明治三十八年十一月五日發行每月一回五日發行　明治三十三年十二月二十五日第三種郵便物認可

女學世界

第五卷

第十五號



十月十五日より

一第十回新柄陳列會

一懸賞圖案元祿模樣陳列

一元祿時代參考品陳列

一寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右何れも弊店內に於て特別盛大に相催し候間御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣伏て奉願上候

東京日本橋區駿河町

三越吳服店

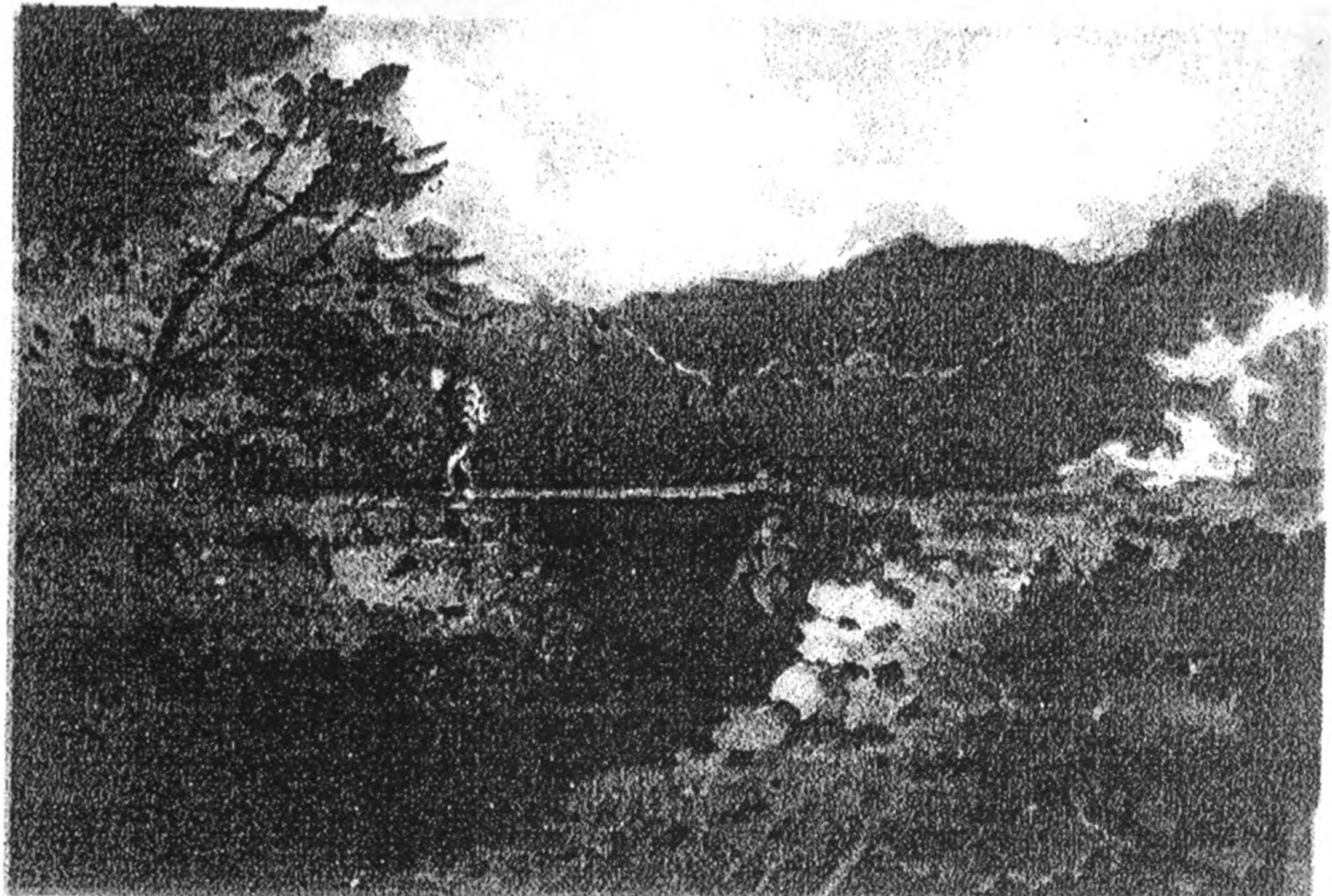
明治三十八年十一月

女學世界 第五巻第拾五號 目次

佳節



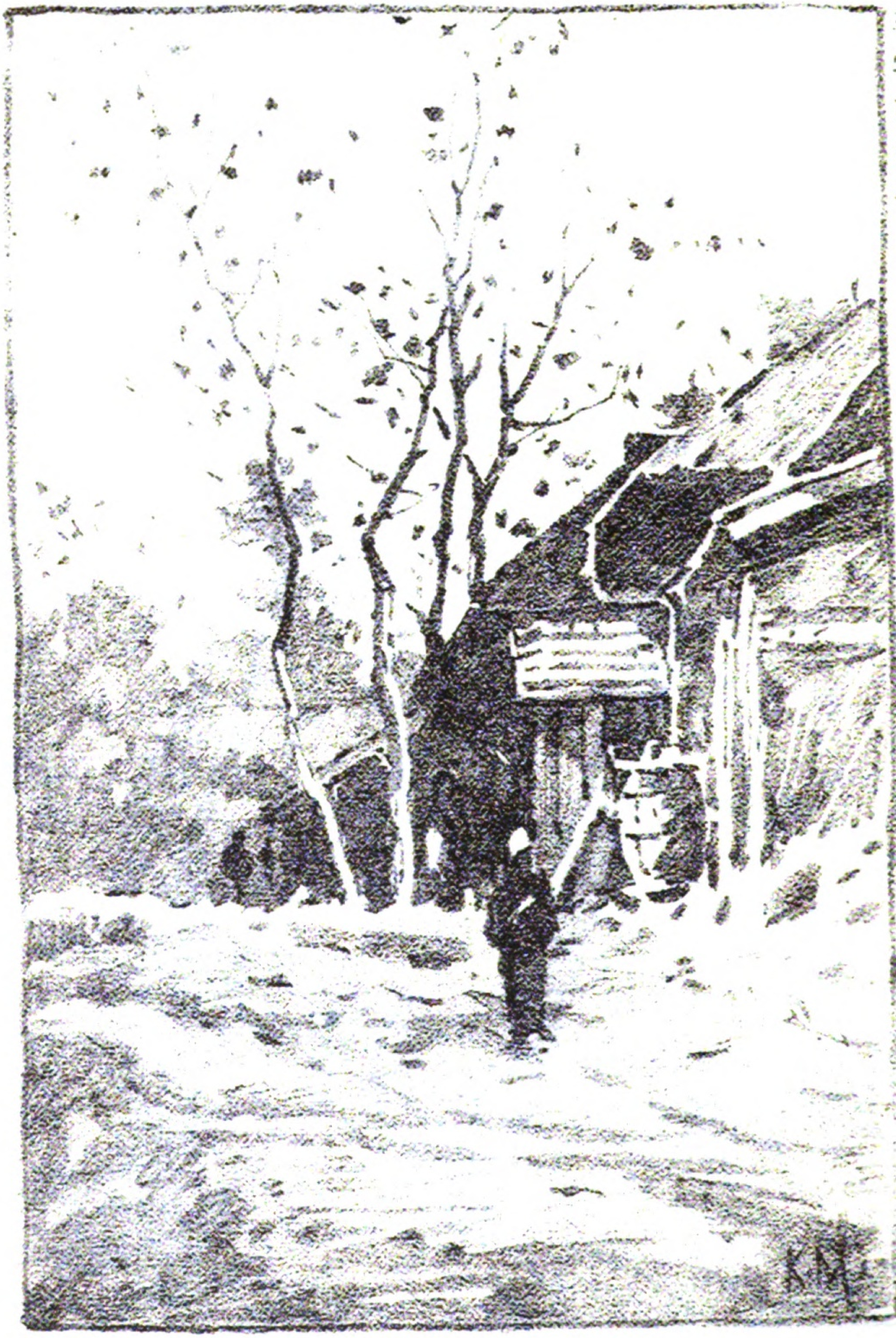
碓井の秋色



三宅克己筆

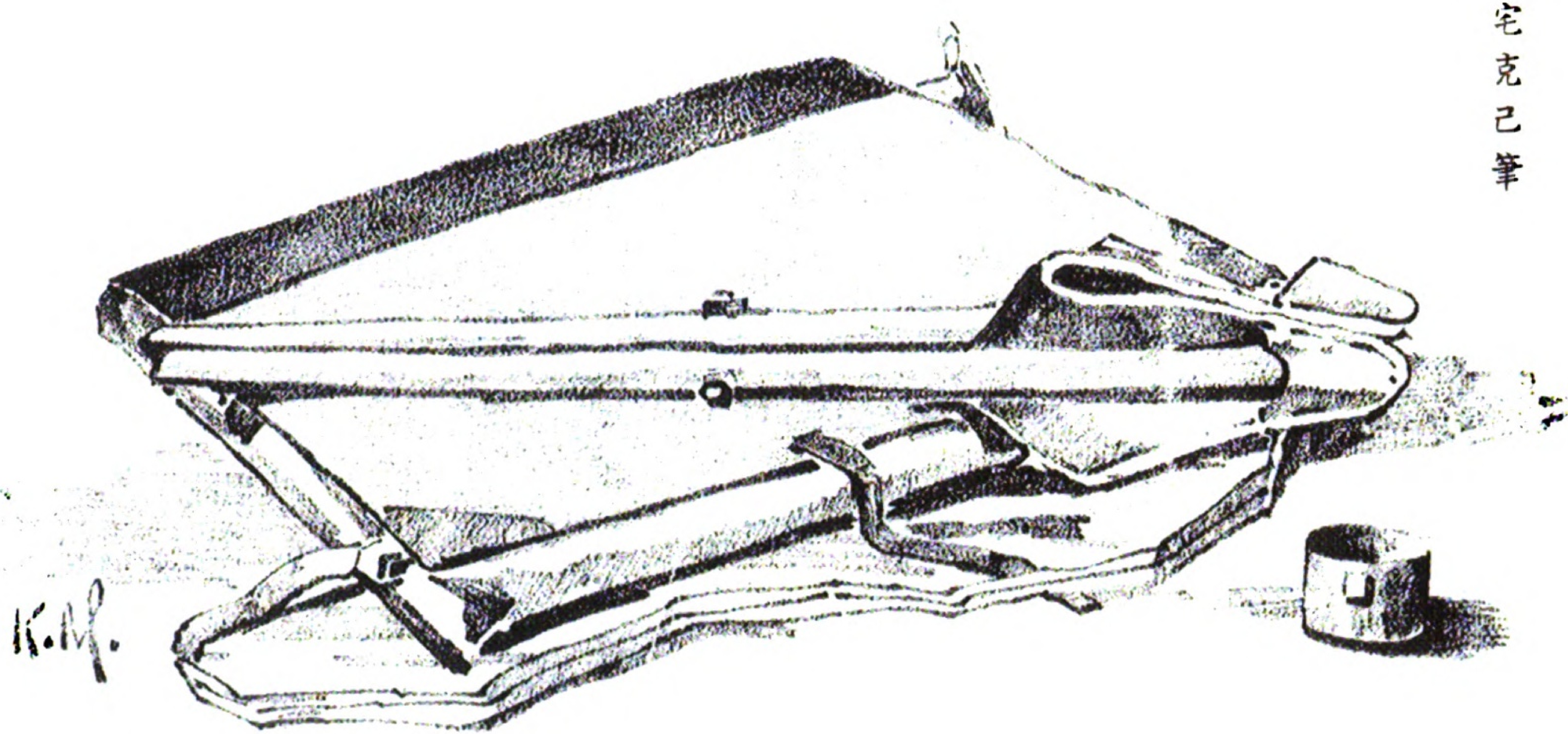
秋の村落

三宅克己筆



寫生道具

三宅克己筆



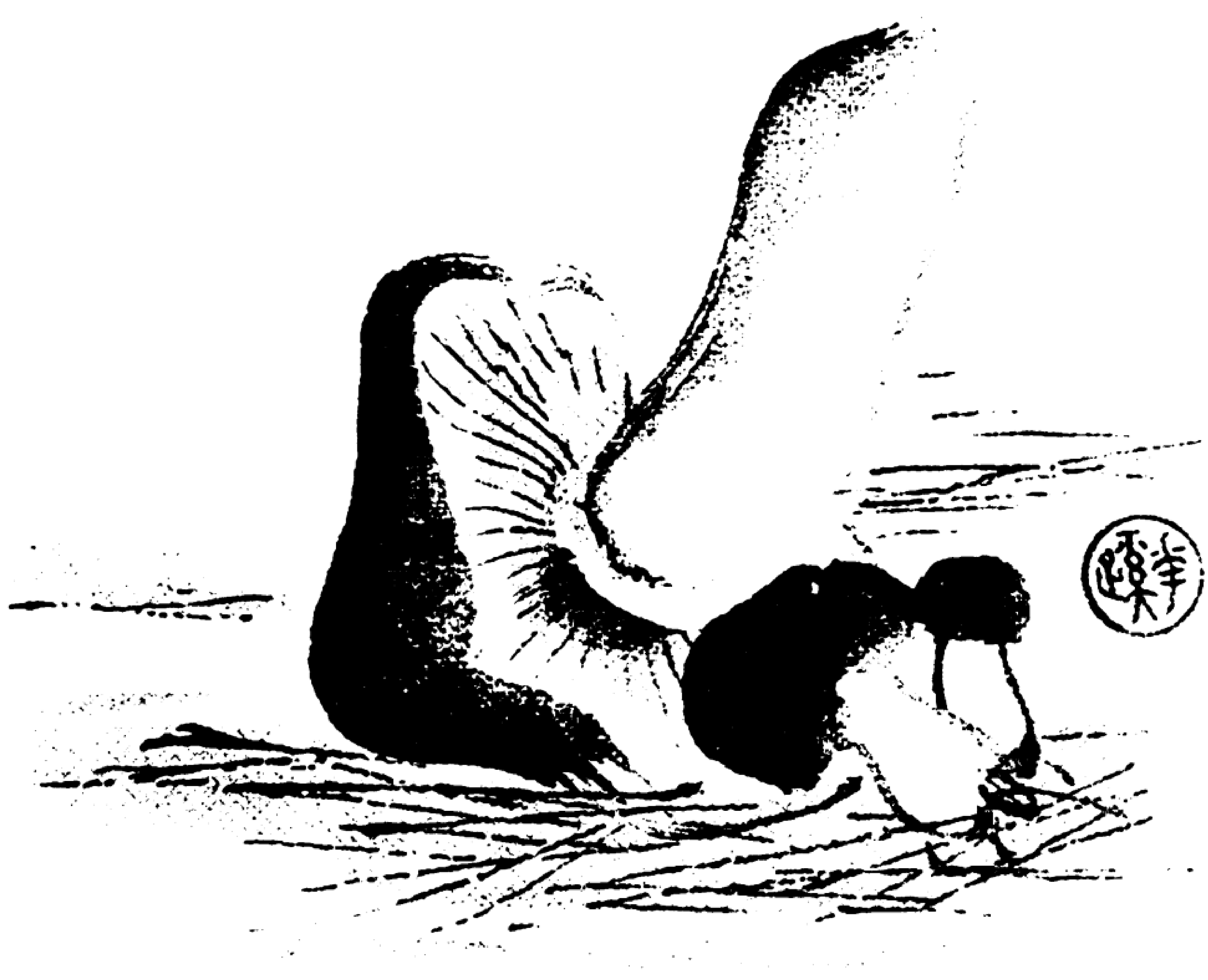
菊



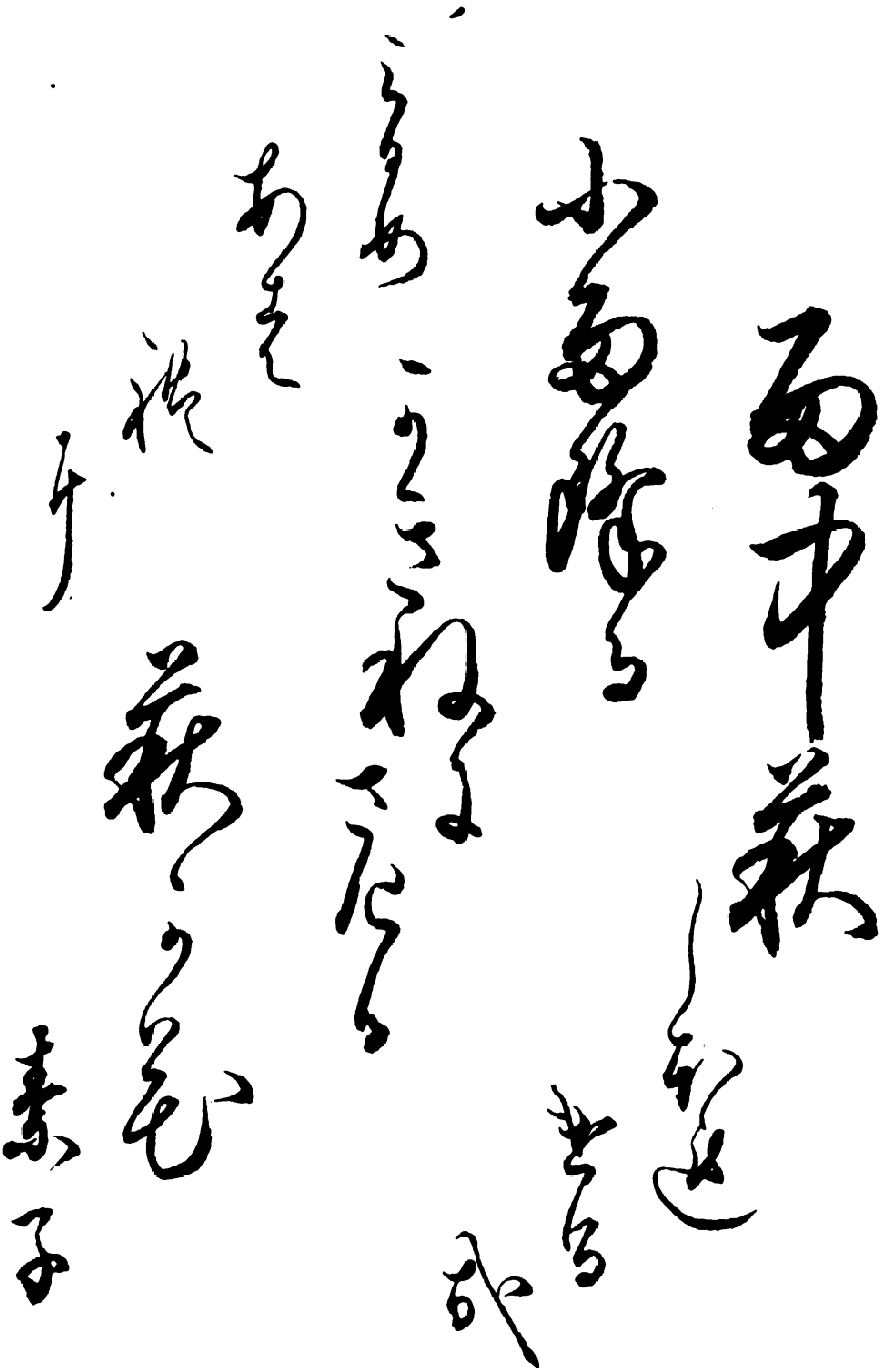
跡見花蹊女史筆

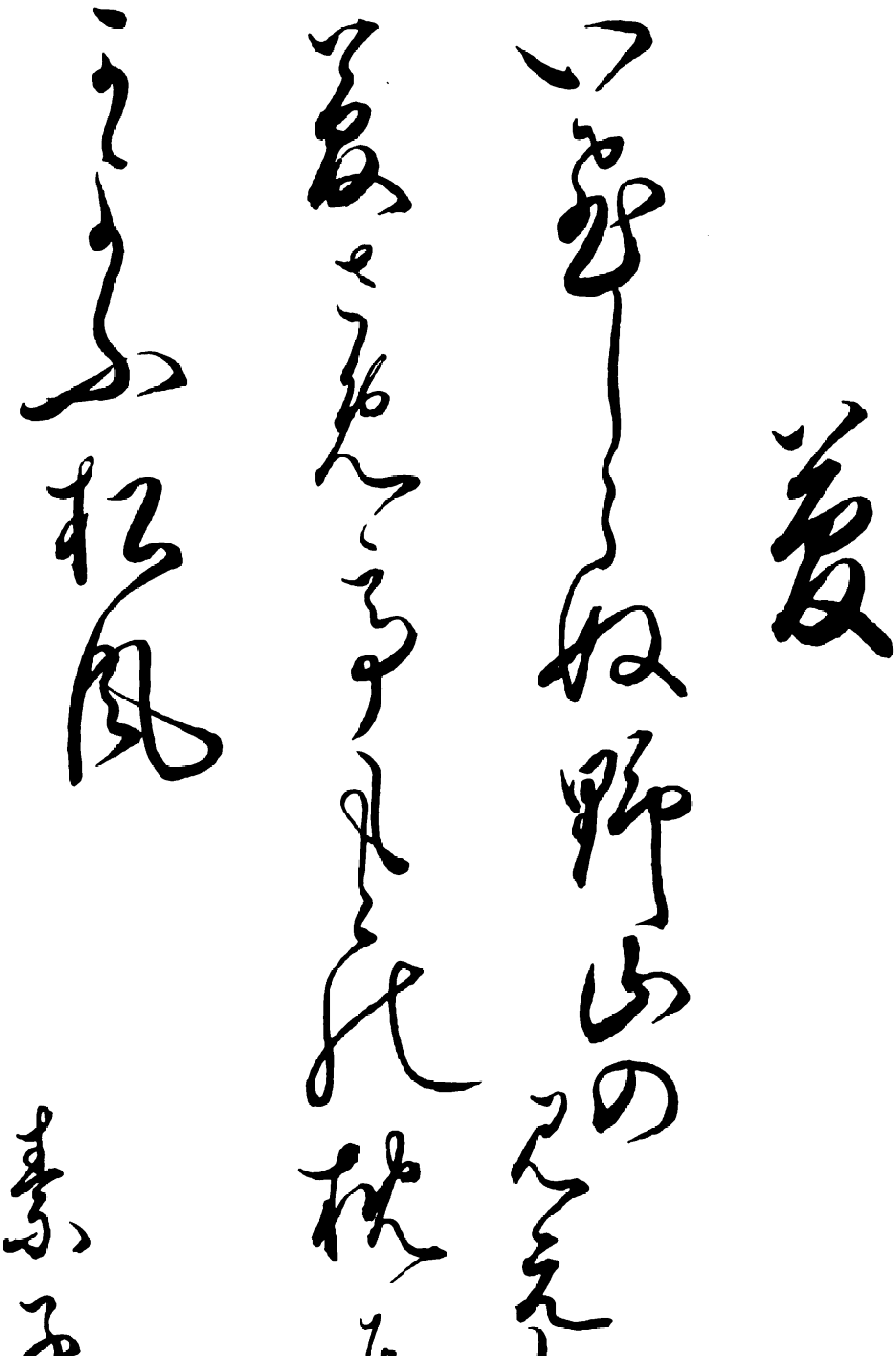
あきの香

跡見花蹊女史筆



仙石子爵夫人筆





仙石子爵夫人筆


美術造花材料
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類
一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書
ニテ御申越被下度候
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番

女(甲の二)



好評 低廉無比 好評

女子練文随一雜誌

每號懸賞文滿載

第拾壹號 十一月一日發行

前號よりお約束の**美麗なる繪はがき**(滿方畫伯の筆)を添へました、又**表紙**も每號改版し口繪**彩色畫寫眞版**如例頗る優美なり

定價 一冊 送料共拾壹錢
六冊 前金六拾三錢

▲前號は又々初版及增刷(第二版)とも發行旬日を出でず忽ち賣切の盛況なり

◎第三、七、八號の外皆賣切也

發兌元 女子文壇社
東京京橋區大鋸町十一
(電話本局六〇七番)

最寄書店になくば直接發兌元へ申込を乞ふ

毛のはへる事請合 ハロール

ハロールは歐米各國に於て造化の妙工を奪ふの奇効ありとの好評を博したる醫學博士シユタインゲル氏の秘密藥を當館主が深奥なる學理と老練なる技術とを以て多年の研究に依り其秘を發き之に最近の發見に係るドクトルベンザム氏の生毛に關する新説を參酌し最新藥を配合したる世界無比の良劑なれば價額は他の生毛劑に比し稍々高價なるべきも其効能の卓絶なる世間に有觸れたる技術と學理に暗き藥人の製造に係る濫製品の比に非ず、まゆげ。はへぎわ。ひげ。の薄を濃しやけどでき者にて禿たるを生じ陰毛等ある可所に毛なきを生じ禿頭病に大効ある事請合なり是非試よ定價五十錢送料五錢郵券代用三錢切手二十枚送れ

らい病最新藥

▲複方ヂノサール一ヶ月分 貳圓
▲ヂノサール一ヶ月分 一圓五十錢

此のらい病藥は永年ハワイ國に在留して癩病の研究に從事し世界に醫名を轟かしたる醫學博士ハドソン氏の癩病治療藥を化學的の方法にて分析し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は艱事なれども其病勢の甚しからざる中に貳圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月並用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に趣き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救濟せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず詳細は容體書に三錢切手封入本舖へ申込あれば委しく通報す

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主
醫科大學卒業藥劑士
從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

女(甲の二)

新奇發明 **増酒資料**（さけふやすもと）

壹斗の清酒は瞬時に倍増し（即ち貳斗）となる大金儲的釀造化學作用の一大發明新法なり

（附錄）腐敗酒直し法、醤油參倍増法、味淋酒速造法、酢速造法、新酒を古酒に變ずる法、香竄葡萄酒速造法、燒酎倍増法、味噌速造法等以上の釀造家及び請賣營業者の大有益案内……右今回披露の爲拾萬部限り**無代進呈**す酒造家及前記載の營業者にして望の方は郵券四錢相添申込次第直に傳習手續摘要錄を送呈す速に見よ營業上一日も缺くべからざる確實**大有益**の秘訣なり是ッ非早く利用せよ驚くべき大金儲あることを確證す（注意）本館の隆盛を羨み近時當館廣告に擬せて怪しき無効の僞法を傳ふる奸者顯はれたり有志者深く注意して僞傳者に欺かるゝこと勿れ……（當館は去廿壹年の創立也）

發明**元祖** 東京市神田五軒町拾九番地 **日本授産館**

肉體 **色白新劑**

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色**に**變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑なり●

價並製金壹圓特別製分壹圓五拾錢

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月問滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃すること確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢（注意）本劑の盛大を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯る深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二增割の事（電話下谷五四六番）

以上貳藥**專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

女（甲の三）



無上の光榮

ゼムは戰捷國の好紀念品として英國支那艦隊司令長官ノーエル大將閣下の賞讃を辱ふし室主親しく旗艦に拝謁の榮を賜りたるは本品の光榮とする所なり

ゼムは氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他郷或は悪臭の場所に携帶し常に少量を用ひなば時候あたり、水傷、流行悪疫を豫防なす良劑なり。

ゼムは二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感ぜしめ又偉大なる効能と愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必ず談話喫煙飲酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり

定價
優美高尚包 七十五粒入拾錢　百六十粒入貳拾錢
四百卅粒入五拾錢　九百粒入壹圓
新意匠容器ゼム入貳拾錢

發賣元　東京市日本橋區馬喰町二丁目　愛國堂　山崎榮三郎

支舗　大阪市東區高麗橋二丁目　山崎兄弟商會

◎販賣所——全國到る所の藥店雜貨店にて販賣す

はげ脱毛薄毛生際悪き人試みよ

東京皮膚病院　發明　山崎製

毛生液（モウセイエキ）



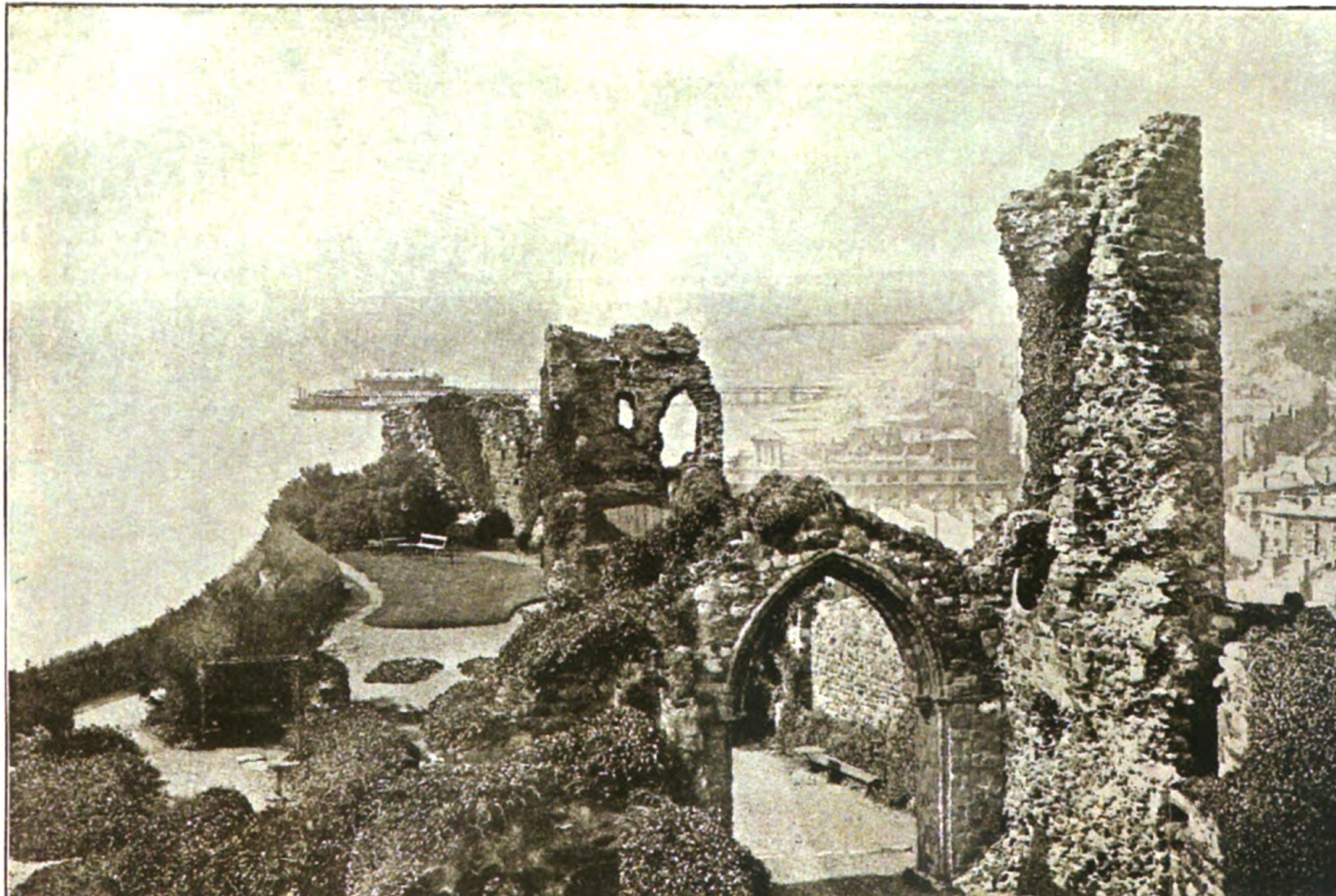
本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め髪の毛はへぎわ眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド其他あるべき所に毛なきに用て毛のはへる事請合也

（甲の四）

彈琴



絶壁の上に建てられたる城郭



英國ハスチングス古城の斷壁

清國の貴婦人と其侍者



社交界の貴婦人



金子男爵夫人と令息

大日本女學會

●本會は十年來女學の通信教授に任じ本會の教を受けし者既に參萬貳千人に及べり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束脩四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○日本歴史（大森金五郎）○萬國歴史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事經濟（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附録機關雑誌をんな

●簡易科（學期一個年）　月謝貳拾錢束脩貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歴史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜錄○雜報

初巻發行　簡易科十一月五日　高等科同月廿五日

東京市麴町區下二番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

根治確証

わきが

新治療

必ず全治し決して再發或は他病に變ぜず 價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を滌清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難症にも甲價特別製を用ひよ必ず速に用て苦惱を脱せよ

毛のはへる

原名ベグネス

めはへざわうすき人◎まゆ毛◎口ひげ◎婦人こまあたりのはげ◎あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人は早く試みられよ◎ぬけ毛落毛を止

化學製劑 品名ハイドコロン浴液

色の白くなる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貞節淑女粋士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艷美となる男女交際上最も必用の品なり

みやくをとろし

すぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

メリルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆれば

◎專賣 東京本鄉湯島四丁目十四 オリエンタル藥舖

◎大橋圖書館

▲午前八時開館 午後五時閉館

▲麹町區上六番町四十三番地所在

(ぶ二)

工學士 淺田忠順君著

◎工業叢書 石鹸製造法 附 實用西洋洗濯法

博文館發兌 正價七拾錢 郵稅六錢

石鹸は方今內地に於てこれが製造に從事するもの甚だ盛にして其製品も優に舶來品を凌駕するの逸品を製出せらるゝは斯道の一源といふべきなり著者近頃本書を著はし石鹸製造者に便ならしむ讀者之に由て一層研究せば其領得する所鮮少にあらざるべし

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵劵二錢封入して御照會あれ

千葉縣安房郡北條町 川名助次郎

子宮病（しきゆうびやう）

自宅療法

妾嫁きてより七年此方子宮病ちの道の難病をわづらひ色々と藥療を盡せしも更に効なく一家悲歎の折柄ふと試みたる療法にて忽ち全快妊娠の身となり今や安く／＼と健兒を擧げゝれば嬉しさの餘りこれを弘く傳へたし望む人は返信料三錢と容躰書を添へ遠慮なく問合せあれ

奈良縣宇佐郡榛原町 笹岡りん

天下一品
最上醬油

釀造に最も古き經驗を有する本印の品質他品に超絶せるは更に贅するの要なく夙に世間の定評あるあり尚此上とも御愛用奉願上候敬白

千葉縣野田町
釀造元　茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

各國帝室及王家御用
ミルクフウド



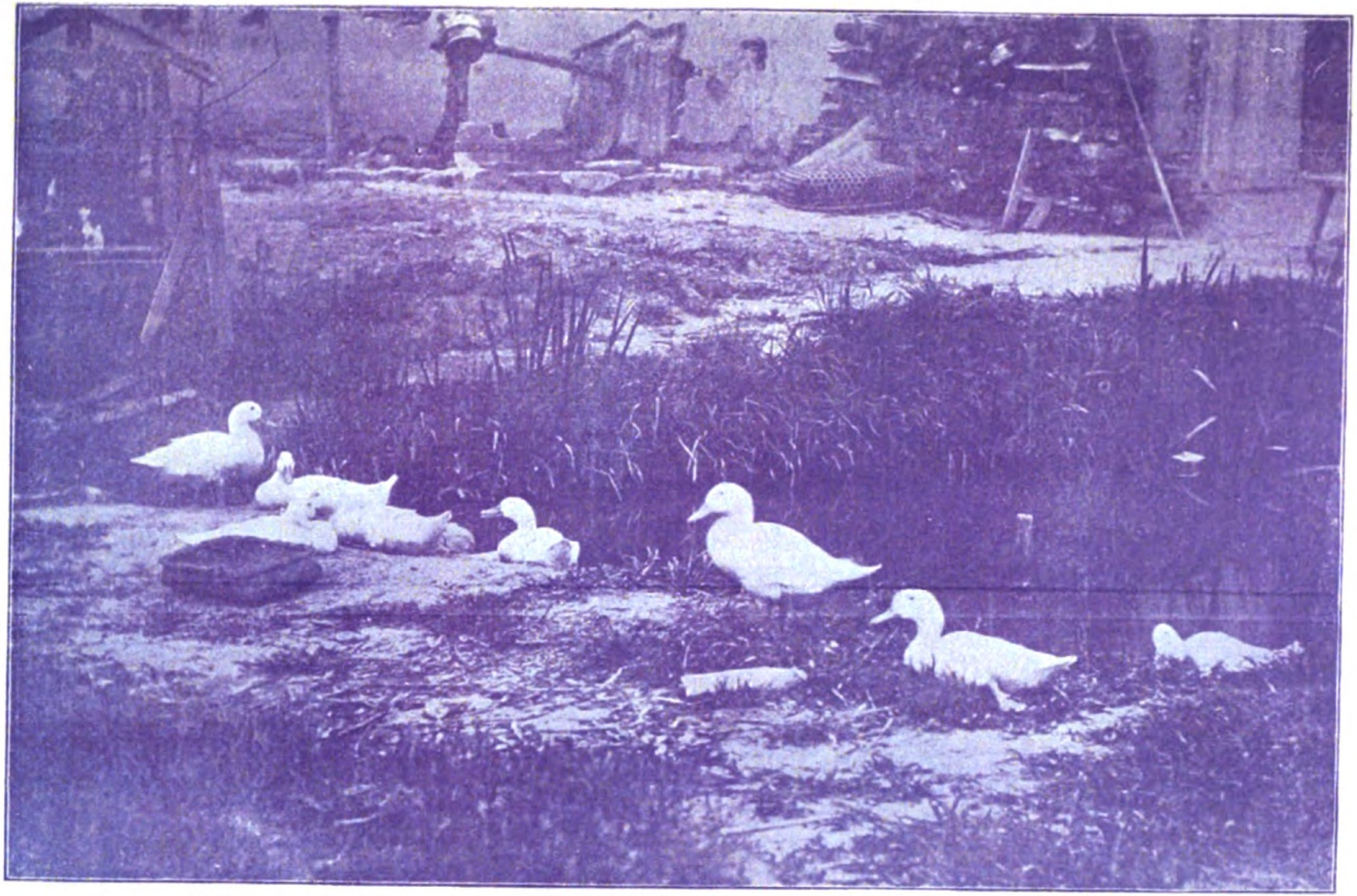
歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ◉最モ盛カンニ藥舖洋酒食料品店ニ販賣ス

やさしの手業



（愛國婦人會京都支部に於ける眞田編の作業）

蘆間の鶩



▲婦女必讀雜著

- ●女學生訓　文學士大町桂月君著　正價貳拾五錢　郵税四錢
- ●婦女家庭訓　華族女學校學監下田歌子女史著　正價參拾五錢　郵税八錢
- ●女訓評釋　千河岸櫻所君評釋　正價六拾錢　郵税拾錢
- ●日本女子立志編（全二册）　千河岸櫻所君編　木版繪繪口繪挿入　正價一册六拾錢　郵税一册八錢
- ●帝國女子修身鑑（全四册）　東京女學館講師西田敬止君著　正價一册拾錢　郵税一册貳錢

發兌元　東京　博文館

五大軍醫合議製劑

藥價　五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔



本舖　東京銀座壱丁目　大阪南久宝寺町堺筋東

山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

○外毒豫防ゴム製

婦人の衛生器現れたり

子宮（しきゅう）サック



定價一個　甲種金壹圓　乙種金七十五錢

効能及使用方　一名さよごろも

子宮サックはゴム製にて嶄新の發明御婦人方の衛生上必ず備ふべき要用の良器なり子宮サックを用ゆるときはいかなる場合といへども痳毒黴毒下疳等の傳染することなく又子宮を毀傷する患なし子宮サックは懷妊を望む御婦人は用ゆべからずこれを用ふるときは懷妊せざればなり子宮サックは月經の際緘水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ子宮サックの使用方は本品を添て委細傳授すべし

○子宮サック入用の御人は御注文次第東京市内は無遞送料にて御届申上候其他地方は郵送料一箇に付金十錢にて全國何處を問はず御郵送申上候

月やくはらい　通經丸本舖
子宮サック　發賣所

東京兩國米澤町二丁目一番地角　萬珠堂藥舖　電話浪花一一三八

特約大販賣所

- 東京々橋區銀座通、一　吉田安五郎
- 東京日本橋區坂本町角　佐々木玄兵衛
- 東京日本橋通四丁目　德田多助
- 東京日本橋通二丁目　津村順天堂
- 東京日本橋通二丁目　北島茂兵衛
- 大阪道修町一丁目　寶藥卸會社
- 大阪高麗橋一丁目　榆尾商店
- 京都四條通新町　武田都堂
- 京都三條小橋　雲庭大齋堂

（丙の三レ）

伯爵東久世通禧君題辭
土居香國君序文
上島長久君跋文

松永聽劍君編述（既成發賣）

樺太及勘察加

全壹册

洋裝菊判美本
寫眞銅版八頁
紙數三百六十頁
正價五拾錢
郵稅八錢

●口繪——中村不折君書
●樺太及勘察加詳密地圖入

本書は之を上下二編に分つ上編には**樺太**の沿革、歷史、地理、產業に關する諸般の事項を網羅し懇篤詳細に記述せるを以て該地に對する唯一の寶典たること論を待たず加之最珍最奇の寫眞銅版數葉と風俗、家屋等の繪畫數十葉を挿入して趣味津々たらしむ。著者**松永聽劍**先生は明治廿六年樺太を跋涉視察して大に得る所あり爾來該地の調査研究に從事せらるゝもの茲に十有餘年其記事の如何に詳密にして其材料の如何に確實なるか敢て呶々を要せず今般先生に請ふて本書を出版して容易に樺太の事情を亮知せしむ。下編には**勘察加**附**痾哥斯科沿岸**の梗概、地理、產業其他諸般の事項に關し**黑龍會**々員諸氏の實地踏査せし記事を骨子とし尚露國最近の出版物を飜譯し且つ有益なる統計表を添へ具體的に之を記述せり苟も國を想ふの士は**帝國北門の鎖鑰**として亦帝國の新富源として日露戰爭唯一絕對の**紀念物**たる**我樺太**の眞相を研究知悉せられよ

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丙の二）

博文館編輯局主幹　坪谷水哉君編纂

日露戰爭 凱旋みやげ

全一册

横綴美本精巧寫眞
六拾枚百餘圖
十一月上旬發行

△附録＝滿韓戰局面全圖（縦一尺八寸 横一尺三寸）

滿韓の野に於る我軍、連戰連勝の光景を撮影したる寫眞は我軍の功績を萬古に傳ふべき最大紀念なり。而かも從來戰地の光景を全く一册の中に收めたる寫眞帖無し。是れ最も惜む可し。故に本書は從軍の勇將猛卒が、戰勝の月桂冠を戴いて郷里に凱旋する唯一の土產と爲さんが爲、戰地全般の精巧なる寫眞と地圖とを縮述し、且つ成し能ふ限り代價を廉にして以て凱旋將卒の功績を不朽にせんと欲す。收むる所の寫眞は大約左の如し。發行は十一月上旬を期す。

◎高貴御肖像
◎皇太子殿下
◎從軍各宮殿下
◎滿洲軍總司令官
◎同總參謀長
◎黑木、奥、乃木、野津、川村、長谷川各軍司令官
◎各師團長

◎旅順
◎遼陽
◎沙河
◎黑溝臺
◎南山
◎金州
◎得利寺
◎大石橋
◎鴨綠江

◎摩天嶺
◎烟臺
◎撫順
◎鐵嶺
◎開原
◎法庫門
◎昌圖
◎營口
◎大連

◎京城
◎平壤
◎仁川
◎鎭南浦
◎大孤山
◎鹽大澳
等の各方面六十枚
五拾餘圖

（丙の三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の四)

圖書雜誌の御注文に就て 愛顧諸君へ謹告

一 御註文の宛名は必ず日本橋區本町三丁目 博文館小賣係と御認め被下度候 近來往々小石川印刷工場又は博文館編輯局宛御發狀の向有之斯くては延着又は錯誤を生じ易く候に付特に御注意願上候

一 博文館は十種の定期刊行雜誌と數千種の圖書を出版發行致し居り候其總目錄は往復葉書にて御申込あれば進呈仕候

一 博文館は一手販賣品を除きては他店出版品は一切取次販賣不仕候

一 御註文の節は必らず代金相添へ御申越被下度候

一 東京市内の御註文は代金引替にて御配達可仕候

一 郵便爲替の御送金は受取局を東京郵便局受取人を博文館と爲替券面指定欄へ御明記被下度候

一 郵券代用の御送金は必らず一割增に限り申候

一 御註文の書狀には文字を明瞭に御認め被下度候

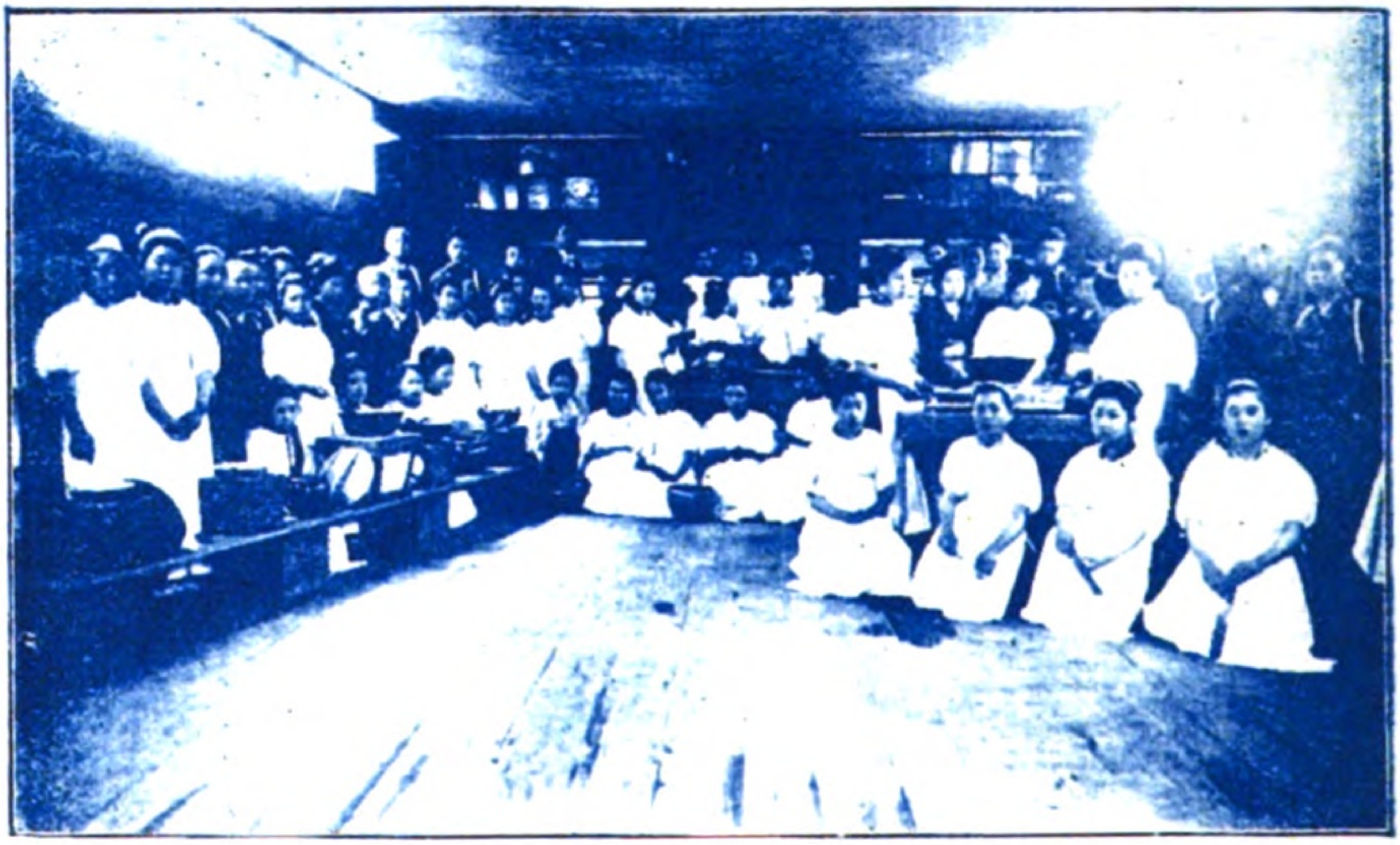
一 御照會は返信用郵券附又は往復葉書にて願上候

一 金高一圓以上の御送金には受領證差上げ可申候得共壹圓以下は送本丈けにて辨用可仕候

一 發賣致し居り候圖書切符は御進物用又は賞與品等に最適當に御座候金高は御隨意に調製仕り候

東京市日本橋區本町三丁目 博文館小賣係

鎌倉料理講習會





禮法正風會の演習

京都五條橋



第百編第卅六卷十一月一日發行

寫眞畫報臨時增刊

觀艦式寫眞帖

全一册　洋裝大判　正價貳拾錢　郵税貳錢

◎口繪――觀艦式の夜景（極美麗石版畫）東城鉦太郎君筆

日本海軍の武勇は宇内を震駭せしめ、帝國軍艦旗の飜る處驕敵を殲滅し、東郷大將は目出度く凱旋せらる。時恰も日英新協約成り、ユニオンジヤツクの旗風美はしき友邦の東洋艦隊は、舳艫相啣んで我國を訪ふ、東京灣の波も爲に歡聲を放たんばかり也。

實に今回の觀艦式は、世界空前の偉觀と云ふべし、百七十隻の艨艟が、蒼波に浮んで活動する光景の如何に壯なるか、滊笛鳴つて水雷艇駛馳し、號砲轟いて巨艦進退し、旗動き、波跳り、電燈閃く光景の、如何に勇ましくも亦美はしきか、即ち本館は熟練なる數名の寫眞技師を各現場に特派し、英國東洋艦隊の來朝より、觀艦式の終結に至るまで、苟も世人の見んと欲するものは細大洩さず、更に海軍將校諸氏の寄贈にかゝる珍品を添へ、茲に美絶壯絶なる「觀艦式寫眞帖」を發刊す。本卷載する處要目左の如し。

◎東郷大將の凱旋。日英海軍の首腦。英國艦隊の東京灣碇泊。東京及び横濱に於ける歡迎。觀艦式當日の千種萬樣なる壯觀。日英兩國軍艦。甲板の光景。英國海軍士官及び水兵の愉快なる動作等

◎五十頁百數十葉の鮮明なる寫眞版は、一として美ならざるはなく、一として珍ならざるは無し。

◎記事には東郷艦隊の凱旋より參内の偉觀、觀艦式の盛況、東郷大將傳、英國艦隊の來朝其他壯絶雄絶の文字を滿載す。

帝國海軍の武勇を感謝するの人、東郷大將の凱旋を祝賀するの人、英國艦隊の來朝を歡迎するの人は、請ふ本卷を手にして、光榮ある觀艦式の壯觀を永く語り玉へ。

（其の二）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（丁の二）

中學世界定期增刊第八卷第十五號十一月廿日發行

菊花壇

表紙……中澤弘光君畫
口繪……小林千古君畫

『菊花壇』は天下の少壯文士が清明の秋色に動かされて、菊花の如き清艶の情と高逸の思とを歌ひたる文集なり。其内には小説あり、叙情詩あり、論文、書簡文、詩、歌、繪畫等ありて、而も其選評は一に公正と親切とを旨とし、平凡の花、衒耀の花は取らず、壇上に咲揃ひたる大輪の名華、皆な各々獨特の色香を有せり。加はるに、卷末には左記の名流大家に新作を乞ふて附錄となし、七草の野の美麗を壇にせんとす。眞にこれ今秋文壇の一偉觀と云ふべし。

附錄

文藝新論
島村抱月君
長谷川天溪君
大町桂月君

美文小品
野口米次郎君
中内蝶二君
西村渚山君
鷹野止水君
宮崎湖處子君
巖谷小波君

新體詩
嶋村藤村君
與謝野鐵幹君
平木白星君
岩野泡鳴君
河井醉茗君
兒玉花外君
薄田泣菫君

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

尤も高評ある繪葉書

漫畫はがき	第一輯 第二輯	北澤樂天畫	六枚	廿五錢
四季の花	上下	跡見花蹊畫	上下各六枚	各三十錢
水彩十二ヶ月	上下	三宅克己畫	上下各六枚	各廿五錢
やまとなでしこ		上村松園畫	畫紙付六枚	三十錢
俳諧繪葉書	春夏秋	齋藤松洲畫	春七枚 夏秋六枚	廿錢 三十錢
今樣大津繪		淺井忠畫	六枚	十五錢
繪はがき愛		島崎柳塢畫	六枚	廿五錢
名所十二ヶ月	上下	中澤弘光畫	上下各六枚	各拾三錢
風俗十二ヶ月	上下	尾形月耕畫	上下各六枚	各廿錢
日本美人		水野年方畫	函入六枚	廿五錢
家庭繪葉書	上下	同	上下各六枚	各十八錢
歷史繪葉書		富岡永洗畫	六枚	廿五錢
滑稽葉書		梶田半古畫	三枚	卅錢
花と人		藤島武二畫	六枚	拾五錢
元祿風姿 薄化粧		コロタイプ アロマイト	六枚	特九十錢 並二十錢
花と美人		寺崎廣業畫	六枚	十五錢
花？人？		本田穆堂畫	六枚	三十五錢
歌箋葉書		藤岡武夫畫	六枚函入	拾五錢
水彩寫生葉書		中澤弘光畫	六枚	拾八錢
水彩繪葉書	第三輯	大下藤次郎畫	六枚	拾八錢
秋草と美音		コロタイプ	六枚	拾五錢

(丁の五)

東京小石川 日本葉書會 電話番町九三二

今後の日露戰爭實記

本年十二月末まで續刊

見よ全國唯一の日露戰爭實記と其書報

日露間の平和は回復せらるゝも、精確なる戰記と、從征中の美談逸事等世に傳ふべきもの尙ほ無盡藏なり。而して交戰中は、**軍機の秘密**に束縛せられ、最も趣味ある記事を掲ぐるを得ず。常に靴を隔てゝ痒を掻くの憾を免かれざりき。故に**最も有趣味の戰記は、今日以後始めて公にするを得べし**。然るに世の戰爭雜誌は今や盡く廢刊し、我が陸海軍の戰功を不朽に傳ふべき機關は、**全國を通じて唯だ博文館發行日露戰爭實記のみ**となれり。故に今後奮って**本年の終まで續刊**し、然る後更に**明春以後は面目を新らたにして**江湖に見え、以て曠古大戰勝の事蹟を遺憾なく萬世に傳へんと欲す。

明治三十八年十一月

東京日本橋區本町三丁目

博文館

丁の七

高等女學通信教授＝目下入學の好機

講義錄第一號 十月廿日發行

大日本淑女學會

（規則）

詳細なる規則を要せば端書にて申越さるべし直ちに郵送する者とす

（丁の八）

本會講義錄之特色

▲女學通信教授●●●●● 事情がありて高等女學校に入る事の出來ぬ人の爲めに『女學講義錄』を發行し僅に二ヶ年の間に高等女學校程度の教育を授けます。近頃都門學生の風儀が大變に紊れ婦人の遊學は益々危險になりました。此塲合女學講義錄ほど安全な修學機關はありますまい。

▲講義と學費●●●●● 本會の講義錄は文部省によつて高等女學校の全課程を說くのは勿論ですが。更に本邦家庭の事情に照し。一家の主婦として缺く可からざる實用の諸科を說きます。それから本會の會費は最も小額で。都會一ヶ月の遊學費があらば優に全期を終はる事ができます。

▲興味多き講義錄●●●●● 世間の講義錄は皆乾燥無味で少しの面白い味がありません。本會講義錄は此點に注意し。諸學科の講義何れも面白く極めて分り易いようにし。且つ有趣有益なる數十頁の雜錄の外に。名高い文士の筆になつた清い美くしい。家庭小說を毎號附錄とします。

▲親切なる講師●●●●● 本會の講師は皆な斯道專門の大家で且つ教育に充分經驗のある方のみです。講義は。只親切と云ふ事を主として丁寧懇篤に說いてありますから。本會々員は親しく講師の膝下に在て講義を聞かれると同じ事です。尚博士學士等三十余家の科外講師があります。

◎東京神田南甲賀町十番地（電話本局三千四番）大日本淑女學會◎



女學世界

第五巻　第拾五號

（十一月五日發行）

凱旋軍を驩迎すべし

露國と干戈を交へて一歳半の久しき、我軍の海に陸に連戰連勝、以て日東帝國の威武を八紘に耀し、又た之に出て我が利權を獲得し得たること、是れ偏に　天皇陛下稜威の然らしむる所とはいへ、又た忠勇なる將士が善戰善鬪の功によるものなれば、吾人は其の勞を思ふ毎に、感謝に辭なきを覺ゆるなり。

今や和議成りて、陸海の將士正に凱旋の途に就くに際したるをもて吾人國民たるもの、此の常勝軍を迎ふるに、滿腔の誠意と謝意を捧げて、其の待遇に遺憾なきを期すべきと勿論なり、思ふに男子には既に適當の歡迎準備あるべし、女子亦た相應の支度なくして可ならんや、否な女子は殊さら男子外征の勞を思ふて、之を十分に慰するの心構なかるべからず、吾人は實に女子の斯くあらんことを切望して止まざるなり。



時論

女子道德變遷の時機

海老名彈正

宗教は男女の差別無く、皆其本然の天性に由るものとす。されど信仰無き女子は、其德操に於て比較的に男子よりも、甚だしく缺點の目立つ事なり、これ女子の身體が優美に造られ、自ら男子の力に依賴せざる可からざるものあると同時に精神上にも亦然り故に信仰無き女子は德操を缺く場合尠からざればなり。

古來我が國に於て、女子の道德としては『三從』を說けり、即ち幼にしては親に從ひ、嫁しては良人に從ひ、老ひては子に從ふの三つなり。昔ローマに於ても此三從の德を尊びたるが、就いて之を詳細に見る時は、兩者の間に相異無きを知る。又舊約聖書を見るに、ヘブライ人種の民族間には、女德を讃美せる歌に、先づ此三從を示したるものありき。されば三從は、獨り東洋のみならず、又實に世界の各國に存在したりし事を知るべし。此三從を更に縮小して云ふ時は、即ち『從順』なり、從順とは、女子が男子に異なれる點有るに就て、特に必要なる德義として、見たるものなり、今之を歷史に徵するにこの德の盛大なる時は國家興隆の時代にして、若し三從よりも更に高尙なる美德が見出さる場合は格別なれども、さも無き限り、三從の頹るゝは、即ち社會の風俗が壞亂し、人心の腐敗したる時

代なるを斷言し得べし。唯だ時勢一變して舊來の女德が破壞さるゝ時は、其破壞が進歩的に行はるゝと否とを問はず、社會に向つて大なる變動を生ずべし、三從の頽るゝ時も即ち亦之にして、今日の日本は將に此變動に際會せるものと言ふべし。

今日の女子教育は、女子をして父母長上の命に從ふべく教へ乍ら、到底從ひ能はざるもの多きに至らしめたり。即ち教育を受けたる女子の智識見聞が、やゝもすれば其父母以上の處あるを以てなり。抑も從順の美德は、我以上の人に對しての物にして、我以下の人には只束縛となるのみ、而して我が國に於ては、從來子女として其父母に勝る丈の教育を受け得ざりしが故に、自己よりも智識見識の優等なる、親若くは良人に、又子に、從ふを順序としたり。然るに普通學は勿論、育兒、衞生家政等に至る迄、今日の場合に於ては往々其娘よりも智識勝れたる母は多からず、其姑よりも才學の優れる嫁は少からず、故に今日の教育が如何程從順を命ずるとも、其實行は遂に不可能の事に屬するもの多きがごとし。

元來今日の女子は獨り姑に從順ならざるのみならず、其父母にも亦然りき、一例を擧ぐれば、父は猶ほ未開時代の遺風として紳士の羞べき妾騷ぎを爲して夢中に迷へる時、其の娘は早くも其惡事なるを知りて内心深く恥ぢ父の行爲を以て人間社會の倫理に反せるものとなさんか、此點に於ては勢ひ父と雖も多少の輕蔑を以て見るの餘儀なきに至るが如き、世間の實際に於て往々見る所なり。更に堅き信仰を持てる娘にして、其父は無宗教の姿なるが少からず、是亦娘として父の爲めに時に憂ひしめ時に悲ましむるの結果、父に對する尊敬の念を減殺せざらんと欲するも得べからず、更に一歩を進めて、嫁して從順なるべしとせよ、そはまづ良人の人格如何によるの問題なり、若し不幸にして其良人道德倫理に甚しく缺ぐる處あらんか、從順も時に依るべし、是良人の智慮分別が、如何に優秀なりとも、道德的觀念の上に於ては、遙に其妻に及ばざるもの多ければなり。而

して第三の老いて子に從ふの點に於ても今日舅姑に從ふ能はざるほどの嫁は、老ひても亦子に從順なる能はざるべし、そは新家庭の主權者と成りて、健全なる大國民を養成すべき母たらん者が、何の所以もなく其の子に服從すべき理由なければ也。

斯く今日の年若き女子が從順ならざるの嫌ひ有りて、家庭に於ても、學校に於ても、心配せられ苦心せらるるなるが。それ智識有る惡人は無智の惡人よりも、其害を爲す事十倍百倍なるべし、我等は如何にして今日の智慮勝れたる女子をして、能くお轉婆に陷らざらしめ得べき乎。

爰に於てか婦人に信仰を持たしめ、宗教の本義を認識せしむるの必要を見る可し。夫れ宗教は我以上の大なる權能あるを認識す、此權能や道理的にして、智識に於て、道德に於て、的確に認むるを要す。古來比較的に男子よりも女子の、宗教に熱中なる者多きは、此敎權を見出せる時に於て、之に依賴する尊き心の特に女子社會に多ければ也。斯くて從順の內に神聖にして犯すべからざる強き物の發揮せらるゝに至るべし。

蓋し從來の三從は甚だ穩かなる美德なれども、直ちに之を眞の從順とは云ひ難き也。何となれば今日の日本に於ては往々父母の言として女子の節操を破らせたる場合あるを以てなり何ぞや、父母の命に依つて女子が貴人の妾となるべく強ひらるゝ事あり、又父母が他人の恩顧を受くる時に當り好まぬ人に、強ひられて餘儀無く嫁かしめらるゝ場合あり、即ち彼の從順は人爲的なるを以て絕體的の從順とは言ひ難し、されど神に依りて從順するの女子は、自ら一種の權威を附隨し來り、愈々神に信賴すれば益々犯し難き溫和的威嚴を備ふるに至る可し、斯くて父も無理を命じ難く、良人も其自由を壓迫す可からず、然も斯の如く強くして又其中に甚だ從順なるものの存せるなり。

故に漫に父母の命、良人の言に、盲從する時は、往々前條の不節操に陷りて、婦人の道德を衰滅せしむるの

媒介と成るべし。故に女德は宗教に依りて教はるゝものと言ふべし。然らざれば、女子は多く單獨に働きて衣食する事に成り、從つて父兄に從順を缺き、其弊害は遂に底止する所無きに至るべし。

されば從來の從順は、一方に女子教育が旺盛と成り、他方に女子の新職業が續々として發見せらるゝの今日に有りては、到底其儘には保持し難きものとす。故に從來相對的に養はれ來りし女德も、今日は絕對的に養はれざる可からず。即ち神の力に依賴せざるべからず。云ふ迄も無く神とは、『神聖にして犯す可からざる愛』也、別言すれば大能の愛也、故に、此所より湧出する女德は、淸くして、美るはしき聖き愛也、斯の如くして從來消極的なりし從順が、積極的となり、能く容れ能く導くに至るべし。況んや父母良人慈愛ある時は其家庭は高尙優美なるべし。

宗教上に於て女德を讃美せし者は西洋には聖母マリヤあり、東洋にては觀世音菩薩有り、共に女德の理想なり。後世子持觀音なる物あり、或はマリヤより來りしか否かは知らねど、觀音が處女たると共に一面に母たる相あり、マリヤも亦母たると同時に妻として敬愛すべき姿あり。今日の女子は自ら考慮して、此二者に學ぶ所あるを要す。

近來米國にて、女權の發達したる結果、妻としての德之に伴はず、其家庭は聊か殺風景の嫌ひあり。凡そ女子の貴きは母として子を愛するに有り、社會は彼不具的發達を好まざる也。

今日教育有る女子を見るに、眞の從順を認むる能はず、或は意地を張り我慢を通し、權式ぶらずば自己の力のみを賴みて、男子化したるものさへ有り、これ女に缺く可からざる絕對的服從心を持たざれば也、此大缺陷を宗教の力に依りて補ひ得んか、即ち眞の文明國の賢母良妻たるべし。

曾て民權自由の盛んなりし時代に女權云々とて行動を壯にしたるものありしも、其人の末路は甚だ香しから

ず。又今日社會主義の平等說に心を寄する女子はあれ共、絕對的服從を知らざる間は、必ず悔ゆ可き日の來るを見るべし。（文責記者にあり）

修身講話

忍耐の心

東洋女學校長　村上專精

第一。人類の等差は忍耐の程度如何に依りて相分る可き事

人間には總て等級と云ふものが有る。先づ財產には金滿家と貧乏人と有り、智識には怜悧な人と愚な人とがある。藝術にも其通り、一通の手紙にも、美しく書いたのと、金釘の折曲つた樣なのと、其金釘さへ書けない人と有る。それで善く書いた物は錦の表裝を附け床の間に掛けて、花を插み香を燻らして賞讃される。けれども下手な物は直ぐ反古籠へ押込まれる。同じく五本の指であり乍ら、一方は夫れ程大切にせられ、一方は反古籠へ押込まれるのである。又見ず知らずの人でも、是非一度お目に懸りたいと敬慕して來るのがある、是は勿論慕はれる人がえらいからである。又之と反對に親兄弟にも見限ざられて、其人が來れば親戚の者迄逃げ隱れする程嫌はれる人もある。こんな等級、階段が如何して出來たのか、元より原因は種々あらうが、其大部分は各自が忍耐の程度に依つて出來たので、下へ〳〵と墮落して行く人は、忍耐の反對たる「我が儘」であるからである。

文字の上から解釋して見れば、忍は刃と心とより成立つて居る。人の心は弱い物、我が儘な物で、少し氣に喰はぬ事が有ると直ぐ小言を云ふ、暑ければ暑いと零し、寒ければ寒いと愚痴を並べ、或は眠い、或は早く喰べたいと勝手な事ばかりを言ふ。何故他を毆つたかと問へば腹が立つたからと答へる。何故花を取つたかと問へば、欲かつたからと答へる。そんな我が儘では世間は渡られないから、我が儘が『眠い！』と起つて來た時『何を言ふ!!』と一遍に其心を刃で切り殺すのが即ち忍で有る。此心が十度起つて十度殺し得る者は聖人君子佛菩薩で有つて、我々は中々そんな譯には行かないが、せめて二つだけ殺したいと思ふ人と、辛と三つ迄殺した人と、如何しても四つ以上殺さねばならぬと心懸てる人と各自種々であるから、此所に等差が出來て、二つ殺した人よりも三つ殺した人がえらく、三つより四つがえらく、四つより五つ六つ七つ八つ九つと、澤山に殺した人程えらいから澤山な階級が出來るのである。中に一つも此心を切殺し得ぬものは我が儘ものとして、世人に嫌はれ天地の道理に嫌はれ、神佛に嫌はれ、遂に失敗して自滅するのである。

偖て此我が儘の矯正法を尋ねると

一、受　苦　忍
二、耐　怨　忍

の二つで有る、受苦忍とは文字の通り艱難辛苦を喜んで受けるので、如何程の苦痛も少しも恐れず之に向つて勇進するのである。女子の生涯は總て受動的で有るから、一層此受苦忍が必要である。又學術藝能の如きも此受苦忍の力で歩一歩と發達するのである。

第二の耐怨忍とは、人は兎角物事に附けて他を怨む情の多いもので常に爭ひが斷えない、若し怨に報ゆるに怨を以てして、彼が打つたから己も打つたでは彼復打ちに來る事が必ずあるから、此所は屹度忍耐せねばなら

ぬ「汝の敵を愛せよ」とキリストも言つたから、怨に報ゆるに慈悲を以てせねばならぬ「己人を打たば人亦己を打ち、己人を識らば人亦己を識る」と釋迦も言はれたのである。

漫に怨み怒りをせぬ人には自然と世を擧げて慕ふて行く、聖人君子の仕方は皆之である。例令ば學校の生徒でも忍ぶ事が強く無ければ立派な卒業は出來ない、友達同士の交際に於ても、我が儘で有つては遂に除け者にされる。德川家康の言葉に

「我が儘にては遂に願望の叶ひし事決して無きものに候

第一、我が儘にては親を恐れず親にも見限られ候

第二、我が儘にては親類にもうとまれ候

第三、我が儘にては朋友にもうとまれ候

第四、我が儘にては召使ひの者にもうとまれ候

第五、我が儘にては願事悉く叶はず候

右五ケ條の通りに成り申候へば身を恨み天道を恨み後には煩らはしく心亂るゝより外無之候、唯だ幼少の時より物事の自由にならぬ事を能く心得させ申たき事に候

と有る。學校で如何程立派に教育したいと思ふても我が儘では手が附けられない、遂に總ての人に疎まれ、金に疎まれ、智惠に疎まれて、見苦しき死樣をするのが最後である。道傍にのたれ死とか、河岸に土左衛門とか、新聞の三面に書かれる情無い死樣は、始めから爲る心算の人は無いけれども、我が儘から段々嵩じて遂に餘儀無く成るのである。

第二、忍耐は慚愧羞恥の心と相待つて發達する物なる事

人は恥かしいと云ふ心が是非無くてはならぬ、此心の强い人は之と相待つて耐へるのである。客に行つてお菓子は出たが喰べたいけれども恥かしいから辛棒する樣に、讀み書きが出來ぬと恥かしいから學校へ行つて勉强する樣に、恥かしいと耐へると相伴はねばならぬ。世の中で恥を知らぬ者が三通りある、第一は小供である、多人數の前でも兩足を投げ出して居たり、大小用を所嫌はずしたり、母が干物を入れる二分か三分間も待てぬで泣いたりする。第二は狂者である、大きな人が小供の樣に泣いたり笑つたり、醫者にも看護婦にも遠慮も無ければ恥も無い。第三は大病人である、之は病苦で恥を言つて居られぬ、兩便其他の世話にも成れば、氣も短く成つて人前も關はず譯も無く怒つたりする。以上の三種は恥が無いから忍ぶ事も無い。偖我々は小供や狂者や病人の眞似は、仕て見よと云はれても役者で無い限り出來た物で無いから、完全な人は能く恥ち能く忍ばねばならぬ。特に今後は一層である。由來女子は何云ふ譯か知らぬが事實の上に於て惡籤を引いて居るから尙ほ更深い注意を要する。

第三、今の慚愧及び羞恥は宗教的信念に依つて發育すべき物なる事

如何して羞恥と忍耐の心を發達せしむべきか、之は必ず宗教的信念に依らねばならぬ、宗教とは何か、各自に信仰を持たせる物で有る。信仰とは己の心の内に貴い美しい此上無い立派な物が出來るので、結局神を認め佛を信ずるのである。肉眼で見えねど、野に行つても山に行つても、土藏にも屋根にも、我行く所必ず附いて離れぬえらい方があるから、此お方に恥ちて忍ばねばならぬ。神佛を分り易く言へばお藥の樣な物で有る、病を直すもので起すものでは無いが、不養生な人の病は矢張直さない、養生する人のはかりを速に直すのである。亂暴な我が儘な人は神佛も助けられぬ。能く恥ち能く忍ぶ人にして始めて立派な信仰を持ち、神佛の慈愛に浴する事が出來るのであるから、我々は之を實地に行ふ樣に常に心懸けて居らねばならぬ。（文責記者にあり）

THE "JOGAKU SEKAI" ENGLISH COLUMNS.

Conducted by Isoh Yamagata.

WHY ARE WOMEN BETTER LOOKING THAN MEN?

In the previous issue of this Magazine, I have quoted a rather novel remark made by an American authoress to the effect that men are more beautiful than women. Most people, however, will not endorse this opinion, but maintain, as I do, that women are better looking than men. I do no say this that I may please you, my readers, for I am going to tell you something, which will be unpleasant to you. It relates to the question: "Why are women more beautiful than men?" According to an English specialist, who has made a careful study of the subject, it is because they are more indolent and are not called upon to use their brains as much as men are. Hard intellectual work and assiduous attention to business, he says, are harmful so far as physical beauty is concerned. As proof that his theory is correct, he points to the Zaros, whose home is in British India. Among them women hold the place which in other countries is occupied by men. The Zaro woman manages the affairs of state, goes into business on her own account, and does not wait for a proposal of marriage, but proposes herself, whereas the Zaro man has nothing to do but cook the meals and look after his children. The natural result, says the scientist, is that the men of this singular tribe

女學世界英文欄

山縣五十雄擔當

何故に女子は男子よりも美貌なりや

本誌の前號に於て，私は米國の一閨秀が述べたる，男子は女子よりも美であるといふ寧ろ驚くべき新說を轉載しました．然し大抵の人は此說を贊成せずに，私と共に女子は男子よりも美貌であると主張するでせう．私がかく言ひますのは讀者諸孃の氣に入らうと思つてゞはありませぬ，其證據として私はこれから諸孃にとりて不快なるべき事を御話ししやうと思ひます．それは"何故に女子は男子よりも美貌なりや"との問題に關する事でありますが，此問題につきて詳しく硏究した或英國の學者の說によれば，それは女は男よりも怠惰で男ほど其腦を使用する要がないためださうであります．此人は，六かしい智力上の仕事と事務に勉强して精神を注ぐことゝは身體美に有害であるといふ說で，此說の正しい證據としては，英領印度に住するザロ種族を擧げて居ります．此種族の間に於ては女が他の國に於て男子の占めて居る位置を占めて居て，國政を處理し，自ら商業を營み，結婚の申込を待たずして，男の方へ結婚を申込むので，男は食物を調理し，子供の世話をする他に何もすることが無いのであります．其結果として此奇なる種族の男子は頗る美貌で，女子は非常に容貌が惡るいのであると此學者は述べて居ります．

若し此說が正しいとなれば，容貌の惡い婦人方は身體上人の愛を惹かぬを嘆くの要なく，自分は自分よりも美なる姉妹よりも智力に於て優つて居るのであると思つて慰めるとが出來るでありませう．

are very pretty and the women are unusually plain.

If this theory is true, plain women need not regret that they are not personally attractive, but may console themselves with the idea that intellectually they are superior to their more beautiful sisters. Still I think that most women will prefer being beautiful than being plain but wise.

さりながら大抵の婦人は容貌が悪くつて賢いよりも美貌である方を望むであらうと私は思ひます.

〔註〕 Novel remark 新説—endorse 賛成する—better looking than man 容貌が男より好い—specialist 專門家—are not called upon 要せられぬ—assiduous attention to business 事務に精勵して意を注ぐこ—affairs of state 國政—goes in business on her own account 自ら業を營む—proposes herself 自ら結婚を申込む—has nothing to do but cook the meals 食物を料理する他に何も仕事はない—look after 世話をする—plain 容貌が悪い—attractive 人の愛を惹く.

❋ ❋ ❋

MILITARY SERVICE FOR WOMEN.

A piece of news, which will alarm the fair sex, is published in an American paper. It is to the effect that the German Emperor is seriously considering compulsory military service for young German women. Japan is a faithful imitator of Germany in military matters, and so, in case the German Emperor decides to carry out his project, it is not improbable that time will come when the young women of this country will be compelled to enter military service.

But, my dear readers, even though such time may come, rest assured that you will not be required to fight on the field of battle. The German Emperor does not think to make soldiers out of young German women. His idea is to employ them in the various military offices of the empire, thus relieving for field work thousands of men now detailed as clerks and employés. The Emperor believes that such service would not only greatly augment his army, but would materially benefit German women, training them in punctuality, order, obedience, business procedure, and increasing their mental and physical well-being.

女子の兵役

婦人社會を驚かすならんと思はる一報が米國のある新聞に出て居りました. それは獨逸帝は此頃熱心に若き獨逸の婦人に義務兵役を課しては如何と考へて居らるゝといふ事であります. 日本は軍事に關しては悉く獨逸を摸倣しますから, 若し獨逸帝が其計畫を實行せんと決心せらるゝ場合には, 我國の若き婦人も兵役に就くの已むを得ざる時が來ないとも限りませぬ.

然し, 讀者諸孃よ, よしかゝる時が來るとするも戰場に出て戰爭をする必要はないのですから御安心なさい. 獨逸の皇帝は獨逸の若き婦人より兵士を作らうとは思はれぬので, 其考へは同帝國の種々の陸軍諸役に婦人を採用し, かくて目下陸軍書記及び雇吏として使用されて居る數千の青年を野戰勤務に流用せんといふにあるのであります. 帝は婦人を斯の勤務に使用せば, 只に其陸軍の兵力を大に增加し得るのみならず, 婦人達に時間を正確に守ること, 秩序を正しくする事, 從順なる事, 事務の取扱ひ方を教へ, 且其精神上并に身體上の利益を增加して, 大に其利益となるであらうと信じて居らるゝのであります.

〔註〕 Fair sex 女性—compulsory military service 義務兵役 -military matters 軍事—it is not improbable ないとも限らぬ—even though よしありとも—rest assured 安心せられよ—military offices 陸軍諸役所—relieving for field work 野戰仕事に當する.

人事暦

十一月

休日｛日曜日……五日、十二日、十九日、廿六日
祝祭日……三日、廿三日｝

▲一日（舊暦十月五日きのえたつ）——各商店冬物を賣出す。▲三日——天長節。觀兵式擧行。各學校に祝賀會あり。▲四日——駿河淺間神社大祭。▲六日——武藏靖國神社大祭。▲八日——鞴祭。鍛冶職、金屬細工師等の家々にて稲荷を祭る。▲十二日——滿月。▲十五日——七五三の祝ひ。三才の男兒、五才の男兒、七才の女兒の祝ひとて、各々新衣を調へ、產土神に詣で親戚の家々を廻り、其夜知友を招きて饗宴を張る。▲十七日——庚申。▲廿一日甲子。▲廿三日、——新嘗祭。

季節‖八日「立冬」廿三日「小雪」。朔風漸く來り、冷氣頓に加はりて世は冬景色を呈し、晴夜繁霜を見ること頻なり。

農事‖粒々辛苦の効果を結ぶの時、農人收穫に忙はし、その他冬穀の蒔付、桑、果樹の植付、麥類、蠶豆、豌豆、の播種稲の扱落し等は此月の重なる仕事なり。

遊覽‖紅葉と菊は當月に入りて益々其の美を加ふ、紅葉は東都瀧の川、海晏寺、京都三尾、通天橋、嵐山、菊見の場所は東都にて團子坂、其他各國、又た東京人の足を引くは酉の市（一ノ酉——六日、二ノ酉——十八日、三ノ酉——三十日）。

食品‖當月の眞味は魚類にて、ひらめ、さより、はも、あまだひ、むつ、いせゑび、たこ。野菜にて、おいも、わらび、はうれん草、ばなゝ、生海苔。果實にては柿、林檎等最も美味なり。

觀察

日本風俗の瞥見

尾崎夫人　エー、セオドラ

秋の交際季節の最も賑はしかりし一日華燭の典を擧げられたる尾崎東京市長と尾崎宮中顧問官の令孃にして龍動有名の學者モリソン博士の孫女に當るセオドラ孃との結婚式は英館歡迎を芽出度く終りたる十月十四日午後二時を期し小春日和の暖たかき芝區榮町アンドレー教會に於て擧げられたり、此芽出度き華燭の典にたづさわれる名譽ある役割及媒妁人大隈伯爵、立會人は朝吹英二、ベストマンは尾崎行昌、招待役は高崎男爵、渡邊市助役、米國公使館一等書記官ウイルソン、同書記官ミラー、英國公使館一等書記官ガピンス、濟金太郎、松山忠次郎、ブライズメードは尾崎君子孃デニング孃、尾崎清香孃プリンダリー孃、ガップリング孃、ミラー孃等にして式場に連なれる來賓は何づれも内外の貴顯紳士貴婦人令孃なれば羅綾の衣金繍の袖亂れ重りて雲の如く花の如く秋の錦は正にアンドレー教會に開たりき。午後二時は約束の時間なれど花嫁となれば有繋に身の裝粧に時間を奪はるゝものと見えブライド英子の馬車は時間に後るゝ事約二十分にして教會に着し別室に入りて暫く盛裝を凝らし尾崎市長はフロックコートにシルクハットを戴き平素の眞面目なる顏は愈よ眞面目になりノーエル提督の厚意に依り儀仗として送られたる英國水兵五十二名が別室より式場に至る間をいと嚴肅に守れる徑を靜肅に進み續きては嫁英子水色の洋服に白の被衣を冠り手に花束を持ち長く曳きたる裾を一様に水色の洋裝したる蕾の如く可愛らしきブライズメード數名に捧げしめ少し面を上にして丹花の唇を堅くしめ澄し切つてぞ蓮歩を移したり、式場の入口にてメードは裾を放せば白の孔雀が尾を曳きたるが如く長く長く裾をひきて市長と共に聖壇に進み新郎新婦は握手し牧師は比翼連理の固を神に祈り例の如く儀式を了りたるは午後三時、幸ある新夫婦は馬車を共にし華族會館へと馳らしたり、華族會館の階上にて市長夫婦は來賓の祝辭を受け夫婦相

携へて紀念の撮影をなしたる後食堂に移りて立食の饗應に着き芽出度く閉きとなれるは午後五時頃なりき。左の一文は尾崎新夫人がセオドラ嬢たりし當時日本より龍動なる友人に寄せたるを同府の Lady's Realm に掲載されたるものなり、以て新夫人の文才の一斑を窺ふに足るべし。但し譯文の拙きは記者の罪なり。

日本にての夏休

第一信　千九百二年八月一日　日本　輕井澤にて

慕はしき君よ、煙たち上る噴火の山を朝夕に眺めつゝ、夏の休暇日を過さんことのさいはひはたれしも享け得らるべきにや。

とにかくに妾は此處、輕井澤に在りて、僅か十二里の彼方には、勇ましき淺間の山は屹立しぬ。妾が君に贈れるは此の山の噴出しつゝあるをうつせる最近の寫眞なるが、凡そ噴火山を呼ぶに男性を以てし、又は女性を以てする事は當れりや。日本にてはすべて女性たるもの、皆、柔和温順であらねばならぬ、然るに淺間は柔順ならぬのみか、著るしく勇壯活潑であれば、妾は此の山につき語るには、男性の代名辭(彼)を用ゐて可なるを思ひぬ。

淺間山、若し情あらば最と歡ばしく感ずるなるべし、そはわれらは朝夕たえず彼を眺め見守りてあればなりげに煙の太き柱の數々もて幾度もわれらに報ひぬ。

或る朝の事なりき、妾は龍の形したる煙の上るを見、又一度ならず轔々轟々たる音響をも明に聞きぬ。しかしてわれらは屢々大破裂の場合にはわれら如何なる方向を取りて進む事最も善きやと話しあへりしが、なにがしは笠を頭にし『トンチル』に急ぐ可しと告げぬ。

此のあたりの土地は總じて燒石より成れるが、皆この勇壯なる噴火の山の吹き出だせしなり。しかして極めて近き頃の大噴出は、千七百八十三年にて數多の村落や、大森林をば破滅し、烏有に歸せしめぬ。

當夏は犂大の石塊を噴出したるが、妾も散歩の際、灰を蒙りて歸り來れる事屢々なりし、山上まで登りし一群の輩は、硫黃の氣に襲はれ、殆んど絕息して地上に倒れしが、忽ちにして幾許かの石片、落下し來り、土地の案內者は怖れて、倉皇山を奔せ降りしとぞ。

げに淺間の頂まで上らん事は難し。人々槪ね馬に乘りて上るなるが、山の頂より日の出の壯觀を眺めんとて九時に出發す、玄かして心弱き女性は駄籠に乘る、これは馬にては安からず、馬の騷ぎ動きて蹈み外すことのあればなり。

二人の○○レデー(貴女)ありて、或る朝、いと早く、駄籠に乘りて出發したりしが、一人は輕く、他は重かりしかば、均衡を得る事能はず、御者は已む無く其の中間に座せしとぞ。

誰にても硫黃の氣が、烈しからずして、噴火口に近づき且之を瞰下し得る時には、其內面に火の燃え居るを見るべし。

去りながら是のみにては妾の君に語る處、未だ足らず、此の地は海面を拔くこと三千二百七十尺、炎熱堪へ難き八月の空も爽快にして涼し。妾は七月三十日八時四十分の列車にて、上野を發したるが、歡ばしき空氣の變化は高崎を過ぐると程無く感ぜられたり。しかして橫川より二十六の「トンネル」を經て列車は次第に山を登り行けるが、勾配は甚だ急となり、後の方より聞ゆる機關車の咆り吼ゆる聲は怖ろし。

煤煙にて黑くなれる小き洞は何れの「トンネル」口にもありて、列車が入りこむや否や幕を垂る。是は煙に包まれたる空氣の吹き込むを防がんが爲めにて、日本の石炭は至て柔軟なるを以て、煙の中には多量の石炭を含

み居るなり。

輕井澤には凡そ三時頃着するなるが、停車場の外側には「トンチル」工事の爲め死したる數多の人々を紀念せんとて、建立したる大石碑あり。今や何の障害も無く滑かに列車の進行する鐵道が、當時は無數の人々を犧牲にせしものなるを思へば、心恐ろしくぞある。

黄塵に汚れたる都市に住める者の、此の停車場を去りて、清涼に爽快なる空氣を呼吸しつゝ徒歩し、幾度か丘陵の妙なる光景を眺望しつゝあるの時、其快謂はん方無し。其の美や、全く音樂の如く、人を動かし、感せしむ、妾は麗はしき花の咲きしげる野原の間を押し行ける、長さ一里許の道をば歩みて上りしとき、今年始めて眞の生命を受け繼ぎたる心地しぬ。

野原の上には多くの「マッチ」函の如き、細やかなる田舍風の家屋は散在してけり。輕井澤は自ら宣教師たり學校教員たり、又實業家たる人々の好避暑地たる資質を有しぬ。最とも近き丘岡には、細き陋舍の建てられたるがあり。

輕井澤の村は一階の茅舍陋屋が僅なる列を成したるまでのものにて、それも朽ち且つ破れて見ゆ、たゞ彼方、此方へ繁昌するらしき店ありて新しき窓戶、新しき門口の見らるゝのみ。昔時の輕井澤は旅人が西方の海岸へ通行せし、天下の大道なりしも、一たび鐵道の敷かれてより、殆んど全く世に忘れらるゝに至りき。

然りし處、福音傳道會社が、始めて日本に派遣したるアークヂーコン、ショーと云ふ宣教師の巡行せる際、善き場處なるを發見し、彼れ自らの夏の住處となし、以て世に紹介したりき。

爾來輕井澤は繁昌し、當時三十圓にて賣買せられたる土地も、今や二三千圓の價あり、廣き室、大なる梁はあれ共、最早や何程の金も要求し得られざるほど古く廢れたる旅宿は所謂たゞにて買はれたりしかば、多くの

人々之を買ひ、些少の修繕を加へて夏の住宅と成しぬ。

先つは右にて、次週には旅館の事及び生活の有様に就き詳しく申し陳ぶべし。

第二信

千九百二年八月七日

輕井澤にて

最もなづかしき君よ。妾が先つ頃文せしよりは天景色の悪しき、云はんかたなく、たゞ雨降り霞立ちこめて半時も外にはすごし難くなりぬ。

妾がやどりしは龜屋旅館とて、半洋風にて造られたるなるが、室の障壁は、すべり易き屏風様のもの丶立てるのみなれば、秘密話など試みんことといとも恐ろし。妾は朝は早くより夜は遅くまで、同じ室にやどれる人々の爲め甚だ苦しめられ、また其の人



輕井澤の客舍に滯留せる尾崎新夫人エー、セオドラ

人の淺間に登れる折節の、危かりし出來事など聞されて、情の動けることも、また甚だしかりき。かくて妾は入口の上なりし正面の、騷々しき室を去りて、長き屋敷に沿へる門の一隅に建てられし別室へと移りぬ。

此の室には可なりの窓も戸もありたるが、障壁は木作りの格子に薄きかるた紙を貼れるのみなれば、無遠慮なる鼠の嚙みて穴明けたるが、一二ヶ所あり、妾が「ランプ」を消せし後すら、室には外より光明さしいりて暗からざりき。

龜屋旅館の主に、息子あり、基督教徒なるが、一度は宣教師たらんとの目的にて、東京は「セント、アンドリユー」の神學校へ入學せしも、父なる人之を好まず、歸りて業務に從事せよと主張しとぞ。

或る「ブラヂル」人ありて、其老人に「クリスチアン」なりしやと通譯者もて尋ねたるが、老人は、然らず、基督教は甚だ好みしことあるも其教には解得し能はざりし事柄多く、又若し新に基督教を信じなば自ら好めるものゝ多くを棄てねばならぬを知りたればと答へたりき。げに彼は既に之を實行したりしとの風評が多妻主義をば棄つべかりしなり。

年尙ほ少き佐藤といへるは、立派なる家の主にて、僅か十二才許なる其小女をば東京の小學校へ出だせるが同女は宣教師たる或る英國の「レデー」(貴女)と寓居を一にして、英語を學びぬ。

新しき條約の實施されてよりこのかた、英語を學ばんとの熱心はいとどさかんになりゆきて、今や漫遊の蹤も至る所、其の口にする英語を聞かんとて集ひ來り、話しかくる學生を見ざるはなし。而して妾は或る日の事英語を敎へ與れかしとの長き手簡に接したりしが、此の珍らしき文の終には、下の如く記されてありき。

「生は「求めよ、去らば與へらるべし」との尊き訓を信じて行かん」

さて君は妾に、能ふ限り、此地の人々が如何に生活居るや、その生活に就き告げ知らせてよともとめたまへ

るが、かゝるつたなき田舍にては、さほど面白き事もなし。そは農夫共は不淨不潔に、其茅屋は醜陋許のものなればなり。さりながら彼の人々はそのつたなきありさまをもて足れりとし、さちあるものと思ひ居れるぞ、たゞ一のなぐさめなるべし。而して盆祭と云へる佛の祭こそ、大淸潔の行はるゝ時なれ。あらゆる小女等は各浴場に往きて其身を淸くし、理髮者の手にて其髮を結ひ、淨き衣服を着け、かくして後、松林の墓場へと詣り佛となれる先祖等の墓石の前に香を燒きて伏拜み、又供物をば爲すなり。

さはあれど、世に比類なき看物は、原始時代にても用ひたるらしき至て粗造なる農具もて、田畑に耕やせる男子等の靑き股衣つけたるにぞあれ。しかして枝、又は草を擔ひ運ぶは、多く女子等の業にて、そが衣服は田畑に、働ける男子等にさも似たり。されば男子たると女子たるとによらず、農夫の群なすを見んものは、さながら靑く又灰色の煙のたなびくがごとくに思ふべし。而かも斯は一般の服裝なるが、年若き女子の折節には紅き衣の端を見するがあり。

さはあれど「ホテル」の女中等は、全く之と同じからで、その多くは活潑にやさしく、ばら花の如き頰を有ち、さも忙しく立ち働き、靑又は黃色の綿着物をつけ、色異の帶をしめ居れるが、旅客のよく親切にいたはり何かと心づけなす間は、いとゞ好ましけれど、一たび叱り罵り、または無遠慮に、かくなし呉れよと禮無き語もて命ずるならば、その愛らしき顏は、忽ちに澁面となり、柔順ならぬものとなる。客人、もし怒らば「チーサン」は却て面白がるなり。されば君の此國に來らん時、愛らしく微笑するを忘れたまふな、日本の人を怒らすことの少くば、いやましに、君は此の國人に愛しまるべし。

一週一度、女理髮者來りて「チーサン」は順番に其の髮を解き其の髮を結い、香油を塗り、縮緬の卷きたるをのせ、一又は二の針すらさすなり。乏かして理髮の場所には入口の一隅が、あてられ居れば、誰れにても其

有様を見るを得べし。

都邑にては、普通のグラス鏡、昔しの麗はしき、金製のしかもよく研ぎ成されたる、手付の圓鏡に代つて用ゐらる、古の日本には、女にして其のもてる、鏡をくもらすなれば、耻づ可き事とせられたりしが、それ故にや、諺に

かゞみがくもると、たましいがくもる。

夕方となれば、妾等はすべて此の少さ「ホテル」の室に座する事あり。こゝには妾の親しくなせし二人のいと愛らしき娘ありて、或る夕、互に奇怪なる又は悲惨なる物語を爲したりしが、妾が聞きたる其の一をば成るだけ手短に君に語らん。

箱根山への山路にて、旅人は、親知らずと大文字にて記されたる石の立てるを見るならん、妾が今告ぐるは此の親知らずの事にぞある。去る昔、箱根の土地に、或る少年あり、種々の不正なる行によりて、其家より逐はれたりしが、時經て、此の少年が、一層の悪漢となり、遂に强盗とまで成り果てし噂の、其家に傳へられし所、斯かる悲む可き風聞をば心に介くるものとて無かりしが、獨り其老れる母のみ、彼を愛する心やまざりきされば他のもの皆、彼を悪様に罵りしかど、母は尙ほ彼を信じて、さか思はざりき。かくて其の失へる子を探ね、成るべくば、連れ歸らんものと心を定めぬ。誰れにも其の事を明さず、一夜、心急げるまゝに能ふ限り、金と食べ物を掻き集めて、窃かに家を忍び出でぬ。こは其の子が、僅かなる金錢も、もたず、さぞや、飢へ疲れて斃れんばかりになり居る可しと想ひ。何にても彼に與へたく思ひたればなり。

而かして彼れ老母は其の弱き歩にて、山路をたどりつゝありしに、坂を下より急ぎ上れる人の足音、騷がしきを聞きたりしが、一言も物云ひ替はさゝりし間に賊は、其小刀を拔きはなち、忽にして刺し殺しぬ。斯くて

賊は老婆の有ちものを奪ひ取らんと、見おろせしに、其面の自分に似たりと思はれしかば、不審に思ひ見直せしに、月の明、星の光はまがふ方なき其生みの母なりき。今は彼れ自らの手にて其母を殺せし事の疑ふ可くもあらず。悔しさ、悲しさは胸に充ち溢れぬ。かくて彼は老母を殺せし小刀もて、自らの身に加へ死に果てにき翌朝、人々通りかゝりて、兩人の死骸を見出したりしが、その場所へと夫の石は建てられしなり。

夥だしきは復讐談なるが、或る人の話によれば僅か一年前の事なりき。或る夕方いつもの如く、此の室にて物語しつゝありしに、突然急ぎの足音聞へ、其音やむと、忽ちにして、泣き呻く聲の高く聞へたれば、何事ならんと、皆なく立ちあがりて出で見れば、數多の傷を受け、血にそみて倒れたるがあり、かくて彼は直に病院に送りこまれたりしが、何故にかゝる事のありしかと尋ねしに、彼は答へて云へらく、自らが現在、其にて衣食し居れる財産につき、或る者と法廷に爭ひ、之に勝ちたりしが、敗けたる彼は自らを威嚇せしかば、警察の保護を求めたりしも「ポリス」は少しも心に留めざりしかば敵なる彼は此の夜威嚇を實行せしなりと。去かして此の可憐なる人の傷は、重かりしも、幸に全癒せしとぞ。

妾は此の日全く異なる或る話を書き、それにて妾の文を終る事とせん。去かして此の話は日本の二六新聞(英文欄)に出でたるを、切抜きたるにて、妾は君の定めし悦ばるゝならんを思へばなり。而かも其如何なる話なるやは、其題號にて知らる、仕組は復讐又は死の事に非ず。戀愛にて、甚だ面白き事柄にぞあれ。あなかしこ。

戀の勝利

新橋にて有名なる美人お○○○と結婚せんとて物語りしつゝありし、獨り子の五郎に向ひ、頑固なる其父は曰

へらく「あの女をば棄てよ、あの女を、然うなくば汝の父と母とを棄てよ、彼の女はつまり藝者で、金の爲に歌ふのだ、金の爲に汝を愛するのだ、それが彼の女の業である、汝もし我が言を信せぬなれば母に問へ」母は微笑せしも、何も云はず、双方しばし無言なりき。五郎は其立派に分けられたる髪の上に手を置きながら「若し彼れが――若し私が――彼れと私が――若し二人が――」と恐る〳〵さゝやけば、「だまれモー云ふなしかしとかもしとか云ふ樣なる語を聞く閑暇が無い、汝は彼れを棄てるか、棄てぬか、其の一を答へねばならぬ。彼れを見離すか、此家を見離すか、何れかにせねばならぬ」と怒れる父は五郎の言はんとするを妨げながら、斯く云へり。

五郎は暫く考へたるが、其の最も愛する「情の女王」阿玉の爲めには、あらゆる物、父の家も財產も犧牲とし棄てねばならぬと、決心したれば、きつぱりと「よろしうござる、おとつさん、私は家を出ます、私は此家を欲しく思ふこと出來ません、しかし、おとつさん、阿玉は私のものとせねばなりません、私は斯樣に決心しました、私も大學の卒業生です、人の性質を知るには充分です、阿玉は泥中の蓮です、立派に生まれ、立派に敎育せられながら、不運であつたのです、阿玉は私には理想の妻です、世界は廣いけれど、私が共に喜び與に悲み、禍福兩つながらを分たんとするのは、阿玉のみです、私は、凡ての愛情と心を以て、阿玉を愛するのです、もし私が彼れと分れますなれば、私は暗やみの世界に住まねばなりません、愛無き生活はやみでありますさようなら、私は行きます、行きて明るい生活を求めます、さようなら」

五年の星霜は過ぎぬ。五郎も父も逢はざりき、又、五郎は父の金とて一錢も受けざりき。しかして五郎は不運なりき。盜みする事と自殺する事の外には何事にても試みたりき。阿玉も最早や若き美しき娘ならず、一歲の兒の、母とはなりぬ。都の塵埃多き中、神田の裏町の細き家にて、二人は住みたり。或る夏の晩、阿玉は五

郎の歸りを待てる間其兒を眠らせんとて、靜かにそを搖動かしつゝありしが、江の島、大磯、次は日光と、長き前、——嗚呼長き昔、夏の日の多くをば、五郎と共に樂しく過ごせし、それ〴〵の所を思ひ起し、天の使の如き面もて、眠れる小兒の顏へ、淚をば落しぬ、去かも此淚は其身の爲ならで、其の愛しき、夫や子供の爲に落せる、太き熱き淚なりし。

五郎は歸れり、其顏は曇りて見へぬ。夕飯を終りし後も甚た無言なりしかば、あらゆる辛苦を堪へ忍べる阿玉は夫を慰めんとつとめぬ。五郎は憂ひて「何程の金殘り居るや」と尋ねたれば、阿玉は數へつゝ「たゞ拾、貳拾——五拾錢——此れ丈あります」と答へ、若き夫婦は思に沈み、死したる人の如く靑くなりぬ。五郎は何か好き事のあれかしと望みて、最後の一錢もて、購ひ來りし二六の廣告欄を看下したりしが、忽ちにして彼は光明を見たりき。かくて新聞を投げ「キット、己は之をなそう」と叫びぬ。

去かして、五郎は立ち擧り、急ぎて剃刀を取りしかば、阿玉は目に淚もち「アー、あなた、剃刀にて何を爲さるのです、あなたは氣が狂ふて咽を刺すのですか、あなた、どんな事でありますか」と叫びしに、五郎は「靜になせ、恐るゝに及ばぬぞ。己はまだ本心を失はぬ、尤も汝が新橋に居つた頃は、汝の爲めに本心も失つた事もあるが。己は髭をそらうと思ふのである。」阿玉「それは何の爲めに」五郎「心配するな、汝は小兒を大事にして居ればよいのだ、己に何の爲めなど問ふな、ありたけの金を己に出せ、己は行く、己は出てこねばならぬ」と云ひ、早く髭をそり、又「カラー」や「ネックタイ」を脱して、五郎は阿玉を抱き、小兒に「キス」なし、其の儘出で行きぬ。

阿玉は小兒とのみありたるが、夫五郎はやけを起し、盜み心を出だし、人又は家をば傷けなどせずやと訝りつゝ、如何許り憂へしぞ。去りながら五郎は大丈夫でありき。彼は飛ぶがごと、急ぎ走りて、大爭鬪の開か

れたりし淺草へ行き着き、阿玉が與へし五拾錢にて、入場劵を購ひて、場內に入りぬ。玆にその大立物は、露西亞人なる拳鬪の名人にて、若し三分間、周りて、三度目の終まで倒れぬ者には、誰れにでも三千圓を與ふ可しと新聞に廣告ありしは、此の拳鬪者に就てなりき。拳鬪場の支配人が、五郎の、二六新聞の廣告にて、見たまゝを、聲高く觀覽者に陳べし時、群衆の間にありて、前の方に居りし、滑面の靑年は、立ち擧りて、『玆に私があります、私は其懸賞を取る爲め、やつて見ようと思ふ』と答へたれば、『おいでなさい、おいでなさい、やりなさい』と支配人は答へぬ。

かくて五郎が、圓き場面に入りし時、大喝采は起りぬ。何れも熱心に五郎を視たれ共、誰れとて、適ま其所に居りし五郎の親友すら、學校時代には甚だ誇り居りたる髭が無かりし爲め、其の五郎なりし事を云ひ得るものあらざりし。斯かる目立ちたる鬪戰のありし前、西洋人が幾人か、其懸賞を得んとて、彼れ露西亞の勇士と拳鬪を試みたれど皆、其の爲めに負かされたりき。

五郎は如何にして拳鬪の術に通じて居りしかは、全く不思議なりしも、其友には、彼が柔術の達人なりし事知られ居り、又强き、早き、巧者なる鬪者なりしこと、知られ居りしとぞ。さりながら五郎は二六新聞の長き讀者にて、此の新聞に始めて現はれし拳鬪の記事を、連日精しく研究したりしかば、恐らく其力は一層强くなり居りしこととなるべし。然らずば、如何に、妻子を愛し、勝つにあらずば、死せねばならぬ場合に迫り居りしにせよ、强力者の露西亞人と鬪ふ程の勇氣を有つこと能はざりしならん。

さて露西亞人と日本人――彼等は互に近く向ひて立ちぬ。日本人よ、露西亞人よ、日本人、日本人よ、露西亞人、露西亞人よと呼び叫ぶ聲はラッパの如く、大波なせる人の群を、鳴り渡れり。

第一、第二の周りは、互に烈しき打擊を交さずして、濟みたるが、五郎は第三の周りに、勇士の肩をはづし

て、其頭を打たんと進み寄りしが、果せるかな、立派に之を打ちたり。しかも勇士は、其恐る可き左右の拳を以て、五郎の顎、首、肋骨、胃をも打ちたりしが、五郎は雨の如く落ち來れる危き打撃を受けしにも拘らで、少しも弱らざりし、こは、彼が阿玉と小兒とを愛する情に勵まされたる爲にて、彼は第三の周に於て、最後の打撃を勇士の面に加へたるに、勇士は、銃丸にて其の頭を貫かれたる如く、倒れ伏したりき。

五郎は歡喜極り、無我無心のまゝ、走り歸りぬ。しかして三千圓を阿玉の前垂に置きて、始終の話を殘らず語りたるが、全く夢の如く思はれき。二六新聞の探訪者は五郎の姓名を知りたれば、翌朝の同新聞には拳鬪の有樣と、五郎の面白き履歷とを詳しく記しぬ。五郎の母は之を讀みて、其の子の居所、知れし故、悅び云はん方なかりき。頑乎なる父も、母の切なる語にて、漸次に怒も消え行きて、五郎は目出度く、其妻や子と、懷かしき昔の家にぞ歸りぬ。

（第二信終）

尾崎新夫人の事

尾崎夫人英子の父君は男爵尾崎三良氏にして、今年正に三十六、祖父の君は英國にて學德高き博士モリソン翁なり、博士は日本文明の紹介者として英國に遊べる邦人の知らざるなく、其の家は世々篤學の士を出せる名門なり。明治維新のはじめ尾崎男が英國に遊學中博士の令孃バチアの君と婚し、夫婦の間に英子夫人と二人の令孃とを擧げたまへり、英子夫人は幼にして遙々日本に渡來せられしが、當時の英國公使フレザー夫人は英子を我手許に置きて、敎養せられぬ、後英子は夫人に隨つて伊太利に赴き、夫人の實兄にして英國近代の文豪なるマリオンクロッフォールド氏の許に寄寓せらるゝこと二年、此間英子は佛語及び伊語を學び傍ら音樂を習ひ又巧みに文章を綴るに至りしは全く此の間の修養に成れるなり、英子夫人が作物たる「フエヤリーブック」及び「靑柳」等は已に内外人の賞讚を博せるものなりき。

英子夫人容姿花の如く、資性亦溫雅にして堅實、眞に婦女の模範たり、この淑女にして今や此の紳士と結婚したまふ眞に好配といふべし。

詔勅

朕東洋ノ治平ヲ維持シ帝國ノ安全ヲ保障スルヲ以テ國交ノ要義ト爲シ夙夜懈ラス以テ皇猷ヲ光顯スル所以ヲ念フ 不幸客歳露國ト釁端ヲ啓クニ至ル亦寔ニ國家自衞ノ必要已ムヲ得サルニ出テタリ 開戰以來朕カ陸海ノ將士ハ內籌董防備ニ勤メ外進攻出戰ニ勞シ萬艱ヲ冒シテ殊功ヲ奏ス在廷ノ有司帝國議會ト亦善ク其ノ職ヲ盡シテ以テ朕カ事ヲ奬メ 軍國ノ經營內外ノ施設其ノ緩急ヲ愆ラス億兆克ク儉ニ克ク勤メ以テ國費ノ負擔ニ任シ以テ軍用ノ供給ヲ豐ニシ 擧國一致大業ヲ贊襄シテ帝國ノ威武ト光榮トヲ四表ニ發揚シタリ是固ヨリ 我カ皇宗祖宗ノ威靈ニ頼ルト雖抑亦文武臣僚ノ職務ニ忠ニ億兆民庶ノ奉公ニ勇ナルノ致ス所ナラスムハアラス 交戰二十閲月帝國ノ地歩既ニ固ク帝國ノ國利既ニ伸フ朕ノ恆ニ平和ノ治ニ汲々タル豈徒ニ武ヲ窮メ生民ヲシテ永ク鋒鏑ニ困マシムルヲ欲セムヤ

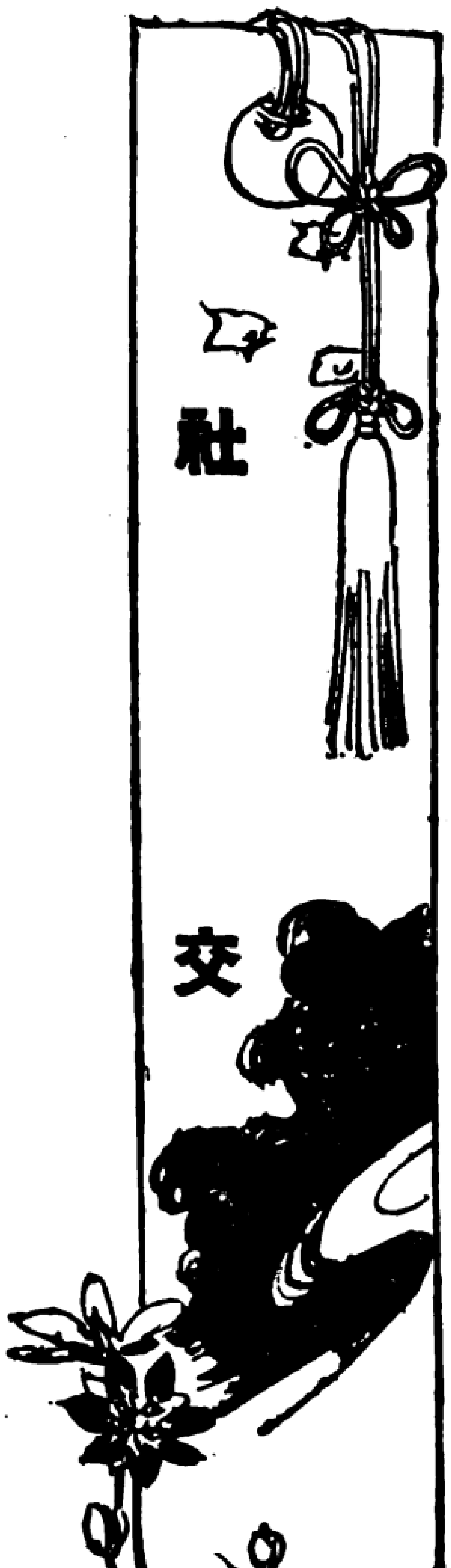
曩ニ亞米利加合衆國大統領ノ人道ヲ尊ヒ平和ヲ重スルニ出テテ 日露兩國政府ニ勸告スルニ講和ノ事ヲ以テスルヤ朕ハ深ク其ノ好意ヲ諒トシ大統領ノ忠言ヲ容レ乃チ全權委員ヲ命シテ 其ノ事ニ當ラシム爾來彼我全權ノ間數次會商ヲ累子我ノ提議スル所ニシテ始ヨリ交戰ノ目的タルモノト東洋ノ治平ニ必要ナルモノトハ露國其ノ要求ニ應シテ以テ和好ヲ欲スルノ誠ヲ明ニシタリ 朕全權委員ノ協定スル所ノ條件ヲ覧ルニ悉ク朕カ旨ニ副フ乃チ之ヲ嘉納批准セリ朕ハ茲ニ平和ト光榮トヲ併セ獲テ上ハ以テ祖宗ノ靈鑒ニ對ヘ下ハ以テ丕績ヲ後昆ニ貽スヲ得ルヲ喜ヒ 汝有衆ト其ノ慶ヲ倶ニシ永ク列國ト治平ノ慶ニ頼ラムコトヲ思フ今ヤ露國亦既ニ舊誼ヲ尋テ帝國ノ友邦タリ 則チ善隣ノ誼ヲ復シテ更ニ益〻敦厚ヲ加フルコトヲ期セサルヘカラス

惟フニ世運ノ進歩ハ頃刻息マス國家內外ノ庶政ハ一日ノ懈ナカラムコトヲ要ス 偃武ノ下益〻兵備ヲ修メ戰勝ノ餘益〻治教ヲ張リ然シテ後始テ能ク國家ノ光榮ヲ無疆ニ保チ國家ノ進運ヲ永遠ニ扶持スヘシ 勝ニ狃レテ自ラ驕抑スルヲ知ラス驕怠ノ念從テ生スルカ若キハ深ク之ヲ戒メサルヘカラス 汝有衆其レ善ク朕カ意ヲ體シ益〻其ノ事ヲ勤メ益〻其ノ業ヲ勵ミ以テ國家富強ノ基ヲ固クセムコトヲ期セヨ

御名御璽

明治三十八年十月十六日

各大臣副署



金子男爵夫人社交談

中村鈴子

夫人彌壽子は熊本縣士族山田秀典氏（明治九年より十五年までの青森縣令）の長女なり慶應二年十月十六日を以て生れ明治十三年を以て今の男爵金子堅太郎氏に嫁す人と爲り聰敏周密にして内は家政整理子女薫育に盡し外は賓客待遇より貴婦人の交際に勉め併せて社會の新現象に注意を怠らず眞に政治家の配偶として申分なきに庶幾し

橙黄色を帯び初めたる朝日影を踏み鳴らして、辨當を背負つたる草鞋掛の男兒、裾高に海老茶袴を穿いてリボンを揺らせつゝ行く女兒、此等男女生徒の錯綜せる小學校遠足の一群を車上に快く見送りながら半藏御門前を左折し、一番町なる金子男爵の御邸へ伺つたのは十月十日でありました。新しい白木の御門を潜れば、御主人御歸朝の日が爰三四日に迫れる爲にや、多勢の植木屋が御庭へ入つて忙しそうに働いて居りました。記者は家從に導かれて廊下を越え、洋風應接室に隣れる和風應接室へ通つたのですが、正面には故三條相公の肉筆なる「和安而好敬」五字の額を掲げ、御床の間の掛軸は、應擧の「梅に鶯」「紅葉に四十雀」の雙幅で、銅製鴛鴦の置物その下に居を占め、違棚には朽木釣瓶形の花活に茶の花を面白く挿まれてあり、支那模様の絨氈に紫檀の煙草盆と琥珀（色は鶯茶）の座蒲團が位置よく列べられたる趣より、時節柄御菓子は松葉と栗の打物であるなぞ、些細の事まで高雅な

御家風であると感じたので御座います。程なく出で來られし夫人は、勝色裾の京御召の袷に、繻珍と黒繻子の晝夜帶を結ばれ、光琳の浪を小さく縫ひたる濃紫縮緬の襦袢の襟は雪白の襟元を引き立たせ、鬢のふつくらと張つた根加減の好い丸髷に、金蒔繪の黒甲の櫛笄を挿して居られました。其張ある明眸と尋常な朱唇に無限の愛が籠り、細く通つた鼻筋と遠山の眉に威厳自ら備り、衣服の着こなし衣紋付き實に一點の瑕疵なき令夫人と心から感じて恍惚として居りました。夫人の話調は謙讓の中に快活な警語を挿み、客をして毫も倦ましめず、客は何れも故舊のやうにもてなさるるので御座います。

▲御主人の歸朝

取り込んで居りますので、斯樣な處へ御通し申上げて誠に失禮で御座います。俄かに庭の掃除やら座敷の手入やらで、御覽の通りゴタ〳〵致して居ります。ハイ多分十四五日と存じて居りますが、彼地から一直線の航路ですから、もつと早く着するかも知れないと仰しやる方も御座いますので……。唯今學習院へ通學致して居ます九歳の男兒は、『若し御歸りが十五日なら御迎に參りません』と申して居ります。それは十五日が學習院の運動會なので、昨年の運動會には未だ入學仕たてゞ人樣の後に付いて居つたものですから、今年は一つ充分に勝つて母樣に御目に懸けると意氣込んで居りますので、『僕が御迎に行かなくつても運動會へ出る爲めなら宜しいでせう』と申すので御座います。今朝も米友會から十三日出帆のルーズベルト孃を是非見送つて吳れと申して來られまして、私も孃に差上げたい物もありますから、參る積りでは御座いますが、丁度金子の着とかち合ひは致すまいかと心配致して居ります。ハイ先頃御出の際にも、金子が彼地でルーズベルト氏と御懇意に致した關係から米友會で是非私に參るやうにと申され、長崎さんや寺島さんの夫人と横濱の波止場まで御出迎致しましたのですが、混雜の中でしたから、私は唯だ金子が御世話になつた御禮を述べて花束を差し上げ、御一緒の汽車で歸つたのです。孃

は本當に御如才なくて上品な方で居らつしやいますね。それからタフトさんとは、金子が殊の外御懇意に願ふやうで、御話も種々出ますし、他にも米國で金子と一緒に演説をしたと仰しやる方も御座いました。

▲御留守中の責任

御留守だから御暇でせうと仰しやる方も御座いますが、獨りで萬端の用を足さなければなりませんので、却て忙がしいので御座います。滯米中は日本の政界の模樣を知りたいから、一週に二度ぐらゐ皆さんを呼ん



で御話を聽き、詳しく通信するやうにと申し付かつて居りますので、これは勉めて致す積りですが、病人其他家事の差支がありますと、ツイ十日に一度位になります。併し先ア大抵一週に一度月曜日に寄り合つて頂くので、其方々は農商務省や勸業銀行などに勤めて居らつしやる、以前からの金子の朋友のやうな御人達で御座います。其日には二階へ碁盤など置きまして、皆樣同志勝手に遊びながら雜談なさるのを伺ひますので、私が皆樣の御意見はと改まつて伺ふのも可笑う御

座いますから、新聞に斯樣な事が書いてありましたが本當でせうかなぞと伺つて段々と話を聽くやうに致し、而して金子の方へ通知するので御座います。

▲新聞と小說

新聞は時事、朝日、讀賣、二六、萬朝、國民、日々なぞで、地方の新聞は、金子の事の出て居る所だけ切拔を取寄せて見ますが、晝間に暇が御座いません時は、夜分讀みますので、翌日に越しますと事柄が判らなくなりますから、毎日必ず目を通して置きます。先達ても大笑ひ致したので御座いますが、奥羽日々に金子は如何にせしかと云ふ題で種々惡口が書いて御座いましたので、御寄りの方が奥さん田舎新聞の記事なんぞ何でもないぢやありませんかと仰しやいましたが、私は『イヽエ左樣ぢやア御座いません、地方と云ふ者は何樣な事でも一概に眞に受ける者が多いから、却て面倒です』と申したのです。或方は名古屋で、金子は今度實に酷いことを遣つたねと知人に言はれて、挨拶に困つたと話されました。金子はルーズベルトと聯合して事を謀つたのだなどと云ふ評もあるとか申しますが、外務省との打合せ通信は一々暗號で御座いますもの、如何して當局でない者は關係することが出來ませう。尤も國際上の事を御承知の方はチヤンと解つて居らつしやいますから、一々氣に懸けは致しません。小說で御座いますか、小說は極好きで御座いますから、葉山へ參つて居る暇のある時、又平生なら夜分寢付かれぬ際などに讀みます。ハイ菊池幽芳のや黑岩涙香のが好きで、總て飜譯物が好きなので御座います。私は感じの強い方ですから、小說を見ますと夜分臥せられないとが御座います。

▲夫人の洋裝

以前は少しは皆樣の御仲間入りに出ましたが、追々宅の御客樣も多くなり、且當年九歳の子供を持ちましてから、唯一人の男兒の上に腸胃が弱い方で、私が始終注意致す爲め、御交際は全然御斷り致しました。爾來唯だ觀櫻、觀菊の御宴に離宮へ上るだけで御座います。私は身體が小さう御座いますから、洋服は見苦し

う御座いますから、御宴に參る時だけは、據ろなく着けますので、日本の洋服屋で仕立てたまゝを着ますと、何様も格好が惡くつて可けないと金子も申しますから、大抵米國へ注文致します。これは私の身體に合ふた雛形を拵えて米國へ送り仕立てさせるのですが、着けます際には必ず西洋婦人に世話して貰ひます。ハイ松野クラ子さんに始終世話して頂きますので、松野さんは誠に深切な方で、全然着付をして帽子を被ぶせて、さあ是れで行つてゐらつしやいと仰しやつて下さるのです。私は慈惠院の幹事を　皇后陛下から仰せ付かつて居りまして



行啓の際は供奉致しますが、一度急遽の行啓で洋服の仕立には一週間程しか間合が無かつた時、御所用達洋服店で仕立てさせました處、其着用振を金子が見まして、何だか少し可笑しいと申しますし、私も氣になつて心地が惡う御坐いましたが、忍耐して濟ませたので御坐いました。外國から仕立てゝ參るのは、胸と背が締つて居て、如何しても僂む事が出來ない様になつて居りますが、我國のは背中の處が緩かに出來て自由に僂むことが出來ます。斯う云ふ處から自然格好に違ひがあるので御坐いませう。一體我國の婦人は外國の婦人のやうに腰が張つて居りませんから、其儘で洋服を着て格好の

宜い道理はありません。西洋人に着せて貰ふ際には、兩腰へ厚い蒲團を當て、乳房の處へも支物を致して權衡を取ります。毎年末には御所から洋服地を拜領致しますので、これを頂きに上るのが暮の二十八日頃で御坐いますが、畏れ多くも近年は御使に御持たせで御下賜になるので、誠に勿體ない事と存じて居るので御坐います。

▲觀櫻觀菊の御宴

これは御幕内と御幕外で御宴を賜はりますので、私しなぞも金子が大臣の際御幕内で頂きました、大抵卓子に四五人位づゝ就きますので、私は毎時物故なられた田中宮内夫人と御一緒で御座いました。觀菊の御宴には隨分御寒いとが御座いまして、松野さんが貴女は御弱いから腰へ灰爐を入れて居らつしやいと仰しやいますので、灰爐を入れて參りましたが、田中夫人に話しますと、田中夫人は『私も實は灰爐を入れて居ますよ』と仰しやつて、大笑ひ致した事が御座いました。

▲葉山別莊に行啓を忝うす

昨年の二月に私は養生の爲め葉山へ子供達を拉れてまゐつて居りました所が、金子は葉山に御行啓中の皇后陛下に米國へ出立の御暇乞を申上げる心得で十三日に別莊へ參り、翌日御用邸へ伺候致す積りで居りました處、十四日朝九時頃に御用邸から御使人が御越しで、唯今皇后陛下がこちらへ行啓になりますと御傳へで御座いました、餘り意外の忝なさに吃驚致しまして、如何したら宜しからうと存し、まだ男子と共に臥せつて居ました金子を起して相談致しました處、金子は離れ座敷を御座所にと申しました。せんたい私共の別莊は散々住み荒しまして普請に掛りました際、戰爭開始の爲め中止に致した位で、却々御坐所に致すのは畏れ多いから、狹くとも少しは新らしい離れ座敷を御坐所にと考へたので御座います。早速出入の者（山へ行つて居る者まで）を殘らず呼び集めて、庭や座敷の掃除を致すやら、火鉢を入れて部屋を暖めますやら、大混雜の内に御用邸から卓子や椅子を御持ち込みになりました。漸と準備が出來ましたので、御出迎へ申し

上げやうど金子はフロックコートに着換へ、私しも髪を梳き上げて居りますと、最早御出門遊ばしたとの報知で御座います。御用邸は直ぐ御隣りで、私共の裏門まで十間餘の距離ですから、遑てゝ一同裏門へ出ました。此時九時四十分で御座いまして、丁度四十分間で準備致したので御座います。私共は裏門口の坂道を下りて拜する暇もなく、早や其坂道へ御はこびになりまして、俄に騷がして氣の毒であると御言葉を賜はりつゝ御入りになりました。供奉は香



川子爵と舎人二人、女官が四人、御烟草盆持が一人で御座ました。陛下には薄い藤色の御洋服に駝鳥の羽毛の御襟巻を遊ばされ天顏麗しく拜し奉りました。御坐所に當てましたのは離れ座敷の八疊でして、私共は次の六疊の間で拜する心得で居りました處、陛下には皆此處へと玉座間近く御召しになり、今日は儀式でないから遠慮は無用と難有い御言葉を賜はり、此處は用邸より見晴しが好いと宜ひ、四方山の御話しを遊ばし、八歳になります男兒を御膝元へ御招き遊ばし、年は幾つ名は何と御尋ねに

なりましたが、私共は若しも男子が失禮な事でも申し上げたら如何致さうと心配で耐りませず、早く御答を申し上げないかと申しても、唯だ微かな聲で武麿……と御返事致したばかりで、何を御意遊ばしても、合點々々ばかり致して居りましたのを、陛下は面白い者よと御笑ひ遊ばされ、汝は海軍服を着て居るが、今から海軍志願であるか、可愛らしい子であると宣ひ、尚ほ帽子の裏に記した文字を御覽じて御尋ねになりましたので、これは先年ペルリ紀念碑建設の砌、來航致した米國水夫が拵へた趣を申し上げました處、これは善い紀念品、武麿大切に保存せよと、御意遊ばされました。　陛下は延べの御烟管で御喫煙遊ばし、御機嫌美しく十一時まで御休憩あらせられ、近邊を散歩いたして又立寄るからと宣ひしゆゑ、私共夫婦と武麿と御供申し上げまして、海濱の方を御ひろい遊ばされましたが、始終武麿に御言葉懸けさせられ、武麿の走るを御好み遊ばされ、軈て還御になり、一同へ打物の御菓子を御手づから賜はりますので、金子は取り敢ず帽子で御受け申し上げ、武麿も父の通りに帽子へ頂きました。私は取急いで扇子一つ持つて居りませんでしたから、失禮ながら懷紙へ御受け申し上げたので、何ですか夢心地で御座いました。御還啓は零時三十分で御見送りに隨ひましたが、丁度近邊に參つて居る私の實母が後家では御座いますし、斯樣な折でなくは御目通りは叶はぬと存じ、呼び寄せまして裏門で拜させました處、香川子爵が『此方は奥さんの母親さんでせう、好い折柄ですから拜謁を……』と仰しやつて下さる時、陛下には二つ三つ御降り遊ばされた坂道を御立戻りになり、今日は不意に金子を騷がせて氣の毒であつたと忝い御言葉を賜はりましたので、老母はポロ〳〵と難有涙を溢したので御座います。

此時夫人は手を鳴して小間使を呼び、葉山で拜領の御品を是れへと命せられましたが、小間使の持參したのを拜見致すと、金子男へ御下賜の御品は練仙臺の袴地、夫人のは風通御召と赤地に金糸繍の紙入、兩令孃へ鏡付の紙入、夫人の母堂へは紫地の紙入、

而して令息へは、日常御使用の文鎮一對、何れを拜見致しても、聖旨の忝さを感佩さるゝのですが夫人は恭しく箱に收めて違ひ棚に載せられ、御話を續けられました。

誠に畏れ多い事ですが、各自にそれ相應の御品御見立て下し置かれ、特に私へ賜はつた反物は貴女が仰しやる通り私に似合ひそうな柄なので、雲深き宮居に在して、斯くまで御心付き遊ばす事に感泣致したので御座います。尙ほ畏れ多い事には、私共への行啓も一つは金子が渡米致すに付き、善く盡力致すやうにとの御申含めの聖旨も在らせられたので、御暇乞に上る前に行啓を辱う致したる金子の難有さは何十倍でしやう。今に始め奉らぬ　陛下の御賢德は却々申し上げるも畏れ多いので御座います。私共は每々御すべりの御菓子を戴きますから、此時恩賜の御菓子は箱へ入れて、其頃東京の宅に宿泊して居つた軍人（十四人）へ送り、皆さんで半分づゝでも御戴きなさいと申し添へました處、軍人達の喜びは何に譬へんやうも無かつたので御座いました。

▲御主人の趣味

拙者は座敷を清潔にして、食物を旨く拵へて與れれば、何にも不足は無いと始終申しますので、『良人は本當に意地がきたないので御座いますね』つて善く笑ひますが、食卓の上へ種々な品を少しつゝ列べるのが好きで御座います。料理は御椀盛や酢の物なぞだけ日本のを好み、鉢物は西洋風か支那風を好みます。一體金子は支那料理を好みますので、從來私なぞとも善く偕樂園へ參りました。酢の物は一日に二度づゝ缺かさず調へますから、一つ物ばかりも致されませんし、材料に困り切ります。在宅の間は始終御客がありますから、大抵御晝と晩は御客膳の用意を致して置きますが、金子が御酒を少しも頂きませんから、御客樣に女中が勸めますと、酒は無理に勸めるもので無いと、每時叱ります。それで私は『皆さん此家で御遠慮遊ばすと酷い目に御遭ひですよ』と申すので御座います。金子は書畫骨董も大好きで、特に刀劍が非常に好きですが、

私は毎時『掛物や道具は座敷の装飾になるからイクラでも御召し遊ばせ刀劍は保存に手數が掛つて困ります』と申します。けれども刀屋が國次でも持つて參ると堪へられないと見へ、先ア暫くの間置いて行くか可いと申して預り、椽側の端へ出ては拔き放して善いな善いなと申しながら眺めて居りますが、遂に求めて了ひます。私は『良人が善いなど仰しやると大抵定まつて居ます』と申して、毎時笑ふので御座います。

▲書齋

座敷も折衷が好きで、毎時皆様に寄り合つて頂く二階の書齋の唐紙へ甲州の富士を油繪で描かせました。取り散らして御座いますが御覽下さい、

夫人は二階へ導かれましたが、板戸に畫かれたる鷲に鴫の圖は沈着精錬の筆と存じました。

ハイこれは大倉から取寄せましたのですが、日本畫の古いところは、却て自然に近く洋畫に似て居ると金子が申して居りました。甲州富士の油繪は、此板戸に對照するやうに描かせたので御座います。

夫人は伊藤侯、黒田老侯、及び舊師の書など指れ、金子が此處は自分の部屋だから恩人を集めて置くのだと申して居りますと話され、元祿時代の遊女屋を描いた浮世繪の屛風を見せられ

これは金子の母が病氣中、何か賑かで慰みになるものをと骨董屋へ注文して取り寄せましたので、無落欵では御座いますが、何れ名のある畫師の筆だらうと存じます。併し圖柄が斯樣なですから、應接室へ置くことが出來ないのです。

復び以前の室に戻つて、珈琲など勸められ、御主人と展覽會へ行かれた事など話されました。

▲筑前琵琶

郷國で聽き慣れて居ります爲めか、筑前琵琶が大好きで御座いまして、御來客の折は、門前に居る法師　橘を呼んで奏させますが、筑前琵琶は薩摩琵琶より賑かなやうで御座いますネ。長唄や義太夫も好きで、雨の降る晩なぞ、今夜は寂しいから義太夫でも聽きたいと仰しやる御客がありますと、昔し葭町の藝妓をして居

つた者が唯今は義太夫語りとなつて居りますから、毎時呼んで語らせます。山崎と申して五十歳ばかりの婆ですが、却々上手で方々善い御邸へ出入致し、丸髷作りの極上品な婆で御坐います。

▲両令嬢

長女は二十歳になりますが、私が若い折の子の故か身體が弱う御座いますし、金子が家向の女に仕立て丶見たいと申します所から、これは學校へ遣はしませんで、十二の時から平尾光子先生に來て頂いて宅で教育致しましたので、誠に内氣で仕方が御座いません。皆が出ます時にも、私は御留守致しませうと、毎時家にばかり居ります。次女は學校へ遣はしますが、これは却々元氣で御座いますよ。次女だけは私の思ふ通りにさせて下さいと私が申して居ります。父親は不在勝だものですから、私を非常に慕ひまして、僅かの間葉山へ參つて居る時でも、直に二人で出掛けて參つて『母親が御不在だと寂しくてなりません』と申すので何時までも其樣では困ると笑ふのです。一體私も娘共を一人で出すのが心配ですから、必ず年寄の家從を附けて遣はすので、御友達が御入來になつても、夕刻になると、私の方から御歸りの御催促を申し上げ、年寄を附けて御送り申し



て居ります。

▲令息の衞生注意

後繼が幼年ですから仕方が御座いません。これは腸胃が弱い方ですから、私も餘程注意致しまして、失禮な御話しですが、五歳位まで毎日便の試驗を致しました。弘田さんが、大抵滿二歳まで便の檢査をすれば澤山だと仰しやいましたけれども、私は何樣も氣になりまして、通じを便器へ取り、長い箸で搔き廻して消化不消化を檢べました。私は夜分も可なりおそくなりますけれども、毎朝六時半には必ず倅と一緒に起き、冷水で倅の身體を拭ふて遣はし、それから朝食を致させるまで、側に附いて注意して居ります。御晝の御辨當は毎日後から學習院まで持たせて遣はしますが、これは温い御飯を頂かせたいからで、學校の先生も餘り御注意が過ぎて宜しくないと仰しやいますが、私は男兒の十五歳までは出來る丈身體の發育に注意する決心で御座います。金子は其樣に子供に氣を揉まず團（琢磨氏）の家の如に放任して置けと申しますが、團さんでは多勢の御子さんですから氣丈夫ではあるし、自然寛かになつて知らぬ間に子供衆が學校へ出掛けると云ふ風なので、それが却つて結搆なことは申すまでも御座いませぬが、私方では僅三人の子供ですから、誠に心細く、惡いとは存じながらも、ツイ注意致し過ぎる傾向になるので御座います。

▲髮、化粧

姑は昔氣質で、身だしなみなぞ嚴ましく申す方でしたから、娘共にも化粧は致させますが、唯だ餘り濃い化粧を致す事と鉛毒ある白粉を用ゐる事とを始終戒めて置きます。髮も私は始終丸髷に結んで居りますし、娘共も皆日本髮で御座ゐまして、二番目の娘は唐人髷で通學致して居ります。

▲姑

私は十五歳で此家へ片付きまして、姑には實母も及ばぬ世話になりました。參つて以來暫く金子の妹（今の團氏夫人）と一緒に裁縫の稽古に通ひましたので御座います。私は始終姑に倚りかゝつて居りましたので

何時までも嫁根性が脱けないで困ると、金子に叱られた位ですから、五年前に此大切な姑を失ひまして以來、頼りが無くなつて、自分の責任が一度に増したやうな心地が致し、身體にも障るので御座います。それで毎度子供達に「此佛樣には母樣が一番恩を蒙つたのですよ」と位牌の前で申し聞かせるので御座います。

▲女中

御飯炊と仲働きと小間使、それに子供の世話致す者が一人と、チヨツト料理の出來る者が一人、都合五人で御座いますが、客の立て込みました時は、これだけでは手廻り兼ねます。料理は二人に教へ込んで置き、一人差支があつても、間に合ふやうに用意して置きます。夜分もおそくまで客來勝ですから、當番非番を二人づゝに分けて、夜分は交代に早く休ませる事に定めて御座います。今日平尾先生が支那料理の出來る女を連れて來られる筈で御座います。



御話しの折柄、丁度平尾刀自來訪の由を女中が取次だので、夫人は直に此室へ御案内申せと仰せ付けられ、刀自の入り來らるゝや記者に紹介され、尙ほ引き續き來訪の人々を紹介さるゝ

など、善く社交に練達されたもので、記者は只管夫人の伎倆に感服致したので御座います。

櫻井女史の女子教育談

婦人記者

女學校設立の先鞭者として有名な櫻井ちか子女史は、目下本郷彌生町に女塾を開いて英語及び裁縫を教授され、又他の學校へ通學する地方の女學生を實費を以て低廉に賄ひ、懇切に監督する爲に、閑靜な寄宿舍を設け、家庭的生活をなさしむるなど、百方女子教育に心身を勞されてゐるのです。女史の眞率にして毫も衒耀の風なきは、誰でも賞歎して居る所であるが、記者の訪問した際も、直ぐに玄關へ出迎へて應接室へ導かれました。女史がフラチルの單衣に、晝夜帶をひつかけに結ばれた風姿は、世帶じみた主婦らしくも見へ、應接、對話の體度の凛として侵し難い所は、敎育家の本領を備へた女丈夫とも見らるゝのです。女史は三十年來の長日月、敎育事業の爲に幾多の辛酸を嘗め、五十の坂を一つ越え、二人の孫に祖母と呼ばれて在らるるに似ず、秀麗豐腴の天質は毫も衰へては居られません。さて女史の御話は……

▲女子の腦力發達に就て

私が始終感じて居るのは、腦力發達の時期の大切であると云ふことです。女子腦力の發達するのは、如何しても若いうち先づ二十歳までの間で御座いませう。それで私は此大切の時期を手藝にばかり費して了ふのは惜しいものだと思ふのです。尤も美術や工藝を專門に學ぶ人とか、中流以下で生計の都合上早く職業を求むる人などは別問題ですが、中流以上の家で、令孃の若い間に茶の湯活花なぞの手藝を學ばせ、此手藝を卒業してから今少し普通學を遣らせたいなど申すのは、出來ぬと云ふ次第ではありませんが、學ぶ者も敎へる者も非常に困難で損で御座います。私共是れまで多勢敎へましたが、手藝を先へ學んだ人と、最初から學問をした人とは大層な違ひであります。尤も高等女學校

に入つた人は、適當の順序を以て教育されるから宜しいのですが、唯だ手藝の教育にばかり熱中される向も隨分あるので、注意を請ひたいと存じます。裁縫なぞは勿論大切に違いないのですけれども、斯樣な事は年を少し取てからでも充分出來ますから、先づ腦力を發達させるとを最初と致したいのであります。



▲世界的婦人

從來は日本の婦人であつたのが、今後は世界の婦人として立たねばならぬのですから、父兄は出來得る限り腦力發達に注意せねばなりますまい。世界的思想を養ふには、是非世界的の學問を仕込まなければなりませんが學問の力は實に非常なもので、英、佛、和漢の學を修めた人が各自其性情を異にせるを見ても、其感化の力が強いと云ふとが判ります。ですから今後の婦人には、外國の學問を仕込んで外國の事情を知らしめ、眼界を廣くさせなければならぬと思ひます。女子に高等の教育を施す弊害を兎や角言はれる向もありますが、これはホンの些細の弊害で、大體の利害から考へれば、如何しても高等の教育を與へて、立派な世界的婦人を作らねばなりますまい。第一、教育のある婦人は世に處する道が巧者であることは、實驗上明かでありま

す。而して男子は結婚後も學問の進歩を得られますが、女子が家を持ては、大抵學問は發達致さぬものですから、女子の方は男子に較べて學課の程度を高くして戴くが宜しいと存じます。女子の職業で御座いますか、是れも一通りの敎育を與へてあれば、萬一不幸に遭遇した際にも、身を處する腦力が備つて居りますから、自然方法を立て得らるゝのであります。

▲女學生の今昔

私が女學校設立に着手致しましたのは、明治九年でしたが、其頃の敎育法は勿論唯今のやうに完全しては居りませんでしたけれども、唯今の女學生よりは眞面目に熱心に學んだもので御座います。先日も或書肆の主人が『昔は英語の敎科書以外に何か研究の材料となる書物は無いかと探す人が多かつたが、唯今では敎科書以外の書物は一冊も賣れません』と話しました。實に此話の通り、唯今では敎科書が整備して少しも不自由なく修學が出來るので、生徒も一向他の書物を探す氣にならないのであります。私なぞの勉强時代には、始終書肆を探し歩いたものでした。斯様な具合で、總ての事が餘り充分過ぎて却つて自ら發明する力が乏しく、隨つて浮々と皮相ばかり學ぶと云ふ風が、今の女學生に往々あるかと存じます。

▲女子の修學時代

私が英語を學び始めたのは、明治三年頃でしたが、最早此家へ嫁した後でありました。私の通學致したのは、神田佐柄木町の芳英舍と云ふ女子英學塾で、生徒は百名餘りも御座いましたが、敎師はウキルソン氏と齋藤つねと云ふ婦人が主任でありました。此齋藤と云ふ婦人は、神田多町の青物問屋の娘で、却々學力のある人でしたが、唯今は如何して居られますか一向消息が判りません。敎授法は丁度昔の私塾のやうで、先進の生徒が後進生に敎へ、敎科書は主にウキルソン、リーダーを用ゐて居つたのです。其後續いて竹橋の高等女學校が興り、女子の英學は一時隆盛でしたが、それから又ズット衰へました。私は芳英舍を退いてから、家へ敎師を聘したり、又宅から世話して學校へ通學さ

せて居る學生に敎へて貰つたり、種々樣々な眞似をして勉强致したので御座います。

▲女史の塾舍

唯今私の塾では、英語と裁縫を主として居りますが、成るべく家庭的に養成致したい目的で、極小規模に致して居り、通學生が五十名程と塾生が十五名程であります。近頃地方から出て來る女學生が寄宿の惡い爲めに、一身を誤る者が多いので、私共では他の女學校へ通學して居る女學生をも預つて世話致して居りますが、是れは本當の實費だけで賄ひ致すのです。世間では何か下宿屋の眞似でも致すかのやうに思ふかも知れませんが、實際塾費には補足を致す位で御座います。唯今では私共夫婦だけの生活で、別に困りも致しませんから、塾生は義務的に世話致す心得で御座います。寄宿費は食料六圓の外に室代を二圓、寒中は炭代を五十錢と定めてあります。此家は家賃が出る次第でもありませんが、これだけの家ですと始終此處彼處が破損しますので、此修繕やら疊替やらで相應に掛りますから、室代を申し受けるので御座います。寄宿生が居りますと、又それに就て便利なやうに方々手を入れ道具も備へたいと存ずる樣に爲り、却々利益なぞ考へては世話の出來るものでありません。塾生とは一家族の生活を致して居りますから、別に難かしい規律を設けませんでも、各自に善く親和して、出入なぞも心配を掛けることは致しません。私は隨分各地方を廻つて來た者ですから、地方から大分世話を頼まれますが、十五名以上になると室が足りないので御斷りして居ります、通學生の方は敎師を二人雇ふて午前に英語、午後に裁縫を敎へて居ります。入學は高等小學卒業の者か、之と同等の學力ある者からで、普通學の無い者に英語を敎へても、詩文とか歷史とかの解釋が出來難う御座います。唯今の高等女學校で御座いますか、これは多少缺點もあるかは知りませんが、兎に角敎育の順序が正しう御座いますから、腦力の發達が宜しいと存じます。

▲米國の家庭視察

私は前後二回參りましたが、主に米國の家庭を視察致す目的で、合衆國中大抵廻つて見ました。それからそれへと知己の紹介で、種々な家を訪問致したのですが、極上流と極下層は却々入り込めませんので、先づ中流の家へ出入り致したので御座います。目下の我國の家庭も追々改善されつゝありますが唯だ比較して觀ると米國の家庭の方が複雜つた困難な事情が少いと思ひます。それは親子各自の權限が整然と定つて居る爲めに、無理に親子同居すると云ふ厭な事情がありません。彼地でも中流以上の家に親子同棲して居るのがイクラもありますが、それは嫁も舅姑と極親密な間柄の者に限つて居ますから、同棲して却つて善く調和して居るのです。而して若夫婦が主人公で、其家へ親達が同棲すると云ふ權限が整然として毫も亂れませんから決して面倒が起りません。中には嫁さんに職務のある爲めに、姑が代つて家や子供の世話するのもありますが、これも一つの職務として遣つて居るので、極都合好く修まつて居ります。我國の中流以上の嫁姑の間は表面は極美しいやうでも、内幕に隨分面倒のある向もあるやうですが、畢竟新教育を受けた者は、昔しの人との思想の衝突もあるのでせうし、前に申した權限の判然定まらない爲めに、何方か無理に忍耐する所から起るのかと思ひます。從來の家庭は唯だ忍耐一天張で治まつて來たのですが、追々女子の智識が進んで世界的になるに隨がつて、無理に忍耐ばかり出來なくなるのは、自然の勢ひですから、却つて難かしいのでありませう。併し追々社會か進むに隨つて、家庭の治め方も完全になる事と信じます。

▲女史現今の家庭

私共でも唯今娘夫婦と同棲致して居りますが、矢張前に申す通り雙方の便利上から左樣致して居りますので、親子各自の權限を定めてありますから、至極愉快で、良人も孫共を樂しみに暮して居るので御座います。

私の洋行中は娘を橫濱の學校へ預けて置きましたので、其後音樂學校を卒業致し、結婚後も宅の生徒に音樂を敎へて居ります。私は一體萬屋の方ですから、敎

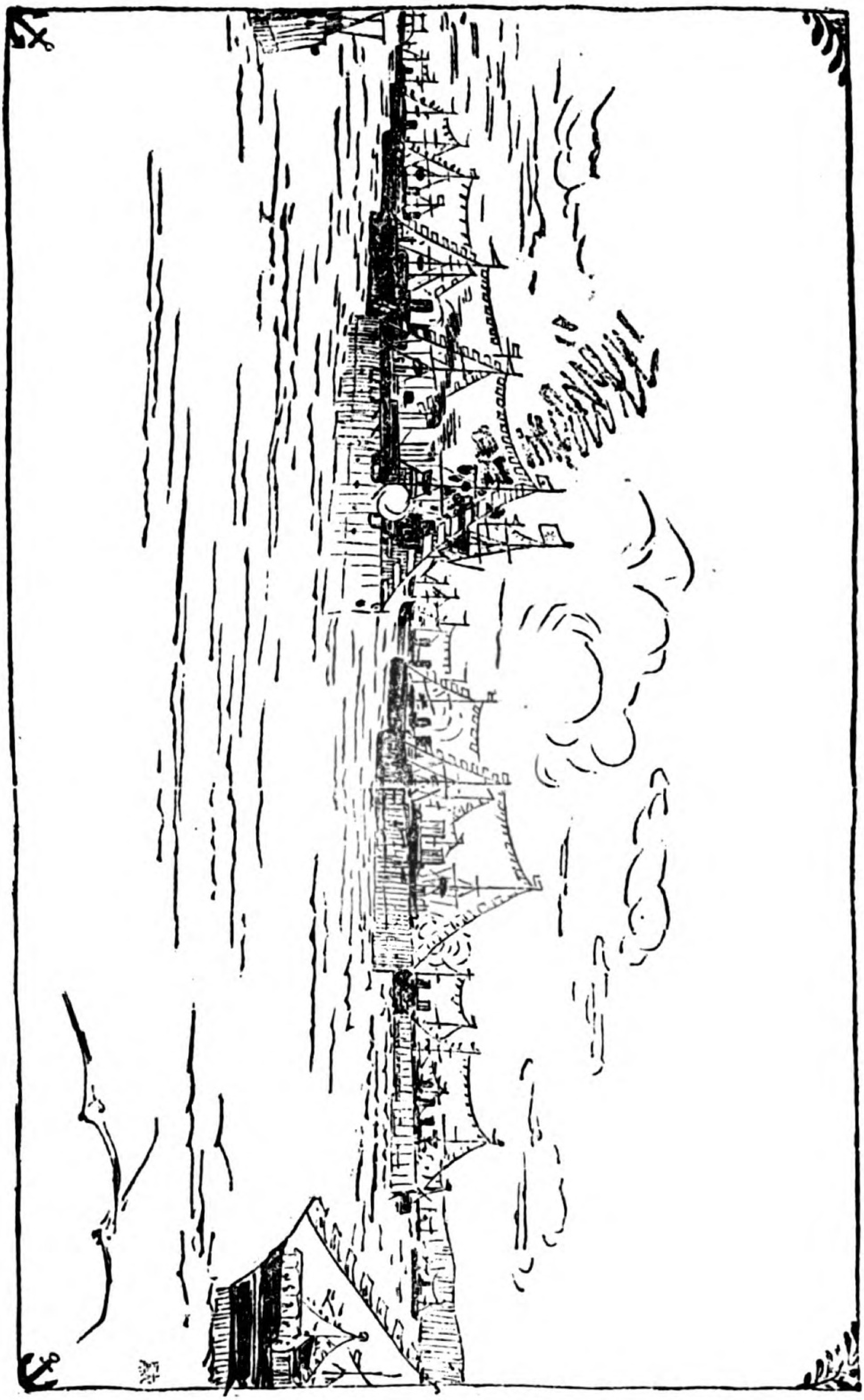
授の間隙には孫の守も致し、朝も早くから起きて見廻つたり働いたりするのが好きですが、人樣が入らしつて『先生が其樣な事までなさらずとも』なぞと仰しやいます。併し私は忠實に働く爲めに身體も壯健で、誠に幸福だと存じて居ります。

▲女子は決心が肝要

女の方を世話致すのは隨分久しい間ですから、種々な人の色々な履歴を觀ましたが、毎時思ひ出して感じますのは、虎ノ門の女子學院時代に塾の賄を致しながら苦學した一婦人の經歴であります。此婦人は其後札幌まで參つて種々の辛酸を嘗め、彼地の骨董屋へ縁付きましたところ、不幸にして夫に死別れ、幼兒を抱へて牛乳配達と爲り、非常の困難を耐へ忍んで居りましたが、遂に牛乳搾取所を開いて息子達と諸共に商業に從事する身分となりました。此婦人の感心な事は、如何なる不幸の境遇に際會しても、忽ち諦めを付けてズン〳〵處置を付けて了ひ、決して愚痴な考を有つて落膽することはありません、私は女子に此決心を養はせることが實に必要だと熟々考へて居ります。

女史は四歳ばかりの愛孫を背負はれながら、記者を導いて敎場、塾舍、臺所、洗濯場など見せられましたが、左して廣からぬ地坪に都合好く空氣の流通するやう建設されてあるので、流石に老練なる女史の腕前と感服しました。

近頃女子學院に東京府から來年度女子高等師範入學希望者あらば推薦せよと其資格や學力の程度に就て通牒があつた丁度此日校長の矢島女史は眼病の爲めベツトに横はつて居られたので僕が讀できかせると女史大に憤慨して曰く一體府廳では女子學院を何と思つて居るのでせう私の院は高等師範の豫備校ではありません自分の生徒は自分の理想する樣に敎育してゆくつもりです何も高等師範のお世話になる用がありません從來我國の人は大槪官公立の學校を大變に有難がつて居つたものです夫は肩書が欲しい爲めなのです肩書を得たい爲に學問するこれが學問の奴隷と云ふものです私の學院には肩書が欲しい爲に官立學校に入學しよう抔と云ふ者は一人もございませんと答へられました。



大觀艦式の光景（十月廿三日東京灣頭に於て寫生）

東京灣内 大觀艦式

我が戰捷國の大觀艦式は東鄕大將凱旋の翌日空前の壯觀を以て東京灣内に擧行されたり朝來天の一方に淡雲現はれ微寒を催ふして晩秋の强き日光を蔽したれどやがて御稜威に柴波も凪ぎ大氣長閑に海原遠く觀艦式には天祐の好日和なりき。滿都の士女は擧て拜觀に奔り、田夫野人も亦た百里を遠しとせずして拜觀に參する者十數萬を以て數ふるに至りたれば海上の壯觀は云ふに及ばず陸上も亦雜沓名狀するに難く蓋し空前の賑ひなるべし

叡聖文武なる　大元帥陛下には過去二十閱月炎暑を冒し嚴寒を凌ぎ百戰百捷を經坤輿未曾有の偉勳を奏して茲に凱旋せる我が艦艇を御親閲あらせらるべく觀艦式へ行幸あらせられたり

陛下には大元帥の海軍御服裝にて德大寺侍從長御陪乘前記各皇族殿下を隨させられ田中宮内大臣、以下侍從等供奉し參らせ御簡略なる鹵簿にて新橋停車場へ御着あらせられ同停車場にて先着の桂總理、山本海軍以下各大臣、大官、御出迎へ申上げ八時三十五分拜觀の群集一齊に歡呼せる萬歲聲裡に龍顏麗しく御着輦それより御料車に御乘御あらせられ皇族殿下を始め奉り供奉諸員等陪從桂總理以下各大臣亦扈從し參らせ八時四十分御發車かくて

▲横濱御着

被遊皇太子殿下東鄕大將井上大將以下の御迎へにて直に無蓋の馬車に召され沿道堵の如き拜迎の公衆の間を鹵簿嚴に御通過九時三十分稅關監視部前に御着あらせらる御道筋に歡聲のどよめくと同時に煙火一發天皇旗を打上げ續いて幾發の間に鳳輦は着せしより數萬の聲々に萬歲の聲は繰返へされぬ、御道筋に充滿せし人人は潮の如く海岸になだれ來りぬ、九時四十二分御休憩所の前に馳せ違ふ人の稍靜まりしと見るに一團の浮棧橋に向へるを見たり白袴の人は侍從職黑服の人は海軍將校中に畏れ多くも肥大なる御體格に著き黑の海軍々服を召され御胸には菊花大勳章を佩びさせられしこそ大元帥陛下と拜し奉りたれ

▲御召艦乘御

須臾にして初風の艦頭に天皇旗飜りぬ、忽にして轟轟殷々百雷の一時に落ちしが如きは參列諸艦の皇禮砲なり、壯絕、壯嚴、雄大の美に打たれて拜觀者は狂しぬ、拍手と歡呼とが砲聲に相和する間に初風は動き初めたり、約十分間は連發する煙花を仰ぎ禮砲の白煙を眺むる時初風は淺間の右舷を横に艦尾を迂回して左舷に着きぬ、時に九時五十五分、淺間

の後檣に懸がへりし將官旗はするく〱と降りて紅の錦に菊花の御紋ある天皇旗の嚴かにも輝ける二分三分、淺間の前檣に信號旗揭揚さるゝと同時に禮砲は又轟きぬ、淺間は錨を拔いて旣に其舳先に白波を斬らんとす、御先導艦たる八重山も亦港外にあつて黑煙緩く吐きつゝ今や其汽罐に運轉の令傳はらんとしたり

御召艦淺間通過の際は各艦に於て司令官、艦長、副長等は艦橋に其他の高等武官及准士官は甲板に於て最敬禮を行ひたり、御召艦は艦列間を御一巡の後第一列の西方豫定の位置に投錨す、此時各艦艇にては一齊に奉賀三回を高唱したる　供奉艦四隻も亦御召艦附近の錨地に投錨せり嗚呼何等の壯觀、何等の盛儀ぞや巨艦艨艟、舳艫相銜み威風堂々として海上數十浬の間に整々配列す森嚴、莊重、眞に曠古空前の偉觀たり

▲勅語

十二時過御召艦の豫定錨地に投錨するや東鄕聯合艦隊司令長官以下各司令長官、司令官、幕僚、司令艦艇長並に海軍將官、同相當官を御前に召させられ左の通り優渥なる勅語を賜り東鄕大將以下一同、聖恩の厚きに感泣したりと

朕親シク凱旋ノ海軍ヲ閱シ其軍容整齊士氣大ニ振フヲ觀太ダ之ヲ懌ブ汝等倍々奮勵シテ帝國海軍ノ名聲ヲ發揚セヨ

右に對し東鄕大將は謹嚴莊重なる語調を以て左の意味の奉答を言上したり

親しく凱旋觀艦式に臨幸の榮を辱ふし且つ優渥なる勅語を拜受したるは　臣等の深く恐懼する所なり　臣等倍々奮勵以て聖旨に報ひ奉らんことを期す

二時十分御召艦は拔錨して港内に歸航し前位置に投錨茲に三時二十分迄御休憩、再び初風に召され御上陸あり參列の各艦が再び發する廿一の皇禮砲あり、陛下は稅關前にて御馬車に召され鹵簿轔々として橫濱停車場に赴かせられ皇太子殿下並に東鄕大將以下の御見送にて三時四十五分の特別列車に召されたり皇太子及常宮周宮　兩内親王殿下は御附を從へ次の列車にて御歸京遊ばされたり

▲大光飾

午後七時夜の黑き幕は海面の壯觀を閉して其の所在をも辨じ能はざらしめし頃空前の美觀は群衆の眼前に閃めき出でたり忽ち見る一點の火光は點々相連り艦型をなし、艦型をなせしもの尾に及び脊に及び忽ちにして七列二百餘艘の艦艇の形は閃々たる電光を以つて現はされたり誠に未曾有のイルミチーションは幅二浬長さ五浬の大規摸に造り出されぬ見る者唯だ呆然たるもの久し、忽ちに火光中空に閃き左轉右折、二條となり三條となり四十餘條となりぬ是各艦の探海燈にして靑きは忽ち赤く、赤きは又た靑となり、艦上より迸り出づるは瑞氣の昇るが如く浮雲の是に照らさるゝは祥雲の靉けるが如く目出度かりける事共なり



同盟國の家庭

華族銀行頭取　園田孝吉

▲經濟を重んずる家庭

英國民の家庭と云ふも、國民の階級即ち上流社會、中流社會、下流社會の種類によりて各々其趣を異にして居ります故、英國人の家庭は此の如きものなりと一概に云ふことを得ませぬ、然らば何種の家庭に就て述ぶるが適當なるかと云ふに、中流社會の家庭がよからうと思はれます、それは餘り貴に偏せず、又賤きに片寄らず、其中邊に位する人達で、殊に日本に取りては此等の人は其生活より見れば上流に比敵致しますから、取て以て學び易すからうと思はれます。

英國人の中流に屬するは、歳入五六千圓から一二萬圓ある人々の間を稱するので、全英國人中最も多數なる人々であります、英國が今日世界の强大國と稱せらるゝのも、畢竟此の中流社會が多いからでありまして、彼の露西亞の如きは、中流社會は甚だ少なく、上流社會より直ぐ下流社會に移つて居りまする故、國の基礎となるべき中流社會と云ふものが、少ない爲めで、至つて國も弱く從つて日本にも敗けたのでありましやう。

今更事新らしく申す迄もありませぬが、家庭を支配する者は妻君で、夫は外に在て働き之を助けて內顧の憂なからしむるは妻君唯一の責務であります、故に妻君は子供の養育から教育を司るは勿論、家計の全きを致して家運長久の基を造らねばなりませぬ、此の點に就ては英國の妻君などは常々能く心を用ゐて居ります る。

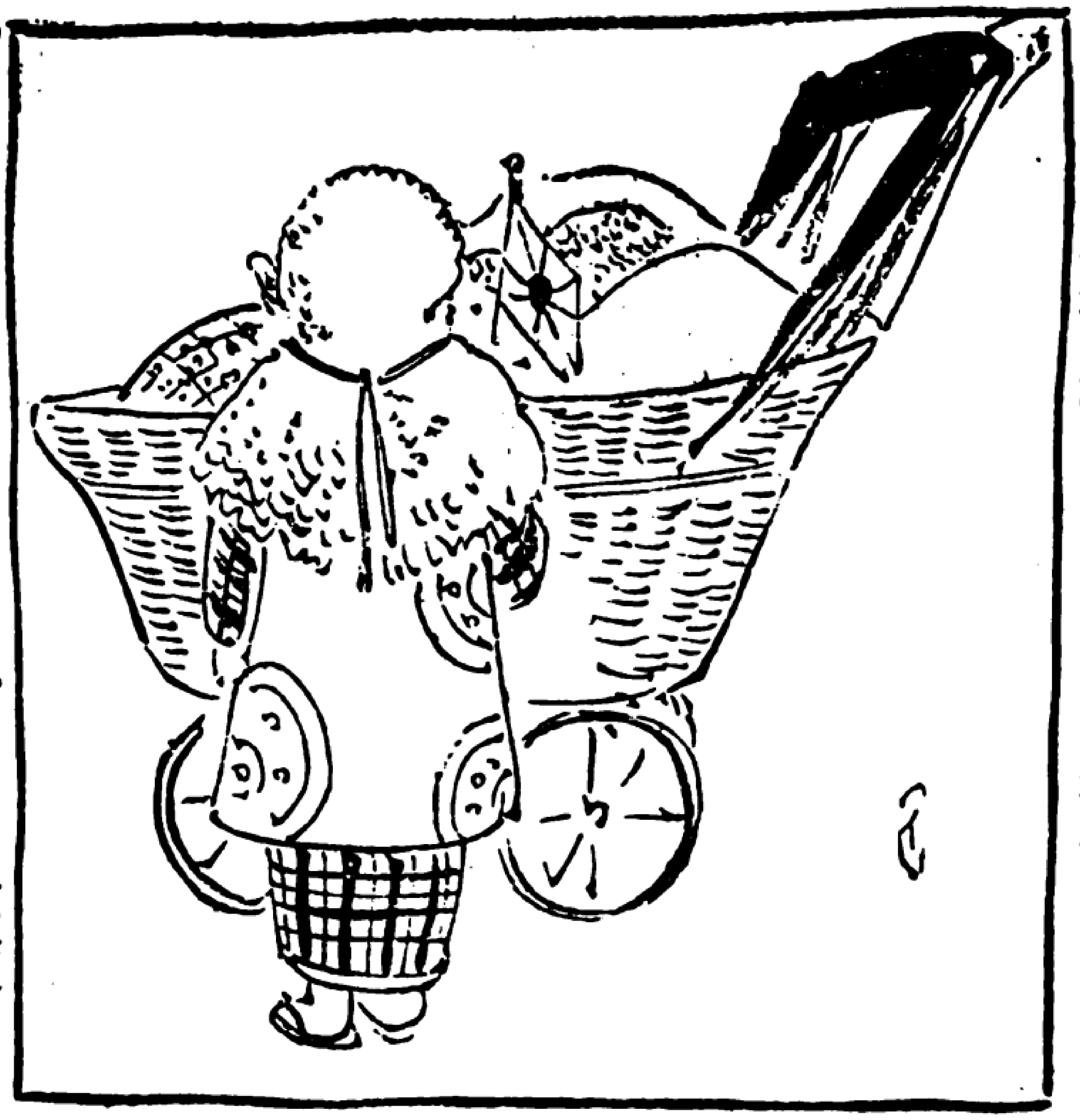
物の直段は日本に比べると丁度五倍も高くあります、日本で一圓する品物ならば、英國では五圓も致しますが、併し日本で二千圓の歲入がある者よりは、英國で八千圓ある人の方が遙かに立派な生活をして居ります。英國が日本より物價が五倍するならば、日本の二千圓と英國の一萬圓と同じ譯であるから、日本で二千圓取る人より八千圓取る人は、生活が惡るくなければならぬのに、反て良き暮しをして居ると云ふのは何の爲めでありましようか、是れ全く妻君が家計に心を用ゐて深く經濟を重んじて居るからです。

英國の妻君は日本人のやうに家計に放漫ではありませぬ、何事によらず周到緻密で一厘の微と雖も忽せには致しません、今一例を擧げますれば、日本の妻君のやうに人任せには致さず、物を買ふ場合には容易に下女や下男に賴まず、自分から馬車に乘りて、肉屋にでも果物屋にでも行きて求むるのです、英國では假令上流の人でも自ら買物に出掛けるのを少しも外聞が惡いなどゝは思ひませぬ、寧ろ譽むべき風習になつて居るのであります。

呉服物を買ふにも、日本のやうに電話で呼べば、直ぐに番頭が反物を車に積んで持つて來るやうなことは出來ませぬから、勢ひ自分から買に行かねばならぬのです、其れから臺所の事ですが、日本の歲入が豐かなる家の妻君になると、殆んど下女任せと云ふ風でありまするが、英國は假令歲入の澤山ある家の妻君でも、自ら臺所の事を取締り、食物なども婢僕五人にはパン幾何に、肉幾斤と云ふ風にチャンと分量を與へて、他は戸棚に入れて錠を下して仕舞ふので、此の一事を以て大抵他をも想像致されましやう。

▲育兒法

英國では婦人が姙娠して出產期に近づきますれば、決して放任して居るやうなことはなく、醫者を呼んで能く診察して貰ひ、其れから看護婦を招いて萬事世話をして貰ふので、看護婦と云ふも普通の看護婦とは違ひ、日本の產婆の如く產醫に通じた者で、產期の二三ケ月前より其家に寢泊りして何與れとなく隅から隅まで世話をするのでありまして、產を致す時には必らず醫者を呼びまするが、若し其の間に合はない時には看護婦が代つて致して與れます、產後は看護婦が產婦の傍に付添ひて一切の事を擔當し、產後一ケ月も過ぐれば始めて看護婦は其家を辭し去るのです。



看護婦が去ると今度は守女を家に置て子供の育て方を任かすのです、此の守女は日本の守子とは全く違ひまして、機械的の者でなく育兒に經驗を有する立派な能力ある者で、重要な事は主婦の命を受くるも湯浴の事や、乳を飲ます事や、室外散步や、其他行儀作法に至るまで、守女の爲すべきことゝなつて居るのであります。

次に赤子に對する乳の事ですが、赤子には中流社會以上は、母の乳は餘り永く飲ませませんで、牛乳を用ふることゝなつて居ります英國の醫者の話しに、母の乳を飲ませるは倫敦は二三ケ月、田舍は六ケ月となつて居るさうですが、是れは母の乳を永く飲ませると、

母の身體を害すると云ふ、衛生上から此くの如くなつて居りまするが、私の思ひまするには、衛生上からのせいもありませうが、一は永く乳を飲ませると、著しく乳房が長く垂れるやうになッて其婦人の美を害するので、今一ッは永く子供に乳を飲ませては、交際社會に出るに甚だ不都合であると云ふ爲めかとも察せられます。

其から英國の育兒法に於て、最も嚴重なのは、子供を抱き寢せざることで、子供と身體を觸れるのは、双方とも大害があると云ふので、脊にも負ぶはない位です、唯外出でもする時は僅かに前に抱て行く位であります、併し多くは押車に乘せて行きます、晴天などは成るべく室外に於て新鮮の空氣を吸はせるやうにして居るやうです。

▲子供の敎育

子供が成長すると多くは家庭敎師を家に置きまして行儀作法から初歩の學問を與へます、其の外英國一般の通有とも云ふべき敎育法は其子に獨立獨行の精神を授くるに勗むることで、假令ば着物の如きも手足の動かざる内は格別、苟も子供が手足の自由を得るやうになれば、母や兄弟などが衣服を着せてやるやうなことは決して致しませぬ、飽まで子供自身が着なければならぬやうに仕掛けるのです、日本の上流人の如く一人の娘に二人も三人も掛りて御仕度をしてやるやうなことはなく、如何に高貴な人となるも、人の厄介にならぬ樣になッて居ります、是れは全く經濟上からと獨立心の養成と云ふ點から、此くなッたのであらうと思はれる。

贅澤の家になりますると、一定の家庭敎師外に外國人を傭ふて、外國語を子供に授ける所があります、外國語の音調は年長けてからは容易に熟達し得るものでなく、是非幼少の時から學ばせねばならぬ故、外國人を聘して置けば知らず識らず其語に達して來ます、英國の交際社會に持て囃やさるゝ人とならんには、少くとも二三ヶ國語に通せねばなりませぬ故、英國婦人は勉めて多くの外國語を修學して居ります。

家庭敎育に於て、學問の外に重きを置くものは、宗敎でありまして、道徳に關することは皆此の宗敎の精神より酌み、禮儀作法に至るまで宗敎より出で居ります、日曜日には沐浴して身を淸め、新衣を纏ふて精神を淸淨にし、其日を神聖潔白に送ることを期して居ります。

▲食　事

日常の食事に在りても、なか〱嚴格なもので、口を漱ぎ手を洗ひ、衣服を更めて食卓に着き宗敎國の習ひとして、此く我々が日々生活して居りまするのは全く天帝の御蔭でありますと唱へて後、ホークを把るので之を謝恩の禮と稱します、其から日本古有の食事の禮は、物を食べる時は口を閉きてはならぬ、御膳の外に目を注ぎてはならぬ、など



と云ふ實にむづかしき法がありまするが、此の點は至極趣を異に致しまして、反て成るべく愉快に互に話しをしながら、食べまするがよいことゝなつて居りまする、尤も差出がましき事や、無作法なる言葉などは深く愼むべきことゝなツて居ります、子供にも食事の間に勗めて話を爲させ、他日交際社會に出づるも人の前に臆して話をすることが出來ぬやうなことなきやう敎育するのであります。

▲一家の和合

英國の家庭は比較的、和合して日本の家庭よりは、上中下各種の階級とも、樂みが多いやうでありまする、其の愛情の深きことは、

たゞ夫婦の間のみならで、親子の間は勿論のこと、兄弟より朋友の末に至るまで、日本人よりは勝ッて居るかと思はるゝ、朝起きるときは、夫婦の間、親子の間、兄弟の間に於て先づ等しく接吻の禮を施こし、夜寢るときも亦た此くするのです、次に兄弟姉妹の間に於て、家庭上の待遇は至ッて甲乙の差なく、一樣に扱ふのでありまして、兄だから弟よりも重んぜらるゝと云ふやうな、偏頗のことはないのです、又名を呼ぶときは、何さんとか何ちやんとか云ふやうな敬稱は用ゐず、親しければ、親しいほど呼び捨てにするのです、兄弟の間は勿論夫婦に於ても、又さうでありまして、夫が孝吉と稱しますれば、其妻は夫を呼ぶに孝吉と云ひ、夫は其妻を呼ぶに花と云ふやうに致します、友人の間に於ても親しければ、其姓を呼ばずして名を呼び捨てにするのです、チャールスと云ふ人を呼ぶに、極く親しければ倘ほ略してチャレンなぞと申します、併し此く云ふからとて、日本の如く其人を輕蔑するやうな譯ではなく、其人を畏敬するも呼捨てにするのです。

如何な文明國だからとて一利一害は必らず宿るもので、英國とても、色々の罪惡を犯すものもありまするが、たゞ比較的日本よりは、道德の點に於て、風俗の點に於て宜しいので、殊に英國には日本のやうに妾なるものはなく、爲めに一家の和合を害するやうなことはありませぬ、日本は上流の家庭ほど聞くも忌はしき弊風か多くありまするが、英國は上流人の家庭ほど嚴格にして、一家團欒の樂みは多く宿るやうに見受けられます、どうか日本の上流社會に於ても、妾なぞと云ふ不思議の者を蓄へるやうなことをせず、能く其半身たる妻に滿身の愛を捧げて、一家掬すべきの和合を勉め、謹嚴自らを持して下の師表となることを願はしいのであります。

▲父子の關係

下流社會は格別でありまするが、中流以上になりますると、子か獨立して妻を迎へるやうになれば、兩親とは必らず別居するが一般の風習になつて居ります、是れは妻帶してから兩親と同居すると、反て和合を害

するの恐あるからでもありましやう、如何に可愛らしき子でも嫁を持つて、其子が憎らしくなると云ふ譬は事實の上に於て見ることで、日本なぞでは舅姑の爲めに心ならずも離縁し、離縁せらるゝこと云ふことは間々ありまするが、實に忌むべき事で、此の點に於て英國は非常に日本と違つて居ります、日本の親は子を立派に育てゝ老後は其厄介になつて安樂に世を送るやうと思ふのは一般の事でありまするが、英國の親はさうでない、子が立派に獨立して良妻を迎へて幸福に世を送らるゝことを何よりの樂みとし、自分は始めより其子に厄介になるなぞと云ふ忌はしき心は、少しもないやうであります。

英國人は親から獨立して立派に暮らさるゝやうにならない内は、斷じて妻を貰ふやうなことはないのであります、兩親と別居せざる婚禮は不幸の婚禮なりと稱して、妻帯を望む者はありませぬ、故に男は如何に早婚でも二十四五才からで、普通は三十才以上であります。



▲婢僕の分業

英國人の婢僕は、日本人の婢僕のやうに何んでも構はず、働かねばならぬのではなく、各々分業となつて居りまして、甲は何の仕業を爲し、乙は何の仕事を爲すと云ふやうに、同じ下女の内でも夫れ〳〵分擔がありまする故、能く責任を負ふて事を勵み、仕事を互に讓り合ふやうな不都合のことは先づ少なくあります、併し時に權限を爭ふことなどがあります、能く働くのは其給料が高き爲もありまするが、一は分業の爲めで、日本の婢僕のやうに亂雜なものでない故、從て上流社會の家庭なぞに於きましても、婢僕は割

合に少なくありまして、子供の守女は子供の守と其部屋の掃除などの外は一切手を出しませぬ、食事の給仕は食事の外はお構なしで、少しく上流の家庭になりますると、僕長と云ふ者を置て婢僕の監督を爲させてあるのです。

▲音樂

英國人は最も音樂を好みます、殊に中流以上になりますると、家庭にピヤノを歡迎致しまして、食後などは必ず此のピヤノを奏せねばならぬやうになつて居りまする故、家庭教育の一として娘には、此のピヤノを學ばせます、之に熟達致しまするど、交際社會に於ても大層持て囃されまする故、孰れも其の名手たらんことを希はないものはありませぬ、此のピヤノはたゞに婦人ばかりではなく、男も隨分奏しまする、ピヤノの稽古にはなか〳〵金がかゝりまする故、下流社會には餘り行はれませぬ。

▲演劇

英國民は全體に演劇を好む方でありまして、家庭上に於きましても、家族が之を見るとは少しも差支ないことになつて居ります、家によりては一週間に一度位は、家族一同引連れて觀覽に出掛ける者もございます英國の演劇は實に高尚で、日本の演劇のやうに時々風俗を害するやうなものはありませんで、敎訓上得る所が多くあります、尤も嚴格なる宗敎家の間には、尙ほ演劇を彼れ是れと云ふものもありまするが、上流の紳士淑女に於きましても、好んで觀劇を致します、此の觀劇の際は、日本の芝居見とは違ひまして、夜會に出ると同樣に、禮服を着けまして、男ならばシルクハットに燕尾服と云ふやうに嚴格に禮儀を正して參ります交際社會に出る婦人になりまするど、是非演劇の總り目には行かねばならぬやうになつて居ります、是れは交際社會に出て、演劇の話しでも出ると、之を見て知て置き、其の話し相手にならねばならぬからです。

▲戸外運動

英國の婦人は至極衛生を重んじ、運動を貴んで居ります、閑暇あれば家を出で、郭外を散歩し、新鮮な

る空氣を吸ふことに心掛けて居ります、其れ故公園などは常に馬車が輻輳して、人山を築かんばかりになつて居ります。

殊に中流以上の婦人になると大層旅行を好みまして夏になると續々田舍や、或は外國に避暑に出掛けまして夏家屋の戸を鎖さぬと肩身が狹いやうな心持がして居ります、又交際社會に出ましても、外國の話でも出ますれば、其話し相手となるには、是非外國を漫遊して置かねばならぬのです。



新家庭の財政

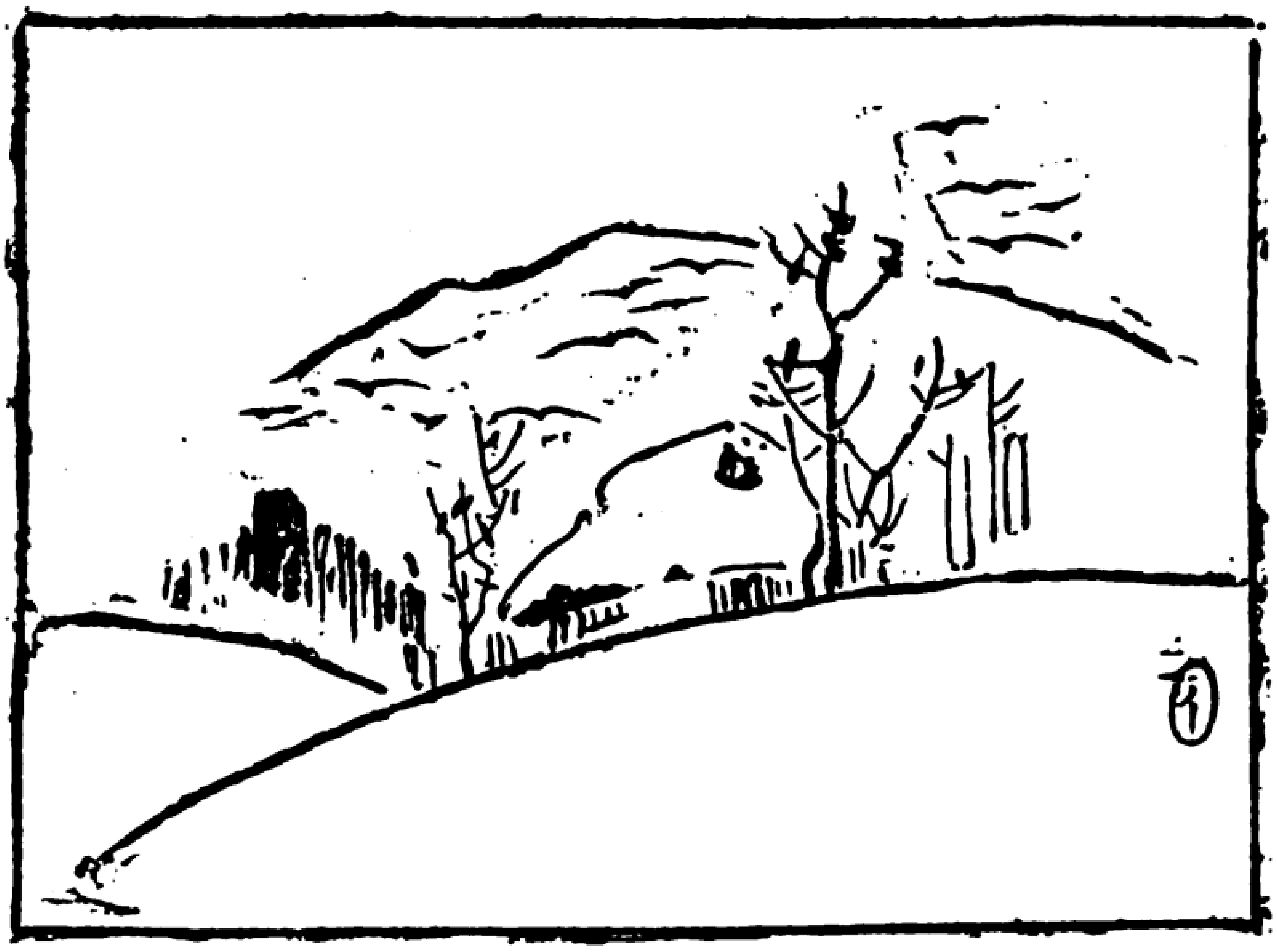
羽仁もと子

一家の財政の健全でないといふことは、申すまでもなく、家庭に取りて最も大いなる不幸の一で御座います、財政の紊れる原因は固より種々でありまして、中には親が借金を殘して死ぬとか、格別の不幸が續くとか、家内に病人が絶えないとかいふその爲に、困つてゐる人もありませうが、また一方には親の負債などには關係のない、全くの新家庭を作つた人々で、主人に別段職業を失つたといふやうなこともなく、家族も一通り健康であり、之といふ贅澤もしないのに、年中金に追はれて居る家が今の中等社會――殊に若き夫婦の家庭に澤山あると思ひます。そして斯ういふ性質の貧乏は何所から來るといひますなら、家庭を造る抑もの初めに於て、不注意であつたとから來てゐるものが一番多いと思ひます。

西洋――殊に英國や米國あたりの眞面目な若者は、例へボーイや下婢をしてゐる人でも、結婚して家を持つまでには、男も女も各々に相應の金を用意して、自分の身のまわり、結婚の費用は固より、新世帶に入用な家財をも一通り用意した上に、若しも早速子供が出來ても、マゴツカヌ位の準備は大概してゐるといふことでありますが、是非さうなければならぬ筈で御座います、どうも我國では立派に教育をうけた男女ですらも一般に斯ういふ點に誠に無思慮でありますが、それは思ふに我國では、これまで多く何々家といふといふ家があつて、その家を繼ぐ必要から、妻をも貰ひ婿にも行くのが、最も多數でありましたから、その何々家に傳つた家業資産世帶道具までを、そつくりその儘引き受けて、申さば單にうけ繼いで行く丈けのことでありましたから、土臺からの新家庭を生み出すことに就ては、一般に無經驗な筈であります。この無經驗の結果として、よし家族制度の思想がまだ一般に改まつてゐないにしても、必ずしも子が親の家業を繼いで、先祖代々住みなれた故郷にばかりも住んで居られぬ、實際上の必要が頻々として起つて來る今の時勢になつてゐるので、都會などには殊に續々として新家庭の起つて來るのにも關らず、その建設方には我も人もまだボンヤリとしてゐるのです、家を持つた當坐には、バケツで顏を洗ひましたの、金盥でお茶碗を洗ひましたのといふことが、日本の社會では自分の成功をいふために、必ず引合に出て自慢話でありますけれど、成程後の成功は或は誇るに足るものでもありませう。併しながら身一ツで家を持つたといふ無思慮なことは、紳士淑女の最も恥づべきことの一つであります、ナゼならばそれでも、その人は幸にして都合よく行たからよい樣なものゝ、多くの家庭の財政を紊亂させるそも〳〵の原因はまづこの不用意に家を持つたといふことから出て來るからで御座います。

物質的方面に於ける家庭の幸と不幸とは、必ずしも收入の多寡でなく、全く家を持つ前に相當の準備をしたかしないかといふことによつて分れるといふものは、

人の家といふものは、必ず收入に相應した費用のゐるもので御座います。百圓の收入ある新家庭でも、その夫婦はホンの身一ツであるならば、相當な衣服も造らねばならず、家具も整へねばならず、結婚費の借金も返さねばならずといふ樣なことで、假りにこの方面に月々三十圓宛を拂ふといふことになりますと、その人は七十圓の金を以て百圓の生活をせねばなりません。言換へれば七十圓の收入で、百圓の收入ある人と同額の税を拂ふやうなものです、之を五十圓の收入ある人が、一錢の負債もなく、五十圓そつくりで暮らし方を定めて行く人と比べたならば同數の家族でも、前の七十圓は後の五十圓よりも、餘程苦しいに極つてゐます。以上のやうな道理から、準備なくして家を持つた多數の人は收入の必ずしも少い譯でありませんのに、損と知りつゝ矢張いつまでも三月拂の洋服屋や月賦拂の呉服屋のお世話になつて、やう〳〵遣り繰つて行くといふやうな都合になり、月々餘裕といふものがありませんから、必要にせまられて旅行するとか、一月も病氣になるとかいふやうなことがあれば、早速借金をつくる譯になるのです。借金のない時ですら、月々が手廻りかねてゐた人が借金の利子までも拂はせられて、いつになつたなら元金が返せませうか、不用意にして家を持つといふことが、その家庭永久の幸福の上に、實に容易ならぬ關りを及ぼすもので御座います。



さて大小ともその家計に相應した財政の基礎をつくつて、その上に新家庭を築きましたなら、收入によつ

て生活費の豫算と貯金及準備金の額とを定めて、假りに月給取りとするならば本月末に手に入つた收入を以て、來月一日からの生活費を辨じ、勿論日々の費用を記して置いて、月末の決算がキッチリこれでありあまるやうにするのでありますが、さてその豫算のたて方は、また人々によつて違ふのでありませう。或人は生活費を費目分けにするなどゝいふことは、徒らに不便を增すものだといふやうな考を持つてゐる人も御座います。生活費を費目分けにすることの要不要は、勿論收入の度合によることで、家族の多い割に收入が僅少で、例へば家賃を引き去ると、やう〳〵家人の食料が殘るだけだといふやうな場合には、費目分けの要不要といふことは別にして、實際費目分けをする餘地がないのです。さういふ時は家賃とか米代とか薪代とか、どうしてもなければならぬもの丈けを引き去つて、あとを日割にでもして使ふとでもいふ方法をとるより外はありますまい。それ程でない家計ならば、矢張どうしても日々入用な副食物費と、月々凡そきまつて居る米代や薪炭油醬油砂糖といふ樣な物、及日々消耗して行く衣服家具の補充費と、折々は必ず出て來る交際費とは、矢張それ〳〵に見積つて、衣服費のいらない時でも、交際費の出なかつた月でも、それにあてた丈けのものは、月々のけて行くといふやうにする方が、經濟の下手な人にも誤りなく、家政を取つて行かれる安全な方法です。で私は豫算は矢張單に月五十圓でやつて行くとか、百圓で濟ますといふ丈けでなく、費目分けにする方がどうしても便利だと思ひます。勿論この費目分けを、娛樂費、公共費、修養費、職業費といふやうなものまでも加へて、細かく分けるか、以上に記した衣服費、交際費、家具費、教育費等の數種に止めて置くかといふことは、また矢張收入の多少に關つた問題です(家庭の事情にも)、その詳細は各々にお考へになる方がよからうと思ひます。次に以上日常の生活費の外に、どこの家でも、暮れとか正月とか或は中元とか氏神のお祭りとかいふ時には、矢張一定した餘分の費用を要します。外に病氣の費用(これは見積りで)等を合計し

て、矢張月割りにして臨時費といふ費目を設けねばなりません。日常の生活費と臨時費――これが全生活費で御座います。こういふ豫算のたて方で、各費目から餘つたものは、貯金とは別にしてのけて置くやうにしたならば、月々定つた少額の收入でも、暮れの費用だの正月の費用だの洋服代だのといふものを、何所から出さうかと、その時になつて考る必要がなくなります。

已に豫算を費目分けにし、各費目の餘りをそれ〴〵にのけて（または預けて置く）置くといふヿになると、毎日の小遣帳のつけ方が、例の何でも彼でもゴッタ附けにする流義ではいけません。それかといふて、一々各費目の帳面を別にするのは、またあまり不便です。どうしたならば費目分けにした家計の帳面が、各費目の餘りも不



足も分るやうに、容易に明了につけられるかといふよが、必要な問題でありますが、それに就てお話しをすると、餘り長くなりますゆゑ、御研究になりたい方は、私のつくりました、家庭之友家計簿に就て御覧下さるやうに願ひます。

新家庭の財政といふヿに就て、記すべき事柄は大方以上のやうなものでありますが、やゝ實社會に接觸して居らるゝ讀者の中には或は我邦で獨身時代に、新家庭の基礎となる程の貯蓄をするヿが、果して英米の社會のやうに出來るであらうかといふヿを怪しまるゝ向もありませう。誠に御有理で御座います、我邦の社會はまだ米國のやうに、一方で働らいて一方で學問の修業もできるといふやうな風に行つて居りません、我邦のやうに勞力の安い所、交換へれば金錢の貴い所、即はち金

持でない國柄では、獨身でもなか〳〵捗々しく貯金するといふことが出來にくいのではありますが、併し家庭を持つてから苦しむことに比べると、一人の時に未來の希望のために苦しむ方が、ドンナに樂か知れません。併し私共はじめ一體の日本人は、金もないのに儉約の出來ない質でありまして、一人者でも家持ちでも、出來る限り贅澤な生活をするやうな傾きが御座います。若しもお互が此所を分別して、暫くの間自家の身分の忍び得る限りに於て、儉約な生活をすることに覺悟したなら、例へ僅少の收入よりない人でも、下宿住居をやめて、體裁のわるい自炊生活に甘んずる位にしたならば、數年の間には相應の貯蓄が必ず出來ると思ひます。勿論こういふことは日本では、專ら男子のみの責任のやうになつて居りますけれど、近來は教師その他の職業に從事して居る婦人も澤山ありますし、またさうでない人でも、心得て置いて不必要なことではありますまい。

終りに子供が出來ますと、家庭は存外に事多うになり、人手も多く入り、費用も嵩むやうになりますゆゑ、新家庭の一二年、即ち子供の出來るまでは、夫婦とも一方に於ては出來る丈け働き、一方に於ては成るべく節儉の習慣を養ひ、その上手早く家事を處理することを學んで置かねばなりません。

夜具

夜具は朝起きてから直ぐたゝむこと何處も同じく一の仕癖になつてをる。所が、それは、自然臭氣を放つことになるのみならず、健康を損ふ次第となるのである。別けて、幾分か身體に發熱の氣味あり、多少の下痢をなし、酒を飲んでからの就寢、小兒を抱へて臥したる時などは何程の異狀ありと覺ゆる程にあらずとも、かゝる際は、よりよく注意して日光にあてもし、風通しよき所に干しもすべきである。なほ、その上敷の如き、枕の如きも、洗ふか、乾かすなどの注意を要す。また寢衣などは朝起きても、その儘、着用し居り、よしや脫いでも、未だ暖氣の失せざるものをたゝみ片付くるの風少なからず。兎角惡臭を放つやうになり、健康を害するも、かゝる仕癖から來るのである。それから夜具を乘り出すもの、頭から被るもの、子供などには隨分有り勝であるが、乘り出るものは風邪に冒され、被るものは勢ひその呼き出したる炭酸瓦斯を繰返し吸ひ込むが故に、或に惡夢に襲はれ、頭痛を覺ゆるなどより延いて病弱の身となるを免れず。かゝる仕癖は子供時代より嚴しく戒めずんばあるべからず。

臺所の改良

工學士　H　K　生

近來は大分食物の料理の事が八釜敷成て來て所々で色々と研究なさる樣に成たのは誠に悅ばしい次第ですが其れに付て此食物を料理する臺所の研究も亦必要である、既に此事に付ては多少說を出した人もあるけれども、まだ完全とはいかぬ。

元來日本の臺所は餘り完全したものとは云へぬ、加ふるに近來は西洋の料理法もする樣になつて來たから益々此臺所の改良が必要である、是れ迄は兎も角今新に建てる家でも在來のを眞似て造る人もあり又多少改めてつくる人もあるがいづれも大同小異である、然らば何故改良が行はれぬかと云ふに元來臺所は婦人の配下に屬し臺所を見て其內の夫人の氣質が知れると云ふ位密接な關係がある、これに反して主人は座敷とか玄關或は門などを立派にして臺所などには一向御構ひはない、と云ふ譯でもあるまいが、そこには經費とか何とか色々事情もあるだろう、然るに座敷は客のない時は一日中用ぬ時もあるのに臺所に至ては唯の一日たりとも缺かされない所であるから十分注意して改良されたいものである。

臺所に必要な條件は便利、衞生の二である、條件を滿足せしめるには如何にすればよいか、まづ外國の臺所に就て見るに構造は日本より餘程完全して居る、その臺所は厨房、食器洗塲、肉房、食器室、石炭室、灰入塲の六より成立て居る、厨房の大さは二間半四方より五間四方以上もある、此內には窯や、七輪に相當するものがあり、料理臺が中央にあり、戸棚は壁に沿ふて取付あり、又料理品を冷さぬ爲に「ホットテーブル」と云ッて臺下に蒸氣を通じて常に温める机もある、食器洗塲は厨房に隣ッた一室を設け、專ら皿、其他の器具を洗ひ、之れを食器室に納める工風になッて居る、食器室及肉房は厨房と接して設けてある、石炭室、灰入塲は窯に接近して置かれてある、之れ等は秩序よく

配置してあつて少しも混雜せぬ。

勿論日本の臺所も大な家では技師の設計になり相當の配置がしてあるから其れ等に對しては云ふ必要はないが只の大工の設計になッた臺所についていふと前述の便利と衛生とに缺けて居る西洋ならば食堂に近く置くべきであるが日本ならば茶の間に接近して置く必要がある、去かし茶の間に接して置くは宜しくない、廊下なり其他を隔てゝ置なければならぬ、西洋では食堂に接して「サービングルーム」と云ふ室があつて臺所から食堂へ食物を持て行く前に此室で一度整理をするのである、日本でもかういふ室を取ッて一方に膳棚、机等を備へて置いたら便利でせう、次に座敷とは隔れて居らねばならぬ、今の普通の家の臺所は一般に狹きに失して居る、少くも八疊敷以上の廣でなければならぬ次に中の裝置に工風しなければ大に場所不經濟である、此中の配置は其臺所の形、構造に依て異ふけれども大體は中央に料理臺を置き、此の臺に接近して戸棚を置き、一方の壁に沿ふて竈を置き、流しは料理臺及び戸棚に近接して取るのが便利である、今一例を擧ぐれば

イ　竈
ロ　七輪
ハ　流し
ニ　料理臺
ホ　戸棚
ヘ　棚
ト　戸棚
チ　膳棚

是れは小きものにして一時の用に供す

此大さは臺所の大さに依て異れ共普通は三尺に六尺位が便利ならん高さは二尺五寸臺の下に引出を付け小道具を入れ足の下より五寸上りたる所に板を張り物をのせる、此の上適宜の高さの所に横に棒を天井より釣り物を掛る時は便利なり

是れは高さ二尺五寸奥行二尺のものにして此の上は窓となる此戸棚は臺の兼用をなす

之れも窓の下にありて高さ床より二尺五寸の所にあり

是れは高さ六尺奥行二尺上下二段となり戸は凡て硝子障子を用ひ硝子は透明なるものを用ふ

奥行二尺段の數は膳の數に應ず前には必ず白金巾の帳を下げ塵の入ぬ樣になす

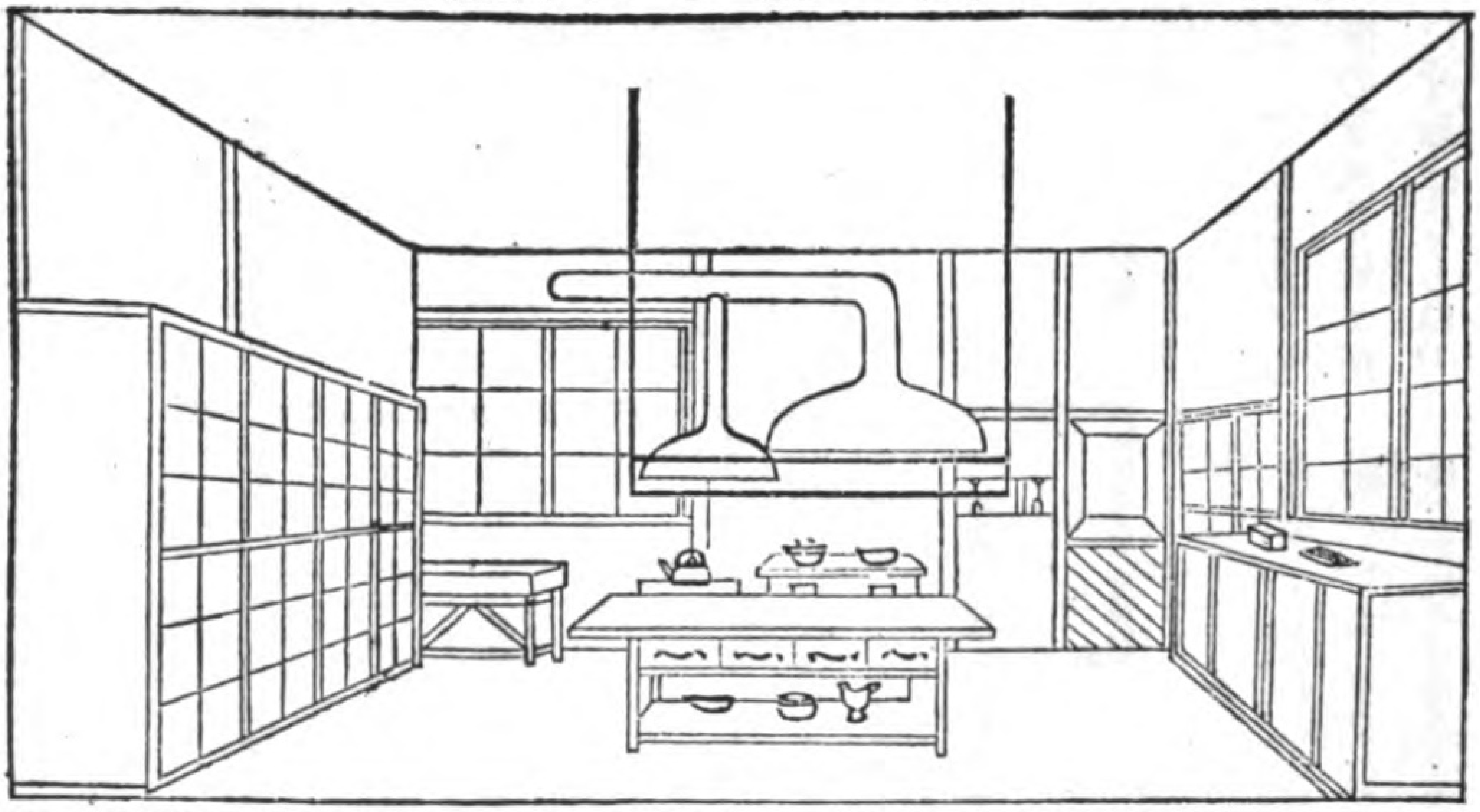
リ　机　高さ二尺五寸

ヌ　流し　重に食器を洗ふに用ふ前方に巾七八寸位の棚を装置す流の高さ二尺五寸

ル　薪部屋

一切の仕事は立てするやうにする床と同じ高さの流しの前で屈むで料理するなどは餘り感服せぬ、座ると場所が不經濟で、從ては尻を七輪にぶつ付て湯沸は轉すと云ふ失體を演ずる、然るに立て料理臺の上で仕事すれば非常に便利である、然し永く立ちつゞけるのが苦痛であれば腰掛の二つも用意して置けば充分である。

次は衛生の事に付て述べやう是は最も臺所には必要な事で、然も之れ迄割合に輕視されて居るは殘念である、先づ第一に位置の事に付て述べやう、臺所は家の何れの方向にあるのが最もよいかと云ふに、北或は東を撰ぶがよい、然し是れは屋敷の都合上出來ぬ事もあろうけれども、出來得べくば此方面を望む、其理由は夏日光が射入すると從て物が早く腐敗する故に、陰の方に取て窓は成べく大きく取らねばならぬ、或は陰に取ると濕る恐れがあると云ふ人もあるが空氣の流通をよくすれば差支ない、床は成べく高きを望む、床板は一寸板にて隙間なく張つめ、少しも塵などが溜らぬ樣にせねばならぬ、床の下へ薪などを入るのはいかん、矢張別に入れる所を取る方がよい、天井も高きを望む中には天井なくて直ぐ屋根裏を表はすのがあるが、是

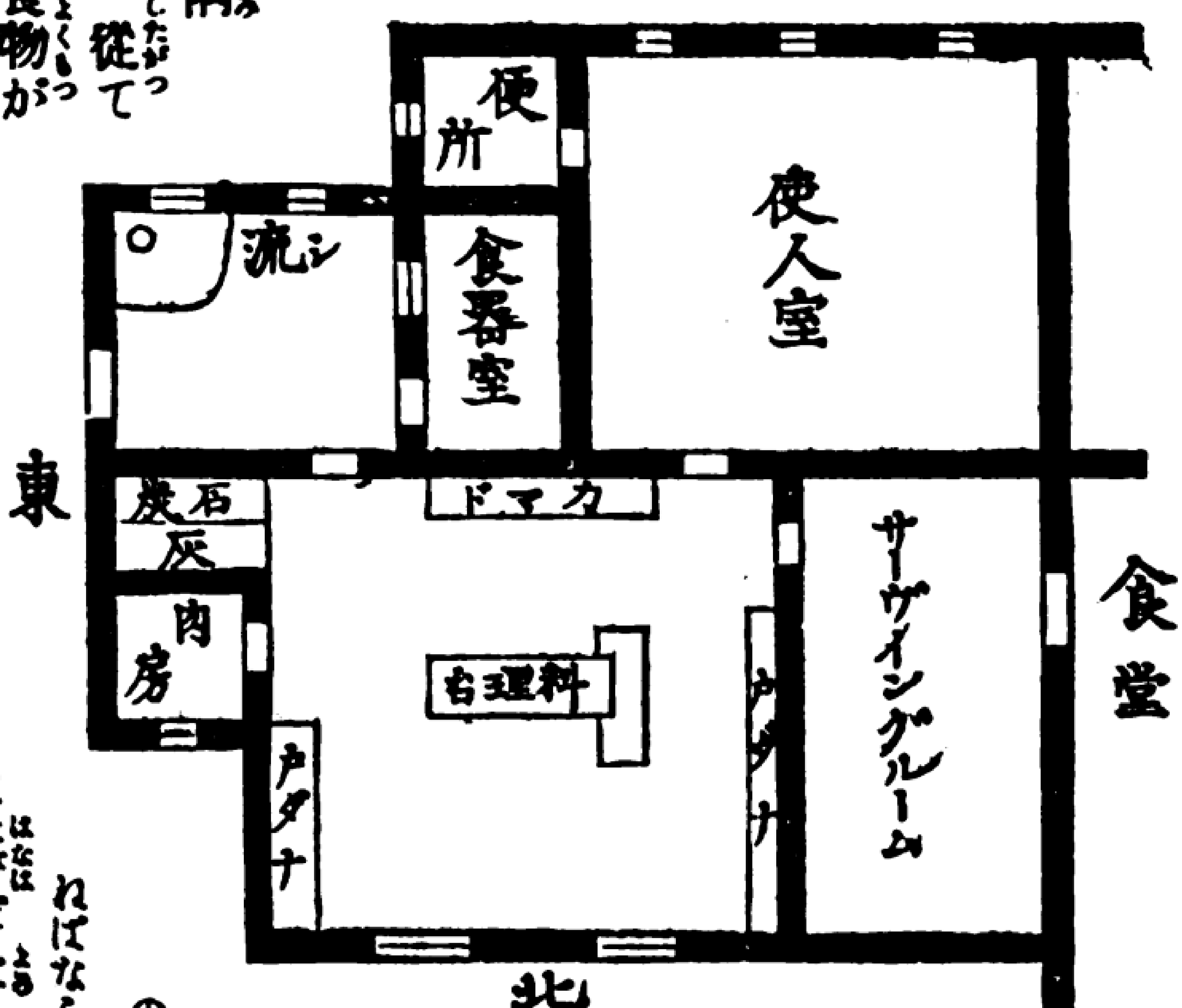


れ等は上から塵が落る恐れがある、壁は板張若しくは磨き壁にして、よく掃除の出來る樣にせねばならぬ、壁に器具を掛るときは巾尺から尺五寸位の板を一枚横に柱間へ打付て其上部に釘を打つのである、次に竈七輪は壁に接して置くは宜しくない、其後を掃除する丈の餘裕を與へる事を望む次は最も太切なる

△光　線

臺所は最も明くなくてはならぬ、暗といふと大切の食物の中へ何が入るやら少しも分らぬ、又隅の方に塵が溜ッて居ても氣が付ぬ、從て黴菌が充滿する、日々口へ入れる食物が斯樣な所で出來ては、たまらない、故に窓は出來る丈大きく取り、又高くする必要がある壁の下部を使ふ所は上へ窓を取る、凡て窓は開閉自在にせねばならぬ、

洋式台所



又天窓を取るのも非常によい、然し雨が漏ると云ふ人があるけれども、之れは構造さへよければ漏らない、凡て窓の障子は硝子障子がよい臺所へ太陽の光線が直接射入するは甚だ宜しからん事で臺所を北なり東なりに取れば先づ此心配はない。次は

△通　風

先づ（臺所の中の空氣を換へる事、竈は必ず烟筒を付て決して室内に烟の漏ぬ樣にしなければならぬ、望むらくば西洋竈を使用せられたい、室内の空氣は一部此の烟筒から外へ出るのである、日本曲突の烟筒なしは以ての外である、早速改良せねばならぬ、又臺所外へ食物の調理する臭が漏れるは甚だ宜しからん事である、時によると斯樣な家に遭遇する事がある客は坐敷で旨いだけ御馳走になつて歸るとは餘り難有もない話である、又主人側から見ても香がプン〜客に嗅すと晩の御馳走は南瓜だなゝどゝ直ぐ分つて甚だ面目ない、第一客に對

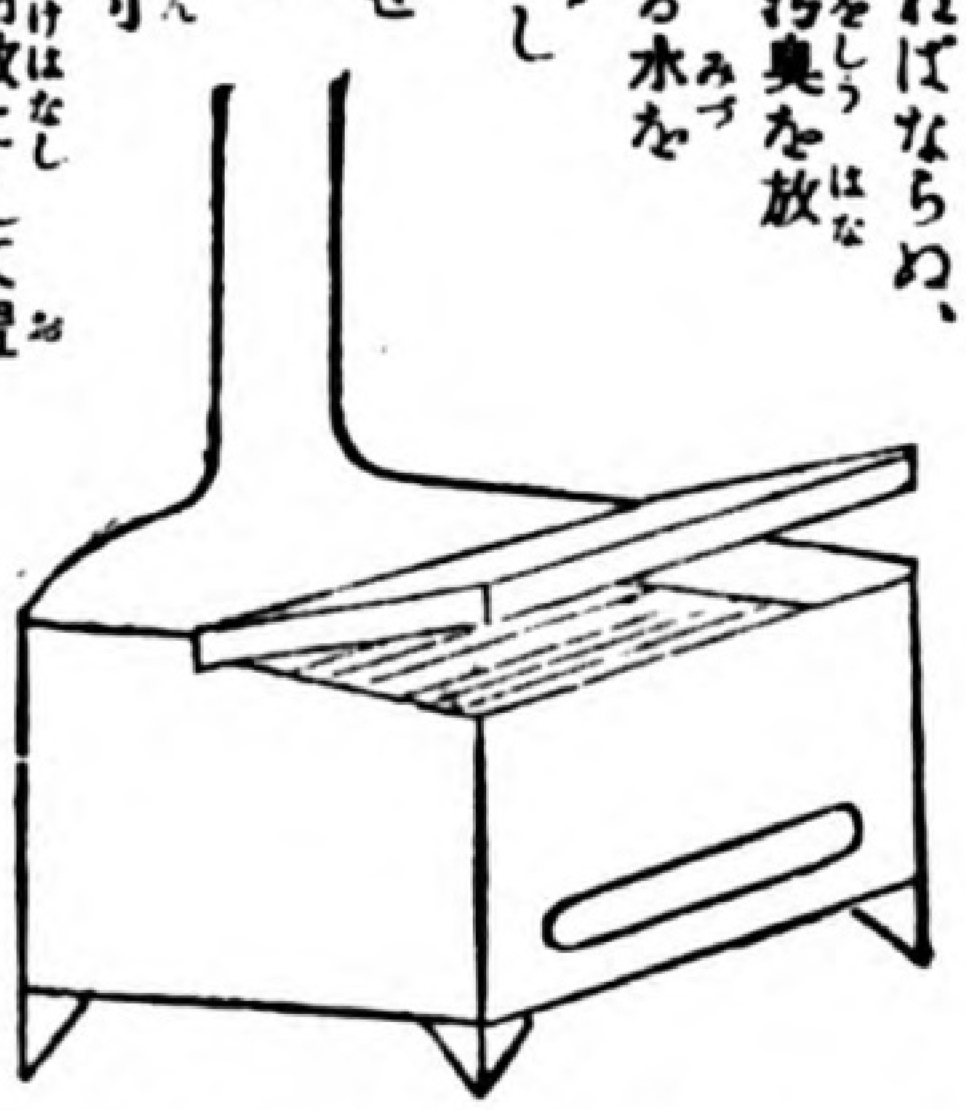
して之れ程失禮な事はない、亦客はないにしても家人同士でもこんな臭のするのは甚だ不愉快極る譯である、抑々之れは何に起因するかと云ふに臺所の構造及び調理に當る人の不注意からである。然らば如何にすればよいかと云ふに第一此臭が臺所の外に出ないで直ちに屋外に出る工夫をしなればならぬ、此の事は現に或る高貴の方の臺所でも餘程注意してあつて、之れを防ぐには第一他の室との通路に戸を立て遮断し、第二に通風の作用にて臭氣を屋外に追出すのである、折角戸を付て置ても之れを不注意に明放して於ては何の爲にもならぬから、氣を付ればならぬ、第二の通風には單に窓を明て室内の空氣を交換せしめるのもよいけれども冬窓を明放す事も出來ぬ又夏とても風向の都合で此部屋の空氣が他の室に行く恐れもある、尤も夏なれば窓を成べく明て空氣を流通せしむる必要はあるが、臭氣を防ぐには室の上部に空氣拔を作り置くも一法なり、又竈よりの煙筒を二重になし内部は煙が通り外の管は室内に開き居り内の管を通る煙の爲に熱せられて此空氣は常に上昇して外界に出る從て室内の空氣を吸收して新陳代謝せしむる、又魚など燒には全く蓋をして少しも空氣を出さぬ法がある、之れは臭を出さぬに最もよき法である。



給水は水道なれば別に注意する必要はない、若し堀井なれば溜箱を用意し、一度に用ふる丈の水を汲上て用ゐるがよい、即ち一方に流しの前へ溜箱を置き、其内へ井より水を入れ、下部に栓を付て、之れより水を出す樣にすると便利だろうと思ふ次に

△排水の事

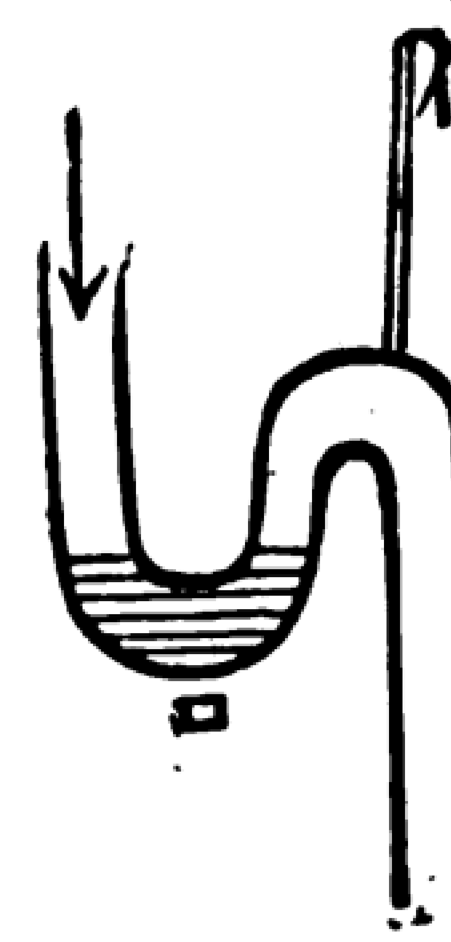
は大に注意せねばならぬ、水ハキが悪いと汚臭を放ち衛生に害がある水を使用するは只流しのみにする樣にせねばならぬ、流しは床より二尺五寸位の高に置下は明放にして置くがよし、此流しの一隅に穴を明て、之れより土管に通じ土管は必ず土中に埋込み少くも四十分の一の勾配即ち四十尺に付て一尺以上の勾配がなければならぬ、曲り目には掃除の出來る樣に且瓦斯を拔く爲に穴を明け、又時々澤山の水を一時に流して土管の中の塵を押出す必要がある、之れでも時によると流しの口から瓦斯が出て悪臭を放つ事がある、之れを防ぐ爲には「ツラツプ」を付るがよい、此臺所の地所は少し高くして廻りに溝を掘り、雨水の浸入を防ぐ然し此溝へ汚水は決して流してはならぬ、土間は煉瓦又は敲にて敷つめ濕



ぬ様にするがよい
一切水は他へ漏ぬ様にせねばならぬ流しが漏りて床下に出たり水溜箱から水がピチョ／＼滴るなどは能く注意せねばならぬ。

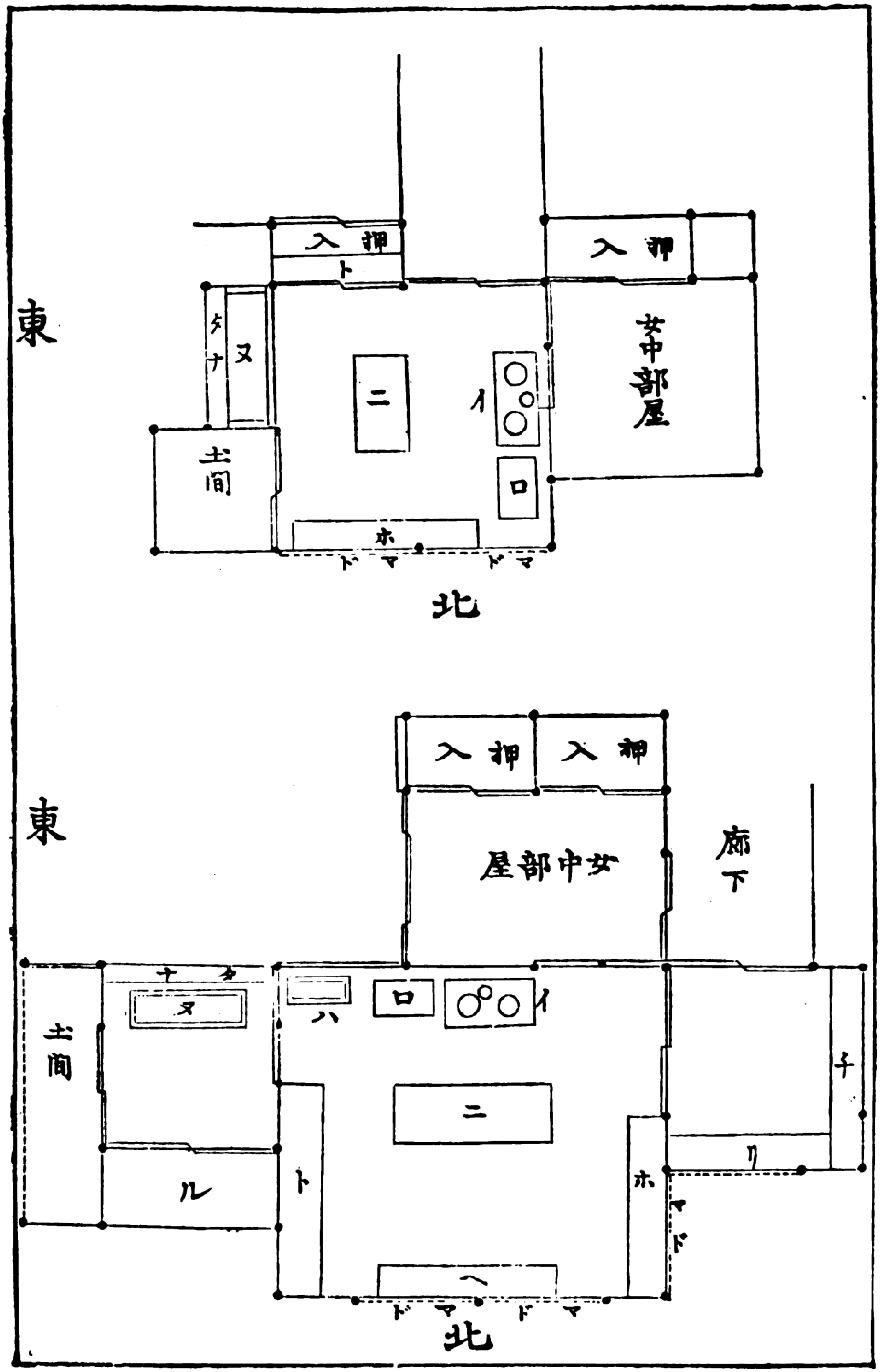
△鼠の豫防

次には臺所に鼠の入ぬ様にする事である、臺所に鼠は付物の様に何處に行ても居る、これは居る筈で、食物があるからして鼠は此所で生活するが、又家人も強て防がぬ、臺所の方でガタ／＼云ふから何だろうと云ふと夫人は多分鼠でしやうと一向平氣ですまして居られるからして鼠も臺所を天下として横行するも尤もな譯である吾人の口へ入れる大切な食物を料理する所をかまはず鼠が土足で歩くといふのは、閉口の次第である、まさか鼠が土足だからと云ふて遠慮もせまいから、そこはこちらで注意して鼠入ズなどゝ姑息な手段を取らず絶對的臺所に鼠の入らぬ様にするがよい、鼠の食物は重に臺所で得るものであるから、此臺所へ鼠の入らぬ様にすれば鼠は從て餌食に窮するから、ドシ／＼御隣へ行てしまう、御隣でもたまらぬと思て自然注意する様になる、之は實地經驗した話しで鼠に食物を得させぬ様注意すれば鼠は居なくなる、鼠が居ないと不吉の兆などゝは以の外である、又鼠を取るにも大に利益がある、鼠が食物に飽くとワザ／＼危險を冒して迄係蹄に入る必要はない、然るに鼠は飢さして置くと直ぐ係蹄にかゝる、從て容易に鼠を退治しペストの豫防にもなり、一擧兩得の策であるから、何



イの管より惡臭は外に出ず
ロは水なり故に惡臭は此の
水の爲に戻り來らず

でも鼠を臺所に入れぬ様にせねばならぬ、之れは左程六ケ敷事でもない、前に述べた構造にすれば床天井壁から入る事は出來ぬ故に、只戸を嚴重にして成るべく板戸又は硝子戸を用る様にし、土間は床下と交通を絶ち床下は外に穴を明け空氣を流通せしむるがよい。
以上は大體の構造ですが前述の通り臺所は最も繁く使


東
押入
押入
ト
タナ
ヌ
ニ
イ
ロ
女中部屋
土間
ホ
マド
マド
北
東
押入
押入
女中部屋
廊下
タナ
ヌ
ハ
ロ
イ
土間
ニ
チ
リ
ル
ト
ホ
マド
ヘ
マド
マド
北

ふ所であるから、最も整頓させて置く事が必要である器具が整頓して居らなければ秩序的の仕事は出來ぬ、只ガタ／＼させて居るばかりで何時迄たつても料理が出來ぬから器具の整頓は必要であり、從て不用のものは一切置ぬ樣にせねばならぬ、器具の古いものや用ひもせぬものがそこらに置てあると、必要な器具が置なくなつて用が缺けるから不用の物は一切置かない樣にせねばならぬ、又竈や其他のものを隅に置ぬ樣注意せねばならぬ、兎角隅は塵の溜り易いのみならず掃除が出來ないから外國では二階三階或は地下室に取る事が多い、日本ではまだ六ヶ敷いだらう、だから中庭に面して設けて以上述べた構造にしたらよからう、所によると裏への通行路を臺所にし天窓から明りを取て仕事をして居る所が澤山ある、之れは立て仕事をするから割合に便利ではあるが、通行路を兼ると云ふ點は改良せねばならぬ、斯樣な構造で、よく實見するが、所謂臺所の眞中を汚穢屋が通る、實に不潔である、又他の室と皆續てあるから臭氣が擴がる、だから矢張別に一室を臺所に取らなければならぬ。

△修繕費用

新に臺所を建るには前述の如くすればよいが、既に建て現在住つて居る人で自分の家である以上は少し位修繕してもよからう、別に大して六ヶ敷事ではない借家の人は充分缺點を認めつゝ然も他人の家であるから其儘不自由なりにして居る人が澤山ある、そこで望むのは第一家主が假令自分の住はぬ家にしても、充分前述の點を考へて建てもらいたい、自分の住ぬ家だから不便でもかまわぬと云ふ家主はありますまい、次に借て居る人も永久借りて居る積りなれば家主に相談して修繕しても大した事はない。

さて經費はどれほどかゝるか大した事はない、臺所は少しも裝飾はいらぬ、一坪增に付て三十圓もかけたら出來る其他日本風の障子を硝子障子にする差金が一本に付て一圓七八拾錢位、其他煙筒の構造を代へ、机腰掛の代から、一切で、三十圓位、尤も之れでは充分ではない、けれどもまづ取敢へずの改良としてこの位でよからう。

和洋折衷料理

龜井まき子

和洋折衷料理は四五年以來、流行し始めて、當時は少し上等なる、會席料理店等にては、重に之を行ふやうになり行きたるが然し此料理の根源は、西洋料理にて調理せるものを、日本風に化し行くもの故、西洋料理の調理法を、會得したる後、日本料理の調理を、研究したる人か、或は日本料理に通じたる後、西洋料理を學びたる人に非ざれば、眞の和洋折衷料理といへる物は、調理し得られぬものなり、されば當時の割烹店にて、庖刀をとる者、多くは所謂品川町（日本料理の職人溜り所）より一日何程の給料とかにて、雇ひたる職人なれば、手際はよく和洋折衷の如く見ゆれど、眞理を知らねば、外見上のみの和洋折衷料理といはざるを得ざるなりこれより、下に載する、和洋折衷料理は自から教場にて、實驗したる調理なり、且此調理は、我國は多く魚類に富む國にして、又當時は出征軍人に送る爲、或は俘虜を養ふ爲に、獸肉の高價を來したるより、獸肉に替ふるに、魚肉を以てしたるものなれば其名稱の如きは、自分の考へより出しものか、又は原名に基きて、名づけたるものと知るべし。

●白胡麻あへ　細打キャベツ　唐草赤貝　せん生姜

キャベツ細打は、小なるキャベツ一個の、軸をとりて、竪に四ッ位に截り、夫を橫に細かにきりて、よく水洗ひをなし、鍋に湯を沸騰させたる中に、入れて茹で、軟かくなりたらば、之を笊へあげ、水をきり、酢（小なるキャベツ一個につき酢一合五勺位）に一時間斗浸しをくべし。

一　唐草赤貝は、赤貝の殼をはがし、肉を出し、腸を去り、竪に刺身庖丁にて、細かに條を入れ後、橫に細かく截り放し、目笊に入れ、鹽を（赤貝は前記のキャベツに付、中位のを十五位の分量なれば、鹽も夫につ

れての分量なり、）小なる金杓子に、半分位入れ、俎板の上に、笊を兩手にて押へ、よく〳〵こする時は白き泡が赤貝の上に、一面うき上るなり、これに水をかけて、摩擦ること、數回の後よく〳〵水洗ひする時は、赤貝の色は、ます〳〵赤く、又唐草の如く、巻き上がるなり、此鹽をかけて、こする事は、血泡をとる事にて、かくする時は腥き事少しもなきなり、扨此赤貝に、又鹽を少しふりて、半時間もおくべし。

一　生姜の皮をむき薄く切り、又細かに纖にきり、水にはなしおくべし、（生姜は前記の分量の時は、拇指の頭位のを三個位なり、）白胡麻をよく水洗ひして、布巾にて絞り、炮烙にて煎りてよく擂り、（但し前記の分量に付、白胡麻二合の割なり）どろ〳〵と、油の出る迄になりたらば、煮切（味醂一合を五勺位に、煮詰めたるもの、）一合を、そろ〳〵と入れて、擂りのばして裏漉をなして、前記の酢につけたる、キヤベツの酢氣を、よく切りたると、又鹽をふりたる赤貝を、水洗ひして、水氣をよく絞りたるとを、入れてまぜ合すべし此まぜ合したる上へ、前に水に放しをける、生姜を布巾にて、よく水氣をさりて載すべし。

此分量は、凡十人前に盛りつくるを得るなり、

●丼　キヤベツ巻魚つゆかけ

一　キヤベツの外皮をむき、一枚〳〵に丁寧に葉をむきて、水洗ひをし、鍋に湯を煮沸かせる中へ入れ、茹るべし、茹であがりたる時は、目笊の底へ、此葉の破れぬやう、靜かにのせ、水を切るべし、扨魚を三枚におろし、（鯛にても、鮃にても、又は鰯にても、鯔にても、何にてもよし、但し下等の魚にて、上等なる膳に上る事の得ぬ魚の方、却つて面白し、）皮及骨より、肉をよく殺ぎ取りて、肉をたゝき、鹽胡椒を少し入れ小なる茶呑茶碗に、輕ろく一杯位の、分量づゝに固め前に茹でをける、キヤベツの葉にて、よくつゝみ、此葉につゝみたる塊、十個につき、酒五勺（五勺の分量は普通の大なる金杓子一杯をいふ、）と味醂五勺とこき煮出し一合にて、よく煮詰るべし、汁の少しつまりた

る時、醬油四勺程入れ煮るべし、是又煮つまりたらば鍋をおろし、靜かにキャベツの葉卷を、皿にうつすべし、然る後、鍋に煮汁をよく絞り入れて、又鍋を火にかけ、此煮汁の煮立ちたらば、葛を猪口に半杯程入れ水にてうすく溶かして、攪廻しながら入るべし、然る時此煮汁はうすく固るなり、夫を前に煮たるキャベツ卷魚にかけ、胡椒をふりて出すべし。

●皿　俵あげ魚
夜まきいんげん
からしあへ

一　俵あげ魚は、魚(何魚にてもよし)を、三枚におろし、皮を去り、細かにきり、又骨皮等にある肉を、よく殺ぎ取りて、之にまぜて、共にたゝき、小骨を去りて後、胡麻油を鍋に極少し入れ、煮立たせたる中へ入れて、火を通し、夫より又細かにたゝき、醬油少々と胡椒を入れ、此たゝきたる魚が、小さき茶呑茶碗に十杯に付、小なるじやが芋三個の皮をむき、裏漉しをなしたるを入れてまぜ合せ、俵の如き形になし、パン粉にころがし、玉子のとかしたるをつけ、又パン粉にころがして、胡麻油を煮立て之を揚るべし。

一　夜蒔いんげんの前後をとり、細くきりて、鹽をふりおき、三十分も經たる後、鍋に湯を煮沸かしたる中へ、炭酸曹達一とつまみ入れて、之をゆで、軟かくなりたらば、笊へあげ、水をかけ冷やして、水氣を切り、醬油と水と半々の割にて、西洋辛子粉をときたる中へ、此茹でたる、いんげんを入れ、交ぜ合せて、俵揚げ魚の、附け合せとすべし、又俵揚げ魚は、醬油をつけて、食するも、鹽をつけ食するも、適宜なり。

患者の食物

△チキンブロース

老鷄の毛を取り去りて切り、骨を折りて鍋に入れ、冷水に浸し、三時間煮、鹽一茶匕を水五合の割に加へ、而して漉し、冷へたるとき脂肪等を取り去り、暖めて與ふべし、但し若き鳥より老し鳥を用ゆる方滋養を多

く得るなり。

△鶏スープ

チキンブロース二合五勺の中に飯二食匕と三葉芹を細かに切りて入れ、胡椒を加へて二十分煮る、而して焼パンと共に供すべし。

△牡蠣のブロース

牡蠣二合五勺を細かに切り、水一合三勺にて十分間煮、鹽半茶匕加へ漉して胡椒を加へ、熱くして焼パンと共に與ふべし。

△パンと半熟卵

パン一切を焼き、其縁を碎きて乳又は湯に浸し、少少鹽を振り、そして薄鍋に湯を沸騰せしめ、少々鹽を加へ、卵を割りて入れ、三分間煮、之を大匕にて掬ひパンの上に載せて出すべし、

△ミルクトースト

パンを焼き其縁を熱湯に浸して和かにし、蓋のある深き鉢に入れ、粉一食匕を牛乳一合三勺に混じ、鹽一茶匕四分の一を加へ、濃くなり初むる迄煮て之をパンにかけて用ゆ。

△煮カスタ

三個の鶏卵の黄身をとり、之に砂糖三四食匕を加へ之に二合五勺の牛乳を煮て靜かに黄身に注ぎ入れ、絶へず混せつゝ能く混じたる後、之を湯煮をし、濃くなる迄煮るなり、而して香物を加ふるも良し、之を皿に入れ、そして後卵の白身に砂糖二茶匕を加へ、能く攪き混せ其上に置き用ゆるなり。

△焼カスタ

二個の卵を黄白身共に砂糖二食匕と、鹽少々を加へ能く打ち、牛乳一合を入れ、能く混じ之を小茶碗に油を塗りて別ち入れ、二十分間焼釜にて焼くべし、而して上面に焼け色見へし時は直に取り出すべし。

△柚の湯

柚の汁二食匕と砂糖一食匕、熱湯一合三勺を混じ、能く溶解せしとき與ふべし。之れは風邪にかゝりしとき宜し。

△蜜柑寒天

寒天四分の一を、半合の水にて能く煮、之に蜜柑の汁一合二勺混じ、砂糖二茶匕を加へて後之を漉し、浮模様のある鉢に入れ、冷やして之を皿に移し、與ふるなり、又は蜜柑の代りに柚を用ゆ、其所は砂糖の量を増加して二食匕とす。

寒天半本を一合の水にて煮、之を水と柚又は蜜柑の汁と共に二合五勺を混じ、之に砂糖一食匕を加へて漉し、蜜柑の皮を剝き、輪切りに切り、鉢に寒天の煮たるを少々入れ、其少々固まり初めたる時蜜柑の切たるを入れ、又其上に寒天を入れ、其上に蜜柑を置き、又寒天を入れ、之を反覆して後冷かにするときは美しく又美味なり、

△珈琲寒天

寒天四分の一を半合の水にて能く煮、之に珈琲（一茶匕を一合の熱湯に煮出す割合なり）一合二勺に砂糖三茶匕を加へ、之を寒天に混合して後漉し、鉢に入れて冷し、之に乳汁を加へて與ふるなり。

（此乳汁を作るには卵の黄身一個をとき之に牛乳五勺を加へ砂糖二茶匕を混じて少し煮、香料を加へ珈琲寒天にかけ與ふるなり）

△チキンシヤレー

一羽の鶏を能く羽毛を取り去り、料理して水七合五勺を入れ、一時間を經て後鹽一茶匕を加へ、二三時間文火にて肉と骨の離るゝに至るまで、又水の二合五勺に至るまで煮、胡椒を加へ、之を鉢に漉し、冷へたる後其上に浮く所の脂肪を取り去りて、燒パンと共に用ふべし。

△牡蠣のスープ

牡蠣二合五勺の中、五ッ六ッ大なるを殘し、殘りは皆細く切り、鍋に入れ、一合五勺の水を入れ、鹽半茶匕加へ、十分乃至十五分間煮上に浮く物を取り去りて漉し、粉一茶匕を水にて解き之を入れ丸の牡蠣を入れ胡椒を加へ燒パンと共に供すべし。

△卵のブロース

一個の卵を能く攪き混せ、砂糖半茶匕を加へ、熱湯二合五勺に注ぎ入れ、能くませ、鹽四分の一茶匕を加

へて熱き間に用ゆ（是れ甚だ消化し易し）

△蛤のスープ

蛤を能く洗ひ、少量の水を入れ、口を開く迄煮、夫より堅き部を取去り、軟部を用ゆ（長く煮るときは唯堅くなすに過ぎざれば開口する迄にて充分なり）牛乳を茶碗一パイ其汁を加へ粉を少々入れて而して後蛤の軟部を投じ共に沸騰せしめて熱きを供すべし

△ケズリ肉

上等の牛肉を庖刀にて削り、三四分の厚さに固め、圓くして之を燒鍋に油を布て、鍋の燒けたる時に入れ三分間兩面を燒き、胡椒と鹽とを加ふべし。

△湯煮卵

卵を煮るに熱湯にて三分間程煮るは通常なれども、之れより良き法は熱湯を鉢に入れて卵を入れ、蓋を堅くし、其湯の度を高くして十二分間置くときは和かにして堅くなることなく、全體同樣に煮ゆるなり。

△スノーエグ

牛乳一碗を薄鍋に入れ、少々鹽を加へて煮、卵を黄と白に分ち、白身を能く打ちて牛乳の沸騰せしとき白身を大匕にて此所彼所に一匕づゝ掬ひて入れ、白身の固まりたるとき皿に上げ置き而して後黄身を解きて砂糖一茶匕加へ、之を乳の中に注ぎ入れ、暫時煮て其皿にある白身の周圍に入るゝなり。

△蛤ブロース

蛤六ツを能く洗ひ、三食匕の水を加へ、火上に置き其口を開くを待ちて其汁のみを茶碗に入れ與ふるなり蛤は鹽氣を含む故鹽を加ふるに及ばず。此蛤のブロースは其榮養を得ると牛肉ブロースに劣らず甚だ滋養に富み、興奮性を有する者なれば、ビーフブロース或は牛乳を好まざる人に與へて良し。又重症なれば一食匕づゝにても可なり、恢復期なれば多量に與ふるもよし。

△ヲムレツ

卵の黄味と白身を別々に打ち燒鍋に油を布き、先黄身を入れ、鹽と胡椒を入れ、而して白身を置き二つに切りて重ね供すべし。

△エグチスト

パン一切を焼き縁を砕き、熱湯に浸し卵の黄と白とを別にして白身を能く攪きて白き泡となし、之をパンの上に鳥の巣の形に中に凹を作りて置き、其中に黄身を丸にて入れ、少々鹽を加へ焼釜にて三分間焼くべし

△焼　卵

小茶碗に油を塗り卵を丸にて入れ鹽と胡椒を少々加へ、而して焼くなり、又時としてパンを砕きて其上に置き焼くも可なり、良き加減の焼釜にて白身の少々固まる迄焼くべし。

△焼パン

少くも二十四時間經たるを四分程に切り、兩面共薄黄色に焼きて暖かなるとき與ふべし。

△スープ粥

飯二食匕を篩にて漉し、スープ二合五勺に入れ火上に置き、鷄卵の黄身を攪きまぜ、二食匕の牛乳を加へ之をスープに混じ、弱き火に載せ、能くまぜて沸騰せしめ、胡椒を少し加へて直に與ふべし。

△ポテトスープ

中位の大さの馬鈴薯二個を能く洗ひ、冷水に入れて之を煮、能く煮たる時水を捨てゝ能く砕き、牛乳二合五勺を沸騰せしめて之に混じ、而して、醫師の許可あるときは葱若くは三葉芹を刻みて加へ、後漉して再び沸騰せしめ、半食匕の粉を乳又は水にて解き、之に加ふ、而して鹽一茶匕胡椒四分の一茶匕へ五分間煮て熱きを與ふべし（又濃過ぎる時は乳を加ふべし）

△卵と柚水

一個の卵に砂糖二食匕を混じて能く攪き混ぜ、之を柚の汁三四食匕と氷水二食匕とに混じ、砕きたる氷に入れて與ふべし。

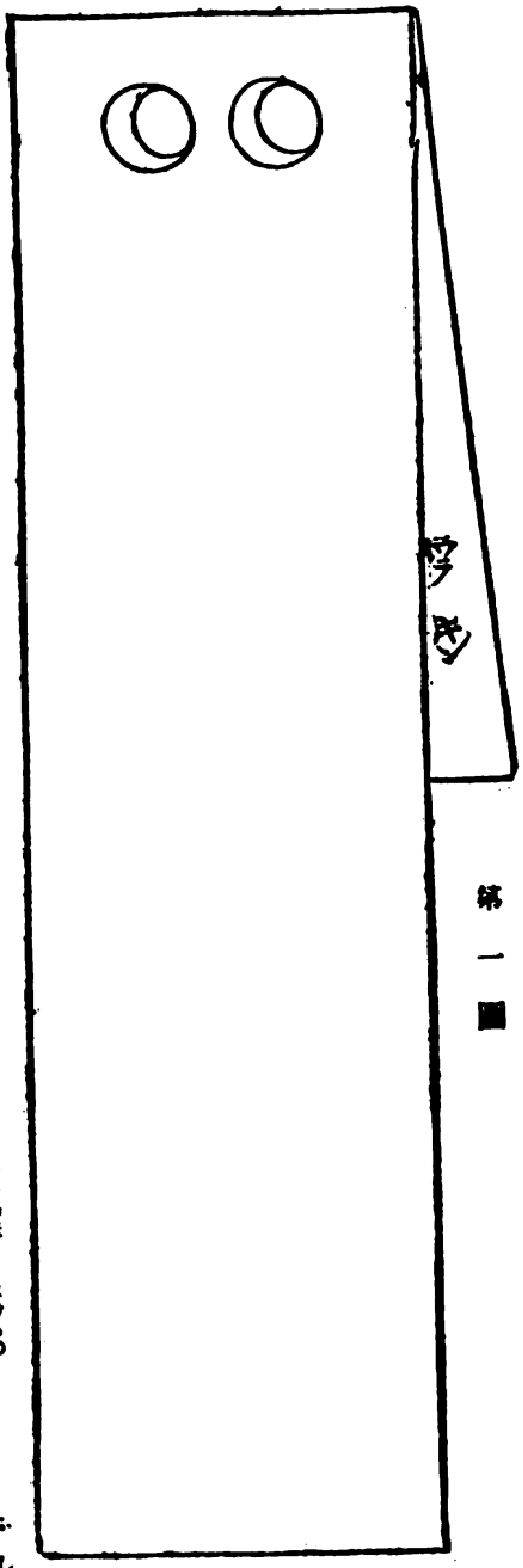
△柚の水

柚の汁二食匕と砂糖一食匕と氷水一合三勺、氷の砕きたるを一食匕、幷に柚の皮二切を混合し砂糖の溶解せしとき之れを用ゆれば冷き飲料として味良きものなり。

栞（しをり）

久保田金仙

栞は、讀みかけし、書冊の、あはひに、さしはさみおく文具なり、説文に、栞は、本と、栞に作る、槎識也と、これは、森林通行の時、其枝を斫りて道の記識としたりといふ、それを、栞に作るとあるは、栞は、蓋し其木を斫りて低折の狀あるが故に、かく六ヶ敷云ひしもの也、俳人百菴が、歌林記載論に、栞字の説を、ことごとく云へり、屋代伯賢はそれを難じて曰く此説無益也。今のしをりは古への夾竿の遺風にて、昔しは書籍多く卷物なれば、不審の箇所、又は讀みかけし所へ、さしはさみしゆゑ、夾竿とはいひしも今は冊子おほき故にヒラとヒラとの間に、はさむを山路のしをりになぞらえて、名付しまでなりと、此説によるべし、栞といひ夾竿といふも、要するに深山道なき場所の通行に枝を折り木を斫りなどし後人の辿りしことを、借り來たりて、讀みかけし書籍のあとを、訪ぬる印しとはなせしなり、



第一圖

されば、中華に用ひし栞の形狀は、たしかにしれざるも、吾國古への人々、書冊に、さしはさむに、便宜の品を、其物好みより作り、自然文房具の一とはなりしなるべし、今其二三を圖に示して大方の參考となさん。

第一圖　後水尾院御物好のよしにて、城州鹿園寺にあり、全體は、鳥の子紙を用ひ、表は、白紙にて、邊はりに金線あり、裏は銀箔押なり、上部に、組穴二ツあり、竪四寸八分、横壹寸貳分五厘、折返し貳寸五分、穴三分、文字及び繪なし、



第二圖

第貳圖　庭田大納言重條卿より或方に贈られしものと傳ふ、桐の薄板にて作る、竪三寸七分、横七分、紐房は、上部にありて、三寸三分、表裏ともに、吉野山に櫻さく圖、上段に和歌あり、

「よしの山こそのしをりの道かえてまだみぬかたの花をながめむ」（新古今春の上花の歌の部にあり、西行）



第三圖

第三圖　烏丸光廣卿の作る所と傳ふ、これは鳥の子紙を用ひ、竪三寸八分、横八分、紐房は右の角七分下がりし所と、左の端七分上がりし所にあり、繪は、上段遠山、下段吉野川、中段は、よしの山の歌、貳圖、參圖、の形にて世に傳ふものは、この歌にはかぎらず

われひとり思ひ入りぬる山路には誰かしをりをかたらひともみむ（新撰六帖）

山ふかくいるその道に入る時はわかみしなりとほろをおるかな（新撰六帖）

などその人々の好みによりて認めしものか、

第四圖　綾小路中納言有美卿より賜はりしものにて、これも、桐の薄板なり紐房は右の肩七分下がりて付く、繪は、霞て、上段は歸雁、中段は吉野山、下段は吉野川、裏は霞に落花、寸法、竪三寸八分、横八分、此頃或女學生間に、絹糸にて修多羅にあみ、又は扇つなぎ、桝つなぎ、などさま〴〵の趣向して、贈答するを見るも、いまだ古人の物好に及ばず、



第四圖

凱旋佳話

東郷大將が參内上奏を終へて二十閲月に渉れる双肩の責擔を稍に緩うするを得、馬車を回して勸業銀行脇へ來た時である、恰も戰地より後送せられたる病傷兵の一隊が看護手に率ゐられて通り掛つた、先驅の近衛騎兵の劍影を望み見るや一代の名將として無前の大勲を奏し世界の東郷として盛名嘖々たる此偉人に敬意を表せん爲、ヒタと立ち止まつて、擔架を其儘何れも憔悴せる面上に滿腔の熱誠を漲はし痩せ細りたる手を擧げて敬禮を捧げたのである、車上の大將は之れを見るや其衷情を酌みて殆んど堪へざらんとするが如く、恭しく答禮を施したる儘身を車外に乘り出してシツと許りに見入りつゝ泫然として涙を拂ひ去り、凱旋も歡呼も全く忘れ去りたるが如く過ぎ行きしは流石に大將の大將たる所以にして彼の丕績の偶然ならざるを思はしめた、堵の如き群集も此光景に感じ暫時は恍惚として大將の後影を見送りながら潜かに人格の勝利者たる東郷大將其人を追慕して止まなかつたのである。

談叢



肉體と愛情

小野田花子

肉體上の不具は、果して人間の愛情を減殺するでしやうか。これは誰しも考ふる問題と思ひます。茲に妙齢の美くしい、女子があつて、一人の男子と結婚の約束が調つて居つたと思ひなさい。然るに、娘は其の愛人の旅行中に、不幸にも熱病に罹りました。幸にして、其の後、全快は致したが、可愛相にも、大切の髪の毛が、一本殘らず拔けてしまい、生れもつかぬ不具者となつたのであります。詮方なく、鬘を被つて、漸く其の外見だけは保つて居るものゝ猶ほいろ〳〵と金錢を惜まず、療治に手を盡して其の快復を計りましたが、元より惡症のことでありますから、何うにも仕樣が御在ません、彼此する間に、其の愛人が、旅行から今にも歸らうといふ塲合にさし迫つたのであります。男は元より女の病氣であつたとは、よく承知して居りましたが、其の結果が、かくまで美を害つたとは夢にも思ひ設けずに居たとしたなら、何うでせうか、此の男は果して以前の約束を實行して、其の不具となつた女と結婚するでしようか。そうして今迄彼が其の女に寄せて居つた愛情は、見蕩るばかり美くしかりし頭の裝飾を失ひしにもかゝわらず。なほ渝らずに繼續することが出來るでしやうか。是は誰しも判斷の出來兼ぬる問題であると思ひます。又男子に對し、踏み入つて究間すべきとでもないと思はれます。



私は、曾て巴里に居りました頃、一夜プタールヴアルトの劇場で、名高い演劇を見ました。其の第四幕目になると、其の劇の花役者たる一人の女が、面布を以て其の顔を目深に掩ふて出て參りました。それといふは、其の女の顔一面に疵が出來て、一生の醜婦となり果てた恥かしさに、かくは顔を掩ふて居るのであります。然るに、其の婦人の良人は、久しく戰場に在つて稀代の戰功をたて今將さに一年目で凱旋せんとする音信を受取つたのであります。女も戀ひ焦れて居つたことゝて、其の良人の歸るとをきいて、非常に喜び、鏡に向つて自身の姿を見ました、所が、以前とは全く變つた姿に、今更の如く、身も絶へ入る許りに歎くといふ筋であります。女は勿論病氣であつたとは、良人の許に申送りましたが、其の結果かくまで其の容貌を害つたとについては、一言も申送らないので、良人は夢にも知らないといふ譯であります。良人は果して彼女を見て以前の如くに愛するや、或は終に愛情を盡かして去るかといふのが、此の劇の主眼で、又た其の場合が如何にも小說的であります。間も無く良人は歸つて我家の閾を越へ、双の腕を擴げて其の妻を抱へんとしましたが、女は一言も發せず、呼吸さへ逸んで見えました。男は堪えきれず、女の方に身を寄せんとしました。そこで、女は所作振で、手を以て男を己が後方に招いてありし一伍一什を物語りました。去かし、男は、如何なる肉體上の故障も、決して其の愛情を減殺するものでないといふ、所謂ブウーパアート劇中の一英雄でありました。そこで男はかゝる出來事が、其の情愛に何等の變化をも及ぼさぬとを誓ひ、其に安心して、女は徐ろに面布を取り除けますと、男は女の足下に身を投げて、心の奧底から、

「我が愛は變らず、我が愛者よ」

と絶叫しました。去かし、男は決して女が以前よりもズット美くしいとは申しませぬが彼女の猶美くしい點を一々所作にて示し、再び彼の愛情に變りなきとを誓ふのであります。觀客は、此の時、其の良人の氣高き心掛を拍手喝采して、暫は鳴りも止みませぬでした。

此の時、至つて惡口好きの友人が同席して居りましたが、私に對つて申しますには、『ナニ、これは此處だけさ。もし、此の二人の男女が幸福で、御互に永久も澁らずに愛しようといふには、マア其の家へ歸つてからのことさ。そこで觀客も初めて滿足し、此の演劇も大團圓にならうといふものさ。

男は女の顏の瑕の到底取り去る事の出來ぬものと知りながら、以前にも增して、一層其の戀愛を切にするといふは、畢竟女の前に於て、其の兩眼を引き拔き、盲目にした故と見てよろしい。是に於て初めて肉愛ならぬ心の愛の總てを捧げて、其の愛情を繼續することが出來たものである』と。



私は之に答へて、『然り、貴下の言はるゝ通りであるとすれば、貴下は、女が己を愛する一念より痘痕も笑窪に見えた盲目的の男と結婚したことを氣付くと思はるゝか。多分、其の女の愛情永久に此の故障に打ち勝つことが出來ぬかも知れぬ。』と申しました。

又た私は、愛せる妻の頭髮が眞白になつたので、其の夫が遂に之を嫌ひ、爲めに破鏡の嘆を招いたといふ哀しむべき事實を知つて居ります。

思ふに是は心理學上の一大問題で、一朝一夕に滿足

な解答を與ふべきものではありませぬが、私は聊か之を諸君と研究して見樣とて提供した次第で有ます。けれど私は幸ひに、皆樣が眞實心から其の妻や、夫や戀人を熱愛して居らるゝことを承知して居ります。去かし、一言御忠告申したいのは、以上申上げたとから、一つ試驗して見ようなぞと飛でもない御考を御起しなさらない樣に願ひます。そして、又た其の愛情を唯だ一つの嗜好の樣に御思ひなすつてはなりませぬ。其の最愛の妻にも、亦戀人に對しても、よく〳〵注意なすつて、終始少しも愛情に變りなきを御見留めになつた上で、尙ほ又た愛する人の身に何等の病氣もなきを確めた上でエンゲーヂして頂きたいと思ひます。之が最も智慧ある仕方と思ひます。

ジヨン、ブル雜談

山本迷羊

これはマツクス、オーレル氏(佛人)の著書(英譯)から抄譯したもの。

著者の筆はいかにも所謂佛人的で、その奇警な觀察、輕妙洒脫の描寫は、確に局外の讀者を味方にする魔力があるが、兎角皮肉が過ぎたり輕薄に趨るので、當の英人には嫌はれるさうだ。ジヨン、ブルの一言一行も、この人の筆に上ると忽ち新芽を萌いて花が咲く。

一、英人の旅行

中流以上の家庭に育ッた英人は、誰でも、端艇も漕ぐし、馬車も驅れるし、馬に騎る位はお茶の子なのである。兒童の時分から身體を鍛へる運動に慣れて居るので、先生達は百哩歩くとか、倫敦から牛津まで漕いで行くなンかは何とも思ッてゐない、現に、倫敦からエディンバラアまでテク〳〵歩いて旅巡りする人はザラにあるので、行ッて見たところで決して自慢にはならない。處で、さういふ連中の旅の準備はどうかといふと、それは至ッてお手輕なもの。まづ嚢の中へ、フランチルの襯衣を一枚、カラアを一ダアス(コイツは日本人には鳥渡眞似が出來ない)、それから靴下二足位押し込むと、既う出發用意は整ッたので、洋杖を引握むや、主は飄然として膝栗毛に一鞭くれる。

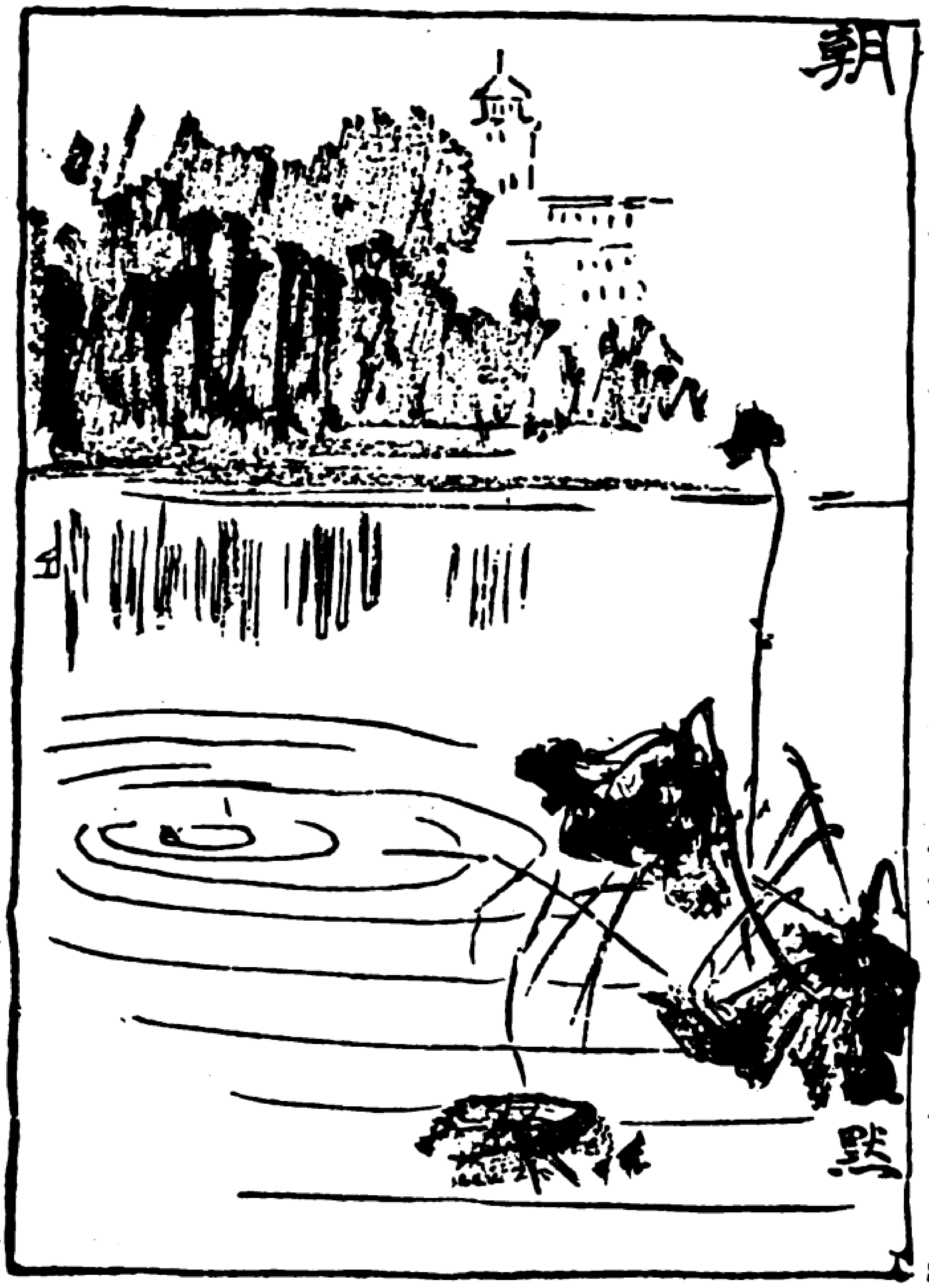
ある人が、昨年この徒歩旅行で、スコットランドのズッと北の方まで入り込んだが、その先生が國境までは汽車で行くといふのを聞いて、友人達は寄ッてたかッて嘲讀ッた。

「何だ、意氣地が無いな、奮發しろ奮發しろ。旅と名が付いたら全然歩くさ。汽車の切符は、君が折角の事業の價値と興味を玉無しにするよ。」

此人は先年暑中休暇を利用して、諾威へ出掛けて、千哩以上の山河を跋涉したのである。

二、ジョン、ブル翁の健康

この歩くといふ習慣は、英人に在ッては隨分高齢まで保たれる。都離れた方へ往ッて見ると、パクパクのお爺さんが、毎日五哩や六哩の道程を平氣で歩いてゐる。で、一朝これが出來なくなッた時は、即ちそれが床につく合圖なので茲に彼等はアブラハムの御胸に睡るべく天國にかしまだつ支度をする。處が、佛蘭西の地方へ往くと大違ひ。私らのお爺さんは、大概は僂痲質斯のために半身不隨となり跛者になるので、食卓にかぢりついて愚圀々々に半日を過す。午餐を終へて始めて屋外へ出るのだが、それも老僕の腕に凭れ掛ッて、担々たる大路の片側を蟲の這ふやうに徐行するのである。



総じて佛蘭西では、六十といふ聲がかゝると、既う大抵は老耄の姿となる。若い時分にサンザ放蕩した事や、又多くは歩行が嫌ひで家にばかり坐ッて居た因果は覿面、支那人の所謂耳順とか致仕とかいふ頃になると、若干も無い餘命が、自分にも、また家族の者にも荷厄介になる。勿論これは英國には無い事で、ジョン、ブル翁は、臨終の際まで矍鑠として壯者の如くに目を瞑るのである。私は今年八十八歳になる老友を有ッてゐるが、この人は夏でも冬でも一日も缺かさず、宛然勤行のやうに毎朝水をかぶる。そして又三四哩歩いてからで無ければ、間食に座らうともしない。この翁、いつ見ても活快で、さも嬉し氣で、食後には例の菓子や果實を撮みながら喜んで唄を歌ッて呉れる、で乾度人毎に、私の作る豌豆がどうの斯うのと話しするが、それが、來年壽かうといふのだから面白い。併し想ふに、彼れはまだ〳〵澤山の豌豆を收める事が出來るであらう。

三、水入らず

私の知己に、若いオックスフォルド大學の教授があるが、この人は毎年小さな端艇に乘つて、一二ヶ月位の旅行をやる。

先生まづ細君と手に手を把つて、出發の地點まで陸路を行く。で、其處へ往きつくと、舟を傭つて、夫人を舵の處にお乘せ申す。それから後は水入らずの船旅なのである。夜は河邊の旅籠屋に宿泊り、(註に曰く、こゝ、藤村さんに言はせると『……いざよふ波の、岸近き宿にのぼりつ、濁酒濁れる酌みて、草枕志ばし慰む』といふ寸法。)翌朝になれば新しい糧食を舟に積み込んで復た先へ先へと漕いでゆく。

二人はかくの如くにして、歐羅巴の湖水や河を大抵觀遊してしまつた。旅行中には種々な珍談もあるさうな。

四、自轉車の新婚旅行

前のは舟の旅だが、中には自轉車で歐洲の都會巡りをする者がある。併しこれが髯男の一人旅なら格別面白くもないが、粋な若夫婦は屢々二人乘の三輪車で新

婚旅行と出掛ける。彼等は尻に帆かけて村から村へと國中を駈け廻るが、珍らしくも無いので、毫も人の注意を引かぬ。……この國では、皆がこんな常規外れの事を見慣けてゐるから。

何處へ行つても人情に變りは無いので、誰か友人が結婚すると、物好な連中が續々と先様お更代で花嫁さんの顔を拜みにくる。こいつを避けるのが旅行の主意で、兼ねて新鮮な田舍の空氣を充分に吸はうといふのである。

それで、かう云ふ二人乘の三輪車は、まあ『相乘』とでも云はうか、兎に角 Sociables と云ふ至極適當な名が付てゐて、新婚旅行には持つて來いに出來てゐる、如何です、讀者諸君一つ試つて御覧なすつては。なに、羞しくはないさ、拙奴切にお勸め致します。



さてこの相乘自轉車の構造と謂ッば、腰を掛けるところが二つ密接き合つて並んでゐる。それ、そこで、互の胸は喜悦に溢れ、手と手を握り合ふ、やがて四つの唇が相見えると云ふ重寶な仕掛。

で、丘の頂へ達いたら、まづ身體を引き緊め膝を曲げて、低いドン底の方へ風のやうに飛んで見給へ、するとその墮力で、今しがた急速度で駈け拔けた空氣は、前のやうに容易もなく次の坂へ押し上げて呉れる、私は、此奴たゞ駈け廻る丈けでも中々愉快なも

のだと思ふ。況んや、その途中に森でもあれば、若夫婦は自轉車を下りて休息も出來る、逍遙も出來る、時にはどうかして互に見はぐる事もあれば、又思ひがけなく偶然出遇ふといふ人に知られぬ面白味があるに於てをや。

これは、別に費用もかゝらないから誰の力にも及ぶ事で、又かうやれば花婿たる者も、結婚早々肉屋や麵麭屋の書付で新女房を責めつけずに濟むし、花嫁さんの方でも旅行に英氣を養つてから、いそ／＼と新世帶の苦勞に取りかゝる事が出來て、加旃かの新婚旅行の樂しい回想は、幾千代かけて友白髮になるまで續くものである。殊にあの昇り坂の骨が折れた時の事などは。

滿洲の貴婦人

清國に於ては近來漸く女子敎育の忽にすべからざることを自覺し來りて女學校の設立せられし ものも尠からず曾て戶外に踏み出したることなく室內の步行さへ人の肩に倚りしと云ふ中流以上の婦人達にして自ら率先して纒足を廢したる者さへ 少からざる事なれども滿洲に於ける貴婦人の智識は本邦の者に比すれば概して其程度低く普通文字を解し得ざる者多し左れば 偶々本邦人にして筆談を試みんとしても能く之に應じ得る者すら少な く常に堅く深窓に閉ち籠り居り公共事業に携はり或は他人を引見する等の事絕無なるは勿論社會よりは何等の資格をも認められ居らざるにも拘らず家庭內殊に其夫に對し ては實に無限の權力を爲し居ること我々日本人の想像以外に在りて其髷形の大なるも實に驚く許りにして每朝髮を結ぶにも必ず一二時間を費し一毛をも紊さずして綺麗に結び上げるを 常とし殊に其髮飾の燦爛として目に眩く服裝の鮮麗なると相映じて其の押出しの立派なるは如何なる社交界に立つ も引けを取るまじき風采なれども只飛籠めてのみあるを習慣とせる彼等の事とて面接を求めん とするは容易の業にあらず偶々應接する事ありても訪客に相當の言辭を交す事さへ出來されば結局不得要領に終るが常なりされば苟も敎育あり思慮ある日本婦人は進んで彼の地に渡航し先づ彼等貴婦人の啓發誘導に 努め且つ精神上の感化を與ふるは蓋し戰後の經營上に多大の効果を收むべき事業なるべしと

素人薬物學（其二）

糸左近

注意――之を讀まるゝ前に、前號即ち第五卷第十三號の（其一）を參考せられたいのである。

〔含糖百弗聖〕＝これは豚或は牛の胃粘膜から百弗聖を取り、これに乳糖を混せて製したる者である。抑々百弗聖（Pepsin.）とは我等人間の胃液腺からも分泌する胃液素で、肉類の主成分たる蛋白質を消化せしむる爲に天が與ふる自然の藥、然るに何かの不養生で胃病となり、この胃液素即ち百弗聖が缺乏すると、肉食は言ふに及ばず、植物性食物中にも含んでゐる蛋白質を消化せしむることが出來ぬ、消化せねば從つて食欲も非常に進まぬやうになる、食欲進まねば身體も次第に衰弱するは理の當然、そこで醫者はこの牛豚の百弗聖を以て之を補ひ、消化を促すやうにするのである、なんと重寶な藥ではありませぬか、それ故如何なる醫者も之を健胃劑として用ゐぬといふことは無い、さうして小兒青年乃至は老人、誰が服んでも功があるのみならず他病を胃病と誤診して用ゐた所で、別に何等の中毒をも及ぼさぬ。

其量は通常一回に一瓦で、一日には三回食後々々に其儘散劑として服むか、或は水に溶かして用ゐるも可い、さすれば啻に健胃劑となるばかりで無く、間接には肺癆及び貧血の諸症にも効がある。

なぜだらう此の二三日は食不味し
　どれ一瓦服まう百弗聖。

斯う申すと、其樣に結搆な物ならば、我等の如き坐職者は年中用ゐて居れば宜からうか、否々々決してさうでは無い、其の食欲の進まぬやうになつた原因を知らずして、無暗に之を續けて居れば啻に功が無いのみならず、百弗聖を服まねば食物が消化せぬといふ習慣が着いて、一方ならず胃の薄弱を來すことがある、されば二三日乃至四五日用ゐて試らるゝ位が適度であらう、「藥は服むべし又服むべからず」の諺はこの意味で

ある。

偖、右の如く含糖百弗聖の効能を説くと同時に、讀者諸君は斯ういふ疑問が起るであらう、曰く西洋人のやうに肉類を多く食ふ者には宜からんも、我等日本人の如く植物性の食物を主に取る者の、食欲不進には、何うしたら宜からうと、然りその疑問は無理ならぬことである、されば又次の如き結構な薬がある。

〔マルチン〕Martin.は醫科大學の草野君が麥芽から發明せられたる苦心の結果で、植物性の食物を消化せしむるには、仲々効の有ることを余も亦經驗したのである若しこの効能を疑はるゝならば、試みに小麥粉大凡十匁に適宜の水を注ぎ之を煮て糊となし、之に「マルチン」〇、一を加へ、攝氏四十度の熱で、半時間程温むれば、次第に澱粉が消化して奇麗に澄んだる液體に變る、これを以ても植物性の食物を消化せしむる良効あることが證據立てらるゝであらう、然れば我等の如く植物を常食とする者の食欲進まぬ折に、百弗聖と交せて用ゐれば二薬相待つて大いに効を奏するは言ふまでも無い、用量は一回大抵〇、一位である。

一デシのマルチン三度服みしため
米芋野菜溶けにけるかな。

斯う申せば讀者諸君は又曰はれん、「成程蛋白質や澱粉質はその二薬を以て消化せしむるとした所で、脂肪分を分解して吸収し易いやうに導く一種の薬が無くてはなるまい」と、所が、その目的には左の如き物がある。

〔パンクレアチン〕Pancreatin.これも、我等人體の膵臓から分泌する膵液の缺乏せる時、これを補はんが為に、矢張牛や豚の如き哺乳動物の膵臓から製したる薬である。これに固形と流動との二種あつて、固形は哺乳動物の膵に水を加へて浸出したる後乾燥せしめたるもの、流動は膵に依的兒又は屈利設林を加へて製したる液體である、何れも脂肪を變化する力あるのみならず、蛋白澱粉の二質をも消化する効能あるもので、畢竟百弗聖は胃の消化薬、パンクレアチンは腸の消化薬である。

用量は〇、一乃至〇、五瓦を百弗聖と混せて用ゐたり或は牛乳又は肉羹汁に混じて服むも宜い。

米や肉皆それ〳〵の脂肪あり
之を消化すはパンクレアチン。

然らば名にし負ふ彼の重炭酸曹達、苦味丁幾、或は稀鹽酸、酒石酸などは是等の物に比ぶれば、既に陳腐に屬する無効力同様の藥であらうか、イヤさう考へられては、飛だ間違である、醫者の藥を用ゐるは、恰も君子の人を使ふやうなもので、其長を取つて其短を捨つれば、或る場合には曹達に勝る名藥無く、稀鹽酸に如く良劑無きことがある、然れば今順次にこれ等を列記しよう。

〔重炭酸曹達〕（重炭酸那篤僧謨又單に重曹とも名づく）これは白色の粉末で、これが効能を擧ぐれば、（一）慢性胃加太兒に用ゐて大効を奏することがある。（二）飲食の誤用より發したる胃の汚物症に用ゐて一方ならぬ良成蹟を呈することもある。（三）制酸劑として醸酸過多の消化不良には、この藥の右に出づる物は恐らく無い、醸酸過多症は口中に酸味を覺え、酸い噯氣を發するものである。（四）强い嘔吐を鎭むるために服ましめて、大いに其の目的を達したることは屢々余の經驗したる所である。（五）咽頭加太兒、氣管支加太兒などの粘膜加太兒に蒸氣吸入として用ゐれば多少の功あるけれど、內服しても宜いとの說は余の經驗上疑ふ所である。（六）尿石とて膀胱中に結石の出來る病に與へて、良効を呈することもある。（七）糠粃疹とて、皮膚が粗糙になつて、白い粃の樣な小さい屑の剝がるゝ皮膚病に外用して、思ひの外治ることもある。右の外痛風を治し、利尿の功ありなどゝ泰西の醫學者は論じてゐるけれど、これこそ陳腐に屬せる說なりと余は信ずるのである。

用量は一回〇、五乃至一、五を、一日數回散劑の儘或は水劑として用ふ。吸入及び塗布劑としては一％乃至三％の溶液である。

世人はこの重炭酸曹達即ち重曹が非常に廉價な所より、功力も亦これに從ふものゝ如く誤解してゐるけれども、老練なる醫者が用ふれば、危き一命をも助けた

る例さへある。嘗て某金滿家の老主人五十五歳が常に輕い慢性胃加太兒になつてゐたるに、搗て〻加へて或日誤つて腐敗せる魚類を食したれば、間も無く嘔吐瀧の如くに催ふし、數多の名醫を招いて、その治療を乞へども、益々困苦衰弱し、今一兩日は保つまいなどといふ哀れな診斷、然るに最後に來りしベルッ博士は唯單に重曹水を適宜に服ましむれば、それで可いとの單簡なる診療、名にし負ふ國手の事なれば患者を初め皆々それに從ひたるに、時を經、日を追うて快復し、今は既に六十四歳であるけれど、實に健康なるものである。この重曹一日分の量を買へば僅に一厘か二厘の價、而して十年の壽命を延すとは、實に醫者は藥を賣る者に非ずして伎倆を賣るものなることを世人知るや知らずや。

酸いおくび出たら重曹を一瓦
服んで追ひ去れ輕い胃加太兒

斯くの如く輕症に對して、一寸試みるは宜しいが、餘りその効能を信じ過ぎて、秤りもせずに、今日も明日もと目分量に用ゐれば、却て釀酸を增し更に消化不良を起すものである、所謂過ぎたるは猶及ばざるが如しとはこの事であらう。

〔苦味丁幾〕＝これは細かに截り碎いた橙皮及び龍膽を各々五、小豆蔻の粗末二、酒精百といふ割合で五日間浸し、之を壓搾し、濾して製するのである。効能は消化器を刺戟し、間接に食物の防腐をなし、消化吸收を促す所の苦味健胃劑である、されば醫者は唯單に之を用ひることは少いが、大抵の藥に伍用し、彼是相待つて効を奏する材料に供ふるものである。

用量は一日分として二、〇を用ふるは通例である。この藥も重曹と同じく甚だ廉價で、しかも左程の中毒が無い所から、如何なる素人の方でもこの藥名を知つてゐる、無暗矢鱈に服んでゐる人がある、されど自然の攝生を加へずして、徒らに藥に賴らうといふ事は、却つて身體を柔弱にする所の基である。

彼是の藥にませて消化器を
補ふ物は苦味丁幾なり。

〔稀鹽酸〕＝これは鹽酸一、蒸餾水二といふ割合を以て、相混和し製したるものである。抑々鹽酸は胃液の肝要なる成分で、百弗聖と力を戮せて蛋白質、軟骨、膠様質を消化するものである。然るに胃中にこれの缺乏するは、言ふまでも無く胃病であつて、食欲衰へ身體從つて羸痩するは理の當然なれば、斯る時に之を用ゐて以て消化を補ふのである。その他清涼劑止渇劑として熱性病に用ふ。

用量は一回五六滴を、三〇、〇の水に或は二、〇を二百瓦の水に注ぎ、これに白糖なり或は單舍利別を加へ所謂鹽酸リモナーデとなして適宜に用ふれば、能く渇きを去り、清涼爽快の態を起すものである。然れども久時連服したり、或は過量に服む時は、却つて消化力を減じ甚しきは、胃の組織を傷め虚脱に陷ることのあるものなれば、大いに注意すべきことである某醫院の藥局生は蒸餾水と間違へて患者に與へたるため、患者非常に胃を傷ひ、殆んど一年の月日を費して生命を取返したことがある。元來醫者は書生に、藥屋は小僧に藥の調合を委せるといふは、實に危險千萬な事である、さりとて藥劑師の少き我國に於ては、醫者一人で診察も調合も兼ねばならぬ、されど斯る事は到底行はれぬ始末、當路の人何かこれが救濟法を講じられたいものである。

鹽酸の乏しくなりし胃加太兒を
なほす藥は稀鹽酸なり。

〔酒石酸〕＝これも清涼劑として、〇、五乃至一、〇を百瓦の水に加へ、單舍利別を混ぜ所謂酒石酸リモナーデとなしても用ゐるけれど、多くは沸騰散として用ゐ該藥を單用することの少いものである。

〔沸騰散〕＝これは重曹十、酒石酸九、白糖十九といふ割合で、製するものなるが、水を加ふればシユウ〳〵と沸騰するより、この名ある所以である。効能は制酸鎭吐等で、其の用量は五、〇を一五〇、〇位の水に溶かし、その沸騰に乘じて服むか、或は水に溶さずして直に舌上に載せ、然る後水を飲むも宜い。その胃窩のムカムカして吐きさうな時に、之を試むれば甚だ爽快に

なることのあるものである。
シユウ／＼と泡を立つるは沸騰散
ムカ／＼治りむねはすくなり。

〔百弗聖酒〕＝これは含糖百弗聖白、偶利設林五十、水五十を混せ、然る後これに鹽酸五、白葡萄酒千八百を入れ、屢々振盪して七日間放置し、之を濾して製したるものである。消化不良の人及び貧血家は健胃强壮剤として食後々々に十瓦乃至十五瓦（小盃に一杯位）程宛飲めば精神も爽快になつて仲々効のあるものなれど、之を薬店に求むれば、即座に製したる物を賣るのみならず、その白葡萄酒が十中八九まで贋物であるから、之を用ゐれば便秘或は下痢を起す所の害物となる、實に日本商人の不道德は、惡みても餘りありと謂はねばならぬ

百弗聖酒食後／＼に一杯を
飮めば病の玉帚かな。

偖右にて劇薬ならぬ即ち通常薬の範圍内で、著名な健胃剤を述べたから、今是等の處方を擧げて今回の終りとしておかう。

△含糖百弗聖　三、〇　マルチ子　〇、三
乳糖　適宜　右分三包一日三回食後一包

△パンクレアチン　一、〇　含糖百弗聖　三、〇
乳糖　適宜　右分三包一日三回食後一包

△重曹　三、〇　苦味丁幾　二、〇
單舍　八、〇　水　一〇〇、〇
右一日三回分服

△含糖百弗聖　三、〇　稀鹽酸　一、〇
單舍　八、〇　水　一〇〇、〇
右一日三回食前（三十分）分服

△重曹　三、〇　含糖百弗聖　三、〇
白糖　適宜　右分三包一日三回食後一包

△稀鹽酸　二、〇　單舍　一〇、〇
水　二〇〇、〇　右一日數回適宜に分服

△苦味丁幾　二、〇　含糖百弗聖　三、〇
稀鹽酸　一、〇　單舍　八、〇
水　一〇〇、〇　右一日三回食前分服

但し甲乙の薬を伍用する事はなさらぬが宜い。

▲衛生顧問▼

(問)毛を柔かにする方法を教へ玉はりたし（甲斐の硬毛女）
(答)前の十ヶ條を守られなば柔らかに且つ光澤を生じます。
(問)先生が嘗て顏の話ノ下に述べられたる毛生薬を塗けて見ようと思ひますが、幾月程試めせばその効力が知れませうか。（筑紫二郎の沿岸女）
(答)一日二回、半年續けて御覽なさい。但し今回書いたる(4)(5)を朝夕交代に塗れば倘宜いけれど。
(問)コスメチックを附ければ髮の色が黃くなつて、其上濃くなると申された人がありますが、本當で御座いませうか。（京橋區の新榮屋勝女）
(答)これは西洋から流行して來たもので、西洋人の目的には適ひますが、日本人が塗ければ沒食子酸といふ藥が混じてゐるために、毛を赤くいたします、濃くなるとは間接の間接でありませう、近頃日本製が出來てこれには沒食子酸が含んでゐぬとのことであります。
(問)五十歳以上になつて毛髮の禿げ且つ白くなるは、治し樣の無いものでせうか如何、若又果して無いものとすれば染める藥など教へ玉はれ。（西京の五十二歳婦）
(答)然り治し樣はありませぬ。染藥は硝酸銀二瓦、炭酸安母尼亞三瓦、緩和軟膏五十瓦の三品よく混せて塗ければ殆んど自然の色に近い黑さを呈します。但し皮膚に着いても黑くなりますから、過つて着いたら、鹽水で洗ひ落すが宜し。

（月經に就いて）

(問)月經閉止の原因を御聞かせ下され、時々不順になつて困ります。（兵庫の不順女）
(答)月經閉止に持久性と一時性とあり。貴女のは一時性であるから、その原因を申しませう、即ち生理的においては姙娠及び乳汁の出てゐる中は閉止するものである、この原因を除くの外は大抵病氣である、例へば胃病、子宮病、結核或は窒扶斯後などの如し、又病氣といふ程で無くても滋養物不足等で營養の不足する者にもある。又精神感動に依て一時の閉止を來すこともあり。例へば劇しき驚き或は悲哀なる事に出逢ひ、月經中なるにも拘らず突然の閉止を見ることさへあるやうなものである。又、非常に姙娠を忌み畏るゝ時は爲に經閉を見ることがある。又之と反對に子が欲しい〱と神佛にまで祈願をかけて寢ても覺めてもおもつてゐる結果、擬姙娠とて、殆んど姙娠のごとき經過を取り、

月經閉止を來すこともある、この二例には面白い話もあれど長ければ略す。又換替性月經とて鼻粘膜、胃、痔疾或は創口などより出血のある時だけ月經の閉止を見、然らざる時は規則正しくあるのがある、これは、その出血が月經を代償するのであります、貴方のは右述べたる中で何れに當嵌りますか、兎に角その原因に依つて治療せられたいものである。

(問)月經不順なる者の養生法及び療法を敎へて戴きたし。(大江山の女)

(答)病氣なれば第一に治さねばならぬ事は言ふまでも無く、その他營養を佳くするやうに滋養食品を取り、麥酒又は良好の葡萄酒を飲み、適度の運動、海水浴、冷水摩擦新鮮なる空氣の呼吸及び日光に觸るゝことなどを怠つてはならぬ、貧血性の人にあつては右攝生法の外に、

還元鐵　〇、三　鹽酸規尼涅　〇、一　甘草末適宜

右六丸となし、一日三回食後二丸宛

などの鐵劑を服むことも必要である。通經藥としては、

余は屢々述べたり、

日本局法の蘆薈莉刺巴丸を朝夕二丸宛、又は余の創製にかゝるクキーン(本郷區森川町一番地順天堂藥舗發賣)も、ヘステリ性の閉血者には殊に功があると信じてゐる。

(問)月經中の養生方を問ふ。(備中の初川花枝)

(答)第一は淸潔である、然るに世人は月經中は仕方が無いなどゝ、止むを待つて淸潔にする者が多い、けれどこれは大いなる心得違でこれが外陰部の病に罹ることがある、然らば何うして淸潔にすれば宜いかといふに、毎日五六回微温湯にて外陰部を洗ひ、膣中には棉花を塡め月經帶を着くべき事は言ふまでも無い、但し温湯の膣中に入らぬやうにすべし、況んや月經時に入湯するが如きは、言語に絶えたることである。第二は安靜である、婦人と雖も鐵亞鈴、体操、騎馬、競走乃至は挽弓柔術などの運動を行らねばならぬけれど、月經時は嚴重に之を止めて徜徉散歩位にしておくが宜い。第三は精神を愉快に有たねばならぬことは言ふまでも無い。第四に食物は平常と敢て異る程で無くとも、可成は淡泊としたる滋養品を取るが宜い。第五は感冒に罹らぬやう注意するが肝要である、經時の感冒からして白血長血の如き重い病を誘ふことがある。



奈良朝の政治的婦人

井上秋劍

軍隊的婦人の意氣永く銷沈して、流石の日本婦人も漸く繊弱に成り行き、かてゝ加へて欽明敏達の朝、佛法朝鮮より渡來し、金光莊嚴の神像は衆をして恭敬の念を發せしめ、諸行無常の鐘の聲は人をして物の哀を感せしむ、感情に鋭敏なる婦人の之に化せられ易きは自然の理、擐甲乘馬の血腥き振舞は思も依らず、且つ文明の程度も自然に發達して漸く翠帳紅閨の人と爲るに至れり、我國最初の女皇推古天皇、皇極天皇は此間に位に即き玉ふ、憲法十七條の起草せらるゝあり、大化の革新の行はるゝあり、近江朝に次いで奈良朝と爲る、文物典章大に開け、金碧樓臺、龍鳳麒麟、平城の京都は今を盛りの春の花、匂こぼるゝそれならで、神功皇后以來暫らく鋒鋩を斂め、餘勇を正妻として他の婢妾を抑制し、併せて其夫婿を苦しむるに漏らし居たる日本婦人は、忽如として其優婉にして而も猛烈なる本性を顯はし來れり、上古の婦人が軍隊的に發揮したるものを移して政治的に發揮し來れり、奈良朝七代五十年間の政治は、殆んど婦人の手に於て左右せられたりといふも過言にあらざるなり、持統天皇は天武天

皇の雌伏時代に少なからざる內助を與へ玉ひ、壬申亂平ぎて天武即位の後は賢明なる皇后として天下に臨み天武崩御の後則ち大統を承けて天子と爲り、治世最も和平僅かに大津皇子の亂有りしのみ、文武位を嗣ぎて世を早うし、代て大統を承け玉ひしは實に奈良朝最初の天子元明天皇にして、是亦た、賢明なる女帝におはしき、之に繼ぎ玉ふは元明の姪、文武の姉なる元正天皇にして、天下倍々太平に、國家富み皇室榮う、其次は聖武天皇、男帝にして女帝には在まさゞるも、之に配させ給ふ皇后藤原氏は、有名なる光明皇后にして、篤く佛法を信じ、弘く王法を布く、東西大寺を帝京に建立し、大廬舍那佛を鑄させ、六十六州の國府に國分寺を建立し、政敎一致の制を以て天下を治め玉ひし天皇の御治世は一に皇后御輔翼の功與つて力あらせられしと傳へ聞く、孝謙天皇は申すもおろか女帝にして、淳仁天皇は女帝におはせられざりしも、實柄は孝謙上皇の御手に在り、且つ廢帝とならせ玉ひて後は孝謙再び祚を踐み玉ひぬ、弓削道鏡の一大事件は長へに靑史に在り、必ずしも賀すべき御時世にはあらざりしも、愛憎寵否御心の儘に振舞ひ玉ひしに見れば、其凡々の君主には在らせられず、才智かしこき女帝におはせしことも知らるゝなり、生殺與奪の大權は渾て其纖細なる美しき御手に握らせ玉ひ、さしも名臣の少なからざりし朝廷に其愛寵する一僧侶をしてかく迄羽翼を伸ばしむる事をさへ、敢て憚らず心の儘に振舞ひ玉ひしに拘はらず、道鏡禪位の事起れば殊に女にては事を誤ることもやと、硬直の聞こえある淸麿を宇佐に使はし玉ひしなど、自づから其叡慮の程も押し測らるれ、されば其御一代に就ては、後世史家をして左右の評を試みしむる餘地ありとは云へ、其果斷勇決、國家的經營の局に當り敢て窘迫の痕なき點に於て、光明皇后、孝謙天皇は慥かに奈良朝、女性の二明星を以て目す可し讀者或は吾人が堅白同異の言を爲すかを疑はん、乞ふ去て國史を繙き之を精讀せよ、必ずや思半に過ぐるものあらん、而して尙ほ歷史上の日本婦人を硏究せんとする者の特に注意を拂ふ可きは、奈良朝が上に斯多くの

女王を戴くと同時に、下に勢力ある女大臣、黒幕宰相ありしことゝなり、女大臣とは誰ぞ、黒幕宰相とは誰ぞ、贈正一位縣犬養橘宿禰三千代。

大宰相の夫人

竹軒生

世界の大舞臺に立ちて、思ふ存分活躍したる大偉人彼の鐵血宰相ビスマークの赫々たる名聲、煌々たる偉跡は、種々なる方面より世に傳へられたるも、その半面たる家庭の内情に至りては、世多く之を傳ふるものなし、されど彼れが如く思ふ存分活動し得たるは、彼をして内顧の憂なからしめ、時に心神を慰安せしめたる内助の功與つて尠なからざりしに職として由らずんばあるべからず、之を以て余はビ公の家庭を記述し、彼の隠れたる半面を紹介せんと欲す。



ビスマーク夫人、名をヨハンナ、プットカーメルと云ひ緑眼黒髪敢て美と稱すべき際にはならねども温乎たる容貌の中、自から凜乎として犯すべからざるの風丰を備へ、而かも音樂に於ては獨特の妙技を有てりき。

ヨハンナの少時、親友にヴァイオリンを能くするものあり、二人は時々相携へて伯林の某音樂堂に遊び、合奏を試むるを以て唯一の樂とせり、ビスマークまた其嚴乎たる容貌には似ず、一種美妙の性情を有する人とて、餘暇ある毎には必ず此音樂堂に遊ぶを常とせり、或る日のこと、此二人の音樂手は、ビスマークと相知り、ビ公の爲に

ビートーベンのソナタを演じたるに、ビ公は此兩妙手が清音妙調に聞き惚れて感嘆措く能はざりし事あり、斯くして爾來ビ公とヨハンナの二人は屢々此音樂堂に會することありて、ヨハンナはビ公の爲に奏樂するを喜び、ビ公はヨハンナの演奏を聽くを以て無上の歡樂となしければ、遂に心裡の琴線は相觸るゝに至り、而も二人の性情は音樂以外に於ても、一致する點やありけん、是れより以後六ケ月許にして、二人は終に結婚するに至れり。

ビ公は金色なせる頭髮と、口も蔽はん許に茂れる鬚髯を畜へ、尙ほ其の凜乎たる炯眼は毛深く叢生せる眉毛の下に輝き、音聲玲瓏快談縱橫人をして一見其偉人たるを思はしむると云へども、ヨハンナの彼に結婚すると聞くや、彼女の親戚友人等はビ公の人爲、尋常人に非るを知ると雖も、寧ろヨハンナの爲めに之を危みたり。

實に當年のビ公は不屈不撓の精神に滿ちながら、身は粗衣粗食に甘んじ、殊に銃獵を好んで、危きに臨んで聊かも畏るゝことなき恰も中世の騎士を見るが如く、折には飲酒喫煙深夜に及んで敢て辭せざることあるも、人は曾て彼れの醉歩蹣跚の體を見しことなし、彼れは又た讀書家にて、就中歷史を好み、又特殊の地圖を喜び、古きビユシングの地理書をさへ研究せりと云ふ。

ヨハンナ曾て謂へり。

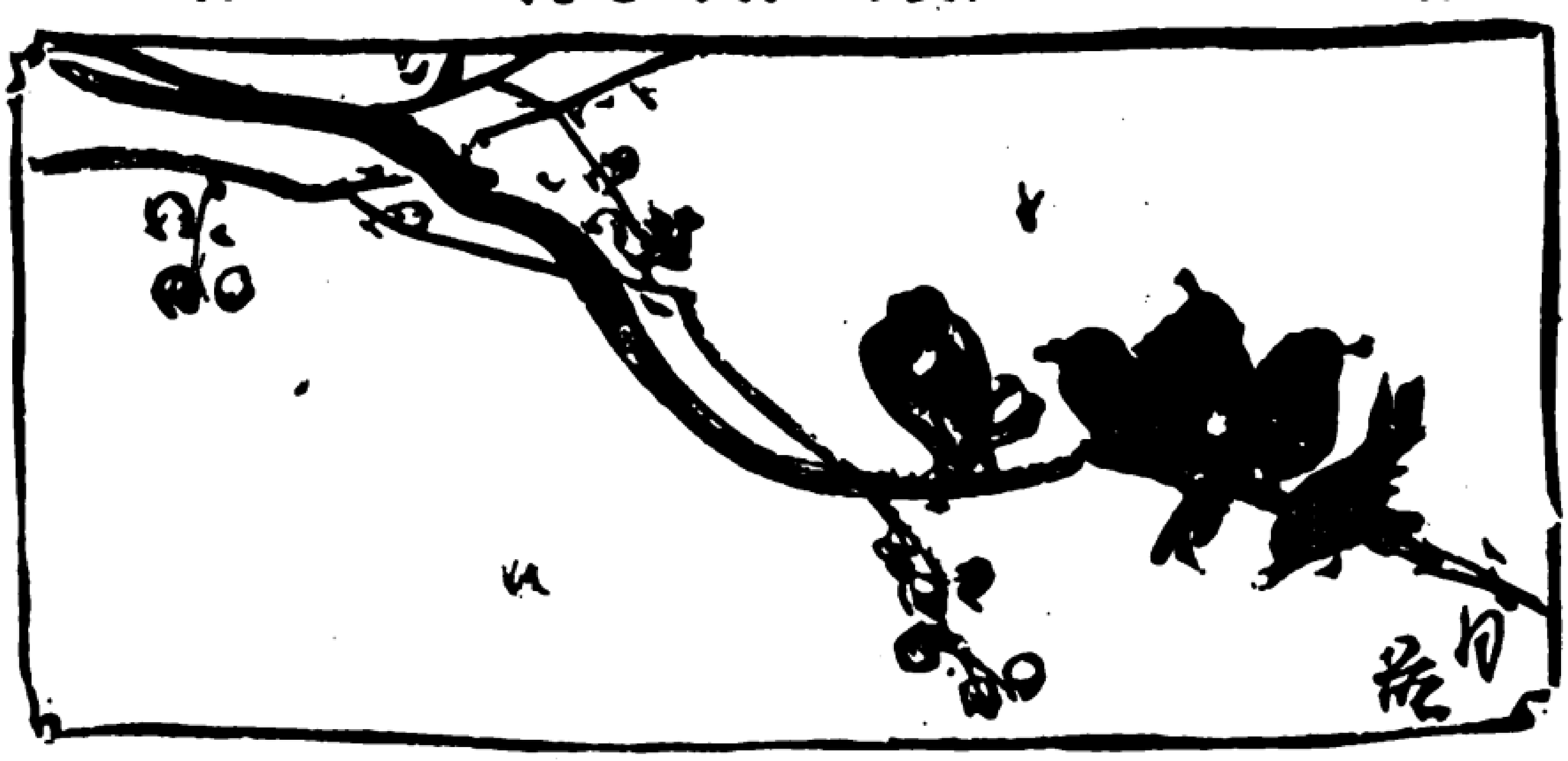
『ビスマークは今痛く其健康を害し居れり、されば我等二人は一切の俗事を棄てゝ樂しきキツシングに到らざる可からず、妾は已に此の三週日來、言ふ可からざる義務の情を以て、目下家事の整理に努力しつつあり』

と、以て如何に家庭の温かく融和せるかを見るに足らん。

ビ公の繁劇なる政局に當り、心身の疲勞を感ずるや、夫人の演奏する美妙の音樂に依りて慰められ其鬱を散ずるを常とせり、ビ公の長子ヘルバルトの生れたる時（一八四九年）夫人の母なる人亦來りて其家に在しが、

一家族團欒の席上、傍人に尋ねて曰く、愛婿の舞踏は、恰も旗手の躍るが如くに武骨なりやと、其の時座に在りたるビ公は傍より直に答へて曰く、然り、そは余が健康の爲めなり、余は連日運動に缺くる所あればなりと、以て彼の出色の半面を窺ふに足る可し。

ビ公、嘗てヨハンナに向ひ、御身は交際場裡に入りて、多くの未知者の群に立交らんよりは、寧ろ留まりて小兒等と共に、家に在るを欲するなるべし、されど若し強いて人に知らるゝを望まば、夜毎に外出せざる可からず、而して之れが爲めには、殆んど十五種の舞踏衣を備へざる可からず、實に煩しからずや、と言ひけるに、ヨハンナは之に答へて曰く、此の如きは妾の元より欲する所に非ず、只世人は名聲ある人の妻を見んと欲するの好奇心より



頻に交際を求む、然れども妾を知らんと欲する者は、宜しく此處に來るべしと、其家庭に忠實にして質素なる、此一語にて說明し得らるゝなり。

ビ公嘗て政治の難局に處し、殊に獨乙聯邦改造の擧あるに當り、有名なる鐵血政略を以て之を料理せんとするや、非難の聲内外に喧しかりき。此の當時ヨハンナ夫人が其友に送りし書簡の一節を見るに、

「妾の信頼し參らする、最愛の一人に對し、世間は如何に毒舌を以て、排擠せんといたし候も、妾に於てはわが信仰に少しも影響する所御座なく、唯彼等が言はんと欲する所を言はしめ置きて一向差支もなし、人一度偕老同穴の契を結び候へば、啻に一日一月一年而已にては無之、幾千萬年も渝ることなく、毀譽苦樂共

に全一生を貫くの覺悟あるべきものと信じ申候」

とあり、是れ實に夫人が節操の清烈なるより迸出する至誠の言といふべし。

ビ公の露國公使たりし折の事なりとか、夫人書を前と同じ友に送りて、ビ公の近狀を報じて曰く

『今や吾が夫は全くカチ、オルロウ（露國公使夫人）ならでは夜も日も明けぬ有樣にて、カチ夫人は吾が夫の爲めにビートーベンヤメニデルスゾーンを演奏致し居り候、妾にして若し些かたりとも嫉妬心を起す如き事有らば、情に驅られて惡路に迷ふべくやも知る可からず、妾の心は純潔に候へば、斯樣なる邪心の少しにても之れなきは勿論、却て妾の最愛の夫が斯る才媛を得給ひて、其爲に永く一定の地に住むことを得、且つは其健康も大に奮に復せらるゝに至りたるを喜ぶものに候」

と此言果して尋常妻女たる者の口より能く言ひ得るものならんや、蓋し夫人の如きは如何なる場合に於ても確實に熱誠に高潔に其夫を信じたるものと謂べし。

ビ公は常に難局に當りし爲め、健康を破りしこと一再ならず、其都度夫人の熱心看護と慰諭に努めたるは是又た言ふまでもなし、彼が曾て東普魯西なる友人を訪ひ、重病に陷りたる時、夫人の書に曰く

『御身にしてあらゆる政治上外交上の煩務を見棄て一家と共にシエーンハウゼンに參りて、一切の世事を離れ、そこに我等の小兒兩親及び眞の親しき心の友のみと相結ぶは、妾の大に望む所に候、幸に斯くなされ候はゞ、御身は十年前の健康に復され候はん、事請合なり、今や荒々しき外交界は、疾、癇癖、敵視、嫉妬心のみに候へば、御身の如き剛直高雅なる人には適せざるべくと信じ申候、若し御身にして妾の言を容れられ、外交界を去られたらんには、妾の滿足幸福は此上なく候然れども御身にして尊ぶべき祖國の爲に、此任に當るを御身の義務なりと信じ居らるゝならば、據所なきことに御座候』

と、其夫を知ると同時に、其夫を愛する事の深き、其熱情は自ら筆端に溢れんとす。

一千八百六十八年五月七日、コーヘン、ブリンドとて、有名なるビ公暗殺事件ありける時、公は王邸より帰宅するや、先づ其遲刻せしを詫びつ一室に入るや直ちに夫人の額に接吻し、而して卓に就き徐に口を開いて曰く『驚く勿れ、今日余は何者かの狙撃する所となりたれど、余は幸に微傷だも負はずして此處に在り』と、其後ビ公はリューゲン島に赴きて靜養したり、其間に於ける書信は公と私とに拘はらず、常に夫人が一切執筆する所なりしと、以て内助の一面を見るに足らん。

以上の如くビ公夫妻の間は常に琴瑟相和し、其の家庭は和氣靄然春の海の如く殊にビ公の夫人を遇するや、常に鄭重親切を以てし、五十年の久しき生涯に敬愛至らざるなく、金髪紅顏たりし新郎のビ公も、雪髪銀髯の老翁たりし比公も、終始一貫談話に書簡に、我が



心の語を吐露して常に渝ることなかりき、而して夫人のワルチンの別墅より又はラインフエルドの生家等より伯林に歸る度毎に、公はステッチンに夫人を出迎ふるを常とせり、又夫人も常に家庭に對しては忠實に、公に對しては、信愛從順を守り、而して十九世紀の一大偉傑をして、内顧の憂なからしめ、專ら力を國事に委ねしめ、遂に能く獨逸大帝國の鞏固なる基礎を建設なさしめたる其の功や決して尠少にあらざるなり。

▲憐む可き芬蘭土　露領芬蘭土ほど憐む可き土地はあらず其の南部は比較的に豐沃なれども大部分は荒漠不毛にして全く農業に適せず唯々花崗岩より成る傾斜地に於てのみ少量の土壤ありて植物の發育に適するに過ぎず隨て氣候も著るしく不順にて人民の嘗むる苦痛はなか〳〵想像も及ばぬ程なりされば中等以下の貧民は毎年冬期に至れば其の生活實に悲慘を極め都會に住める者を除けば彼等の大部分は秋期に燒きたる麵麭の貯藏を唯一の食糧となし鹽水を以て溶ける珈琲若くは單純なる鹽水に之を浸して食するなり若し夫れ副食物若くは砂糖水の如きは到底彼等の口に入る可くもあらず而して少量にても牛乳を飲み若くは羊肉を食する者あらば开は實に芬蘭土に於ける資産家の部に屬するなりと

評論

强い女の話

同情翁

八月中に萬朝報の紙上に、和歌山市の磯谷某といふ名譽の戰死を遂げた大尉の妻阿房といふ婦人が、幼ない一子と一女を遺して自宅で縊死したといふ事が出て居た。何と氣の毒な事ではあるまいか。婦人といふものは極々弱いものである。先頃尾崎東京市長が、東洋婦人會の席で、時局婦人觀といふ題で、演說された中に、市長自身、電車内で乘合せた、夫や子に別るゝ爲に上京した、地方の婦人たちが、全で芝居で見る楠正行の母同樣であつた。此母此妻あつて始めて夫たり子たるものが潔よく戰死を遂げることが出來るといふことを話されたさうであるが、婦人が電車内や汽車内で、公衆の面前で言ふ事や爲る事と、自分の宅で言ふことや爲ることとは、全で正反對である。公衆の面前では强さうなことを言つて、宅に歸ると落膽して泣き崩れるのが、女の習である。其の公衆の面前で强さうな言を云ふのが、旣う其の弱い證據である。場合に支配されて思ふ事が言へないで、思はない事をいふからである。寧ろ公衆の前で、思ひきり聲を立てゝ泣く婦人があつたら、其れこそ本當に强いといふものだ。離別を泣きに來たからである。思ひきり離別を泣いて置けば、宅に歸つても心が安くなるのであるのに、公衆の前で泣に來て笑つて歸るから、宅に歸つて泣き崩れるのだ。この阿房婦人の如きも、公衆の面前で夫を見送るときには、强い言を云つて別れたのだらうけれど、宅に歸つて悲しくなり、やがて夫の戰死を聞いて、ふ兒は弱いし、賴りはなくなるし、落膽して此の最期に及んだものとしか思はれぬ。

婦人は斯樣も弱いものである。この弱い婦人を强くするには賴るものが必要である。これほど明かな道理はない。彼の阿房婦人でも然うである。天性どれほど

弱くても、夫がある間は夫を頼つて居るから死ない、夫が亡くなつてから死んだのである。して見ると婦人には頼るものが大事であるが、人間では可ない、人間は死ぬるから頼にならない。死ないものでなければならぬ。死ないものは何であるか。神である。神より外に本當に頼りになるものはないのだ。然れば婦人に取つて肝心な事は、神を信ずるに如くはない。或は又然樣婦人が强くならんでも可ではないかと言ふ人があるかも知らぬ。實に心得違である。勿論是迄は其で可かつた。然し旣に一たび露西亞と斯う戰端を啓いた以上は、是から始中終戰爭が起る者と見なければならぬ。すると男子の敎育ばかりが、軍國的であるのでなく、女子の其も亦た軍國的でなければならぬ。女子の軍國的敎育とは何樣いふのか、弱い女子を强く爲して、强い子を生ませ、愈强くこれを育てゝ、國家に貢献さす事である。何樣して弱い女子を强くするのか。だから女子には神を信ずるのが必要だと言ふのである。

弱い婦人の話

元氣翁

▲婦人の天稟。弱いのは婦人の性だと曰へば其迄ですが、實に婦人の弱いのほど困つたものはないのです。一家に於ても精神の强い妻を有つたのと、弱いのを有たのでは、大層な幸不幸があります。況て一國として我が日本の如く、新に世界の公道に踏み出して、人道扶植の大任を享けた國家にあつては、いざと言へば戰爭をせねばなりません。ですから婦人たるものは苟にも『妾は女である』と云ふ自覺が起つたが最後、國の爲に强い軍人を生むといふ考がなくてはなりませんし、又軍人の妻たる者は善く良人を勵まして名節を磨かせ、必要なる場合には貴重な生命をも國家に惜まず獻げさする心構なくてはならず。又其未亡人としては、能く良人の戰死の光譽を荷い、代つて遺子を敎育して亡き父に繼ぐところの日本帝國の勇敢なる軍人とせねばなりません。然もないと日本帝國の光榮も生命

もパッタリと消滅して了ふのであります。斯う考へて御覧なさい、現在わが大日本帝國が、貴女がた婦人の肩に何の位倚頼して居るかと曰ふ事がお分りなさる理と思ひます。乃で翁は今の年若い婦人たちが、何様か心强く生立て、髯ある男子を凌ぐやうな女丈夫、神功皇后や巴御前の様な勇婦になつて戴きたい。然様して國を强めて戴きたい。斯う申すと强いのは分つてるが、弱い婦つて何様なだらうと仰しやるでせう。いで是から翁が其の弱い婦人を並べて御目にかけますから、何卒か貴女がたの生涯の旅に、此様な弱い婦人の道を何様か避けて通つて戴きたいです。

▲常盤御前、第一は貴女方が好く御伽噺で御承知でお出なさる、前に申した巴御前からも連想されます常盤御前、日本第一の名將であります、源義經の母御であります。さて此の常盤といふ方は何様な男を良人に持つてあつたと申すと、實に當時の名家も名家源氏の嫡流、院軍の元帥、左馬頭義朝、爵位は何様であるか知れませんが、軍人として位置から申せば、今の大山大將や山縣大將の位置であります。義朝敗軍に及んだので、常盤は三子今若、乙若、牛若を携へて、大和龍の里に匿れてあつたのです。然るに平清盛が其母なる人を收へたので自から出て六波羅に參りまして、其身を以て一母三子に代らんことを請ひました。淸盛常盤の容色を悦び、其を納れて母と三子を赦しました。是れは常盤の苦節として大凡日本國民たるものゝ感せざるを得ない所です。然るにものゝ書を御覧なさい、是の後常盤寵衰へ出でゝ人に嫁すとあります。人とは大藏卿藤原長成であります。情ないではありませんか、鬼神をも泣かせた前の苦節も、此失節で水泡に歸し了つたのです。是れが果して源氏の嫡流、院軍の元帥、大山大將や山縣大將の位置に立てる人の奥方に適はしき行爲でせうか。忠孝節義で有名な信夫恕軒先生の如き、躍起となつて其を責めて、前に淸盛に嫁したのは道理だが、後に出でゝ人に嫁すとは抑も何の爲に嫁するやといふのです。御尤千萬です。何故常盤御前は獨身を守つて、助かつた三兒の生長を待つ事が出來なか

つたでせうか。外ではないです、是が是の婦人の精神が弱いからです。さて其次は

▲さまりやの婦。これは新約全書の中に見えてる一婦人です。是の婦は追つけ五人の男を持つて、六人目の男には其の隠し妻となつてるのです。考ても御覧なさい、一人の婦で五人も男が替つたら、既う大概なものは我身の不幸不運を観して男を思ひ断つのですのを、猶ほ懲りずまに悲しともなく愧しともなく、男を求めて其の隠し妻ともならねばならぬといふものは何故でせう弱いからです。

▲阿房婦人。常盤御前は三兒が僧になされたので之を育てたつて出世の望はなし。さまりやの婦とやらは子がないから頼るものがないので、諸ともに巳むを得ず男に頼る氣になつたんだらうと仰しやるでせう。其處で此の阿房婦人の物語をするのです。阿房婦人とは和歌山市の軍人磯谷大尉(名を忘れました)の妻なるもので、夫婦の間に七歳の女兒と五歳の男兒があるのです。然るに良人大尉が今回の戰爭に從軍して、名譽の戰死を遂げたので落膽して下賜金五百圓の中、三百圓を男子に、二百圓を女子に分配して我が親里で育てゝ貰いたいと遺言して、自分は自宅で首を縊つて死んぢやつたんです。良夫の戰死の名譽を荷つて、其子女を天晴良夫の後繼として育て上ぐることは置て。ですから如何に子供が有りましても、弱い婦人はこの阿房婦人の如く、子供を置て死で了ふから詰らないです。今一つ同じ例で、

▲『先夫人。』是れは小説の話、(文藝倶樂部第十一卷第十二號鈴木秋子作)ですが、斯ういふ哀な話があります。(哀つぽいのは小説の性ですが。)沖津文學博士の先夫人名は八百江、博士が博士となる前に彼女と幼兒を彼女の母に托したのです、其理由は自分が博士號を得たいので、是から一生懸命に勉强するのに、宅に彼等が居ては邪魔であるからと言ふのですが、實は離縁の緒なんで沖津其人の愛は疾に他の女に移つて居ました。其を八百江の母は初より看破いて居たのですが、當人は良夫の初の愛が身に染みてるので、毫も心づか

ないでした。母が屢々沖津の冷遇と冷情とを比較して說明して斷念せよと勸めても、信じなかつたです。終に媒人玉崎なる者より沖津が彼女を離つて他の女を迎ふることを告げ來しました。八百江は忽ち取逆上せて眼前にでも居る樣に沖津に對して怨を述べて乍ち倒れました。餘程氣の小い婦人です。是までも既に思の爲に痩せ細つて居たのですが、遂に其夜から病を成しました。『母樣はあんなに仰るけれど、まさかと思つて、私しはまた來年にもなつたら博士の家內と云はれる樣になるだらうと』思つて居ましたと、盡きせぬ怨を繰廻して遂に肺結核となりました。斯かる際にも是のみは夫の形見と、先夫と談判の上幼兒を請ひ得て、片時も離さず胸に懷きて眠るのでした。彼女は此幼兒に就ては『私は嬢やがあるから生きてゐられます』と、沖津から使に來た書生に言傳しようと思つたほどでありましたのに、今は離婚の絕望の爲に徐々と消えゆき、沖津が文學博士の學位を得て、新聞雜誌に歌はるゝ頃には、疾うに此の世を去つてゐたです。心の弱い婦人には、玉より貴とい子寶も其生命の爲に無益なのです。

▲なにがしが母。同じ弱いといふ中にも、言ふにも憂いのがあります。即ち生みの子を置て餘所に緣づく母親なのです翁が知つたなにがしなる人の母の如き、利巧發明な子を持ちながら、良人が亡くなつたので其子を置て他に嫁づいたのです。長い月日の經て後、夫と不和になつて離別されたので今度は愈獨立獨身で暮さねばならぬ塲合となつたんです。其頃なにがしは立派に一人前の男となり、相應の收入も有つて、妻を有ち子を擧げて、幸福に暮して居たものです。然るに此の故の母なる、婦人が生活しかねては無心に來る、借金をしては其拂を負はする處々方々から質草を引出しては受方を命ずるので無愧やなにがしの家政は一時の內に紊亂を極め、心外なる負債の下に沈吟しはじめ、家內は每々離緣を請求するなど、見るも哀れな狀態に陷つて今も猶ほ其の狀態に居るのです。而してなにがしは斯く母親なりし婦人の爲に、苦しい義務(でせうか)を盡しながらも、朋友に向ひて、冷酷に其の母は(猶

ほ母と曰つて居る）を人非人と罵つて居るのです。何と淺ましい母子の中ではありますまいか。婦人の我儘も斯に至つて極まるとでも言べきでせう。此の同じ類で他の一例を語りませう。

▲阿蘭夫人　是も亦小說の話（文藝倶樂部同上內山捻華氏の銃音）です。其の會話中の一節を藉りて此人の履歷を云ふと斯うです『一昔前の噺だ、いまの奥方、むかしのお蘭さんが草津で左褄、顏と腕で利かして居た頃、關係つたのがフランクてえ亞米利加人、貴方別嬪何でもオーライ直ぐ落籍せたやつだ。お蘭さんは死んだ亭主の一粒種、お衣を連子で、長火鉢の向へ丸髷できちんとした圍者美しいつたら無かつたんだ。少頤するてえと其の異人が弗相場で手を燒て二年か三年の中身代丸つぶして夜逝も同然女房を放棄て唐三界へ隨德寺さ。佐用媛なら石に化ける處だが容色が佳けりや人樣が放やつちや置ねえ……其處で今の旦那樣江戸の麴町の華族樣だ幸福よ、妊娠を隱してお妾、直ぐと病氣を託に湯治へ來て竊と生落したのがあの雜種兒、直ぐ親不知で里へやつたといふ來歷だ。』而して彼女の生みし姉弟に就て曰はゞ『だから姉弟でも姉はきちやうめんの日本人、こいつが柔順で弟を可愛がるつたら無かつた。弟野郎は小兒の時から雜種兒で仲間外れ、さんざつぱら朋友に弄られた僻んだ根性、三兒の中から魂が据つて臍曲の胴性骨。……其でも姉にや孝行もんだせ、肺病で死にかゝつて居るやつを獨で一生懸命うぬが軀を忘れて介抱だ。これ許は腕白に出來過た藝當さ。大事にされた恩返し親二人前孝行するんだつて、慘らしいぢやねえか、豕小舍のやうな家を借りて同胞二人、他の世話にもならず、冬季獵で稼だ金で、一年中通さうといふ、十二や三で豪しい威勢なんだ』といふのです。其で母子の間柄は何樣かと申すと、母親は此地に別莊を建てゝ外ながら同胞の看護をして居る積ですが、子等は中々承知しない。姉が病床で母に一目逢たいと云ふと弟は怒つて『べらぼうめ、うぬが儀鬼の世話も能ねえで、夫人も無えもんだ。此方は捨られた日から爺も母も居ねえ心で斷念て お前と二人で

暮さうつて、鐵砲を打や獲物もある、不自由の無え暮だ。それにお前あんな薄情な人非人を第一親なんて思ふから迷ふんだぜ」と言つて、猶ほ飽足らないで、母を呼んで畜生と言てるのです、其も無理とは言へないでせう。ある朝娘が一目逢たいと曰ふのを聞たお蘭が、山路の雪を踏分けて村に下らうとして方向に迷つて居ると、轟然一發、あはやお蘭は桂太郎が山鳥を射彈丸に中つて斃れたのです。二人の子どもを打棄て自分一人美い夢を見て居た母親への天罰かも知れないです。

▲丁抹の女皇　是は有名なセキスピアの劇詩「ハムレツト」に現はされた丁抹の皇太子ハムレツトの母君なんです。其の身は既に五十の齢を超へた老媼で、賢明の聞ある皇太子其人の頼るべきがあるにも拘らず、竊に己が夫王を弑して其の王位を奪つた王弟クロヂヤスと夫王の死後一ケ月も立つか立たずに結婚したのです。ハムレツトの慨歎は何樣であつたか、實に痛切を極めて居るです、「想へば淺ましき世の成行、父王崩御ありて只二月になるやならず、さばかり英邁の君に在しゝを、彼を此に比ぶれば、日神アポロに牧神セイターを並べし如し。母后とは暴き風にも當させ給はぬ御優しさ。あはれ想起すも涙の種忘れもせず母君には犇とばかりに父君に縋らせ給ひ、いとしさ責めて離れがたなき御風情なりしこともあまたゞび、それに一月經つや經たずいや思ふまい思ふまい脆いと云ふ字は女と訓むかや。おゝ一月經つや經たず、ニオベの像もかくやとばかり涙を流し父君が柩に侍したりし其時の履の土も乾かぬ間に、あはれあの母君には――おゝ非理非情の獸類だも、さばかり早く夫は忘しぞ。何ぞや二度の夫定め早きにも事にこそよれ、不義の快樂を急がせたまふ御敏捷さを何とか言はむ」と宜なる哉言や後ハムレツトを毒殺せんと、王が竊かに杯の中に毒を盛つた酒を飲んで死なれたのです。

▲弱い婦人とは　此樣なものです。何卒か我が敬愛する年若き婦人たち、此の例を御覽なすつて、是非强い女となつて一國を助け、一家を立て、一身を保ちて戴きたいです。

女學生問題

倭翁

△女子敎育　女學生風紀問題に付て、敎育當事者即ち女學校々長或は女學校先生などの觀察が面白し、試に頃日新聞紙上に顯はれたるその一斑を紹介せん。

△某は曰く、女學生の風紀頽廢は是れまで閉鎖されたる我が國家庭内の暴露せられたるものなれば、學校を責むるより先づ家庭を責めざる可からず。彼の風紀を紊せる女學生の系統は家庭の如何に關せり。香しからざる家庭に生育せしものは箱入娘にても蝕し易し、而して現今家庭の狀態の不十分なるは畢竟敎育の不足より來れるなり。是れ女子敎育の最も必要を感ずる所にして高等敎育は男性の專有物にあらず。又男女學生の墮落に付ては寧ろ男生の方を取締るべき要あり此邊特に監督者に多大の注意を求めざるべからず、寄宿舍は家庭に比して幾分監督の行屆ける方なれども、乾燥無味にして不品行者なきかはりにヌレツカラシとなり易し、情味ある家庭の薫陶には到底及び難しと、

△某は曰く、女子敎育は未だ過渡時代にて研究中にあり、先づ校訓にて生徒の服膺すべき理想の標準を定め各年級に配當して順序的に訓戒し、生徒心得、敬禮規程を作りて實地に示し、保證人心得を作りて學校と氣脈を通じ可成的形式に流れざるやう監督し、その風紀に關しては日々修身講話にて訓戒し、男女交際は必要を認むれども、兎角危きに近よらざるを良とし、可成丈け接近せしめざるやう監督し、生徒心得の歌、或は徽章の歌などの唱歌を以て精神敎育を爲しつゝあるも、往々醜聞を耳にするに至つては遺憾のとなりと、

△某は曰く、女學生の墮落は女子敎育の隆盛に伴ふ弊害なり、豫防せざるときは將來の進步を頓挫せしむる恐れありと。

△某は曰く　元來父兄の中には女子を遊學させる本旨を誤れるもの少からず。學校に入るゝは身體を健康にし且つ德性を養ふにあらずして、只他へ嫁せしむる一の資格を作ると云ふ考にて、校門さへ潜ぐれば可なり

と思意せるゆゑに、此等の點が女學生風紀に大影響を來せるなりと。而して其地方に在ては未だ甚しき保守的にして婦人に對しては手も足も出さしめざる風習なるを以て、女子はその壓迫の下に柔順なれば總て突飛なる弊はあらず。故に某は之を引伸ばす方針にて、即ち時世の潮流に後れを取らざる樣、新思想の注入を怠らざるなりと。

△某は曰く　女子教育の家庭に遠かれるは、事實にして之を接近せしむるの必要あり、學校卒業期一ケ年間は通學生を學校内に預り、教師をして家族的生活をなさしめたく思ふなり、我校にありてはその弊害あるを恐れて初年の學生には殊に賢母良妻を說かず、卒業期近くに及びて三人五人づゝ手元に呼寄せて、校長自ら婚嫁の心得、夫に事ふる道、舅姑に事ふる道等を訓戒しつゝあり、而して不良なる學生の出づるは多く家庭に原因すれば近來家庭調查の必要を認め、住所、家族職業、學歷、身體の現狀、生出後の發育、學生の仕事保證人と生徒との關係等の欄を設けて、臺帳の製作中なりと。

△某は曰く　女學生の風紀問題は困難中の困難なり、家庭の狀態によりて種々なる關係を有す、到底短時間の學校訓練にてその完全を期す能はず、抑も女子教育は初期に在て既に過たり、即ち土地の人情風俗如何を顧みず專ら上流社會の華奢なる風儀を注入したればさなきだに虛榮を好む婦女子は相胥て浮華に流れ遂に風紀問題を惹起するに至れり。近年大に注意する所ありて、實用的に着實を主とせる方針を採れるも、尙ほ過渡時代の混沌たる狀態を免れずと、

△某は曰く　女學生の墮落は意志の薄弱なるに因りて誘惑に抵抗する能はざるに由る、今日の教育は意志を鞏固ならしむるを要す。而して他方に於て監督を嚴にしてその誘惑に接近する機會を與へざるにあり。此等は家庭と相竢つべきものなるに、家庭は頓と此邊に意を用ゐるもの少し、某の如きは卒業後同窓會を設けて如何しき行爲あるものは直に報告せしめつゝあるを以て、相當の勸告書を贈りて注意を與ふるなり、斯くて

自然團體の制裁を藉りて幾分風紀の維持に資すと。

△某は曰く　女子師範生は體格檢査を嚴重にして所謂衞生的美人を採用するに據り醜面のもの多く、且つ常に筒袖の荒き竪縞木綿服を着用せしめつゝあり。爲に或はその餘りなりとの注意を受けたる程なれば、風紀取締上安心なるものなり。最も男女同構內に居住すれども寄宿舍は全然別棟にして相互に離間見得ざらしむれば間違の出來やうなし、兎角女敎師は緣遠し、是れ女敎師の結婚を希望せざるに非ざるも、娶り人が鮮きに依る一の研究問題なるべし、學生の風儀の不良なるは事實なるが、是れ一般社會の淫靡的に墮落せるを以て誘惑せらるゝが多し、女子の男子らしくなれるも事實なれどもより多く男子の女子らしくなりて、その挑發に依りて女子が墮落せしめらるゝなり、世間に此等の媒介を業となすものあり先づ此徒より制裁を加へずんば到底駄目なり、併しながら女子師範生は如上の理由ありて全然風紀問題以外なりと。

△如上の衆說を綜合すれば女子敎育は今尚は過渡時代にあり、多少の弊害あるは敎育隆盛に伴へる影響にして、女學生の墮落は家庭の不良に原因すと云ふに一致せるものゝ如し、而して對女子敎育問題は當時猶研究中に屬すと云ふに外ならず。

△抑も過渡時代てふ言葉は實に不得要領にして、曾て政界にありても斯る語の提唱されしとあり、其他にも亦屢々用ゐられたる常套語なり、萬林枯凋せる嚴冬の光景を以て、百花爛熳たる盛春の光景に對し來らば此間劃然たる過渡時期の存在せるものあるやの感なきにしも非ずと雖も、素と春冬の間何等巨溝のあるに非ずとも、唯刻一刻移暑し來つて肅殺だる冬景はいつしか駘蕩たる春景を描出するに至れるなり、即ち一陽來復せば積雪の下早く既に春信の傳ふるありて所謂る陽氣發する所金石亦透るもの是れなり。さればその進歩にまれ、退歩にまれ、苟も死定固着せざらん限りは、何れの時か是れ過渡時代ならざるべき、若し强て我が女子敎育に於ける過渡時代を求めなば、明治初年今の大山捨松夫人、津田梅子女史等が初めて海外留學の擧

ありし時ならめ。今日女子敎育の盛況は大渠既になりて奔水瀉倒せるものならずや、然るを今尚ほ過渡時代に藉口して彷徨へる醜體を糊塗せる如きは女子敎育者として偶々その無定見なるを自白せるものにあらずして何ぞや。

△所謂女學生の墮落とは何ぞ、廉恥心の痲痺なる消滅なり、靈性的人間界より禽獸界に墮落せる謂ひなり、無敎育ならば或は廉恥の何物たることを解せずして敢て耻辱的行爲(墮落)を爲すことあらんも、是れ古人の云へる如く敎へなきものは禽獸に近しに外ならざれば寧ろ憫を加ふべきものなれども、その敎育あるが故に殊に常識を缺き廉耻心なしと云ふに至ては吾人之を何とか云はん、學校敎育を以て家庭の改良を期したりしは往年敎育者の空想なりしが、空想なりしと雖も其意氣たる大いに壯とするに足る。今や之に反して自己が敎弟の不謹愼を擧げて家庭の不良に歸す、即はち學生墮落の罪を家庭に嫁するに至ては無責任も亦甚しからずや、吾人は斯る言動を陋とし劣とし、免れて愧なきものと云ふも敢て過言ならざるべきを信ず。

△某事務官曰く、學生風紀問題は男生自ら墮落の結果純然たる犯罪行爲をなすものと、他は男女學生間に渉る情事行爲なり、既往の事實に徵せば强ち退校又は放校處分を受けたるもの許りに非ず。在學生にも往々あり、斯る場合に、學校へ照會して見ると悉く在校生に非ずと刎付らるゝを常とす。校名を毀損せざる樣との主旨は諒とすべきも悉く是れ僞稱者なるを如何せん、强て隱匿せざらんことを希ふと、當事者たるもの自ら省みてやましからざれば幸なり。

△偖々女學校の內容を見るに數學を課し、理科を課し地理歷史を課す、男子と何等撰ぶ所なし。手工を敎へ裁縫を授く、是れ女性的技藝の一部にして、彼の遊藝師匠の稽古所、裁縫師の職場と何の徑庭の是れあらん女子文學として源氏物語、伊勢物語等を講じ、てにをはを說く、爲に一知半解の和文法は侍べる、けりなど嫋體作文を綴りて世の物笑となり、且つ軟文學の講釋に女子の品性を傷害するに至る、而も斯くて養成する

所は賢母なり良妻なりと、古來生れて女性たるもの誰か妻たり母たらざるものかある、不具者尙ほ且つ財あるものは持參し、技あるものはその技を磋きて以て配者を求む、而して官も亦不具者を配とせるものには公役を免じて之を奬めたり、その女性にして嫁せざるものあるは今日に始る、所謂敎育ありて空想を追隨せる女性に始まる。

△夫を持たば自ら妻の爲すべき事を行ひ、夫婦の間に兒を擧ぐれば又自ら母の爲すべき事を覺ゆ、母たり妻たるは、文字にあらず、說明にあらずして實事問題なり、而してその良と云ひ賢と云ふ是れ亦程度問題なりとす、借問す、その理想とせる良妻賢母とは孰れぞ、楠母か孟母か、あらず、山內一豊の內室か細川忠興の夫人か、あらず、ローラン夫人かワシントンの母か、あらず。

△全然益軒先生の舊女大學を捨つる能はず、又斷然福澤雪池翁の新女大學を採る能はず、その修身敎程なるものを見るに、此等の雜書より拔萃したる者と覺しく母の道とか、妻の道とか、育兒の法とか、看病の心得とか、或は家庭の何とか、家政の彼とかを臚列して之を筆記せしめ、之を諳記せしめ、斯くて臆面なく揚言して曰く賢母良妻を作るなりと、而も顧みれば學生の進步は電車以上にして一足飛びに、良妻賢母を通過し去て、愛の戀の理想のと云ふ學科を卒業し、土臭き世知辛き所には良妻も賢母もなきものと考へ、逆上したる空想に驅られ滔々相率て世の指彈する所となるに至る。

△殊に氣の毒なるは女子師範生なり、有らゆる女性的美を褫奪して野獸の如く圈內に離隔し以て風紀問題以外なりと放言せる師範敎師の見識には呆然たらざるを得ず。斯くて世の師表たるべき女性が擧げて變成男子ならざるなきは以あるなり、頃日敎育新聞が報告する所を見るに東京府下に於て女敎師を宿泊せしむる所なしと、而してその說明を聞くに東京府下とても僅に市外に出づれば是れ田舍に過ぎずして最初は女敎師の如き一般に優待し、地方には相當の地位ある家庭にて特

に客間などを明けて其寄宿に貸與へたるものなるが、女子師範校出身の女教師の無作法なる、毎日寢床は取放しにして祿々掃除をもせず、夜間などは點燈の儘机に倚りて坐睡するなど事毎に父兄の惡感を招きたりしが、而も是れ等は尋常の事にして、其甚しきに至ては不謹愼とも慮外とも何とも云はん方なき不始末なり、例へば某女教師の如き家人が優待して風呂に請ずれば不淨の身を以て圖々敷も初湯に入浴して忽ち立てしままなる洗湯を汚し、爲に一人の家人すら浴する能はずして新湯を放棄せしめたるあり。而も靦然として省る所あらず、此事再度に及びたれば如何に扣目なる田舍人も愛憎をつかして遂に放逐するの止むなきに至れりと、此一事を以て萬般を推せらるべきにあらずや。女教師は多く獨身なり、もと婚嫁を欲せざるにあらず而も配者を得ずと、彼等も女性なり如何に醜面なればとて、俚諺に『破れ鍋に綴ぢ蓋』と云へる如く、自己が地位を自覺して似合しき緣を求めたらんには、天下往くとして何ぞ配者なきを憂へん。偶々不自然なる教育を受けたる結果として世に憐むべき寡獨の不幸に沈淪せるさへあるに、剰へ自己が經驗なき理想せざる良妻賢母を說かざるを得ずと云ふに至ては、聞かせらるるものより、教ゆるものゝ心事を忖度せば世に又斯る悲慘は多くあらざるべし。

△偖て當事者をして難事中の難事なりと叫ばしめつゝある學生風紀問題、女學生墮落の原因たる一部は、或は社會の淫靡的風潮にもあるべく、家庭の不良にもあるべく、寄宿舍の乾燥無味にもあるべく、監督者の懈怠にもあるべし。而も是れ抑も末なり、頻々として起れる女學生非難の原因は職として女子教育の本義を誤解せるに是れ由る、若し一たび女子教育の本義に泝りて解決を下さんか、良妻と云はず賢母と云はず、所有る女學生問題は刃を向へて解けんのみ。

科學

慾望と進歩

落葉

人に慾望と云ふものが無かつたなら、恐らく我々は今日の如き文明の世には生れて來なかつたで有ふ、人間の慾望は實に無限のものである、飽く事を知らぬものである、而して此慾張りの飽く事を知らない根生が、我々人間に有ればこそ、夫れに就て種々の事が進歩して行くのである、若し人間に慾と云ふものが無かつたなら、少なくとも原人以外には決して何の進歩もしなかつたで有ふ、世が次第に文明になり、進歩して行くのは、偏に我々の慾張と云ふ一方から云へば、極くいやしい心(日本人の所謂ヨクバリ)から生れて來た處の寶である、つまり文明國程慾張の程度が高いと云ふても餘り誤りでは無いでしよう、世の文明が進めばすゝむ程我々の境遇は便利になり、從つて複雜を免れ無い、此煩雜を厭ふたならば、昔の原人時代の生活の有樣をつゞけて行くのがよい、併し人類が殆ど先天的に此慾望と云ふものを有する以上は、何處迄も其願意を充して行くのが、此一般人類に對するの道ではあるまいか。

然るに我日本人は、此慾望を充たそうとする處の慾が誠に少ない樣に思ふ、つまり少し位の不便は忍んでも、夫れに甘んじて居て、無暗に頭を腦まして迄、夫を少しでも便利にし樣とする精神は極めて少い樣に思ふ、此最も手近な例は、いくらも有るが、今思ひ付いたのは、彼の西洋蠟燭と、日本の蠟燭とである、誰でも知つて居る樣に、西洋の蠟燭は日本の蠟燭よりも明るい、其上に又體裁も甚だ好い、之は何の爲で有るか何の西洋のは蠟が上等で心の工合が好いからだと無造作に斯う云ふてしまへば夫れ切りであるが、先此蠟燭の歷史沿革を調べて見たならば決してそんな呑氣な事は云つて居られない、矢張西洋に於ても昔は日本のと同じ蠟燭を用いて居た、夫故に永く用ふる間には自然

に暗くなつて、心を切る必要も矢張有つたので、心切りと云ふものも有つて、而も夫には立派な裝飾などの施したものさへ有つた、併しいくら心切を立派にした處で、暗い事は矢張暗い、手數のかゝる事も隨分有つた、何も不便だと云ふ處から、流石思考力を有する事の多き彼等は、種々の方面に就て研究し、工夫した末、終に極く容易な只心を三ツ組にすると云ふだけで、終に其目的を達した、今日の樣に改良せられた、其仕方は至つて容易いものであるが、之を發明する間の苦心は中々容易なものでは無かつたらう。

　飜へつて日本の蠟燭は如何にと云ふに、之は何時の頃に出來たものであるか、傳はつたものであるか、よく分らないが、何しろ近今の事では無からうに今日に至る迄何の變化もない、何の改良した處も無い、日本人はあれを不完全なもの、不便なものと思はなかつたので有ふか、否慥に不便とは知りつゝ、只何となしに不便だと思ふばかりで、何とか工夫して、夫を改良し樣とは思ひ及ぼさなかつたのであらふ。

　初め火を點じた時は、西洋のも日本のも同じ明るさであるが、見て居る内に日本出來のものは次第に、心の眞中の處が暗くなつて來て、終に半燒けの心が炎の頂上迄達する樣になる、斯うなると明りが暗くなるのみならず、眞中にある冷めたい半燒の心を、完全に燃燒せしむる爲に、周圍の炎の熱を奪はれるので、勢其炎は暗く、且弱くなりて、其心を取除いてしまはなければ、元の通り明くはならない、是に反して西洋製のものは、此大切なる點を改良したのである、試に西洋蠟燭を細かに調べて見ると、心の黑くなる部分は極く僅で、夫れが必ず炎の下部でまがつて、其先は横の方で空氣に接して居る、此點が日本製のものと異なる點で、日本のは炎の最上點迄行つてから、初めて外界の空氣に接する樣になつて居るから、暗いのだが、西洋のは下に在て空氣中からの酸素の助けに依つて燃え盡してしまふのであるから、炎の明暗には何も關係しない、然らば何して心が斯ふ好い工合にまがつて居るかと云ふに、それは糸を三つ組にして、平たいのだか

らである、凡て平たいものは丸いものに比べてまがり易い性質がある、人種に依つて髪の毛が縮れて居るのも、其人種の毛髪は丸くなつて、横斷して見ると、平たいからである、夫と同じ理屈で、實に此些細な事を改良した爲に、大變に便利になつたのである。

併し日本の蠟燭は偶然にも甚だ理屈に合つた樣に出來て居る、彼の蠟燭の眞中にずつと穴のあいて居るのは誠に學理に適つたもので、上に火を點けると下方の孔から空氣、即ち酸素が盛に入り込むので、從つて上の心も炎の上迄行かない内に、下の處で完全に燒け盡して、彼の不體裁な心切りを要する部分は出來ないのである、夫故之をよく用ふると、中々文明的であるが、我々にはそんな氣のきいた考へは持つて居なかつたので、何の爲に穴をあけたかと云ふと、空氣を送る爲に造つたのではなくて、彼の燭臺の上の釘にさす爲に設けたもので有つた、是に至つて我ながら日本人の愚を笑はざるを得ない、西洋人は日本人に比べると利口で機敏である。



併し又一方から考へると、西洋では凡て物の發明發見と云ふ事に社會は大なる賞賛を與へる、時としては何萬何十萬弗の懸賞を以て人に發明力を勵ますと云ふ事である、之が大に動機となつて、何でも物を發明し樣、發見し樣と云ふ心が終に習慣となつて、何でも現在のものでは滿足しないで、もつと好く仕樣と云ふ心が常に彼等の心中にあるから、つまり社會が然ふ云ふ風にするのである、之に反して日本ではたま〳〵何か便利な事を發明しても、人は餘り之を賞賛しない、十年や十五年の

専賣特許位のもので、人々は却つて其功勞をそねむ樣な傾向だから、恰度西洋と反對で、人の心が活動しない、眠つて居る樣なものであるから、自然と物事が遲れ勝ちになつて、人に先を越される樣になるのである、此源因に依つて人々の腦の働きも鈍く、發明心の起らぬと共に、慾望と云ふ事も起らないのでは有まいか。

人類と性質

壺中天

吾人人類には種々異りたる天賦の性質あり、歐米人はこの性質を大別して四種に區別せり、第一多血質、第二神經質第三粘液質第四膽汁質、是なり勿論これは其の大體の性情によりて、區別したるものにして素より精密なる研究を經たるものにあらず、且つ又其の性質とても一個人に特有せるものにあらずして數種の性質を兼有するものもあれどもまづ大體の傾向によりて其の特質を記すれば左のごとし、讀者はこの性質を玩味して各自の朋友、親戚乃至兄弟姉妹の上に當て篏めて見れば自から得る處ろあるべし。

△多血質

此の性質の特點は皮膚赤く毛髮漆の如く黑く、敏捷活潑にして毫も憂愁の狀なく、其の美點は血氣盛んにして氣輕く、多くは樂天的にして、且つ現在の生活を樂しみ、博愛にして常に交際を好む風あり、されど其の缺點を求むれば、時に或は輕躁浮薄にして志操堅固ならず、爲めに屢々外物に刺激せられて一定の操守に乏しきの厭ひあり、而して此の種の人類は滋養物の吸收尤も盛んにして血液に富むを以て動もすれば腦溢血充血等の疾病に罹る事多く肺及び心臟を犯され易く槪して長病少く、急激の致命症を發する事あり、されど多血質は平素極めて健康なるものなり、且つ又多血質中には往々雄辯なるものありされば其の不斷の攝生法は成べく强き刺激物を避け、熱度の高き飮食を禁じ發汗する事莫大なる動作、并に精神の激昂等を避け、及ぶべき丈け精神を沈靜にして、外部の酷熱に觸るゝ

事を避くる樣務めざるべからず、其の食物は、脂肪の多き肉食よりも淡白なる菜食をよしとす、若し古人にありて此種の人を求むれば日本武尊木曾義仲。

△神經質

神經質は多血質と稍や反對なる性質にして一般に寡言にして沈默、多くは憂愁の氣を帶び人生を悲觀する塲合多し、而して一度び憂愁に沈むときは先より先を案じ出して其の憂愁の範圍を擴め、容易に斷念する事能はざるに至る、而のみならず其の過度の憂慮は精神幷に身體に影響を及ぼして種々なる習癖を生ずるものなり、まづ其の精神上に及ぼす現象を求めば、事物に感慨の念深くして思考に陷り、運動遊戯等を兒戯として好まず、動もすれば靜閑、寂漠を好み、獨想に耽り易く、遂に憂



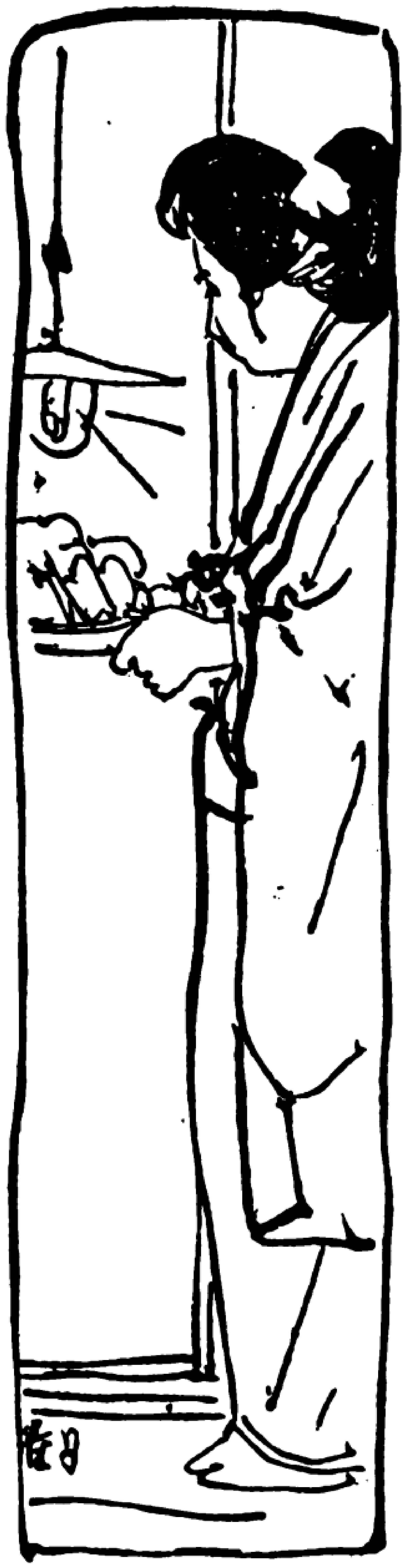
鬱の病を惹き起すに至る事なり、次に肉體上に及ぼす影響は腸胃の疾患を起して諸事快活を缺ぎ、皮膚軟弱となり、血行は遲鈍となり、往々血塞、痔疾等の長病に犯され易し、されど其の長所を求むれば耐忍持久にして、小心翼々其行を謹むを以て失敗少く、比較的事に成功する性質なり、此の種の人は顏面蒼白にして毛髮薄く、身體多くは瘠瘦にして五官、鋭敏なるがごとしこれを古人に求むれば、護良親王、織田信長、平重盛の如き又この類に近きものなり。

而してその性質の人の不斷の攝生は刺戟を盛にして運動を活潑ならしめ沈思單獨を戒め、其の食物としては肉食を多くし、果物を時々用ふべし、されど饂飩蕎麥素麵の類粉製食物豆類等下腸部を膨脹せしむる食物

を戒しむべし。

△粘液質

これは多血質とは全く反對にして、神經質とも又反せる傾向あり、この性質は知覺鈍く、思考力に乏しく随て事を決行するに遲く又活氣に乏しきを以て外面より見れは沈滯遲延恰も感覺なきが如くにして身體の動作極めて緩漫にして血行遲く筋肉弛緩にして往々贅肉を生ずる事あり、此の性質の人は事を成すに遲鈍なるを以て到底人に先んじて功を奏する事能はざれども一度び信じて行ふ時は遂に金鐵をも溶かすに至る、すべて粘り強く我慢強く容易に動かざれども一旦定めし事は如何なる障碍に逢ふも中途にして廢止する事なくして遂に大業を成就するもの往々此の性質の人に在り古への英雄豪傑の中に就て見るに德川家康伊達正宗等此種の性質ありしやに見ゆ。



粘液質の平日の攝生法は專ら活潑なる動作を務め精神の刺激を盛んにし、時々興奮的飲食物及び香料を取る事必要なり。

△膽汁質

粘液質に稍や似て又大に相違せり、此種の人は顔色黎黑にして體質肥滿し、其の性質冒險を喜び大膽にして沈重の風あり、容易に物に動せずして又獨居默考の癖あり膽汁質の人は時々肝臟病或は黄疸病に罹り易く故に不斷の攝生は專ら菜食を務め、飲料は淸水を多量に用ふべし。

鷸と千鳥

天然生

鷸と千鳥は、共に涉禽類に屬する小鳥で、鶴、鷺、秧鷄と同じく、嘴長く尾短く、足は比較に大きく、常に水邊に棲んで丶、昆蟲や蠕蟲などを餌としてる。で其鳴聲や風姿によつて、古來世人に謳はれて居ります。

鷸は、又鴫、田鳥、鷸などの字を用ゐ、羽音を繁く鳴らすから名けられたといふこと、或は夜更けて羽を鳴らすと、何となく寂しき故、名けられたのであるといふ說もあります。兎に角常に田や澤に棲んで丶、夜になると羽音をたて丶飛廻つてる、之を「鷸の羽搔」と稱へ、其繁く音をたてるのを百羽搔といふて歌人等はよく歌に詠んだのです。古今集に

曉のしきの羽かき百羽かき
君が來ぬ夜は我ぞ數かく

鷸には種類多けれども、概ね候鳥で、秋になると亞細亞大陸の方から飛び來り、春になると再び北國へ飛び歸るのです。其種類は俗に四十八鷸といひて、實に多くある、就中、田鷸、地鷸、山鷸（保登鷸）玉鷸、反嘴鷸、杓鷸、羽斑鷸、青鷸、胸黑鷸（黍鷸）黃脚鷸赤脚鷸、木雀鷸、草鷸などは、普通知られてる種類であります。

●田鷸は、最も普通に見ゆる鷸で、到る所の田や澤や其他水の邊に居り、秋來て春去るが、我邦よりも南方に渡つたものも、春の末になると歸りがけ、我邦に途中寄りをするから、更に多く居るやうに見えるのであるそうです。●地鷸は、一に大鷸ともいひ、田鷸よりズット大きくて、夏になつても日本に居つて巢を造り雛を育てるが、冬になると、南方の暖國へ飛去るのです●山鷸は、一に保登鷸といひ、田鷸や地鷸よりは一層大きくて、肥え太つてるけれども、嘴と脚は比較的短い此鷸は專ら山地に棲んで丶、田や澤に居らない殊によく杉の林に居るから杉鷄とも書かれ、肉の味がよいから、常に獵夫に狙はれてるのです。此鳥は候鳥ではあるが、冬でも夏でも我邦に棲み、たゞ夏は北方に、冬は

は南方に移るのみであります。

玉鷸は、熱帶地方に產し、夏のうちだけ我邦の南方に來て居るので、北方には殆んど見えないさうです。雌は雄より大くて、頸の周圍が黒褐色であるから雄とは、著しく異つてる。反嘴鷸は、嘴が上方に反曲つてるので名けられ、鷸類中では珍らしいといふ方です。靑鷸は、山鷸より少しく小さくて、足は綠色をしてる山鷸と同じく概ね山地に棲んでるのです、胸黒鷸は、背が茶色をしてるから、俗に茶鷸といひ、又黍鷸とも呼び、矢張り山野の方に棲んで丶、水田などには見えない、羽斑鷸は、羽毛棲黒白棒等の斑點ありて甚だ美麗である、けれども數は至つて尠ないのです。草鷸は胸黒鷸より小くて、尾の端が白いから、一に尾白鷸といひ、餘り多く見えない方です。黃脚鷸は、俗に京女鷸といひ、脚は黃色である、それから赤脚鷸は、讀んで字の如くであります。

鷸類の肉は何れも味が美しい、殊に燒肉は鷸燒とて、高等料理に用られて世人に賞味されてゐます。それから又其形態を好んで、飼ひ養つてる者もあります

明ぬとて鴫はたてども大澤の　　香川景樹
　蘆間の月の影もさわなり

伏鴫の羽かきはらふひまもなし　　香川景樹
　澤邊の夜露いかにしげけん

鴫立ていよ〳〵廣き野山かな　　杜　蓼

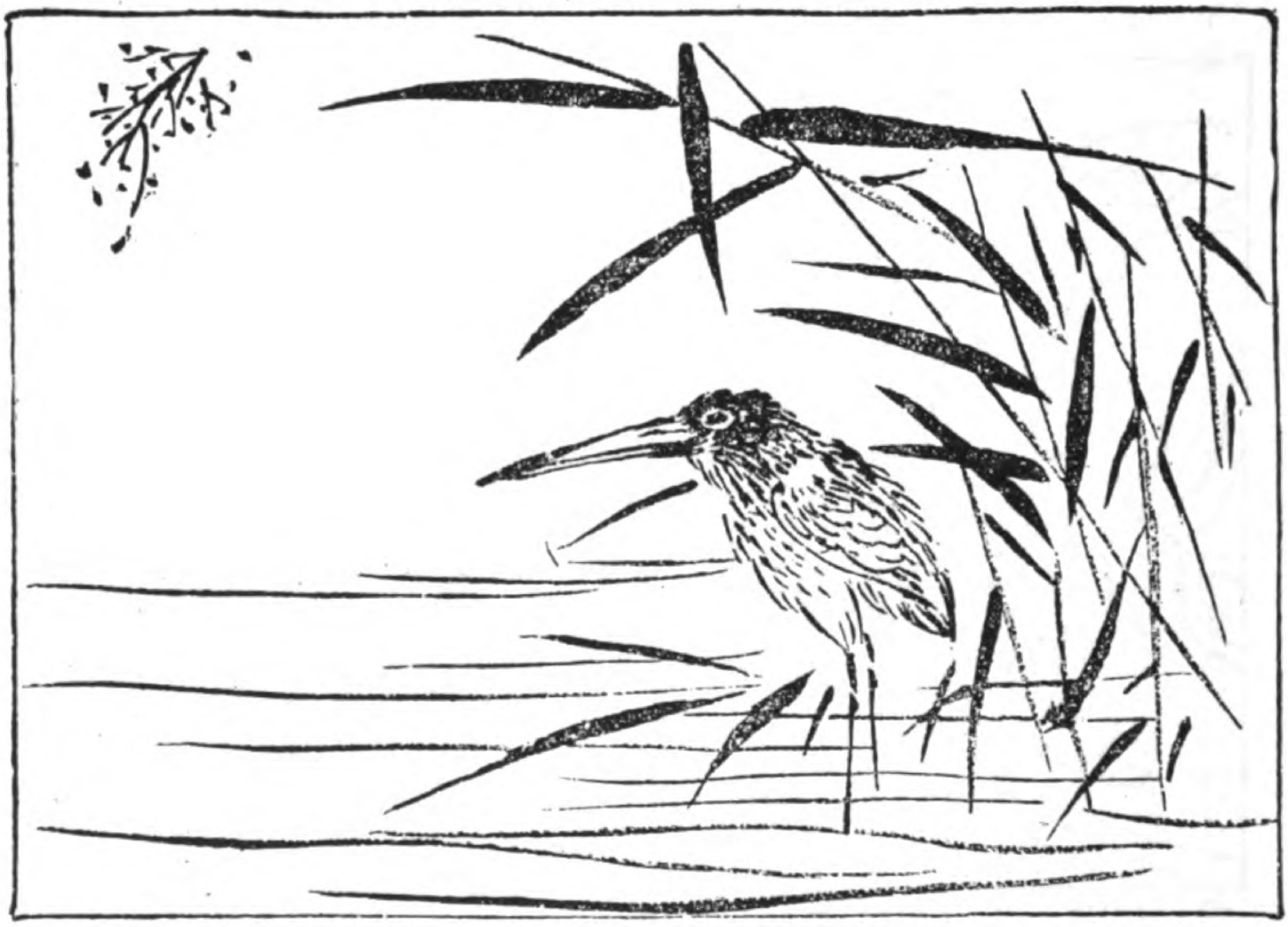
鴫立や十二箇村は樹にくらき　　靑　牛

＊　＊　＊　＊

千鳥は、常に多く群を爲して飛廻はるを以て名けられたのであらう、けれども往々鵆或は衛の字を用ゐ、又歌などには、乳鳥、智鳥と書いたのがあります、千鳥は形態鷸に似て、頭と嘴黒く、頰は白くて眼の後に黒い條を引き、背は一面に靑黒く、腹部は白色を呈してる。此鳥は歩むとき、足を打交へるから、砂の上を駈け走ると、ヒヨロ〳〵してゐて見てゐると面白い鵆とは蓋し之から出たのでありませう。此鳥は冬になると、海や川尻に集つて、水上に群飛し、一種の聲を發して同類と呼び合ふが、なか〳〵幽雅である、それ

ゆゑ歌人などに賞愛されて居るのです。

千鳥にも種類多く、鷸と同じく俗に四十八種と稱へられてる、でイカルチドリ、シロチドリなど有名である、そうして其形態性質などが鷸に似てゐるので俗間往々シギといふ名を附したのがあります。イカルチドリは、普通河原走り、或は河千鳥と呼び、俗に大なるを大首鷸といひ、小なるを小首鷸といひ、共に川の邊に棲みピヨーピーと鳴き廻ッてる。トウチシギは、多く海濱或は川尻に居るから、普通濱千鳥と呼び、秋になると飛



來り、春になると再び飛去るのです、以上の二種に限らず、何でも河の邊に居るのを一般に『水喜鵲』といひ、海濱に居るのを『濱千鳥』或は『呼潮』といふのです。此他歌俳諧などでは浦千鳥、磯千鳥、或は村千鳥、島千鳥、夕波千鳥などと、勝手な名を附けて詠んであります。

何にしろ千鳥は、形態優しくて、景のよい海濱などに居るから、鶯、杜鵑、燕鶉、雁、鴨などとともに、恰好の歌題と成てゐる、歌も澤山あるが、其一斑を擧げてみませう。

紀　貫之

たが年の數とかは見るゆきかへり千鳥なくなり濱の眞砂を

藤原　良經

てる月の影にまかせて小夜千鳥かたぶく方に浦つたふなり

藤原　實定

うちすぐるすみだ川原の夕ぐれに心ぼそくも鳴く千鳥かな

藤原　長任

いもがりと佐保の川べをわけゆけば小夜か更ぬる千鳥なくなり

道因　法師



岩こゆるあら磯波にたつ千鳥心ならずや浦つたふらん

靜賢　法師

霜さえて小夜もながゐの浦寒み明やらずとや千鳥なくらん

加茂　成保

霜がれつ難波のあしのほのぼのとあくるみなとに千鳥なくらん

源　賴政

東女と寐ざめてきけば下野やあその河原に千鳥なくなり

平　忠度

浮寐するいそまの浦のさよ千鳥友よびかはす聲きこゆなり

藤原　俊成

須磨の關有明の空に鳴く千鳥
　かたぶく月はなれもかなしも　　　　僧　西行

淡路がた磯わの千鳥聲しげし
　迫門の汐風さえまさる夜は　　　　源　實朝

月清みさよふけゆけば伊勢島や
　いちしの浦の千鳥なくなり

神山の夜半の木がらし音さえて
　みたらし川に千鳥なくなり　　　　香川　景樹

俳諧には、更に多くよんであるが、こゝには僅か十句だけにとゞめて置きます。

夕闇の松風のぼる千鳥かな　　　　曉臺

むかしより千鳥なくなり淡路島　　　　樗堂

鳴く千鳥どこが須磨やら明石やら　　　　道彦

鳥取へ一むれ通ふ千鳥かな　　　　鶯蒲

來た道も水の上なり千鳥なく　　　　桐栖

水底の月みて鳴くか小夜千鳥

酒樽に千鳥舞入る嵐かな

江島や河が不足で鳴く千鳥

野をゆけば野にも鳴くなり夕千鳥　　　　綺石

山城や海はなけれど小夜千鳥　　　　壽水

千鳥は、多く波打つ磯に居ッて、波の近際に往來してゐるから、潮がひけば、千鳥も遠く去り、潮が滿れば千鳥も亦近く來るのです。古歌に

　遠くなり近くなるみの濱千鳥
　　鳴く音に潮のみちひをぞ知る

とあるは、まことに此眞情を穿ッたものである。夫故此古歌によッて、潮のみちひきを測り、戰場に便利を得たといふ逸談（太田道灌であッたらうと思ひます）が傳へられてあります。

（終）

季節の花　では薔薇、天竺葵、天竺牡丹の種類、靑樹花、扶桑花、西洋萩、にしき紫蘇、カンナ、獨逸芒、ベコニヤの種類等であるが天竺葵が三十種ランタナは白赤 紫 桃色があり天竺牡丹は一重咲菊咲狂菊咲があるカイコーヅと云ふ西洋萩は花も葉も大くて餘程妙だ獨逸芒は冬に這入つても葉は靑々として白い穗は帽子飾りの樣に美くしいベコユヤが普通が二十種球根ベコニヤが三十種之れは葉と花を愛るのである。

牡蠣の話

S、N生

牡蠣は滋養と風味を兼ねた食物であッて、古へより東西諸國に賞用されたものであるが、殊に歐米の人々は最も之れを珍重し從ッて牡蠣に關する書籍も尠からず。之れが養殖に從事するものも多い、我が國では安藝國廣島地方が養殖の本場であッて古へから其の產地として知られて居る。又近年では北海道釧路の厚岸海岸が天然の棲息地として此所より多量の產出を見るに至つた。

一體日本海沿岸で、牡蠣の棲息に適する個所は極めて多いのであるが、古へは唯捕獲採收するばかりで、少しも養殖といふ事に注意しなかつたから、追々と產出を減じて來たのは甚だ惜しむべきである。

牡蠣は原名をオーストリアと唱へて動物學上軟體動物に屬し、其の種類は大凡七十種もある、けれども日本で普通棲息し、又は養殖するものは唯一種に限られて居る、即ちまがきと稱するものである。歐米各國で賞用されるものは、これとは全く種類を別にし、日本では稀に見る「イタホガキ」といふものに粗似て居る。

牡蠣の介殼はやゝ厚い二板の不正なる長卵圓形の殼片より成り其實質は外套膜より分泌して生長するもので、其體は扁平く、頭と軀幹との差別なく背部は凡て外套膜で覆はれ、腹部には足がついて居るけれども、其の區劃は判然して居らない、又其の感覺器は他の貝類に比して至つて鈍く、且く不完全である又雌雄は共に生殖器に特徴なく產卵期は六七月頃である。

又牡蠣の棲息する場所は其の種類に依つて一定の制限がある。日本の沿海では淡水の注流する處ろは多少產出を見ざるなく、就中多くは干潮線以內の淺海に棲息して殊に海底の砂泥の多い處ろを好む氣味がある、故に東京灣內の如きは最も其の棲息に適する地であるとは專門家の說である。

日本で牡蠣養殖の始まつたのは今より二百年前の事

で元祿の盛世には既に此の介類が、様々に料理されて貴人、富客の食膳に上つたのである。歐洲では紀元後二百年の頃既に羅馬に於て養殖された事が記錄に上つて居る。

日本人は随分貝類を嗜む人種であるけれども牡蠣を嗜み食ふ事はまだ西洋人ほどでない。西洋人の牡蠣を嗜食する事は實に非常なもので、殊に佛蘭西巴里あたりでは、一種の贅澤品として食膳に上すのであるが、其價も又中々廉くはない、通例の品が一個七八錢の價ありといふ。歐洲の牡蠣は日本のよりは肉が締ッて居て香氣が多い、これは海水の性質と食物の加減によるものであらうが、併し養蠣の方法を研究したらば人の嗜好に適するやうな蠣を生産する事は容易であらう。

昨今東京の市場に上る品は専ら品川灣、臺場邊の木や石に附着して自然に蕃殖したものであるから、色も榮ないで肉もいやに軟柔であるが、本場廣島産の牡蠣となると風味といひ、又肉の締り方といひ、とても比べ物にはならぬ、彼の有名な大阪の牡蠣舟で食はせる牡蠣は重に廣島産である。

又牡蠣を食ふには料理法を心得て置かねばならぬ。從來普通に行はれた料理は三杯酢て生食するか、又は煮て吸物にし、或は牡蠣飯に仕立つるなどいろ／＼あるが、一番よいのはフライにして食ふか、或は蒸炙りにして粉胡椒などを加へて一寸洋風の料理にして用ふると一層の滋味を與ふるものである。

牡蠣の繁殖に適する處ろは遠淺で海底には砂多く藻類の少く且つ風波に暴されぬ所ろで、多少淡水の混入する海面が適當で、こゝへ幼蠣を附着せしむる材料、重に樹木の枝竹などを束ねて埋むるなり、斯く爲し置く時は夏季に至り盛んに幼蠣附着して恰も胡麻を散じたるが如く多くは物體の裏面に附着して微細なる海藻を食し。春秋の候に尤も著るしき生成を見、翌年四月頃には平均一寸三四分の大さに成る。

斯くて四月頃に至り前年の竹木などに附着した牡蠣を剝ぎて之を砂多き地面に散布し時々鍬の類を用ひて攪まわし生長の平均を保たしむるのである、斯くすれ

ば其生長は普通一年には一寸五分、二年には二寸五分三年目には三寸となる、但し三年以上に及ぶと全く成長せず。唯介殼の厚さが加はるのみであるから、採取するのは二三年目がよいのである。

序に牡蠣の料理法二三種を左に紹介せん。

蠣スチウ

蠣を殼より取り出し、汁は漉して麥粉、バタと共に鍋に入れ、豆蔻花の細片とレモンの皮、胡椒とを加へどろ〜となるまで、煮れば風味よきスチウとなる。

蠣めし

牡蠣めしは廣島にては上下一般賞翫し大阪の蠣船にて重なる食物なり、蠣船にては客一人なれば一人前の釜、二人なれば二人前の釜と人數に應じて釜を出す、されども自家にては釜は客の前に出さず、厨下より裝ひて出すなり、さて飯は水と酒と鹽少しとにて炊き蠣は丁寧に洗ひ殼などをよく去りて、米の上に置き別に好き松魚の汁を製らへ置き飯を碗に盛りて上より其の汁をかけ、淺草海苔、擦大根、葱みぢん、唐がらしなどの加味を上に置く。

蠣スープ

牡蠣五合ばかりをよく洗ひ、液は毛ずいのうにて、漉し、この液に牛乳三合とナットメック（肉豆蔻）胡椒、牛酪を加へ數分間煮て火よりおろし、ソップの出來上りたる時牡蠣を入れ再び煮ること二三分間にして直に皿にうつし膳に供すべし。

蠣の酢づけ

程よき蠣を撰び毛篩に入れて水分を去り、湯を沸かしてこれに入れ、暫時煮て後ち掬ひて壺に入れ置き又別に酢少々と丁子、胡椒、肉桂等の香料を加へたるものに浸したる汁のみを右の壺にそゝぎ尙冷き酢を十分蠣の隱るゝまで注ぎ入るべし

蠣フライ

蠣の殼を去りて一つづゝ布巾にて水氣を取り、メリケン粉にてくるみ玉子の黃味を塗り、パン粉の中にて丸め、胡麻油或は牛脂にて手早く揚ぐべし。

名家衛生談

淋疾と家庭

土肥醫學博士

一體流行病といふものは危險至極の病氣ではあるが、其は一時的の流行であるから、流行が止めば其害も亦なくなつてしまう、然るに結核とか、花柳病とか云ふのに至つては、直に人の命を取ると云ふことはないが、次第次第に健康を損ひ、一人ならず、子孫迄をも弱くして、汎く社會に害毒を流し、終には人種迄をも退歩せしむるに至るので、其禍ひは却つて急性傳染病にも勝ると云はなければならぬ、

人間の死亡數から云ても慢性傳染病は決して急性傳染病に劣らない、今試みに千八百九十九年度の普國の死亡統計を擧げて見んに、死亡の總數が七十二萬五千八百〇一人あつて、其內痘瘡で死んだものが十四人、窒扶斯が四千四百〇五人、猩紅熱が一萬二千百三十六人、合計一萬六千五百五十五人に過ぎないが、慢性傳染病は結核患者だけでも六萬八千四百〇八人あつて、急性傳染病全體の四倍にも當り死亡總數の約十分の一を占めて居る、何と驚く譯ではないか。

又花流病の死亡率については、統計を造ることが甚だ困難であるが、慢性の腦病、脊髓病、內臟の諸病で斃れる多くの男子は黴毒感染したのが發病の遠因と成てゐる、生れながら死んで居たり、或は生れて間もなく死んだりするのは、先天性の黴毒によること、並に婦人科病の爲に死ぬる婦人の病因が多くは淋病の傳染の爲であることを思ふと、花柳病者の死亡數も恐らく結核の死亡數に讓るまいと想像されるのである。

嘗て伯林で造つた統計によると、人口一萬人に對して淋病患者が八十三人、黴毒患者が三十六人であつた、ブラシユコー氏は之に基いて、大都會に於ては二十歲より三十歲に至る青年は、每年千人中二百人即ち五分の一は淋病に罹り、二十四人は黴毒に罹り、又五年間には十人每に一人、十年間は五人每に一人の青年が黴毒に感染する割合である、尙云ひ換ふれば、三十歲以後に結婚する者は、夫より以前に二回淋病に罹り五人に一人は黴毒に罹つて居る割合であると言はれた。

▲淋病の歴史

淋病の淋の字は淋瀝の淋で、支那隋朝に巣元方といふ人の書いた病源候論にも、其事が少し許り記載してある、西洋でも十九世紀の上半期迄は淋病の解釋は甚だ不明瞭であつて、今より七十年ばかり前に、リコール氏が始て淋病と黴毒とを區別したのであるが、氏すらも淋病は尿道粘膜の加答兒に過ぎずして、氣管支加答兒、鼻加答兒などの加答兒と同じもので、極めて害のない病氣と看做して居たのであつた、所が千八百七十九年ナイセル氏が淋病の黴菌を發見するに及んで、始めて此の誤解を正す事が出來た。

▲世俗の謬見

學者の間にこそ淋病を單純の尿道加答兒と見做すやうな誤見は除かれたものゝ、世俗の間には今日でも隨分間違つた考へを持つて居る者が多い、即世間では淋病は男子が必ず罹るべき何でもない病氣の樣に思つて居て一般の醫士も亦之を輕く見るやうな傾がある、淋病の診察を乞ふても、病所及合併症の有無などを十分診察して呉れないで、一袋の内服薬と一瓶の外用薬とを與へて追ひ返して了ふ、然るに數週數月經つた後、患者はまだ癒らないと訴へると醫師は平然として、淋病は誰でも罹らないものはないので、療治しても又起つて來る、療治しないでも癒るときが來れば癒るから、打ちやつてお置きなさいなどゝ云つて、敬して遠ざける弊風がある樣だ。處が斯く冷遇せられた淋病は、啻に患者自身にとつて危険である許でなく、其病毒が家庭に運りて、妻にも子にも難儀をさせ、延いては其禍を社會に及ぼすのであるから、次に其恐るべき譯を申上げやう。

▲男子の淋病

男子が尿道の淋病に罹つた時に、其養生と治療の仕方が宜しいか、又は幸に病毒が輕ければ、數週間の中に癒つてしまつて、少しも後に害を貽すことがなくてすむが、若し一歩を誤つて病毒が深く侵入して、後尿道炎を起すやうになると、攝護腺、精嚢、精系、副睾丸などに炎症を起し、或は膀胱腎臟などの病氣を續發するに至り、或は結核の素質のある者は、淋病から結核を惹起すことが少くない。

▲淋病と全身病

淋病の病毒は淋巴管から血液の中へはいりこんで、脳毒症や壊血症などに似寄つた症状を現はし、或は遠方へ傳つて心臓、肋膜、脳脊髄を犯し、又は關節、骨髄、筋、腱、蜂窩織などの病を起さしめる、而して此の病は啻に其病毒に感染した者だけを苦むるに止まらないで、なほ殘刻な害毒を家族にまで及すのであるから、其のむごたらしさをお話しよう。

▲家族間の傳染

茲には先づ余の診察所で見た一例を擧げて見やう。

或男が惡所通ひをして、翌朝小便をする時に尿道に少し痛みを感じて、一兩日は薄い膿が漏れて、夫から次で膿が濃くなつた、二十日ばかり經つと、其妻も亦小便の時に痛が起つて、膿が澤山下りる、遂には時々下腹の痛をさへ感ずるやうになつた、更に五日ばかり過ぎると今度は生れて僅か九ヶ月の幼女が下から膿が出るやうになつて、其母の云ふ所を聞くに、小便をさせる時に、必ず劇しく泣くとの事である、

此親子三人の病人が大學の診察所に來たのは發病後二十九日目で、檢査をして見ると三人共に澤山の淋病の黴菌あるを認めた。

此男子は自分の病の傳染力が斯程恐ろしいものとは夢にも知らなかつたので、妻に傳染せしめて、重い病氣を起させ、又愛女にまで其病を傳へたのである、まだしも其夫に眞心があつて、自身と家族との健康を保護する爲に、ぐづぐづしないで早く醫師の處へ來たのは不幸中の幸であつた、けれども世間の男子や夫は凡て此患者のやうに正直ではない、中には淋病の危險を承知の上、自分の慾を制することが出來ないで、罪もない婦人を害毒する男子がある、余は實に茲に害毒と云ふ言葉を用ふる、婦人の淋病の危險は、とても男子とは比較にならないのである、獨逸の刑法では自ら傳染病あることを知つて人に傳染させた者は、毆打創傷の罪で問はれると云ふことであるが實際其罪の深い事は毆打創傷所でなく、故殺謀殺に等しい塲合すらあるのである。

▲淋病と新婦と

其術又或る時年若な婦人が結婚をして未だ幾日も經たない中に、俄に熱が出て、顔色が蒼白くなつて、身體が大儀になる、其容體を聞くと、小便が近くなり、膿が澤山下りて、腰のまはりや、關節、筋肉などが痛むと云て來た、憐れや此清淨無垢の新婦は、今や夫が結婚前に働いた放蕩の犧牲に供せられたのである、淋病の黴菌は新しい蕃殖地を得たのであるから、恐ろしい勢で蔓つて、一ヶ月も經たない中に、子宮内膜炎を起し、更に進んで喇叭管膿腫を遣つたので、若し速に之を切開しなからうものならば、數日を出ずして終に腹膜炎の爲に、麗はしき眼ざしは長へに閉ぢ、花の如き唇は復動くことが出來なくなつたのである、幸に九死の中に一生を取留たとしても、久しく病の褥に親しみ、幾ヶ月の後に僅に褥を離れた所で、盛の日のあでやかな姿は痩せ衰へて見る影もなくなり、快活であつた氣質は常に鬱ぎ込むやうになつて「ヒステリー」症に陥り、小兒を設けることは出來ず、世の中の春風に當ることは出來ず、長い一生を寂しく／＼、不仕合を喞いて暮す樣なことになるのだから、呉々も注意すべきである、今から凡十五年前のことであつた、或日急性の淋病患者がやつて來て、云ふには、先生私は前年淋病の爲に先妻を殺しましたが、今憶ひ出しても、實に悔恨に堪へません、ところが／＼また淋病に罹りました、再び妻を殺すに忍びませんから、どうか早く癒して下さいと云つて、いかにも心配さうであつた、余は之を聞いて思はず見惚したのである、彼男は淋病の病理の何たるかを知らないけれど、其眞心は慥に其前妻の死を以て自身の淋病の感染の結果だと信じて居るのである、實に氣の毒な話である。

▲淋病と婦人病

右の如き明白なる事實が屢々世の中に存するにも拘らず、千八百七十八年にネツゲラート氏が始めて淋病と婦人との關係を說いた頃には、世人は之を信じないで、當時の老大家等も一向頓着せず、却て之を嘲つた位であつた。

けれども事實は遂に欺くことを得ない、婦人の結婚後子宮病に罹る者が非常に多いと云ふことは、單に結婚の爲に起つた生理的の變動と精神及身體の疲勞とを以て說明するには事實があまり複雜過ぎるのである、果せる哉ナイセル氏が淋病の黴菌を發見した後數年に、ブンム氏やヴエルタイム氏が婦人病に淋病の黴菌を確に證明し得たので、曩に嘲つた大家たちも遂に兜を脫いでネツゲラート氏の軍門の下るやうになつた、婦人病百の中には淋病がどの位あるかと云ふことに就ては次の樣な調査がある。

センゲル氏は一一、六乃至一八%ツワイフエル氏は一〇乃至一一%（私宅患者）シユワルツ氏は一二、四%

と云つて居る、之は何れも淋病の黴菌のあることを確め得た材料ばかりで調査したのである、其故婦人病者百人中四十八は淋病から來たものと考へてよろしからうと思ふ。

さて淋病は婦人の體の何れの箇所を占めるかと云ふに、是に付てはクラインの造つた統計があるから、素人方には解りにくいかも知れぬが、玆に示して置かう。

尿道	急性淋	一〇〇%
	急性及慢性淋	六二乃至九五%
子宮頸		四七乃至七二%
子宮		一四乃至五〇%
膣		二三乃至四〇%
バルトリン氏腺		三〇%
外陰部		一二乃至二五%
喇叭管		三・六乃至三三%

若し慢性淋だけで調査をすると、子宮と其附屬器との淋病は更に多い、シュミット氏の調べたところでは、百十六人の慢性淋病患者の中で、二十七人、即二三・三「プロセント」は卵巣と輸卵管との淋病であつたさうである。

とにかく婦人の淋病は男子よりもよほど危險であつて、婦人病の中では難病と云はなければならぬ、折々見る所の婦人に强い熱が起つて俄に下腹がひきつけるやうに痛む病、即俗に云ふ癪は、淋病に罹つて居る婦人の持病であつて、眼は凹み、頰はこけ、蒼白い顏に黃斑まで出來て、尙更醜くなり、蹌踉として、室を歩くさへ大儀の様子は、丸で肺勞に罹つて居るもの〻末期のやうであるとは、婦人科の大家のセンゲル氏が子宮淋患者の相貌を現はした言葉である。

センゲル氏は、婦人が、子宮及其附屬器并に腹膜の淋病の爲に生命を縮める者は實に少くない、若し此病の爲に健康を傷つて生理的の快樂を享けることの出來ない者、子孫蕃殖の力を失ふた者を數へたならば、實に非常の數であらうと云つて居る、是等は皆彼の目にて見えぬ微小の淋菌のわざであると思ふと實に恐るべきものである。

▲潜伏と再發と

以上述べた所で、淋病が男女の間に蔓つて居る樣子、一個人及社會に及ぼす損害などは略分つたであらうと思ふ、此淋病は正當の結婚前に傳染し或は結婚した後に夫婦以外の情交からして家庭に傳はるのであつて、其罪多くは淋病が斯く迄恐ろしいものと云ふことを知らぬによるとすれば誠に氣の毒なことである。

時としては患者が淋病の恐るべきことを知つて居る者もあるが、患者自身又は之を治療した醫士が、また淋病の黴菌が殘つて居るのを氣付かないで、僅に膿が出なくなつたとか、顯微鏡で見ても黴菌が見えなかつたと云ふことで、最早全治したものと極てしまつた爲に、自身にも他人にも思はぬ禍を來すやうなことが往々あるのである。

淋病の黴菌の蕃殖力は實に恐るべきものである、淋病の黴菌は洗ひ藥の爲に一時其形の變つて居るものでも、また深い部分の粘膜に潜んで居る弱いものでも、他の粘膜に移れば更に其生活力を快復するものであるから、其存在して居る以上は、新に他人に傳染して淋病を起させ、其淋病が再び自身に傳染して又候淋病が起ると云ふ案配にぐるぐる廻はりになつて、端しのないことがある、次の一例はジユリアン氏が經驗した極めて憐な話である。

一人の患者がジユリアン氏に語つて云ふには「自分は淋病が癒つてから八年目に結婚しましたが、其後二ヶ月許たつと再び膿が出て襯衣が汚れました」

此時氏は患者に向て「結婚の當時御家内は病氣ではなかつたですか」と問ひたるに、患者は「妻には何の故障もなかつたです」と答へた。そこでジユリアン氏は「此頃でも御家内は御達者ですか」と再び問ひかへした所、患者は悄然として「いや家内は結婚の翌年に産後の熱で亡くなりました」と答へた。

此實例は男子の慢性の淋病が、いつまでも癒りきらないで、八年の後に其新婦に傳染し、(婦人は其淋病を覺らないことまゝあり)二ヶ月經つて妻から更に自身に傳染したので、二年の後に妻が産褥熱で死んだのは、恐らくは其慢性淋病が分娩の時に急に惡くなつて、汎く蔓つて腹膜炎を發した爲であらう。

▲淋病と盲目と

分娩の時には、婦人の淋病は其婦人自身にとつて危険である許でなく、生れ出る小兒に對しても随分危険なもので、彼の初生兒眼と云ふ病は、之が爲に起るのである。クレーデ氏の說により、小兒が生れゝば直に五十倍の硝酸銀水を眼に點すと云ふことになつてから、よほど之を豫防することが出來るやうになつたが、夫れでもまだ今日まで母の淋病のために盲目となつた小兒は決して少くない。まア次の盲院の統計を御覧なさい。

ヴインでは三一・〇%

ブレスラウでは三五・一%

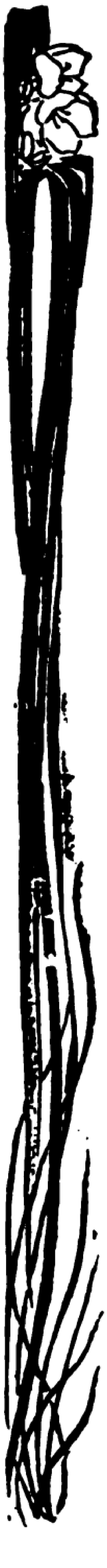
ミユンヘンでは七五・七五%

ブタペストでは四七・八九%

の盲者が淋病に原因したものである、其他ランホーフェル氏は六十%グレーフェ氏はザクセンで七十五%ホル子ルは瑞西の一盲院で七十九%の統計を得たとのことである。

之によつて見ると、罪もない小兒が生れながら天日の光を見ることを得ないのも、亦多く淋病の爲であると云はなければならぬ。

マゲヌス氏は普魯西國に於て、盲者が生産力の缺けて居ると云ふこと、之を養育する費用とを合せて、國家の損失が一ヶ年凡そ二千萬「マルク」即一千萬圓ばかりであると云ふ計算を立てゝ居る、之は唯だ少數の盲者の爲に生ずる損失だけであるが、更に淋病の爲に失ふ、戰鬪力生産力を計算したならば、國家の損失は實に莫大なものであらう。淋病は社會の最高等の人から最下等の一まで何れの階級にも蔓るのであるから、其損害もまた非常に甚だしいのであつて、其恐るべきは、とても虎列剌、「ペスト」赤痢などの比較ではない、實に恐れてもなほ戒しむべきの病であるのです。



鐵道局の

女子事務員

一記者

近年女子の新職業漸く增加の傾向あり、官衙にも民間にも女子を採用する者益々多きを加ふるは、甚だ喜ぶべき現象である、今女子新職業の一なる鐵道局の女子事務員に就て、新橋驛々長高橋氏及び、女子事務員中の古參佐藤きみ子より聞き得たる所を左に掲ぐ可し。

▲始めて採用　新橋停車場内にて出札係りに、初めて女子の事務員を採用したのは一昨年の十一月で、其後橫濱、大阪、神戶、京都と順次之を實行する樣に成つたが、是は云ふ迄も無く其成績が惡く無かつたからで有る。元來此出札係の仕事は、些細な金錢の出納が專務である上、客に對して應接せねばならぬ役目であるから、溫和にして、緻密なる、而も男子の如く無愛嬌でないのが適任であるといふ理由と、婦人の給料は男子よりも安いといふ理由から、新橋驛が率先して試驗旁々之が採用を決行したのである。

▲その成績　そこで試驗の成績は何うであるかといふに、今日になつて見ると、結果は決して惡いとは言へぬが、併し思つた程には善く無が、結局驛から見れば、仕事の點は月給は安いが人數を增したから前に男子の時と同じで損德は無い故、現今の婦人社會から見て新職業が一つだけ增加した位の利益であらうが、尤も開始後日の淺いことであるから、今後の經驗に依つて十二分の好果を收めたいと希望してゐる。

▲事務員の數　目下海老茶袴を穿いて通勤してゐるもの總て十五人、それが二組に別れて、一日交代になり、出札所が一二等の部と三等の部と二ヶ所あるから、同日の出勤者が更に二組に別れて居る。

（以上は驛長の語る所、以下は女子事務員佐藤きみ子の談話なり）

▲勤務の狀態　一日交代で、今日は私の非番です故、今朝七時半に橫須賀行を出してから、當番の方に引繼を濟まして歸宅しました。明日は、丁度今朝と同じ程の時間に出勤すれば宜いので御在ますから、以前から見れば餘程樂に成りました、ハイ以前は更代無しの十時間勤務でしたから、慣れない內は隨分辛く、忙しい時などは根氣が盡きて、這麼仕事は致すものではない

と、熟々思つた事さへありました。

▲●●●●餘暇の勉學　今では歸宅後充分に休養が出來、學校へ行く方もあれば、家事の手傳ひする方もあつて、私も少し計り通學して居る外に、尚ほ三四冊の雜誌も讀んで居る樣な譯で御在ます。

▲●●●●起床就寢　夜は十時の終列車を出せば最早用は無いのですが、私丈は一日の賣上げ代金を計算して後、大方は十二時近く成つてから寢み、翌朝も五時過には起きるのですから、仲々骨が折れます、寢室は驛に在つて、此取締りは創立以來勤續の婦人がやつてお在です。



▲●●●●●●事務員の前身　重に如何な人がなると仰在いますか、小學校の教員を仕て居た方も二三人はありました、私は高等女學校卒業後學資の出道を失つて這入つたのですが。一年餘り勤めた此頃は、最早古株に成りまして、年下ではありますが、慣れてるからと仰つて、一部の監督を爲て居ます。兎角辛抱が續かず、這入つたかと思ふと直ぐ出て仕舞ふといふ樣に實際更迭が激し過る樣に思はれますが、私の想像では、體質の弱い方や、此仕事を面倒がる方が多い故なんでせう、ナーニ、遣て見れば左程でもありませぬ、大抵の方なら辛抱が出來やうと思ひます。

▲出札の多忙●●●● 忙がしいと云つたら最早目の廻る程な事が有ります、殊に見送りの方が入場劵をお求めになる時なぞは、大抵時間間際にお馳附けに成るから、氣の急いた方々が先を爭つてお出しに成る手が、十本も十五本もゴッチャに成つて一つの口に集るんですから遣り切れませぬ。で俺は早くから出してるのに何故呉ないかとか、發車に間に合はなかつたら如何するとか、隨分お小言も頂きますから、耳も聾になる許です、が私共の方にも正確な時計があるのですからお間に合はない樣な事は決して致しませんのです。

▲列車の繁閑●●●● 一番込合ひますのは十時の夜行で此は三等車も連結してありますから、六時の神戸急行に三等の無い事を知らないで來た方の落零れも混つて、隨分急がしう御座ます、此頃は又た京城まで連絡が出來ましたので、午前六時の下ノ關直通も仲々急がしう御在ます。それでも午前は概して閑で御在ますが、午後の四時半頃からは又ポッ／＼急がしく成ります。ソレニ一二等に比べると三等は五倍も七倍も急しいので時々應援を賴む事が有ります。尤も日によると極く閑散で、此樣で月給を貰ふとは勿體無いと思はれる時も無いではありません、雨の夜など、遠くプラットホームに靑白い燈が見えて、女の方が日和下駄でカラ／＼と待合室へ這入るのが聞える時などは、ともすれば寂しくつて變な氣が致します。

▲驛長の諭告●●●● 新橋驛は全國への關門ですから、愉快に出立させるのも不愉快に終らせるのも、是等旅行者の出發に對する驛員の最初の注意が預つて力ある故私共の言語動作を深く愼まねばならぬと、驛長樣からの諭告もありますので、時々後より來て居ながら、己が前から來てるのに何故早く切符を呉ぬか、など無理を云ふ客があつても、少しも口答は致しません。

▲籠の鳥●●● 私共は御承知の通り箱の樣な中に居て前の小窓には金網が張つてありますから、或人が私共の事を籠の鳥だと申されました、然し非番の日に籠を出たからとて、バタ／＼跳廻り飛歩く者ではありません、勿論私共の仲間で惡い風評を立てられた者は是迄一

人もありません。それから私共を女學生と一緒になさる方も有りますが私共は其れを通り越て新生涯に這入つてるのですから、責任も何程か重い樣に思ひます。

▲紳士と學生●●●●　始終仕事に氣を奪はれて居ますから、面白い觀察などは少しも出來ません、唯だ切符をお買ひになる時は、紳士が一番優しくて叮嚀です、立派な紳士程一層優しい樣に思ひます。稀には隨分横柄に、オイ切符！、と賃錢を邪見に投り出す方もあります、朝か、夜行で、横濱邊へ行かれる方には、此等の優しい紳士を乘せた二等以上が多からラクです。學生は一寸亂暴の樣で實は反對です、隨分亂暴相に見える學生でも言葉は大層叮嚀で反つて可笑い程の事があります、兎に角一番切符の賣り易いのは學生方で御在います。

▲田舍者と外國人●●●●　田舍の方で、歯切れの悪いと思へば、隨分口汚く怒鳴り附る方もありまして、一寸例せば東海道にも日本鐵道にも小山驛があるので何方ですかと聞けば、一向分からないで唯だもう慌て仕舞ひなさる許り、眞に困る事が御在ます。外國人は大槪一二等ですが、言葉は單に驛名だけを申しますから反て扱ひ易う御在ます。乘客を大別して見れば、一等が外國人と紳士、二等は紳士と奧樣令孃、三等は少量の紳士と學生と田舍の方、先此三種に分られるので御在ます。



▲腹立つ事●●●●　釣錢を上げる場合にも是では足らぬと注意を受ける事は有つても、是では餘ると仰在る方は無くて、時折り賃錢計算に不足を辨償する事があります。矢張するい方が多いので困ります。甚だしいのは

五圓札と一圓札とを間違へて釣錢が不足だと申して、如何程說明しても、私共の手落ちの樣に一途に思ひ込んで、强情を張り、罵詈する方があります。這麼時は胸が一杯に成りますけれども、此所が忍耐の試驗場と、驛長の諭告を思ひ出してジッと怺えて了ひます。中には隨分憎々しう振舞て、腹立つ事も有りますけれど、少しも逆らはず、只管穩やかに、得心の行く樣にと努めて居ります。

▲可笑い事●●●●　耳立つて聞えるのは國訛りです、初めの方は東北かと思へば、後の方は京都辯で、其次は九州の方が來て、恐ろしい分らん言葉だと顏を見ますと、意外にも婦人が立つて居られる事も有ります。幾度聞いても行先が分らない方には、切符の上げ樣が無いと云つて上げずには居られませんから、更に幾度か聞き直す內、返辭が何うも妙知奇で遂に吹出す樣な可笑い事もあります。一番可笑くて氣の毒なのは、發車間際に馳せ附けて、狼狽する人です。

▲感心する事●●●●　陰乍ら每度お風評して居ますのは、加納子爵の令孃方です、令孃方は每日華族女學校へ大森からお通ひになり、子爵も時々上京になりますが、何方も服裝の質素に奧床しい計か汽車は必ず三等で、決して俥をお倣ひなさいません。

▲羨ましい事●●●●　女學生方が盛裝して遠足にでもお出懸なさるのを見ると『あゝ好わねえ!』と羨し相に云ふ友達もありますが、私共は既に學生時代をば經過し去たので、其花の如き女學生方も、卒業後は職業を求めるか嫁ぐかせねばならぬ御身上なるのみか、職業に貴賤無く自分達は既に獨立自活して居る事等を思へば却て心に强味を覺えて、チツとも羨しくは御在ません。

▲制服●●●●　私共にも改良服に似て裁判官の着る樣な黑色の制服があつて、自宅へも着て歸つた物ですが、一人減り二人減て、昨今は着ない方が多くなりました。

▲紀律●●　は中々嚴格です、銘々に手帳を渡してあり其には月日の下に驛から歸途に就いた時間を記し、其下に主任の檢印を貰つて、更に其下に自宅到着の時間を記入し、そこに父兄保證人の檢印を乞ひ、又た其の下に道草を喰つた時、其理由を記入する摘要欄がありますが、途中で要する時間は、大方定つて居ますから、隙の無い監督法なんです、それでも今日迄摘要欄に筆を入れた方は未だ一人も無い樣です。

二十世紀 良人選擇法

英國リード夫人述

三　才氣縱橫に湧出する男子

餘りに才氣の鋭き男子には、我が身を許すこと好ましからず。才氣の勝ちたる男子は、屢々奇利奇功をも博する代りに、また失敗困憊するが如き場合もまた少なからず。この種に屬する男子は、運命常に一定せず、意外の喜びと意外の悲みとは常に我が身の胸を騷がせ、終生殆んど寧日とては無かる可し。之に反して才氣は少しく鈍くとも、一事を始めて長くその事に退屈せず、何時までも力行を續け得る人には、我が身を許して過失少なし。斯くの如き人は一時に奇利奇功は收むること能はざるまでも、身に激しき盛衰無く、而も終には安全なる地位を作り得て、心安らかに世を過すことを得。故に斯樣の人は、中々好ましき眞人なりと知り給ふ可し。

四　怠惰なる性癖を有する男子

いかに才氣に富み、如何に藝能を有する人にても、怠ける癖ある男子には、虛然と我が身を許し給ふ可からず。世は才氣藝能の外に撓まず勤むといふ美性を有する人ならでは、常に運命の平均を保ちて世を安らかに送り得ざるものなり。之に反して才氣には乏しくとも、また藝能にはさまで秀でずとも、一事に勤めて心に飽きを來たさぬ人は、我が身を許して遙かに安全なり。斯くの如き人と相添はゞ、夜每の夢も安かる可し。

五　短慮なる男子

才智あり藝能あり。加ふるに現在地位あり富もある人にても、短慮の性癖ある男子には添ひ給はぬを宜しとす。短慮は得て我が身の德を殺ぎ去りて、往々事を破り易し。多くの美性を有する人にしても、ただに短慮なる性癖をば有するが爲に、友を失ひ世に棄てられ、終にはその身を不幸に沈まする人は世間に間々あることあり。斯くの如き男子に添へば、妻たるもの丶心遣ひは得も云ひ知れぬものあらむ。之に反して、才智藝能はさまでにはあらずともまた現在は地位高からず財產あらずとも、喩へば春の日の如き長閑なる心を有する男子ならば、眞人として損は無し。總じて斯くの如き人は、烈しき人には喜ばれぬまでも敵を作ることは少くして自然と人に愛せられ、中々福を得るものなり。斯かる男子につれ添ふ身は、生涯煩く咬みつくやうに、叱られぬ丈にても、實に無量の幸福なりと知り給ふ可し。

六　大言壯語する男子

餘り大言壯語する人には、虛然と我が身を許し給ふ可からず。世には「言葉多きは品少し」といふ諺あり。ゆめ／＼油斷して、その大風呂敷に包まれ給ふ可からず。斯の如き男子は撒れその氣のみ徒らに荒々しくして、何んの藝能もなき人なり。之に反してよろづ控目に物を言ひ、奧床しき謙讓の德を有する人は、それ必ずや心の中に光輝ある寶庫を有する人なりと見て、もし斯くの如き人より緣談の口かゝらば、擇んで應ずるがよし。一時の容貌風采などを云ひ立て可惜殿御を取逃しまゐらせては、是れ太甚しき不覺なり。

七　大酒を好む男子

何から何まで躾れ備へたる男子にても、大酒の癖ある殿御には、假令緣談の口かゝるとも、二の足はおろか、三の足も四の足も踏み給ふ

可し。これ男子の性癖中最も困り入りたる癖にして、かゝる男に添ふ時は、生涯妻の苦勞は絕へぬものなり。さりとて餘り下戶の男も望ましからず、斯くの如き人は、心常に沈み勝にて、一家に快樂の聲を殆んど絕てばなり。これは譯者のおまけながら、晩酌に一合二合位の笑ひ上戶の管卷ぬ男が最も妙なる可し。總じて大酒の癖ある人は、人と喧嘩爭論などして、到る所に敵を作り、終にはその身の破滅を招くに至るべし。夢々斯かる男を選み給ふな

八　負債を怖れぬ男子

いかに才智藝能を兼れ備へたる男子にても、負債をすることを恐れぬ人には、決して嫁入りし給ふ可からず。いかに材能ある人にしても負債の恐る可きことを知らざる人は、終にはその身の自由權利を束縛せられて、卑しき分際の人に向ひてまでも、貴き頭を低ければならぬは云ふまでも無く、やがてその身は破滅して、あはれな末路を見るに至らん。斯くの如き男子に添ひたる女子の不幸はそもや如何ならむ思ひやるだに氣の毒なり。返す〴〵も心し給ふ可き事ぞかし。之に反して倦まず撓まず厘毛を積み行く人には、進みて緣を結び給ふ可し。斯くの如き男子に連れ添へば、榮耀榮華は爲し難きまでも、終生衣食の憂ひは無からしむ。堅き夫定めと云ふ可きなり。

九　虛榮心に富みたる男子

虛榮は飾りなき僞りなり。斯くの如き不正なる心を抱ける男子は、生涯其の身を安全なる地位に置くこと難し。かゝる男子と連れ添へば、世を終るまで心に泣きて、顏には常に笑ふ可く餘儀なくせらる。世に是程の苦しみやあるべき、「虛榮は自殺なり」と云へるが如く虛榮な人は、我が身を殺ぎてまでも外形を飾り、妻にも常に僞れ〳〵と強ゆ。心苦しきことの極なり。而も僞り盡くして後は如何、人に面も合せ難き習に陷る、世間其例多し。これに反して少しも作り飾りの無き人、即ち正直むき出しの人は、我が良人として恐しからず。また正直なる人として、人に信用せられ、又愛せらるゝの結果、生涯却つて氣安く浮世の月日を送り得るの德あればなり。

十　世を悲觀的に見る男子

ヒユーム氏曰く、「總ての事物を樂觀するの習慣は、一年一千の歲入に勝りたり」と。實に世は斯くの如きものなるを、世間には常に社會の事物を我が心のおもひ爲しより暗く悲しくのみ觀察して、泣くものあり。世はこれを呼んで意久地無しといふ。斯の如き心に皺の寄りたる男子と一生を俱にする女子は實に不幸なり。斯くの如き人は、生涯思ひ切つたる仕事をも爲し得ず、常に他人の幸福に垂涎するのみにして、常に寒き日かげに縮み、怨嗟煩悶の裡に世を空しく送ればなり。之に反して總ての事物を光明的方面より觀察する男子は、良人に持ちて大いに利ありと知り給ふ可し。斯くの如き人は、如何なる悲哀に對しても、また如何なる苦痛に遭遇しても、心に絕えず樂しみの歌を有ち、雄々しく邁往敢行して、終に彼岸に達し得るを受合ひなり。かゝる男子を殿御に持つ女子は、生涯心強くして、心に憂ひ少し。故に斯樣の人より緣談の口かゝらば、勇みて契り給ふ可し。品性の卑しき男子には、決して連添ひ給ふ可からず。品性は人の心の匂ひにして、心に匂ひなき人は、常に人より侮りを受けて卑まる。この如き劣等なる人に一生を許して何んの幸福あらむや。寧ろその身は貧しくも、品性の高き人、即ち心の匂ひの高き男子をこそ我が殿御には望ましけれ。善々心し給ふ可し。



をりをり草

田中ゆふ風

九月八日

庭の白芙蓉三つ咲きたり。苔むしたる燈籠に、朝顔の白きも咲きからみて、池の彼方に、枝長う垂れたる萩は、眞盛りに、糸薄もやう〳〵穂に出でたり。一叢菊も茂りゆくは、やがて咲き出でんとや。勝れて美しといふこゝの空は、畵家の彩色も及ぶまじきに、月赤う出でゝ、虫の音もさま〲なり。

九月十五日

鶴岡八幡宮の祭禮なり。いつの年も、山車踊などいふものはなくて、七つの神輿の、町々を渡御あるのみとぞ。晝のほどは、源平池のめぐりを、やぶさめあり。暮過ぎては、神樂ありとて、幼きに責められてゆく。

太鼓橋を渡りゆけば、向ひの山際のいたう赤きより立待の月きらめき登る。一昨日こそ、この團なるを迎へんとて、手作りの團きものも供へき。たゞ二夜に斯うしもとあはれなり。

幅十一間、長さ七十間の廣場、祭りの夜とも見えずのどかにて、對ひ立てる杉林の小闇きがもとに、まばらに殘りたる店のかんてら、そゞろ寒き風に搖れて、六十あまり疊みなしたる石段の上に、菊の御紋の提灯二つ、靜が舞ひけん若宮八幡と、名だゝる銀杏とは、

闇きが中に暴く立つなり。

神樂は、拜殿にてぞあるなる。さすがに、見る人の一團づゝ集ひて、段の上にも居こぼれたる、棧敷めかしてをかし。

今し、美き貴女と、老いたる翁と、弓矢を持ちて舞ひあへるは、神功皇后と、武内となるべし。三韓を平げて、凱旋し給へると見ゆ。

俄かに御氣色ありげなるを、武内、あはてゝ内に入れ參らせたるあとに、例のをかしき面の下部出で來て薪を運び、釜を運び、ひさげを運びて、さて、爐にて火をするなど、さまぐ\ありて後、白き髮、赤き襷の老女出で來て、共に取まかなひ、やがて、御子抱き來れと、笛の音急に守歌となりて、互に、御子の頭を撫でつ、背負ひつ、畏さも忘れて愛で奉るほど、皇后出で給へば、武内の、禮々しくその御子を捧げ奉る。是こそ御位にとなるべし。

いづれも畏りて、此上なう嬉しげに、立たせ給ふを見送り奉るなり。

神々しき社、寂たる木立、千古に偉高き皇后、鶴の齡の大臣、淳朴なる下人のさま、まことに此世はなれたる心地もせしかな。

○

一の鳥居より二の鳥居まで、廣き大路の三つに劃られて、右四間、左四間、中に社道四間、それを劃りたる芝生の堤を、左右各三尺、兩側の溝三尺、合せて幅十四間の路を、若宮大路とぞいふなる。置石ともいへるは、社道に、昔、石を敷きたるよりとぞ、雪の下とも。

東の方相張山（一名屏風山とも）の松は、山のうねうねきりそろへたるやうに、丈の並びたるに、賴朝公富士に擬へて白き幕をそれに打渡し、まき狩し給へるより、此處をしかいふとぞ。

廣き大路に、空色ととりあはせよき綠深き松の高う並びて、一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居、大きなる石のを三つくゞりて、五六町すれば、由比が濱なり。左に突出でたる小壺の濱、その次は逗子、その次は

葉山、右は稲村ヶ崎、大島三浦は細く淡く見えて、白帆の影も遠く近し。

十月二日

開校紀念式の後、打つれて金澤にゆく。

朝比奈の切通しの險さを、喘ぎつゝ登るほど、兩側に滾ち落つる水、玉簾のやうにて、やうやう色づきたる木葉の散りかゝりたるも、友禪の模樣めきたり。

上りはつれば、茶店ありて、井のもとにひさくと茶碗との置かれたる。

下りは、滑るやうにして、いと狹し。

兼て定めつる千代本といふに



憩ふ。源頼朝が、三島明神を勸請せしといふ、瀬戸明神の前なり。庭には池ありて、鯛など遊び、椽の欄干長く、影は海に浸りて、彼方に野島の山立てり。瀬戸の秋月とて、八景の一つなるよし。こゝに月出でたらばと、推はからる。

晝飯したゝめて後、稱名寺にとて出立つ。

金澤山彌勒院とて、北條實時の建立のよし、實時、その子顯時の墓、後の山の中腹にありといへど、上らず。

門を入りて右の方に、金澤文庫を、形斗り再興さして、瓦葺の新きが立ちたり。

蓮池に架けたる石橋を渡りて

本堂に到れば、運慶作の地藏尊二體あり。温和くなつかしき面、衣の襞など、實に妙に刻まれたるものかな。
鐘樓の鐘、これをぞ稱名の晩鐘とはいふなる。
もと來し途を半引返して、野島ヶ崎にゆく。夕照の美を稱へらるゝ所とぞ。
その東の濱を乙艫の浦といひ、こゝの歸帆も八景の中なり、打寄する秋の浪に袂洗はせて立てば、夏島はやゝ大きく前に、それに隣りて、烏帽子島、まことに名の形して小さく、右の方には、遙に、伊豆の鋸山房州猿島など見ゆ。
波の音、松風、浮世の塵を掃ひ盡して、三保の昔ならねど、こゝには、天女も下り遊ぶべし。
平潟を過ぐ、中洲に下りて貝拾ふ人たち、是を落雁にたとふるとかや。まことに、此方より見るには、所所に黒く小さくて、鳥のやうなり。泥の中に手をさし入れて、かれも苦き世渡りを、をかしき見立にもあひしものか。
此處まで來つれば、其頃ならねど、木だにとて、泥龜新田のもと村長なりし、永島といふ人の庭を見る。牡丹に名あるなり。
大きなる木のみ。是の花咲く頃はと、思ひやらる。圍ひの彼方なる山の峡より富士の頂の見ゆるを、曇りたる空なれば、然とも思はず、猶よく見るに、まことに、それなりけり。雪いと白くかゝりたるが、そこには塵斗りの雲もなくて、いたうあらはに打出でたるあはれに珍らしう、思ひの外にながむ。
主婦なる人、母なる人出で來て、茶よ菓子よと懇にもてなさるれど、歸りを急げば、よきほどに辭して青嵐とや、松多き洲崎を過ぎ、瀬戸橋を渡る。橋杭なくて、下を、船の過ぎゆく。川の名を内川といふなるこゝに暮雪も八景の一つとや。橋のかたへに照天の松といふあり。照天姫が松葉にて燻されし處のよし。途次、小さく低き家のむら／＼見えて、煙の立上るを、何ぞと問へば、鹽屋なりといふ。鹽やく煙など、よき衣の模様となりたるも、見るには、なか／＼なり。橋に對ひたる君が崎のあたり、小泉の夜雨など、數へら

るゝよし。

休息所にかへりつきて、歸路は、逗子まで汽車にてといふもありしかど、一向鎌倉にゆかん方早かるべしとて、もとの途をかへり來。一日出でざりし日の入方の空をいと赤う染めなしたるも奇しう、すべて、遠足に便よき日なりき。

山水に珍らかならぬこゝの生徒すら、あはれあはれと呻きて賞でにし彼處よ。都の人に見せましかばと、歸りて後も、かへす〴〵。

松の下風

小川直子

世にたぐひなき富人とて人皆



に尊ばるゝ村井東望ぬしのなり所は相摸國の大磯の海邊にて富人の住家には名もふさはしき長者林とて色さへ常磐に彌榮ゆる老木若木の生ひ茂りたる松林の中にいとうるはしき館のあるなりけり此人の母刀自は孝子とて名に背かぬ親思ひの人なるが夏の暑さをよきにとてものせられけるをおのれもとより此刀自とは親み深う交はる中にしあれば諸共に來給ひてんやといざなひ給へるまゝにものしたりけりそも〳〵此館は此磯の東の方にあたりやゝ果ともおぼしくて先づ門の造りやうは古ふりのかや屋根にていとみやびなりめぐりには白くぬりたる木もて獅子垣め

きたるをばわたしたり奥深う入もてゆけば逼入のほどはいかめしうて實に富人の住居とぞ見ゆめる客人居のしつらひはたうるはしくてえもいはず好ましきに端居してなかめやれば松どもの女木男木ありてさま〴〵なる中を吹過て來る沖つ汐風いとすゞしくてあせあえたる衣にも秋のかよへる心ちせりはた松の木のまよりは花水川の流の末廣う入江をなし眞砂の中洲を一すぢへだてゝはるかに蒼海原の見渡さるゝに眞帆片帆のもゝちのふねども行かふがいと面白う見ゆ此なたの庭の面は芝生青々と見る、のみも涼しきに右のかたには廣らかなる花園をつくりて花の木草をとり〴〵にうつし植わたされたり爰におりたちつく〴〵見れば名もしらぬ外國の木草數しらず匂ひわたりてうつくしきに久子孃が思ふ事なげにはしりありきなどせらるゝを見て

花園の薫をしめて遊ぶ子が
袖にはてふもむつれたはるゝ

など口すさびけるに妹のきみ子孃がよめる

朝な〳〵露のひぬまとゑみ初て
われをまつらん朝がほのはな

おのれまた

外國の木草の花もとり〴〵に
ゑみこほれたるそのゝ中かな

かく遊ぶほどにはや黄昏に成にければおもと人出來て入り給へといふまゝに入りてゆふげたうべぬいとも〴〵ねもごろにあるじせられたりさるは海山遠くへだたれる名所よりとりあつめられたる珍らしきものどもさま〴〵にてうじてすゝめらるゝは極樂の百味もこれにはすぎじとおぼえけりかくて暮はてければ今宵は闇なればとて庭にはかゝり火きら〴〵しうたき立て軒ばには美濃の國岐阜といふ所よりし出る灯燈のうるはしきをあまたかゝげわたしてけれはすゞしくてえもいはぬ氣色なり

つとめては、おのれひとり起きいでつゝ先づ松かげに至りて四方を見やるに袂すゞしき朝風の吹かよひたるに涼み臺に腰打かけてやすらふほどに、やう〳〵朝日のさしのぼり來て入江のあし、または、ほとりの畑

にう忍なめたる唐もろこしとい
ふ畑つものゝ白露に日影のうつ
ろふが、きら〳〵しう打なびき
たるはこがねの玉のゆらぐかと
あやまたるゝは實に富人の家居
なれば思ひなしならんかゝる所
にこそ鶴もすむならめとおぼえ
て

濱松に朝日さすなりたつむらの
　つばさやすむる宿りなるらん

また

世のうさをわすれて涼む松蔭は
　はこやの山のこゝちこそすれ

これよりひと日ふた日は雨う
ちふりて神などもとゞろきわた
りたればたれこめてのみ人皆も
文机により居けるが折しも阿部
優子刀自よりせうそこ文おこせ



給へりけるは孝子刀自とおのれ
とふたりの名あてなれば喜ひて
開き見るに此ほどの暑さのこと
などこまやかにておくに

海山をなかめなからに唐大和
　ふみ見る友のやどりゆかしも

とありければ返しに

海山のけしきを見つゝ朝ゆふに
　きみがあれなどかたりあひ皃

また

暇あらず君もとはなむ松蔭に
　涼がてらやものがたりせむ

孝子刀自のかへし

海山をながむるごとに君の事
　わするゝひまもなき我身かな

大磯のいほりに宿る師のきみの
　をしへのもとに暮すたのしさ

などいひやりて夜にいりけれ

ばかるた遊びなどせらるゝ少女だちに打まじりてざればみあへるもまた、をかしかりけりかくて過行ほどにいつしか弓張月の頃ともなりぬれば老も若きも庭にいでゝ遊べるに花園の蓮池も水底すみてすゞしければ孝子刀自が

　蓮池にやどれる月の影見えて
　　いとゝすゞしき夏の夜半かな

きみ子孃か

　花園に秋まつむしの音をきゝて
　　夜露をてらす月を見るかな

などよみいでられけるに、しばしありて村雲のたゞよひいでければおのれ

　沖つ風ふきはらはなんすゞみして
　　ながむる月にかゝる村雲

かゝる事いひ〳〵てあかし暮すほどに孝子刀自の三女なる、梅子のきみ、また竹垣よし子などふりはへて來給へりけふの暑さの堪へがたさ、やらん方なしなどいひて汗のごひつゝ何くれの物がたりして喜びあへり

折しも西瓜をいだされたる、これはた平の都なる横の島といふ所よりとり寄せられたりとてこき紅の珍らしき迄うるはしきを眞白なる玉のうつは物にもりていだされければおのれとりあへず

　白玉のうつはにもりし紅の
　　うりは見るだにすゞしかりけり

かゝる遊びの盡せぬ樂しさなるに日も夕暮のころと成りぬされば例のさま〳〵なるあるじまうけに飽きみちたる折から月はなやかにさしのぼりたればきみ子が

　師のきみとかたらひつゝも大空に
　　すゞしくすめる月を見るかな

うの子刀自か

　うしほあむ人は歸れる大磯の
　　濱づたひしてすゞむ夜半かな

同じ刀自か五位鷺の鳴くを

　夕月夜友よぶさきの聲きゝて
　　すゞむ磯邊に秋風ぞふく

みぎりのまがきに尾花の穗にいでゝはつかに打なび

くを見て孝子刀自が
名にしおふ秋のもなかの月影を
　まちかね顔にまねく小薄
またうの子刀自か
大磯の庭のすゝきの穂なみにも
　秋のけしきの見え渡るかな
竹垣よし子が
糸薄かけやさしくもうつろひて
　宵々ごとにすめる月かな
うめ子のきみが
くまなくも照月影にあくがれて
　小夜更るまでかたりけるかな
漁火の影をちこちにほの見えて
　月かげすゝし大磯のはま
孝子刀自が
晴わたる光すゝしき月かげを
　青海原にうつしてぞ見る
おのれ



はてもなき青海原にてる月を
　濱松がえの葉こしにぞみる

今宵は村井ぬしをはじめとして男のきみだちあまた居給へばおのも／＼時にあひたる唐うたうたひ。そさなき兒子だちは唱歌などをもうたひ連て樂しめるほどに夜もいたう更にければ皆ふし戸に入りて枕につきぬ

　かく日毎／＼にさま／＼の遊びをして暮すなる事にしあれば外國ふりのテニスとかあるはコロツケ此外にもくさ／＼の遊びありて樂しめるが又おのも／＼我好める方に心ひかれて我は釣こそおもしろからめとて釣糸くり出しつゝ入江をさしていづるもあればかたへは今日は汐も干

かたに成りぬいざ〳〵と淺瀨におりたち貝ひろふもありてしやみよあさりよと我こそ多くひろはめといひてふくつけがるもありそが中におのれは老たればとて渚の松がねに腰打かけて休らひつゝながむる程、よはひものぶる心ちして樂しき事たとへむ方なし暫しありて孝子刀自小川刀自も入りてひろひ給ひてんやとそゝのかさるゝに、さばとて水におりたち諸共にきそひあひつゝひろふもいとをかし

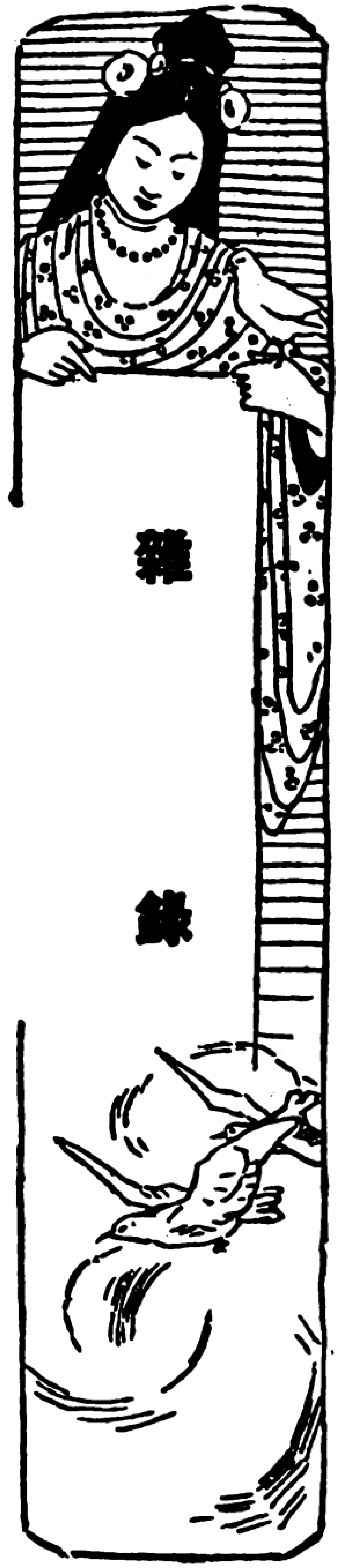
またひと日のあしたには小舟に棹さゝせて入江にうかひ中洲に至り海原遠く晴渡る沖つ汐あひを見渡せば薄霧の絶え〳〵なる中より伊豆の大島それかあらぬかとおぼつかなく見え左の方によりて江の島近く手にとる斗に見ゆるもまた面白し此日は沖つ汐風なぎわたりてもゝ千のふねどもこぎ連て心ゆくさまなればおのれ

　友ぶねのさして行らん港には
　　けふ〳〵とこそ妻のまつらめ

かくなぎわたれども汀に寄る白波のひまなきさまもあはれにて我いにしへのうかりける世をさへ思いでゝ

　吹わたる風にもまれて寄せ歸る
　　なみのくだけに浮世おもほゆ

わがすぐせやいかなりけんと口をしうはづかしと思ひし折もありしはやと思ふにつけても今のうつゝ世には道を守りて德を積み萬に情深うあらまほしとぞおもほゆるかゝる事つく〴〵思ふにも村井ぬしの尊とさこそめでたけれ大方の人は寶を積みて山をなすに至ればいよ〳〵高くつままほしくていそしむほどに、我しらず吝嗇にたちいるたぐひ尠からずされど此村井ぬしは溫和にして慈愛の心深く素よりはらからの中らひ睦ましく諸共に家業をもいそしみ給ふ事は世の人のあまねく知るところなればうからやからのためには心を盡して惠み給ふさまいとめでたしさるのみならず母刀自諸共に慈善の心深く世のため人のためとしいへば幾千萬の黃金をも露もをしむこゝろなく偏に深切なる心よりいでゝものせらるれば其惠を蒙りて身をたつる人尠からずされば此たちには貴も賤も老たるも若きも立寄る人あまたありていと賑はゝしう日を送らるゝさま見るのみも心ちよし斯くうるはしき心なればおのづからみやび心もありてうからどち敷島の道などにも心をこめてものせらるゝなりけりさるからにかゝる住居もふさはしう一きは甲斐ありげに見るこそいとめでたけれ



樺太の風物

小笠原參謀談

樺太占領の當時狀況視察の爲め海軍々令部より派遣されたる小笠原中佐は歸來水交社に於て巡遊中の觀察談ありしがこゝに其の風俗に關する部分だけを採錄して讀者の一覽に供す

▲樺太の住民

一體サガレン島には人種が五種御座います、夫れは尤も露國人の外です、ギリヤーク、アイヌ、オロッコツングース、ヤクーツの五種族で其中の最も多いのはギリヤークですギリヤークは重に島の北の方に住んで居ります、アイヌは南の方に住んで居るオロッコは其中間に居る其外の二つのツングースとヤクーツは極く僅な人數ですツングースは百五十人ばかりヤクーツは十幾人しか居らない私共はギリヤークとオロッコとの二人種に交際つたのです、オロッコ人の中にパルヒと云ふ奴があつた、是は酋長の息子で中々勇敢の奴で、既に私共が參た時にも、其兄弟が熊狩りに山の中へ行つて居ると云つて居りました、此パルヒと云ふ奴が日本語を遣ふから通辯としてつれて行つた、すると自ら小蒸汽の舵を操る所に乘つて、或は右し或は左して自在に漕ぐ、其水路に詳しいとは實に驚くべき程で、中中巧に漕ぎました、一體此附近のオロッコは性質が善良で機敏で日本語を解するものが多い私共が河を上りました其翌日、色々の人間が船へ遣つて來た、アイヌも遣つて來れば露西亞も遣つて來る、オロッコも亦た

遣つて來たが、其土人共は少しも騷がしくない、極く靜粛でありました、其時には物を交換に來たので熊皮と米、或は鮭と麥粉と換えると云ふやうなことであッたが其數を大騷ぎをして調べると云ふともない、イクヲ與れと云ふことも言はない、此方の言ふがまゝに取換えて靜かに歸りました、其時パルヒも來たが、豫てパルヒに遣るべきものは別にして置いた所が、イクラ與れるかと聞きもしない、是れは面白い現象で能く導いたならば大變日本の爲めになりはすまいかと思ふ、何しても此連中は陛下の臣民になつたので吾々同胞の一人であるから斯う云ふ性質を御承知になつて置くが宜い。

▲ギリヤークの村

アレキサンドロフスクより二十海里の北方にギリヤークの村が澤山あるギリヤークはオロッコから見ると餘程懶惰で猜忌心が深い、私共が見ました處ろによるとギリヤークは丁度朝鮮人と同じ種類のやうに思ひます、朝鮮の未婚者が髪を結んで垂らして居るチョンガーと云ふ奴、あの通りの恰好をして居る、オロッコは頭を摘んで居ります、夫れもチョキ〳〵自分で勝手に刈るのだから食ひ散らしたやうな恰好、兎に角散髪です、夫れからギリヤーク人は五六寸位の刀を帯の所に差して居る、其外色々の物を胸へ差したり、懐に入れて居りますが、オロッコは海豹で作つた靴を穿いて居る、其靴の中に色々な物を入れて居ります、であるから髪を結んで下げて居る奴がギリヤークで散髪になつて居る奴がオロッコと云ふことは直ぐ判ります。

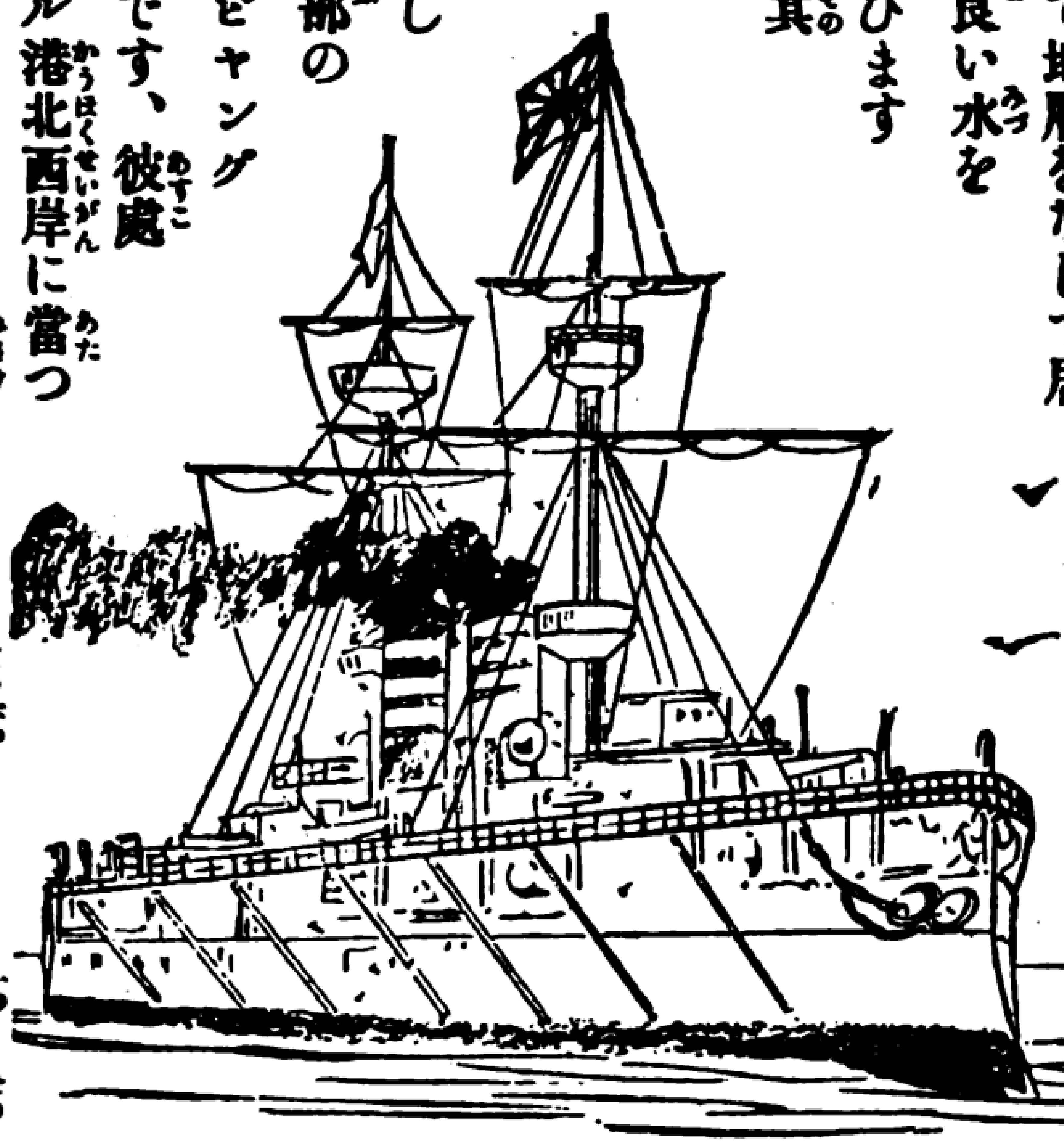
▲土人の奇習

話は少し違ひますが此ギリヤーク人の中に死人があつた時は、夫れを粗造な箱に入れて擔いで三里なり五里なり遠くに死人を棄てる林がある其所へ持つて行つて木から木へ丸太を渡し、其丸太の上に箱を載せて雨露に朽ち去るに任せてある、爾の林に行つて見ると、所謂白骨累々たる有様です、又此邊の土人は開戰以來日本人が少しも來て與れないから、穀物、酒、煙草などは皆無で、只魚類のみで生活して居ると言つて、頻

にコボして居つて片言交りの日本語で酒ない米ない魚ばつかりと斯う言つて居ります、又ルイコフに達する途中のワラチ河までは土人の小舟で溯ることが出來るさうです今申す通り草が枯れて地層をなして居る地質ですから底を掘つても良い水を得ることは困難であらうと思ひます即ちオロッコやギリヤークは其死水の溝泥見たやうなのを掬つて飲んで居ります。

▲鮭鰊の漁場

一寸漁業の場所のことを話して置きます、樺太の漁場は北部の方ではコロワチヨーフ岬からピヤングラ即ち黒龍江の口北方の東側です、彼處が好いさうです夫れからバカル港北西岸に當つて居ります夫れから極く北端のエリサベス岬からマリー岬の間のドン詰り南部の方では七郎灣内は一體に魚に富んで居るやうですが私共の海豹島に上りました不



在中船で士官が釣を垂れた所が丁度二時間ばかりの間に鰈の一尺から一尺五寸位のものがバケツに十杯ばかり釣れました、夫れから卒の方で漁つたのが四斗樽に三杯位、尤も鰈は餘り甘くはない、フライにして食へる位のものだ、併し此一事を以てしても如何に此邊の魚類に富んで居るかゞ判ります、私共は餘り釣をしたことはありませんが珍らしいから海豹島の沖で釣を垂れると大きな鱈が掛りました此位魚類に富んで居ります。

▲土人の飼犬

犬のことを一寸お話します、犬は彼等に取つて非常に大切な動物である、冬は橇を曳きますし、又夏河の邊を溯る時には土人が船に乗つて犬に綱を附けて陸を引張らせて行くです、デ一番先きに極く馴れた犬が行きて、其

後から行く犬は先へ行く犬の號令に從ふと云ふ風だ、ソレで後の犬が若し力を出さぬと、先の犬が嚙み倒すと云ふ話、此犬を育てるには何うするかと云ふと、生れ落ちる時から直く首の所へ紐を括付けて、比較的重い物を結び付ける、爾うして何か食物を先の方に置く犬は其食物が食ひたいから重いものを引張つて行て食ふ、それから段々重い物を付けて、爾うして段々遠くまで行かなければ其食物が食べられないと云ふやうにして馴らすのです、夫れ故肩から胸へ掛けて筋肉の發達が非常なもので、是れは彼等の中で極く良い犬になると、日本の金にすると三十圓から五十圓位の賣買の價値を有つて居ると云ふ、散々使つて肉でも食ひたいと云ふと殺して其肉を食ひ、其皮は着物にするのですから、中々大切な動物であります。

▲馴鹿の話

夫れから諸君が御覧になッた馴鹿はパルヒが周旋したので、既にパルヒ自身が二百頭も持つて居ると云ふ併し是れは夏の中は重に山に放してあるから、冬になると連れて來て橇を引かせるのである、尤も五六頭は始終一軒の家に繫いである、此馴鹿は何が便利かと云ふに、犬は旅行に連れて行つて橇を曳かせるにも犬、夫れ自身の食物を持つて行かねばならぬが、此馴鹿は何處へ連れて行つても少し休む暇があると、雪を掻分けて食物を涉獵り、或は雪ばかりを食つてもイクヲカ凌げると云ふことです是れは大變面白い、又此時にコンナ話がある、鮭を少し買はふと云ふので交換したが丁度鮭が十ばかりありましたが麥粉の袋一俵と換へました、一寸價格にして二圓五十錢位のものです夫れから酒を大變好む、で或る物と酒を六本と換へた所が、其酒が麥酒だつたから何とか言つて來はしまいかと思つて船を漕出して來ると、土人が追蒐けて來て、是れはイケない、本當の酒を吳れと言ふ、イヤ本當の酒は今日はないから、明日船へ來い、本當の酒を遣ると言つたら夫れで承知して、其麥酒を返したが、自分が渡したものは本當の酒を吳れるまで、受取つて置くとは言はない、是等は餘程日本人を信用して居る結果では

あるまいか、夫れからパルヒが鹿を持つて居ると言ふからソンなら吾々が船に積んで持つて行きたいと言ふと、其所から二十露里山の中に放してあるのですが、明日船に持つて來やうと言ふ、併し翌日は出帆することゝなつて居るから遲くなつては困る、正午などゝ時間を言つても判らんから、仕方がない、お天帝樣が頭の上に來るまでに持て來るかと言ふと、乾度持つて來ると云ふ、私共は怪しいと思つて居つた所が、其翌日チャンと夜明け頃に海岸まで持つて來ました、偶々我我が行つたのであるけれども、其邊の子供は少しも怖えもせず、砂糖など遣ると喜んで直ぐに持つて歸つて行く位です、此オロツコ人などは土人の中では比較的善良機敏のものでありますから敎育を施したならば多少役に立つことがあらうかと思ひます。

▲海豹島

私共は海豹島を見る積りで參つた所が、シケで中々上ることが出來ない、一體此海豹島は片岡岬の南方にある此海豹島は全島岩で成つて居ります、南北に伸びて居つて殆ど卓子のやうな形をして居る、遠くから見ると殆ど船の着くと云ふ樣な場所はない、デあるから少し西風でも吹込んで來ますと、到底上ることが出來ない、暫く晴れを待つて居りましたが、見込がないから其所は止めて了つて、後で行くと云ふことにして、北の方へ行きました、丁度其參つた時が七月の十一日です其時に初めて餘程寒いと云ふことを感じました、十一日は正午の一番暖い時が四十九度でありましたが翌日即ち十二日は四十六度位まで下りました、夫れは尤も風のドン／＼當る所に寒暖計を置いたのではありません、チャンと覆ひをしてある所に置いたのである片岡岬を廻つて東の方へ行きました、生憎東風が吹込んで來て非常に大きいウチリで私共の乘つて行つた船は五千何噸と云ふ大きな船で、戰爭が始つて以來海がシケで卓子に枠を付けたことは僅に一度しかなかつたと云ふことですが此時には二十五度から傾きましので枠を掛けました、斯の如き大きな船でさへも非常に動搖する位ですから驅逐艦は何うであるかと思つて非常

に心配しましたが、餘りウチリが大きいから却てウチりの上へ乘つて行けると云ふやうな譯で、存外安全に行くことが出來たので御座います。

凱旋土産

友金豐之助

滿洲では婦人が室内に蟄居し世間の人に接せざるを淑德の女として貴ぶと云ふ風がある、余は出征以來殆ど一ヶ年を此地に過したが、其間曾て一回も彼等婦人の外出を見た事がない、かの山川を跋渉し田圃の勞作するが如き婦人は到底見る事が出來ない、余も最初の程は我が兵士等を怕れての故と思つて居たが、居馴親んで土地の事情を知つて見ると、全く然うでない事が分つた、即ち彼等は多年の習慣として終日薄暗き陋舍の内に蟄居し、唯僅かに被服の裁縫、修理と三度の炊事をなすのみと云ふ事が分つた、ソレデ若し偶々旅行する時には、僅か半里に足らぬ隣村に行くにしても、決して徒歩を用ゐず、遲々たる驢馬の背を借るか或は馬車を備ふのが常である、萬事が恁う云ふ鹽梅式であるから、彼等は全く運動しないと云つても過言ではない、故に顏は蒼白く、手足は絲の如く瘠せて、體軀亦た蚊細く、殆ど風にも倒れん許である、然し斯樣に支那婦人の體軀が發達しないのは、以上述べた如く運動の不足にもよるべけれど、又た一面から觀察すると食物の粗惡が大に影響を及ぼしてゐるのだと思はれる。

滿洲人の食物は概して粗惡である、其の常食は高粱、粟、野菜等で、中にも高粱と粟とは飯に炊いて三度々々口に入れる主食物である、肉類と云つては唯だ一の豚肉あるのみで、時には牛肉、雞肉、魚肉等も用ゐぬではなけれど、平生は殆ど膳に上す事がない、只だ年中の盛典なる祭祀日丈に用ゐらるゝのである、野菜には馬鈴薯、豆類、瓜類、大根、葱、韮等があれど普通には煮ないで生の儘食するのである、ソレモ一寸洗つた許の所へ妙な味噌を付けたまゝで、嚙ぢるのですから、實に驚いた話です。

次に服装を見るに、婦人の衣服は總て筒袖で、短きは腰切り、長きも膝の少し下に達すより長きは無く、デ其を留めるにも帶や紐で締めるのではなく、たゞ胸の右脇を釦で止めるのみである、足には恰度我邦の男子が着用する「パッチ」……の様な物を用ゐ、足を入るゝ所を二つに離し、紐にて腰の上に縛り止めてある、而して着物の裾は足首の所にて紐をもて結んでゐる、實に滿洲婦人の服装は長い邪魔になる袖はなく、歩く度に足に纏り付く裾はなく、窮屈に胸部を締むる帶はなく、大に身體に自由を與へ且つ其の發育に適ふ様に出來て居る、此の點は日本婦人の服装に優る數等である。



衣服の種類には「イーサン」「カンジャー」「クーズ」「タヲフア」等あり、「カンジャー」は「イーサン」の上に襲ね、「タヲフア」は「クーズ」の上に被るので、孰れも單衣若くは袷衣である、色合は藍が最も多く、紫、綠、之に次ぎ、他には餘り變つた色を用ひず、一般に縞柄なき無地の硬い木綿を用ゐてゐる、然し晴着には色々の縞や模様のある支那絹があるが、殆ど着用した所を見たことが無い、普通に見る所では何の婦人もすべて悉く藍色の木綿服を用ゐてゐる、斯う申せば慥かる装飾なき異様の粗服は或は婦人天賦の美容を殺ぎはせぬかの疑が起るが、實際は仲々然うでない、彼等婦人の優婉なる容姿は十分藍色服の內より溢れ出でゝ、荒くれたる男子をも能く「チャーム」するので、其の質樸なる事寧ろ滑稽なる虚飾よりも遙かに優つてゐるのである。

扨て此等衣服の着用次第は、圖に示せる如く、(一)に「グース」を穿ちて裾を縛り、(二)に「イーサン」を着し(三)に「タヲフア」を「グーズ」の上に穿ち、(四)に「カンジヤー」を「イーサンの」上に襲るので、夏季は(一)(二)の外着用せざるも、冬季には(一)(二)(三)(四)を揃へて着用し、特に寒氣の甚しき時は「イーサン」や「グーズ」を幾枚も重ね着する習慣である、序手に衣服の調製の事を話せば、「イーサン」は手首まである筒袖、「カンジヤー」は「イーサン」の袖の無い物で長サは腰迄あり、地質は大抵金巾、繻子を用ゐ袷又は綿入である、「グーズ」は我邦のパッチの様な物、「タヲフア」は「グーズ」の上に穿つ物で左右の脚が別々に出來てゐる、而して胴の裏より股の上にかけて、斜に切落し、其の上端に三筋の紐を付け、之を「グーズ」の紐に縫せて留める樣にしてある。

衣服の事は此位に止め、之より少しく髪の話を爲やう、髪は我邦の如く雜多の種類あるとは違ひ、余の見た所では僅かに三種しか無い、即ち未婚女は三つ組の辮髪に赤き紐を垂れ、結婚して初めて結髪する風習である、故に既婚と未婚とは頭髪を見て直ちに知る事が出來る、其の結び樣の第一種は、一見我邦の稚兒髷の大きなもので、我邦の男のする樣に前髪を中央より左右に分け、其の餘の毛を頭の眞中に集め、根を結んで其を二つに分け、各々斜に後へ曲げて丸くなし、其の端を三組となして、根元に卷付け、尙ほ其の卷いた所より上へ一寸程の間赤き打紐を卷いてある、此の圓形の髷は裏より細い針金もて梯子の樣に作られ、所々に花などの飾が付けてある張を入れ、而して髪の下方に長い金屬製の笄を貫通してある、が、老若を問はず一般に此の結ひ方が行はれてゐる。

其の第二種は略結とでも云ふべく、我邦の櫛卷に似たものである。即ち前髪を左右に分けて其の餘の毛をギリギリと卷き束ね、火箸の如き金屬の簪を其の中央に通して留めてある、是も一般に結ぶ所で、前記の三ツ組に結はぬ者は皆是である。第三種は我邦の「兩輪」に似たものであるが、僅か一二度見た許であるから、

作遺憾其の結ひ様を記臆してゐない、要するに支那婦人の髷は雑多な種類なく、至極單純である、従つて頭の飾りも満洲では金屬製の笄と簪と、ソレニ大きな赤い花簪とがあるのみで、櫛などは一向見受た事がない。

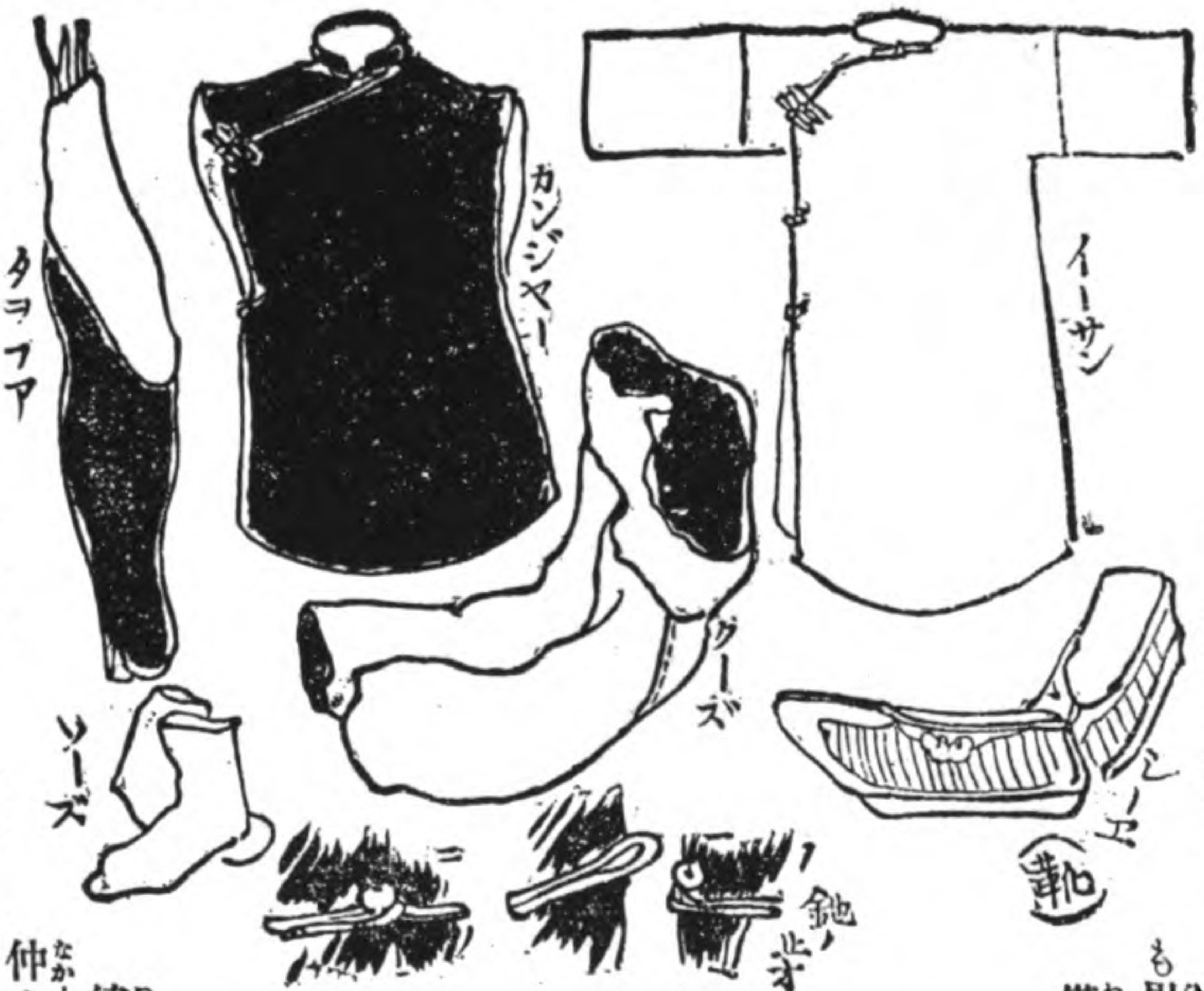
ソレカラ支那婦人の装飾で我邦に無きものは耳に金屬の輪を箝めることである、其の輪は重に銀製で、彫刻を施したのもあれば、又は紫や青の玻璃をもて飾つたのもある、耳に輪を懸ける習慣は支那婦人に缺くべからざる修飾と見え、貴賤貧富の別なく、之を箝めて居ない者は無い、而も此の習慣は早くより付けるものと見え、二三才の小兒にして既に兩耳に痛げもなく穴があき、此の輪の通つてゐるを見るのである。



履物は布を硬く固めて造つた靴あるのみで、年輩により色が異り形が少く變つてゐると云ふ許で、其他に著しい相違は無い、小兒や未婚の處女は矢張り我邦の娘の如く赤好で、其の装飾の刺繍も黄や紅や緑を用ゐて仲々派手やかである、然し年増になると總て白、黒、紫等の色を用ひ、従つて装飾も地味である、又た形の上から言ふと凡て老若を問はず、晴衣に用ゐるものは裏が厚くて丈が高いと云ふ點が異つてゐるのみである、デ是等の靴を穿くには先づ「ワーズ」と稱へ足首の少し上まである木綿で造つた靴下様の物を下にはくのである、「ワーズ」は白木綿に限つて居つて、季節に従ひ單、綿入の二種

を用ふ。

支那婦人の足を見て氣の毒に思ふのは、纏足の弊習である、由來支那では女の足の小なるを尊ぶ所から、孩兒の頃より兩足を緊縛して其の發育を妨げる習慣であると聞いて居たが、今此の滿洲に來り見るに、左のみ足の小さい、步行に差閊へるやうな婦人を見受けない、是れ全く漢人に甚しく滿人には左のみないと云ふ事にも因るならんが、然し此の弊習の一般社會に重んぜられてゐると云ふことは、滿洲に住する多くの小女が悉く其の足を綁帶して居るのを見ても瞭然である折角完全の足を生れも付かぬ不具になすとは誠に馬鹿氣た習慣ではあるまいか。



支那婦人の智識は甚だ幼稚なものである、其と云ふも畢竟教育機關が無いからで、僅かに文字を解する者に就て寺子屋的に古人の文句を學ぶに過ぎないから、進步發達の見込がないのも元より其の筈である、然し針仕事丈は一般に普及し居るものの如く、衣服の裁縫、細工物など隨分器用である、殊に刺繡などは仲々巧なもので、大抵の婦人が皆な心得て居るやうである、靴に枕に貰入に種々の花卉模樣が繡ふてあるが、何うして〱仲々器用なもので、殊に其の圖案の高逸なる、意匠の優美なるは婦人の美術心を表し、何となく奥床しい感がする、砂中にも燦爛たる金が在

るといふは此の事である。
音樂も亦た甚だ幼稚なもので、樂器と言つても僅かに我邦の三味線、胡弓の如きものゝ外は見受ず、而も其の構造の不細工なるは驚く許である。
支那婦人の嗜好はと聞くものがあつたら先づ第一が喫煙と答へやう、彼等は常に右の胸の邊に煙草を入れる巾着を垂らし、片手に長き煙管を持つて、スパ〳〵吹かしてゐる。而して如何に煙草を好むかは、室內に居る時にも舍外に出づる時にも始中終、煙管を放したことがないのによつて見ても分るのである、
以上は余が軍務の餘暇を偷んで觀察した所であるから、元より其の一斑に過ぎぬのである、讀者乞ふ之を諒せよ。

大山大將夫人の凱旋談

去月なかばの事なりとかや愛國婦人會の某夫人が、滿洲軍總指揮官として武名赫々たる大山大將閣下の令夫人捨松子に遇ひて大將の凱旋も近きにあるを賀し奉り、就ては何時頃御歸京あらせらるゝやと質ねまゐらせたるに、捨松夫人は例の捌けた調子にて
「左樣で厶います世間の噂さでは年內に凱旋する樣に申ますけれど宅の方へはまだ何等の通知も御座いません、併し何れにしてもモウ山が見えたので、凱旋は何時でもよいので厶います、或は政府の命令で一と足先に引揚げる樣な事になつたかも知れませんが、どうして貴方……長い間苦勞をさせた部下を殘して自分一人先立つて歸へられませう、部下と云へば我子も同樣なもので、夫りやア命令で動かせば動かすものゝ、全く部下は自分の手足同樣、シカモ戰場で勞苦と寒暑を俱にして來た以上は、同一に歸りたいで厶いませう、家族の者にすれば、戰爭は止み平和克復となつた曉の事で、一日も早く凱旋をして、お正月の餠をさし上げ度いと思ふのは人情ですが、職務には代へられません、第一自分丈け一人歸つて、國民の歡迎を受けるのは嘸ぞ心苦しい事で厶いませうから、矢張來春が眞實らしく存じます」と相變らず元氣な御挨拶、且つ云はるゝやう「私は夫れ迄面白い病院の仕事を手傳つて居りませう」
と言捨て澁谷の赤十字社に赴かるべく俥を急がし玉ひしが、其を見送れる某夫人は良人大將にも劣らざる夫人の雄々しさに、いとゞ崇敬の念に堪へざりけるとなん。

東郷大將歡迎の一日



東郷大將歡迎の一日

古今未曾有の大觀艦式を東京灣内に執行したる翌日は我が二百萬の市民が炎ゆるが如き熱誠を以て東郷大提督を迎へたる日なりき。喜び極つて狂せるがごとき群集は巷に溢れて歡呼の聲は天地に震へり、二百萬市民の敬意は彩旗樂隊、提灯、緑門、凱旋門、紅燈、イルミナーシヨン、あらゆる物體に表示されて、八百八街を忽ちの間に滿艦飾に變せしめたり、是れしかしながら一年八ヶ月の間狂瀾怒濤の間に敵艦隊を全滅して日本帝國を泰山の安きに置き、皇國の興廢を聯合艦隊の双肩に擔ひたりし大任務に對する國民的感謝の溢れたるものなりしなり。

當日新橋停車場より上野に致る沿道は殆んど寸隙を見ざるまで歡迎市民の堤を築き兩側の家より家に引渡したる彩旗は都門の空を掩ふて萬朶の錦を織り成したり東郷大將以下片岡、上村、出羽、瓜生、三須、其他の司令官、艦長等の馬車の徐ろに其間を驅けるや、萬歲の叫びは遠きより其影を迎へ、近くに從つて萬雷の一時に落つるが如き歡呼の聲到る所として一行を追はざるはなし、銀座通りより京橋、日本橋の各凱旋門を潜り市民が打ち振る帽子の波を破りつゝ萬世橋を過ぎ御成道を徐々と過ぎ行く間大將等は絶えず擧手の禮を以て之れに答へられぬ、軈がて上野公園近くに進み來るや群集は三橋附近の廣場を塡充し動々もすれば通路に氾濫せんとし警官は東奔西走之れが制止に困しみつゝありしが一行の馬車の近くや萬歲の聲と共に靜肅に其位地を保ち居るを見たり、夫れより一行の馬車は舊黑門前の式場入口に着し此處にて一同馬車を下り東照宮境内を通過し石磴を下りて馬見所跡の式場にと入込みぬ

▲歡迎會式場

馬見所跡には間口三十五間奥行七間の式場を建設し紅白段だらの幕と杉の緑葉とを以て之れを包み緑門と國旗とを以て之れを飾れり、大將一行の順路を經て式場に入るや劉喨たる音樂は場の一隅に起り馬見所廣場を塡めたる群集は一齊に帽を振り萬歲を呼號したり、

大將一行は市長の先導にて式場に上り上村中將を左に片岡中將を右に相并びて出羽中將、加藤參謀長以下各艦長副長及各艇長等二百餘名之れに次ぎ陪賓には德川貴族院議長、伊藤軍令部長、伊集院同次長、以下海陸の將官大本營幕僚重なる實業家、新聞記者等二百餘名一同着席大將の市長に導かれて式擅に座を占むるや前面の群集は又もや萬歲を唱へて暫時は鳴も止ざりき夫より小笠原流の凱旋饗膳の式あり、酌人は具足直垂烏帽子にて白木の三寶に勝栗と打鮑とを載三組の盃に土器と小箸とを取添白蝶を飾る銚子にて大將等に三獻を捧右にて式を終り、尾崎市長は起つて歡迎文を朗讀し、東鄉大將の挨拶あり斯くて主客一同精養軒の立食場に入る立食場は室內と室外天幕內とに設け主賓たる大將一行百七十餘名の諸氏は樓上樓下の食堂にて卓に就かれ其他の陪賓外數百名は庭園內の天幕內にて祝盃を擧け酒數行の後　天皇陛下萬歲聯合艦隊萬歲東鄉大將萬歲を三唱し次で東鄉大將は尾崎市長の健康を祝せんと提議し同大將の發聲にて市長萬歲を祝したり、此の間尾崎市長は遠來の米客ブライアン氏を大將に紹介し氏の爲めに萬歲を齊唱せんことを望みしに大將は快諾して握手を交換せられ一同ブ氏の萬歲を唱へブ氏は非常の喜悦を以て之を感謝し予も大將の爲め祝福を祈らんとて日本語の萬歲を高唱し滿堂割るゝが如くに唱和しぬ斯て歡聲場に充ち、興の盡くるを知らざりし

▲歡迎途上の東鄉大將

神と言はる東鄉大將の風采如何ならんと歡迎途上の群集はいづれも片唾を吞んで待ち扣へたるに忽ち東鄉大將來ると叫ぶものあり屹と彼方に目を凝せば裝飾美はしき花馬車は幾人の騎馬憲兵を先驅として綠門の綠りと反映し馬の足驅を緩めて徐かにその蔭より顯れ來りぬ、十數萬の歡迎者は、唯だ一種の感慨に打たれて醉へるが如く、手は唯だ無意識に帽庇の上に掛けられやがて場にある人の幾萬の帽子は唯だ躍り、唯だ狂ひて空中に亂雜なる大波圈を描くなり、忽ち萬歲の聲は萬人の唇を衝き出でゝ上野の山を轟かして起れり、萬歲、また萬歲と見れば先頭の花馬車の中に白髮温顏の一老將軍あり、其の答禮すべく擧げたる右手も打顫ふほどに、激しき感激に堪へ能はざるかの如く莞爾たる微笑を、其の黧みたる顏面に浮べ、稚兒の如く左視右顧して靜に潮の如き萬歲聲裡を過ぎ行きたり、嗚呼大將、嗚呼東鄉、是ぞ我聯合艦隊の軍の司にぞありける。

東郷大將凱旋の一日

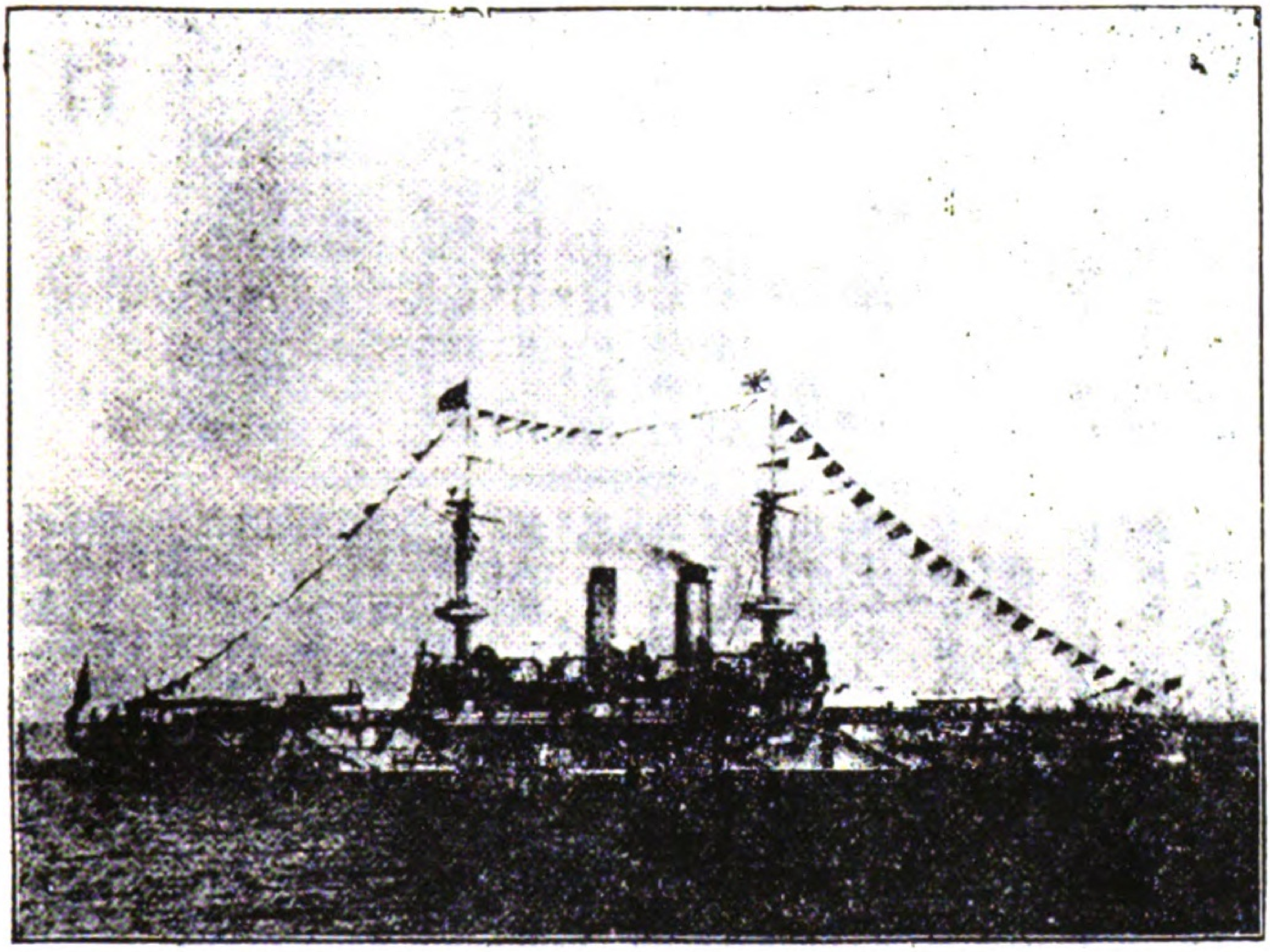
東郷大將の名は國民の誇り也而して今や國民は此誇りを以て其の凱旋を迎へんとす、天は美はしく晴れ家は麗はく粧はれ人は皆な歡び勇めり、滿目の光景すべて是れ東郷大將を謳歌し歡迎するものにあらざるはなし

五千萬同胞が滿腔の盛意を表せる我が聯合艦隊東郷大將、片岡、上村、出羽中將等各司令長官は去月廿二日午前十時卅分目出度く凱旋入京せられたり市民が歡迎は殆ど其高潮に達し其盛大なる開戰以來未曾有の事に屬す戰捷毎に擧げられたる市民の歡呼も此日の如く大ならざりき偉大なる東郷大將初め各司令官の勳功國民の渴仰を高うせるものあるに因らずんばこの盛況は見ざりしならん

▲新橋停車場の光景

は朝まだきより人を以て埋められ、旗を以て掩はれ街四方より集る各町、各團體、各學校の出迎者は停車場より皇城に至る間に人垣を作れり、海軍省役員は八時頃より出張して準備を整へ憲兵、巡査、衛兵は要所要所を警戒したり、又プラットホームには改札口左方に數十名の貴婦人令孃列をなし夫れより絹帽黑服の紳士、制帽佩劒の陸海武官、金章燦然たる外國武官等整列しつゝあり、此くて午前十時三十分に近づく頃芝濱の方面に當り煙火連發して列車の到着を告げ、歡迎者一同片唾を呑んで着車を待ちしに、同三十分に至り東郷大將一行を乘せたる凱旋列車は汽關車に旭日旗を交叉して徐行進入し來りて豫定の位置に停車するや、出迎ひの伊東軍令部長、大將車室前に進み東郷大將は隨員と共に降車し出迎員と禮式を交換し續て上村、片岡、出羽各司令官は夫々隨員を率ゐて降車したり、東郷大將は今やプラットホームに立てり、世界の果にも英名を轟かせる將軍は黑の略服に旭日一等勳章を帶び極めて謙遜なる態度を以て衆人の前に立てり、飽く迄深沈にして飽く迄氣高く引き締りて意味多き眉目の間に渾然たる一團の和氣を湛へて口邊微かなる笑を帶び處女の如く下た向きになりて歡迎者に答禮しつゝあるを見

れば一種敬虔の念油然として覺えず萬歳を連呼せざるを得ざりき、斯の如くにして歡呼は大將の進むと共に廣がり、大將は一々是に答禮し、絕えて一語を發せざるも其の顏は滿足を以て輝けるを覺えたり、この時鍋島侯爵夫人は海事協會及義勇艦隊の婦人會を代表して花籠一個を捧げたり、大將は感謝の眼を擧げて之を受け二三歩の後之を永田副官に手渡しせり、斯くて平井作業局長官高橋驛長の先導によりて數萬人の歡呼の中にプラットホームを出で宮內省の馬車にて凱旋門を



通過し新橋の方へ向へり。

▲二重橋前の光景

東郷晴の氣爽かに二重橋外に集合せる歡迎の人潮の如く手にせる旌旗は紅雲彩霞の靉靆く思あらしめ芝生の綠松の翠此處のみ春風嫋嫋たるの感ありき櫻田門を入れば其右側に東京府立第一第四中學校職員生徒同師範學校職員生徒等の歡迎隊を組み、續て十重廿重の人垣築ける群衆は誠意誠心滿面に喜色を湛へて大將の參內を待てり、老婆あり、少女あり、色褪せし五枚羽織の田舍漢、商人、官吏、學生女學生等社會全般の人を集

めし群衆の我一にと前を爭へる活パノラマを見て如何に東郷大將の我國民に渴仰さるゝかを察するに餘りあらん、十一時を報ずるや遠雷の轟く如き萬歲の聲天の一角より響き渡り刻一刻調子を高めて群衆は異口同音に萬歲を連呼せり

かくて井上侍從武官の第一馬車につゞいて東郷大將は加藤參謀長、山下參謀の兩名と同乘して來れり今迄抑へし幾萬の歡迎者はこゝに至て天地も震撼せんばかり一齊に萬歲を唱へぬ鬚髯蓬々として著しく白髮を混じたる大將は極て沈着にして、しかも愼重なる風姿を以て終始歡迎者を熟視しつゝ、一々手を擧て答禮せられたり、其謙讓なる態度は如何に無數の歡迎者の胸中に響きたらん、つゞいて片岡中將、上村中將、出羽中將の順序で馬車を列ね各方面に莫大の勳功を荷ひし此の勇將が揃ひも揃ての凱旋をこゝに歡迎することの出來る自分は何たる命冥加の者ぞと感泣する老人もありき、やがて儀仗兵が通り海軍大臣軍令部長の馬車が過ぎる比には、大將の馬車は第二の橋に差しかゝり、雲深き九重の御城の內へと入りたりけり。

▲東郷以下四提督の參內

かくて大將の一行は先づ正門を入り侍從武官の御迎を受けて御車寄より參內西溜の間に誘導され次で大本營會議參列の各員式場なる千種の間に進行し玉座の右側には桂總理大臣寺內陸軍大臣以下大本營陸軍幕僚及び職員整列し左側には井上伯爵、山本海軍大臣、伊東軍令部長及び大本營海軍幕僚及び職員整列す軈て侍從武官長出　御を奏請するや　大元帥陛下には大元帥の海軍々服を召させられ同じく海軍御平服を召されたる東宮殿下幷に伏見陸軍大將宮、有栖川海軍大將宮、閑院陸軍中將宮、山階海軍中佐宮、北白川陸軍中尉宮以下扈從し侍從武官先導し奉りて式場へ出御あらせらるゝや東郷長官以下職員は侍從武官長誘導に依り式場に進行し恭しく敬禮の後司令長官は謹んで日露開戰の經過を奏上せられたるに　陛下には龍顏特に麗く詳細の具陳を聞召され終て優渥なる勅語を賜はり入御あらせられ東郷長官其他には東溜の間に於て立食の饗を賜は

りたり

勅語

卿カ統督スル聯合艦隊ノ能ク萬難ヲ排シテ空前ノ偉功ヲ奏シタルハ中外ノ齊シク瞻望スル所ナリ
朕今卿ヨリ親シク其戰況ヲ聽キ將卒ノ忠烈ヲ懷フコト更ニ深シ卿等其レ自重セヨ

▲內親王の御歡迎

同日午前十時の頃、菊の御紋章を施したる一輛の馬車は淡黃色なる蝙蝠傘を翳させ玉へる二方の姬宮を載せて海軍省の正門に入れり、萬衆の視線一時に御馬車に注ぐと共に見奉れば是なん高輪の御殿に居ます常宮周宮の兩內親王殿下が今しも東鄕大將の凱旋を衆と共に歡迎せんとて御微行を仰出されたるより、難有き御思召と畏み奉れる內にやがて大將通過の時刻に近くや兩宮殿下は小松、東伏見、梨本、華頂の各妃殿下を從へさせ海軍省樓上の御休憩所より靜々と御徒歩にて兼て設けられたる柵內の假棧敷に現れ玉ひぬ、コヽは霞關の大路に沿ひたる柵內なれば貴きも賤きも老も若きも皆な一樣に殿下に咫尺するを得たるこそ難有くも亦た畏けれ。

凱旋海將の夫人

振古未曾有の大捷を收めて今や闕下に凱旋せらるゝ時に當りて、海軍諸英雄の夫人を列記して內助の力の如何に偉大なりしかを窺知する、亦無用ならずとせんや。

▲東鄕大將夫人鐵子

偉勳赫々全世界を壓する東鄕大將夫人は其名を鐵子とよび、今年四十二と聞けど容姿頗る端嚴にして秀麗なり、料理、裁縫、生花、音樂の諸技に長じ、家政の任を一身に整理して毫も紊さず、傍ら愛國婦人會評議員として東走西奔婦人社會の傑才を以て稱せらる、殊に夫人の身を卑うして家政に服するの一例は、其洗濯物をさへ自らするの一事にあり。

▲瓜生中將夫人繁子

夫人は益田孝氏の令妹、婦人社會に重んぜらるゝこと既に世の知る所也、夫人は明治四年岩倉大使に從つて外國に赴き大山夫人津田梅子孃と共に留學多年、米國女子大學卒業生の學位を擔ひて歸り來る、かくて久しく女學校に教鞭を執られしが良緣を得て瓜生家の人となり、家庭整理の大任を全うして中將が偉才を助くること頗る多し。

▲梨羽少將夫人

夫人は不幸にして今はリウマチス病に罹り歩行甚だ惱む、然れども裁縫、料理、育兒の事一も怠ることなし。

▲島村少將夫人菅尾子

海軍將校中の美人、生家は山內侯の家士近藤某氏なり、年齡二十五歲、貞淑溫良の德、知るもの之を稱せざるなし。

▲三須中將夫人しさ子

上品にして如才なきは他に其比を見ざる令夫人、婦人界の交際家とは誰も知る所なり。

秋のよそほひ

女の羽織としては黒縮緬も衰へたり。先づ流行は色物に限るといふてもよかるべし、色合は模様物と同じく、年若の向きには小豆色、薄葡萄色、妻君向きには消炭色など、地質は縮緬なるはいはずもがな。少し變りたるものを好まれれば、山繭入縮緬、紬縮、鶉縮などよし。次いでは紋羽二重なり、紋織御召の無地なる、又は織色御召なども需要少からず。是等無地のものには紋は縫ふも縫はぬも隨意なれど、もし紋を縫はせんとならば目下流行の共糸なるがよし、澁い處に妙味のある者なり。而して其縫方に付いていはゞ、繍縫はシツコキ爲め流行せず、昨今は多く菅縫を好かるゝやうなり、蔭の相良縫は一層地味にして宜し縞の羽織向としては、縞御召に及ぶものなかるべし。次いでは紋御召なり。柄は着尺と大差なければいはず。小紋縮緬の羽織は一時の如く盛ならざれども、相變らず人氣多し、小紋の柄はこれぞといふ流行るものなく、只ハツキリと出づるもの一般に歡迎せらる。角通し、霰小紋、重松葉など相變らず宜し、色合も亦藍氣の濃きもの評判よし。それから羽織の紋について一言して置きたいのは黒色の羽織ならば五ツ紋に限るも、色物ならば三ツ紋とすべし。昨今紋の大なるは流行せず、八分五厘より九分見當にして、段々小さくなる傾きあれば、新に羽織を新調さるゝ向きは八分五厘位にする方經濟なるべし。同羽織裏地としては、緞子相變らず流行せり。されど近年裏地専用の繻子地の極柔かなる者出來たれば、其を用ゐらるゝも亦多し。模様は草花に限り、地色は薄小豆鼠色又は白茶地など、何れも色の薄きを貴ぶものゝ如し。次いでは紋羽二重、八橋地などなり。友禪羽二重には特に柄の奇抜なるもの多く、元祿模様の流行に伴ひ、大きな市松中に蝶鳥模様を入れたる、匹田入の亂菊又は葦に槌車など種々新柄ものあり。是等は輕くして着心よろし。新柄の中には褪紅色なる者特に多し、この色は將來大に流行の見込ある色にして、今日のオリーブ以上の流行を見るなるべしと察せらる。

家庭に於ける ネルソンと東郷

我が聯合艦隊の主將東郷氏が赫々の聲名を博するや世人は齊しく東郷大將を目して東洋のネルソンと稱す、東郷大將果してネルソンの如き人物なるか將たネルソン以上の人物なるか、其の人格、其の境遇、又其の戰功、及び世界的の聲名は其の時代を異にし、其の事情を異にし、又其の國情を異にするこの二英雄を比較して同日に論ずるは甚だ穏當なりといふべからず。唯ネルソン提督が其の海戰に於て空前の聲名を博したるとは聊か東郷大將と似たる處あるを以て世俗が其人物を並せ稱するも偶然にあらず、殊にネルソン提督歿後百年紀に相當する本年に於て空前の大捷を博し且つ其の紀念祭の沙汰せられつゝある昨今に於て芽出度凱旋されしを以て世擧つて東郷大將をネルソンに比する世俗的稱賛の辭又無理もなき事共なり、この頃坊間に古今の兩提督を比較して其の人物並に其私生涯を云々するものあり。今是を見るにネルソン、東郷の兩海雄其性格に著るしき相違點あるは何人も認むる處なるべし東郷提督は沈默の人なり。果決の人なりネルソン提督も果決の人なれど何れかと云はゞ上村中將の如く華々しき性格の人なりしに似たり、而して東郷提督に於ては奉國の觀念と千古の意力を見ると同時に、ネルソン提督には高潔なる功名心と熾火の情熱あるを見る、其國に致すのいさほしや一なりと雖も、其私生涯の方面に至りては極めて趣味ある相違點を見出すを禁じ能はざる也、

ネルソン提督の四十七年の生涯は或意味より云はゞ戀愛の生涯なりき。千七百五十八年に生れて初めて結婚せしは千八百八十七年なれば三十一歳の時なりしも、二十三歳の時或る少女に戀着して軍艦に歸るを肯ぜざりしが如く、超て三年或る牧師の女に想を懸けて煩悶せしが如き、軍艦生活の武夫としては東西事情を異すと雖も、寧ろ多情多恨に近く又其のネヴイス島司の娘にしてニスベツト博士の未亡人なるニスベツト夫人と婚を結びて綿々の情思端へ疎く、「予は御身に書を與ふるを以て御身より書を受けたる時に次ぐの愉快となすものなり、予は御身なくしては世に活くる事能はじ云々」と書き遣りしが如き如何に其の情緒の纏綿たりしやを想像するに足るべかりしなりこの點に於て東西國情を異にせる我が東郷大將を引くは聊か不倫の嫌なきにあらずと雖も二十世紀のネルソンと稱する俗間の賞稱に對して假設せんに東郷大將は少壯にして故南洲翁の麾下に人となり、日本武人の典型たる薩摩武士の間にあつて、武骨木強の生活を爲し、後ち英國に留學して操船の事を習ひしも天性寡默にして意志強く、是を以て其の青年時代に於ても絶て情事に關はりし事なく、其の結婚も又日本武人の習慣たる不見の結婚なりと、本年四十四歳なる東郷令夫人は當時十八歳の令孃にして、僅かに鹿兒島西千石町なる海江田子

爵の故郷より上京されしものにていまだ土音も脱け切らざりし時なりき。是れ日本武人の特色たる婦人に淡泊なるの致す處ろに外ならず而して今や家庭の清福徐ろに至り、夫人との間に二男一女を得て圓滿にして健全なる私生涯を開かれぬ。

されど英國のネルソンは之に異り、その私生涯は多情多恨の生涯なり、ネルソン將軍は晩年に至りハミルトン夫人との間に艶話あり私生兒なりと稱せらるゝ（或はハミルトン氏の遺兒とも云ふ）ものありて其戰死前に出發するに際してや、十月廿一日海上十里の外に佛蘭西の聯合艦隊を望みつゝ、と書きて署名せし政府への嘆願書に、ハミルトン夫人の幼兒たるトムプソンの爲めに國家より慈惠をたまはらむことを願ひつゝありしと、而もこれ自己の子なるか人の子なるかの疑問さへある程なれば決して家庭に兒童を擁するの樂は解せざりき。而して其ニスベット夫人を娶るや友人をして「ネルソンの結婚は英國海軍の一大裝飾を失はしめたり、凡て士官の結婚は國家の損失なるが殊にネルソンに於て然り、若しもネルソンにして結婚せざりせば英國の海軍は最大の人物を有したるに」云々と評せしめたるに拘はらず、彼は海軍の最大人物なり得し代りに其結果は十三年にして悲しむべき結果をもたらすに至りき、ネルソンが「予は離隔を以て御身を愛するに變化なし」と云ひしに答へて「古より鹹水と不在とは愛情を洗ひ去ると云ひ傳ふれど妾は此點に就ては異教徒なり妾は毎朝六幅宛の鹹水を被るとも妾の愛情は薄らぐ處なし」云々と答へしニスベスト夫人も、なぞやハミルトン夫人の爲めに其愛を奪はれて「妾は決して御身に於て仇しき行爲のなかりしを知る、妾は堅く此事を神に誓ふ」との語をなし離別さるゝの止むなきに至れり、但し其十三年に亙れる共同生活の中には隨分樂しき時もありたるらし、假令四千五百日の大部分は海上に生活されしにせよ、時としてネルソンの歸省は二人を小山に小鳥の巣を拵るべく許されたる事もありき、然るに一朝ネルソンがネーフルス港にてハミルトン夫人を見るや一度其獻身的の應援を受けたる時より、疾風迅雨はネルソン提督の家庭を見舞ひ、ニスベット夫人をして悲嘆の思をなさしめたるのみならず、ハミルトン夫人も亦現在良人を有するの身なり、此等の恨事はネルソンの心事をして常に多痛多恨ならしめぬ、然り死に至るまで提督は實に多恨の英雄なりしなり、惟ふに斯の多悲多恨なるこそ提督をして壯烈鬼神を泣かしめ、光榮天地と共に長きの戰死を急がしめたるものか雙方の性格異なれりと雖も火の如き情熱と鐵の如き意志とは其結果に於て同じきと共に其の偉大なるに於ても軒輊なかるべし、若し夫れ大海戰に出發せし二大英雄の心事に至りては大に異なり、夫れ東郷大將は家に子女ありと雖も皆成人以上なるが上に、宛がら大將を女にせし如き沈着なる哲子夫人あり夫人は武人の妻女として出征中紙撚を作り二年間に一反の紙衣地を作り居られし程の人故大將も思ひ置く事もなく出發されたりとは云ふものゝ大將出征當時の決心は宛から楠公が帝闕を辭せし心地の如かりしなるべく、竊かに生還を期せざるを物語られしとかされどネ

ネルソン提督の出征に至りては勝敗の結果こそ異なれ、殆むど項王垓下訣別の感ありしならん、當時佛蘭西の聯合艦隊は英國が全國力を賭しても擊破せざるべからざるの運命に迫る、時にネルソンは歸休してメルトンの邸にありしが一夕艦長ブラックウードが來訪し何事をか耳語するや、提督の脣はふるへり、此氣色を見て取りしハミルトン夫人は徒事ならずと早くも察し、提督が「唯だ出征するのみ安心して凱旋を待たれよ」と微笑しつゝ何氣なく語りしものゝ、其微笑のいとも寂しかりしかば、其決心の程も推しはかられ速に生死別の覺悟をなし滂沱として落る涙をせき上げつゝ「嗚呼君に分るゝことの如何に悲しきよされど今は國家存亡の場合なり、何卒祖國の爲めに勇ましく出征ありて芽出度凱旋あるべし妾はそを待ち申さむ」と許りの悲しみには提督も亦泣て夫人を抱き「アヽ勇ましきエムマよ、よくも言ひ與れしぞ我國に幾多のエムマあらば、又幾多のネルソンも有るべきなり」と英雄の情と兒女の痴と慟ひくらべて双涙を禁じ得ざりしと傳へらる斯くして斯の英雄は叔父サツクリングが二隻を以て佛艦四隻を破りしと云ふネルソン家の吉日にウヰクトリア號上に精魂を托し去りしなり、然るに我東鄕大將は無事に凱旋せられ而もネルソン提督百年祭日に前後してネルソン提督の海軍と共に大に威武を八紘に輝さむと欲す、加ふるに法眼坂上和氣靄々の家庭あり、後の英雄は前の英雄に比してその幸福や如何

東鄕大將と少女

東京市歡迎會の催されたる廿四日朝、尾崎市長は花の如き一外國少女を伴ひて入り來りたれば、座にありたる某少將は何故此處に來たられしかと尋ぬるに、少女は臆する色なく、今日は父に伴はれて東鄕大將に謁し、其握手を求めんとて來りしなりと答へければ、少將は乃ち已に席にありし東鄕大將を指して、彼の方こそあどみらるトーゴーなれ、行きて握手を求め給へと云へども、少女は頭を振りて、否とよ父君の仰せには東鄕大將は本日横濱より來着せらるゝ筈なり、決して東鄕大將は此席には居られざる筈なりと答へて信ずる色なし、稍々ありて少女は別室にある父に呼ばれて去り行きしが、父の話により始めて信じたらん顏つきにて、再び入り來り、欣び勇んで東鄕大將に握手を求めに行きしかば、並居る諸將軍も少女が父の言を信ずるの篤きに感じ、兩親の指導の程も忍ばれて誠に奥床かしき心地せられたりとぞ。

詞藻

塚越停春撰

《天》秋田　名古屋市主税町二丁目十三番地　玉村多歌子

こゝばかり秋のあはれの外なりき
　稲穂刈りほす門の千町田

評。淋しき景も、笑ひさゞめく秋も、並ひ寫して、田舎の秋の景情を一句中に歌ひ盡せるを見る。
同じ人の「山路霧」を歌ひたる詠に。
いざやとて草鞋の緒を結べどもわけ行く山路霧深くして。

《地》山路霧　越後三島郡日吉村　坪井わか子

霧深き山路たどるもおぼつかな
　雲の上行く心地せられて

評。暮く山路霧に迷ふの情を歌へるもの。雲の上行くと觀じたる、殊に面白し。
浮雲富貴を危ぶむものゝ、恐らくまた此くの如きの感あるべき歟。

《人》新婚祝賀　美濃國稲葉郡加納町二丁目　片田美濃子

限りなき限りやあると人問はゞ
　君が今宵の契りと答へむ

評。新婚祝賀の意を歌ひて殆ど至る。復た一辭の加ふべきなし。

秀逸

〇〇〇山路霧　東京小石川水道町四六岩淵春雄方　武田春江

見渡せば谷間は霧の海なれや
　峯を小島と埋み殘して

碓氷の山の舊道など、時に此景を見下すとあり。原作上句「上り來て見れば谷間は霧の海」に作る今改むること然り。

〇〇同　伊豫國越智郡四坂島　渡邊梅子

峯も尾も霧立ちこめつうづら鳴く
　聲するかたや山田なるらむ

「鶉鳴く」以下殊に面白し。

〇〇〇柿　河内國河内郡川路村　田中八須子

日當りの軒端につりし柿の實の

甘さは親の心なりけり

金言。

〇〇〇秋田　京橋南傳馬町三ノ八須貝方　高宮安子

八束穗のたりほにおける白露の
　たれるがうへにたれる秋かな

用調の巧妙を稱むるもの歟。同じ人の「山路の霧」の作に曰ふ。ふみ迷ふ山路の霧の奥深く人や棲むらむくだかけの聲

〇〇〇山路霧　淺草馬道八ノ五　窪田幸子

旅衣はる〴〵今日し越路なる
　かへるの山に霧立ちこむる

征途千里の山中霧に遇ふ、言外旅情多し。原作「初衣立ちて月目をこし路なるかへるの山に霧立ちのぼる」也。今改む。

〇〇柿　長野縣飯田町番木路　奧村鈴子

柿紅葉はやくも染めて秋の色を
　里より見する村時雨かな

其想其調共に妙。只惜むらくは題意に切ならずして、むしろ時雨を歌ひたる如き觀あることを。

〇〇秋田　大阪東區高麗橋　加島雄子

雀追ふなるこの音も身にぞしむ
　小田守るいほの秋の夕暮

秋を趣まさらむと欲するも自由ならず。

〇〇柿　麹町下六番町十七　本多ひろ子

からす鳴く遠かた村に日は落ちて
　賤が軒端に柿の實赤し

〇〇同　金澤市八幡町一五太田方　ますみ

山里のしぶ柿赤き小家〳〵
　夕風寒う唯薄日して

〇〇同　安藝國竹原町　松阪梅子

村はづれ荷馬つなげる店見えて
　色づく柿に日は斜なり

〇〇同　石見國邇摩郡馬路村　宮内登美子

戸ざゝれし賤が軒端の柿の木に
　鳥むれゐて晝靜かなり

以上四首、寫景如畫。

〇〇柿　岡山　小山松枝

つやゝかに夕日のかげも色そひて
　みのれる柿を稚子のゆびさす

妙々。

〇〇新婚祝賀　河内北河内郡交野村　前田縫子

とこしへに忘れたまひぞ嫁ぎてし
　あしたの心こゝろとはして

[illegible]全就の歌の意を用ゆれども「朝の心」として自ら新に意あり。

○○山路霧　弘前下土手町　成田よし

もみぢ葉の色も見わかず霧こめて
鹿の音籠ふ秋の深山路

○○同　名古屋白壁町二丁目　山村榮子

まれに逢ふ人さへわかず霧立ちて
夕べさびしき秋の山路

以上二首、一對の佳作。

○○秋田　麻布笄町三ノ九　積若葉

里人の心嬉しも穂に出でゝ
ゆたかに見ゆる秋の千町田

○○同　上總市原郡五井町　齋賀うめ子

刈るわせのたり穂の色はおしねにも
見えて豊けき秋の小山田

○○同　[illegible]賀町　島萬壽

露むすぶいな葉を風にそよがせて
千町田ゆるく穂浪よるなり

○○同　武州北埼玉郡騎西町屋代方　青柳菊生子

秋の田の豊穂における白露は
ゆたけき御代の光なるらむ

○○同　大阪東區[illegible]町月江寺島田方　藤喜代子

打渡す黄金の波のはても見えず
光ゆたかに朝日さすなり

以上五首、共に豊けき秋を歌ひて、共に見るに足るべき作也。

齋賀氏亦「稲」を歌ひて、
山里の秋をかくよと送りてし心は赤き稲に知られて。

○○山路霧　伊賀　服部かつ子

有明の月影うすう見えながら
山路をぐらし霧ふかくして

○○同　美濃國武儀郡東武藝村谷口　山田愛子

乘る駕籠に夢もゆらきて朝霧の
晴れゆく山路月幽かなり

以上二首、山路の霧の景色を詠じて、佳致多し。
山田嬢が「秋田」の作に曰ふ、
みいくさの晉子歸りてたしれかる今年の秋のにぎはしきかな

○○山路霧　福岡縣八女郡上妻村　堀江澄子

雲の上を行く心地して秋霧の
ふかき山路を越ゆる今朝かな

○○同　伊勢國津市　梅田優子

朝ぼらけ木曾の山路の霧深み
雲をわけゆく心地こそすれ

以上七首、[illegible]を聞ふす。

〇〇柿　山梨縣東山梨郡松里村　小林まつ子

同じ色に赤く實のれる柿だにも
あまきとしぶきある世なりけり

〇〇同　三州刈谷　關戸樂子

色にのみ心なとめそ善き色の
澁柿多くある世なりけり

以上二首、柿を假りて教訓の意を歌ふもの。

〇〇秋田　遠州磐田郡上阿多古村　富部ますゑ

露霜をおくての稲もいろ染めて
秋の田の面のうつくしきかな

用詞の巧を以て勝る。

〇〇秋田　神戸市下山手通五丁目七三　岸崎以志子

見せまほしゆたけき秋をそこのまゝに
つはものどもがかへり來む時

〇〇同　三重縣度會郡小俣村新田　吉村芙蓉女史

歸らじとのたまひし脊子歸りまして
戰がたりに秋の田を刈る

以上二首、出征者を假りて秋の田を歌ふ。共に見るべし。

、〇山路霧　河内國北河内郡川越村茄子作　岡市喜志子

朝立ちの小岐蘇路十里行けどくく
只霧のうちたゝ水の音

行路の苦想ふべきのみ。

佳調

● 熊本　安田文子
とつぎするなりしも今は長月の菊に千年を契りますらん

● 姫路　船戸ゆき子
十回へりの花も咲くべき相生の松に契りていや榮えませ

● 石狩　佐々木まさ子
母の病いえぬ背のきみ歸り來ぬたりほの秋の我身たのしも

● 前橋　宮内りき子
世の中の甘き澁さは柿の實の上邊よりこそ見えわかぬなれ

● 山城　澁谷なを子
世の濱に乗りて浮べと愛の神が撰りてそろへしつがひ鴛鴦

● 岡山　しげる
むらすゞめ落穂拾ふと田に下りて千代とことほぐ御代の秋哉

● 岡山　田中草子
豐けさも穂にあらはれて見ゆばかり稲かる里のにぎはひにけり

● 府下　須崎せん子
いつはりの表を飾る澁柿にくちびる汚す世にもあるかな

● 膽振　佐々木さわ子
澁柿の色に欺きて味ひぬさもしきものは人心かな

● 姫路　船戸ゆき子
朝ぼらけ狭霧に淡く包まれて峠路越ゆる旅ひとの影

● 西片町　枯草子
みやま路はきりの海とぞなりにける尾はなの濱の音はせれども

●　岐阜　佐光久子

霧にきりつゞく箱根の路八里嘶く駒の聲ゝすれ行く

●　伊豫　天野八重子

いや深く込めし山路の霧晴れず醉いますらん時に會によき

●　長門　藤村千里

峠路三里滝霧の中に包まれて行く手來し方たゞ夢の如

●　大阪　岡つる子

百鳥の啼く音椿に残りけり垂柿三つ四つ色美くしう

●　福井　長谷川糸子

物凄くみ空に瀧の音はして朝霧深し杉の細路

●　神戸　竹馬利子

杣人の後れてかへる山道に夕霧なびき秋の日くれぬ

●　淺草　寺田鶴子

きりたつと見し山里をわけいれば露もまだひぬ村雨の跡

●　岩代　菅野美子

柿ひとついろの赤きを爭ひてしぶかりし時の心なかしき

●　保土ケ谷　かほる

聞こゆなり眼には見えれど朝ぎりの深き山路に馬子歌の聲

●　仙臺　波部光子

なり〳〵は何鳥かなく聲のして朝霧ふかし木曾の山みち

●　土浦　かすみ子

秋の田にこがれ色つく八束穂は是れぞ御國の寶なりけり

●　尾張　佐藤ふぢ子

山雀のかごに高なく秋日和障子に柿の影のうつれり

●　鶴見　常子

むら雲よりてはにぐる小山田のそほづか笠に秋風ぞふく

●　三重　中野善子

箱根八里關路にたちてかへり見れば關東八州たゞ霧の海

●　長門　杉山きくの子

たちならぶ庭の若松姫小松やがてやたづの巣こもりせむ

●　札幌　白菊

しら玉のつられし秋の田つらこそ豐けき年のしるしならまし

●　小倉　林とみの

わけのぼる山路はきりに見えわかでうたふきこりが聲のみぞする

●　周防　やちよ

尼寺に讀經のやみて風なきに柿の實落ちて秋たけんとす

●　下野　新井琴子

秋神のそはたはむれか黄金だま懸けても見しよ裏の柿の木

●　千葉　田村芳子

色染めし梢の柿なあふぎ見て童の智慕のたらぬ竿

●　尾張　梶田愛子

登り行く人かげ霧にかくるゝを雲にのるよと稚子はいふなり

●　大和　藤岡慶子

風さむき茅萱阪道一里越へ山茸一つ霧にくれ行く

●　神戸　鍋島とら子

秋さればひだの引縄ひだふるにひまなかりけり小田の庵守

●　讃岐　丸山匡子

破れ案山子仆れし畔の小山田に小鳥群て居て日は斜なり

●　和歌山　森紫尾

霧こむる谷のかけはし末きえてゆきこそ迷へ木曾の山道

刈り積みし稻束の上に星の子が群れたはむれて秋は賑はふ　●　備後　森戸初子

高砂の松の葉いろにならひたる君が契りや千代もさかえむ　●　常陸　菊地みれ子

露深うふみわけて行くみ山路のおち方のべにさを鹿の聲　●　盛岡　山田繁子

小山田のみのりゆたけき稻の上は秋風さへも心して吹く　●　筑後　許代いと

幾頃のこがね波うつ秋の田や浮ぶは案山子こぐ手たゆめな　●　牛込　白百合

朝まだきこゆる御山の神かぜにさぎりながれて月力なき　●　岡山　田中靜子

山の端におちくりひらふ聲のして朝霧ふかく見へわかぬかな　●　安房　和田きん子

なしれかるしべは賑りてかとしのみたてる門田に秋風ぞふく　●　鳥取　松下ふみえ

みちまよふ因幡の山のふか霧に松の緑りも見えずなりたる　●　越後　土田その

雪とぶ稻田を十里夕榮えて馬引く人の唄ゆたかなり　●　上總　田村たき子

山姫の首輪のかざり木にかけて忘れけむ珊瑚柿の實　●　廣島　大島喜以子

梨園は今いくかぞと霜降千等みまちつゝ入東風かるも　●　小倉　秋野小枝

しら〳〵と朝霧こめし峠道峠の茶屋に庭鳥のなく　●　山城　古川かつ

たてこめし朝霧分けて出でし日に黃金色ます秋の田の面　●　長崎　佐田秋江

小春日の光りよろしき玻璃の窓今成りし柿の繪の美しき　●　備中　有田たまき

十かへりの松のよはひを例にて榮えましませ君等妹と背　●　宮城　小山田みどり

嶺に路は見えれど夕霧の峠くだるは菅笠子が馬　●　小倉　秋山あき

秋霞さて露をかけたる萩笑みて黃金色せる田の面見渡す　●　備中　渡邊悅子

くりひろひたけがる人の聲もして霧たつやまぢしづかなし　●　本郷　齋藤千代子

日あたりの背戸の柿の實あかうしてこずえのあたり鳥なくなり　●　河内　石田慶子

入相の鐘きゝながらながむれば山深きみち霧かゝり鬼　●　大阪　入　重子

夕されば色づく山のかけぢなる楢のかりやに霧立ちかゝる　●　尾張　磯部そう子

田のもふく野分にひだの音たてゝおどろきけらし雀むれたつ　●　大阪　豊田梅野

ほまれあるみ草人を鶴はむこの入東風を餅としもして　●　奈良　佛田照子

今夏に果出多しなき依のつぎ繪ひてし柿の實りぬ

能登 [illegible]しげ子

[illegible]の大十[illegible]州の秋の[illegible]や[illegible]なす[illegible]みのれり

兵庫 [illegible]田のぶ子

行き暮れし山路にこむる夕[illegible]のとばりの奥にまろ男鹿の[illegible]

[illegible] あい子

[illegible]の衣の山路ない[illegible]顧みればみだれしかみに[illegible]ぞかゝりぬ

三河 [illegible]本[illegible]

[illegible]深き秋の[illegible]のあけゆけや[illegible]ふ馬子歌の[illegible]のよろしき

[illegible] 伊倉田[illegible]子

みの年は大方ねみなたがやして[illegible]にみのりし[illegible]のいなほ[illegible]

[illegible] [illegible]田の小女

見せばやないくさ[illegible]にます[illegible]に[illegible]りゆたけき山田の秋を

佐倉 岩瀬[illegible]子

千代かけて君は[illegible]むとまほなる松のみどりのよしかはるとも

大阪 小山とよ子

里人がむづくしに[illegible]し田のみのりゆたけき秋ぞうれしき

美濃 杉山よし子

若き[illegible]と[illegible]ふ箱根の下り道夕[illegible]深く身にせまり来る

近江 [illegible]部[illegible]子

懐しきの限りなるらんたてこめるきりにあやめもわかぬ山道

山[illegible] [illegible]田[illegible]子

打くする黄金の波のかへしてはまたうち[illegible]する秋の田の面

[illegible] 町田[illegible]子

[illegible]過ぎて[illegible]秋の山[illegible]に[illegible]

下野 [illegible]野とし子

接木せし父はいまさで仏[illegible]にさゝぐる柿の物思はする

長門 [illegible]中すみれ

草とると深山路のぼる朝月夜[illegible]路にうかぶ袖のひなうた

東京 [illegible]川志[illegible]子

秋くれば柿[illegible]すと[illegible]し子は[illegible]まで[illegible]たれし柿は[illegible]しぬ

美濃 [illegible]中久代

[illegible]の音[illegible]まくしところたふとかりけり[illegible]の柿

神戸 今村せきの

[illegible]行く深山路のきぎりするゝ秋の暮

[illegible] [illegible]むめ

[illegible]人も夕[illegible]ふかき秋ぎりにゆくていそぎの道まよふらん

東京 [illegible]か子

[illegible]くこく[illegible]田村くでの秋見へでなびく[illegible]の末もたのもし

下谷 [illegible]井[illegible]子

[illegible]女君が[illegible]の[illegible]がたり柿とる庭に[illegible]ひ出しつ

大阪 山村[illegible]尾

朝[illegible]だきのぼる山路に[illegible]はれてみゆるもうれし[illegible]のもみぢ葉

大阪 [illegible]林[illegible]子

なれましゝ[illegible]の[illegible]その[illegible]に今日の[illegible]りな[illegible]ひまつらむ

大阪 [illegible]井[illegible]子

[illegible]のこゝろ[illegible]しこゝぞ[illegible]れ村まで[illegible]の[illegible]をひくや

丹後 村上うた子

[illegible]の山路[illegible]すれどすがたし見へず[illegible]して

[illegible] [illegible]てい子

[illegible]の月を[illegible]の[illegible]まりみわけつ[illegible]のゆく

●　神田　村井ひで子
霧ふかみ山路をこゆる馬子見えず鈴の音のみほがらかにきく
●　大阪　林すて子
秋風になびく田の面のたりほにも我心をばかへりみるかな
●　伊勢　太田衆子
大寺の庭にのこりし柿一つ暮れゆく秋の名殘りとも見む
●　日本橋　杉浦嘉枝子
秋風の身にしむまでにうれしきは妹つれつゝひろふごま柿
●　三河　榊原きく
鳴子追ふ童のこゑに出で見れば門田の稲穗色つきにけり
●　東京　鈴木たき子
老僧が音たてゝゆく錫杖に朝ぎりからむ秋の山路
●　伊勢　森井まさ
千町田の稲穗のすゑに山ぞひの里の白壁きらめきにけり
●　長門　藤村澄子
刈り跡に落穗たづねて親と子の雀遊べり日は暮るゝまで
●　桐生　しら萩子
豊かなる煙のぼりて峽の庵は秋田の實りたのしかるらむ
●　大和　白きばら
たそがれてすゝきが原をさまよへば山の端おぼろ夕霧の立つ
●　滋賀　田中とみ子
朝霧の中に山路も包まれて馬子の唄のみゆるくきこゆる
●　岐阜　佐光きしう子
路や谷谷や路ともわかぬまで霧立ちのぼる箱島の山
●　大阪　江川かめ尾

なまき手にはげみし甲斐のあらはれてみのりゆたかに主が待つらん
●　和歌山　山村順子
なり〳〵になにかなくなり谷あひに秋の山路の霧ふかくして
●　下野　川邊たか子
軍よりかへりし夫に秋のみのりほこり顏にも早稲田刈るなり
●　三重　松坂貞子
山かつの聲のみはして影もなし朝霧深き山の下路
●　下谷　兒玉秋子
うまし稲瑞穗の國に滿ち〳〵て小田顏はへり眞作のうた
●　大阪　紀藤むらさき
そことなく人の話しは聞ゆれど姿は見えぬ霧の山路
●　千葉　鎌田嘉賀子
萩桔梗咲き亂れにし山路をゆき迷ひけり霧深うして
●　足尾　森照野
霧ふかき膳所の城下をふりかへる五里の峠の朝寒き哉
●　尾張　さい子
二ッ三ッ梢に殘る赤柿を惜しげに子守見てゆく
●　安藝　野村千代子
かきの實のきばみそめにし破垣にこもりむれゐて日は斜なり
●　金澤　千代子
四ツの時秋ぞまさりぬ朝ぎりをふみやぶりつゝこゆる山路は

冬季雜題

〆切十一月十五日

柳體詩

題「料理」「顔」「菊」

劒花坊撰

天

小石川區水道端二ノ四八　大河原鶴恵

郎君に見せばや妾が料理振り

評云、この度の御出句は諸嬢いづれも振ひません、前回及び前々回から見ると餘程劣つて居るやうに存じます、もつともすべてが進歩しましたから、撰者の方も目が高くなり、其間に遠慮容捨を致さず嚴重に撰を致すから、自然斯う感ぜらるゝのでもございませう、進歩の結果など思へば諸嬢の句の振はないやうに見えるのもさまで失望は致しません、閑話休題、さて此句の價値に就いて月旦致しますると、調子が命であるうちに、何となく其女學生でもあらうと思はれる人のナマなところ、氣取つたところがホノ見えて餘情があります、「蓬萊に關かばや」の調子をソツクリ取つて、肉を替へ、骨を替へ、俳句式でしかも川柳になつて居るところに滑稽も御座います、この邊で取敢えず天の賞を差出すことに致しました。

地

山城國相樂郡棚倉村　古川よね

これは貴郎食道樂の秋の卷

評云、心持のよい調子で、しかも句も引締まつて居ります、佳い句です、郎君が庖厨へ來臨で、お前夫れは何の小說だと聞かれると「ホヽ、これは食道樂のと」來るところで、默六氏の「オーやーだ寛ふうレンぷうだつてさア」の味があり、非常に面白うございます、天位は無論この句の答であります、遺憾な事は、此原句は「秋の卷」のあとに「に」の字がありまず、さうすると細君が郎君の膝に侍して誇り顏にいふた言葉になり、意味が違つて來ます、調子も面白くなくなる、「に」を削つて、作者の趣意を變換して頂戴したのですからどうしても一段席を讓らなければなりません、たとへば圍球盤に敵から入れて貰つた球は偶然に得た點で、滿點でないと同ンなじやうなものでございます。

人

能登國七尾町字府中　木森一子

面白い顏のモデルに乳母が成り

評云、この句はくだ〳〵しく說明しなくても分る句のやうで、ちよつと岡目になりますが、撰者は坊チヤンか嬢チヤンがいつでもいたづらに人形を書きなさる時に、乳母の顏をモデルにしなさる、と云ふところで頂きます、趣はありさうな句ですが、感吟です、因に申して置きます、今回は投書の中に、これまでのハメ句があるやうです、暗合でございませうが、こちらでは一考せざるを得ません。

秀逸之部

貸した顏肩を叩いて返される　品川　春野くさ女

此顏を見て頂戴と抱き起し　橫濱　永野とり

白粉を片手に菊の露を受け　大阪　岡崎能鶴

料理書を稱いてから火を起し　伊勢　佐野みよし
仲人のふれ込御料理も出來まする　尾張　梶田　愛子
アヲあなた妾シの寢顔寫生して　下總　岩瀨わかな
料理通ヲッでげすよと河豚で死に　兵庫　中馬　靜子
御手料理鼻にかけたる馳走なり　大阪　富田　艶子
御料理の本見るさきに猫が食ひ　越後　す　い　子
今年から元祿と呼ぶ菊も出來　日本橋　上田いね子
話人は聽人に顔を見詰められ　横濱　立川喜代子
御鏡はしたゝか小言頂戴し　足尾　金子　きん
よそ行の顔を鏡に寫して見　武藏　末廣　翠
ホークを右手に頂戴しますべえ　越前　小川つう子
妹の料理玩具の鳥を切り　長崎　光安しづ子
星眼に拵へて鯉の料理なり　大阪　加藤あい子
朝廷の御紋がこゝに咲いてるよ　美濃　田中　庭子

佳句之部

料理本片手に鍋をのぞき込み　越後　中村　壽美
新婚の當座は折を提げて來る　牛込　伊東　薫
母上よまたも例の豐料理　山形　菅野　てい
お目出度サといはれて顔をサッと染め　河内　高橋千壽子
折のお化粧流いてブチが出來　廣島　稻田　鈴香
相好を崩したヤイで城が落ち　埼玉　淺見紫涙女

拵えの飯は理想の家庭なり　横山　菅井　道代
骨折った料理を犬が頂戴し　石見　鎌田　歡子
あの顔でわしの事をと下女ふくれ　牛込　栗安彦壽子
讀どころノート幾度もあけて見る　仙臺　高橋　正代
親様の手傳ひコッチ閉口し　麻布　廣　久子
下女の顔耻かしい時御茶茶也　甲府　清水たづ子
愛嬌の笑顔出入の種に成り　埼玉　新井　みれ
御草紙の綴りに顔へ手習し　駿河　池上　雪子
書き起の傍でお三は來顔へ出　越後　坪井　わか
顔は先づ十人並と媒人口　千葉　田　文子
どうしても顔が出來ぬと筆を投げ　讃岐　後藤くめ子
熱柿臭い醉顔を見ては妻は泣き　三河　菅沼　花子
母ちやんと罪無い顔で見上げて居　伊勢　江坂　鷹
針の手をやめてちよい／＼寢顔を見　小倉　筑紫　春子
食道樂調べてる間に飯が焦げ　尾道　中尾　久子
お土産の折へ子供は寄りたかり　小石川　金田すみ子
顔よりもでかい茶碗で坊は食ひ　横須賀　岩岡　逢子
夏痩の顔頰骨の高い事　茨城　島田　君子
綿帽子目出度い顔をかくしとき　埼玉　神保　歡午
床の間を拭き／＼下女は映つして居　大阪　安藤まと子
泣寄は下女にも知れし文士なり　神田　増田　富美
嬢さまの料理と聞いて賞めるなり　下總　藤崎みな子
へボ料理自分ばつかり褒めて食ひ　足尾　金子　きん
長い顔へちゝまの水で化粧する　上總　増淵ささめ
手料理の出來たは客の去んだ跡　東京　保田　鷹子

六つとも同ンなじ顔や石地蔵　姫路　白菊女
菊人形いゝにほひするべゝをきて　岡　俵堀子
自慢して取た庖刀で指を斬り　大阪　六車よしを
いつ見ても赤くなつてる金太郎　紀伊　藤村紫女
花活けの菊に造花をまぜて見る　美濃　川村つる子
仕度して料理の本と引き合せ　廣島　今井つる
修身の御講義思ひ當る顔　麻布　増田阿洋子
料理本臺所にて召し玉ふ　姫路　阪井清子
御手すきに顔拜借と耳打し　加賀　木丸豐子
願くは菫の菊ぞ好ましき　下總　岩瀬わかな
意外だと云はぬばかりに顔と顔　宇都宮　井伊のぶ
顔向もならぬ事でと話して居　羽前　西澤二三子
寫眞師曰く癖のわるい顔　羽前　谷山たに子
花いけの菊に造花をまぜて見る　美濃　川村つま子
緣談の諾否を顔で判決し　上總　田村瀧子
似た顔の事とめさせ恥をかき　麻布　青木蕙子
獨者サシミと云ふは豆腐なり　越中　清子
家庭料理あまい辛いが不和に成り　大阪　小山登代子
伯母ちやんの顔に穴がと頑是なき　鎌倉　御園みどり
板前が惡癖を云ふ猫喰功者　横須賀　木本治子
鏡を叱すどうしてこんな顔だらう　人形町　ゆたか
三面を見つめ夫人は色を替へ　下總　大竹てつ子
下女曰く菊はどうして傘をさす　栃木　川端たつ子
顔色を見い〳〵功はれだつてる　京都　雅子
顔かたち無類なれども鼻一ツ　足尾　たけ子
義太夫は顔しかめたりのばしたり　麹町　小川政子
母ちやんのお顔の皺のふえた事　千葉　鎌田清子
嫉妬ば顔からさきに話し出し　大阪　矢部てふ

撰者吟

いやな顔さして破談の使者は行き
庖刀をうまく食はせて婿になり
初心の畫日の出を書いて菊にする

次回の川柳課題

『風邪』『編物』『雛』　〆切十一月十五日

謎々

『ウ井ツテ』『債金』『交際家』とかけ

第一等

『闘牛戯』と解く
心は「つきあひがすばらしい」
▲交　羽前西置賜郡長井町　谷山たに子

評云、闘牛戯を材料につかつたところに働きがある、落も無理で無い、十八ケ今回の謎は交際家が一番よく解いてあるやうだ。

第二等

▲交　美濃國安八郡大藪町八島　田中久代

雨後の筍」と解く
心は「方々へ頭を出す

評云、これも面白い「方々へ頭」が妙に面白く聞こえる、雨後の筍と云へば、物の族生するに譬へてあるが、「方々へ頭を出す」としたのは新しい、頂戴。

第三等

▲ウ　福島縣岩代國扇島大町一丁目　金澤てふ

貧乏人の子澤山」と解く
心は「なか〳〵くへない

評云、なか〳〵解き難い謎だが、なか〳〵上手に解いてある、なか〳〵面白い。

▲慎…我國の獸類」と解く　駿河　星坂貞子
心は「虎(取ら)ない

▲交…三面記事」と解く　本所　戸村みつ子
心は「理屈張つてはいかぬ

▲交…上手の外科醫」と解く　讃岐　川崎みつゑ
心は「うまくきりまはす

▲慎…貧乏人相手の訴訟」と解く　麻布　青木董子
心は「勝つても一文も取れない

▲交…海外移住民」と解く　羽後　三浦とみ子
心は「いつも愛郷(愛媛)はある

▲交…お茶漬」と解く　岩代　坂内乾子
心は「菜(妻)がまづくては困る

▲ウ…山伏」と解く　越後　坪井わか子
心は「法螺を吹き通す

▲ウ…受驗者の問題解答」と解く　越後　增　子
心は「難題を後廻シにする

▲慎…施療」と解く　近江　藤澤もみぢ
心は「一文も取らない

▲ウ…炭火」と解く　岩代　中村すゞ
心は「灰(爐)には必要

▲交…海戰」と解く　神戸　藤井夏子
心は「訪問(砲門)が忙がしい

▲交…算盤」と解く　岡山　深井清子
心は「かけひきがある

次號の課題

『凱旋』とかけて　『パノラマ』とかけて

(〆切十一月十五日)



小説

一家の妻

田山花袋

四

八月のある美しい日、例の貴婦人連中は大磯から半里ほど離れた國府村の吉田夫人の別荘へと出掛けて行つて、種々なる遊戯を爲して遊んだが、夕餐の濟んだ席上で、春子夫人は今迄偕に戯れて居た大藏大臣の子息等の一組の群を離れて、直ちに太田原子爵の傍へと進んで來た。

「私は少し伺い度い事があるんですがね？。」

「何です。」

「私は、友人の交情を非常に貴んで居るのです！。」

「さう聞けば私も嬉しい。」

「けれど、友情といふものはいかに貴くつても、女はそれで滿足して居る事が出來るでせうか。」
「何故？。」
「何故と言ふ事もありませんが、もしその友情が不圖其以上のある情に變つて居た事を發見した時は何うしたら好いでせう。」
「無論犧牲！。」
「犧牲が出來なくなつて居たら。」
「何うも私には御返答は出來ん。私は戀愛の事では、もう盲目で聾で、そして啞も同然ですからナ。」
「けどもまア、私が、それを敢てしたと假定して——其時は貴郎は私を御責めなさるでせうね。」
「無論。」
「それは嫉妬の爲ぢや無くつて？。」
「嫉妬？。」と子爵は笑つて、「私は貴孃に戀しては居らんから、そんな嫉妬なぞといふ情が起らう筈は無い。貴孃に似て居た亡妻の記臆が、堅くそれを封じて居るですからナ。よし又、そんな感を貴孃が起させるにしても、私は清い記臆に甚しい汚點をつけた所以を以て甚しく貴孃を恨むです。解つたですか。」
「私達には餘り高尚過ぎて何うもよく解りませんわ。」
かう言つて、かの女は再び喧しい笑聲の中に其身を投じた。
日が暮れると更に新しい夜會が始まつて、其の賑かさは晝よりも一層烈しくなつた。勿論かれ等は徹宵遊び騒ぐのであらう。
太田原子爵は其の妹眞田夫人と共に八時頃暇を告げて歸途に就いた。二人は行く時にも春子夫人を母親の留

守(津村伯爵夫人は二三日前子供を伴れて出京したのである)から伴れて行つたのであるから、其歸途にも當然一緒に連れて來なければならぬのであるが、春子は面白い夜會をさう早く歸るのは厭なやうな樣子であるし、又同じ従妹の吉田夫人は後から趁つて行くからと達て留るので、後に留まれば今夜は徹宵歸らぬと知りつゝ別を告げて來たのであつた。

美しく涼しい夏の夜の海岸を辿りながら、兄妹は少時默つて歩いて來たが、子爵は突然、

「何うも困つた者だナ、あれではとても望が無い！。」

「何がです？。」

「いや、杉本子爵夫人の事さ。」

「本當に困つて了ふのねえ。」と眞田夫人は長大息を洩した。

「あれぢや、何うも子爵の怒るのも無理は無い！。」

五

兄妹が靜かに海岸を辿つて、松原の陰の小さい別墅に歸つて來たのは、もう彼是十一時であつた。家に上つて茶を一杯飲まうとして居ると、驚いた事には不意に杉本子爵が尋ねて來て、何うか子爵夫人に一寸御面會を願ひ度いとのこと。何うしませう？と眼色で兄に聞くと。

「逢て御逢んなさい。」との言葉。兄は其儘次の室に退いた。

杉本子爵は甚だ愉快らしい態度で、否つとめて左樣見せて居るのかも知れぬが、兎に角惡い機嫌では無い。

「夜分、晩く上つて甚だ失禮な事は知つて居りましたけれど」と子爵は口を開いて「それはまア御許を願ふと

して、今朝妻が貴孃と御一緒に何處かに出懸けたと聞きましたから、それで此方に來て伺つたら、其の居る所が解るでせうと思つて。」

「あゝ、左樣でしたか。」と眞田夫人は調子よく、

「まア、御ゆつくりなさい。」

「いゝえ、左樣しては居られません、只、妻の居る處さへ教へて戴けば、それで好いのですから。」

「奥樣は吉田夫人の國分村の別莊に行つて居ますのよ、吉田さんは直き後から送つて行くからッて言つてました。」

「何故、貴孃と一緒に歸つて來んのでせう？。」

「妾ア、勞れて居ましたし、春子さんはまだ倦きないのに、早く伴れて歸ると言ふのも御氣の毒でしたから。」

と言つて、子爵の顏を見、

「それで何時御出なすつたの？。」

「五時の汽車で來たのですか、來て見ると、津村の母は子供等を連れて東京に行き違ひに爲つたつて云ふし、妻は何處に行つたか解らんと言ふではありませんか、仕方が無いので一人で孑然と夕餐を濟して、そして此處に遣つて來たのですよ。何うもこんな譯のわからぬ事は無い。それでは……。」

「それでは、お休みなさい。少し位、歸りが晩くなつても、餘り心配しないで居らつしやいよ。」

「心配も爲んですけれど……それでは御休みなさい。」

かれは行かうとするのである。子爵夫人は不意にそれを呼留めて、其儘、近く下りて行つたが、

「杉本さん。」

『え。』

『貴方は何うも顏色が好く無いが、矢張苦んで居らつしやるんでせうね。』

『いや、難有う、それ程でも無いです。』

『杉本さん、貴方は奥樣が御歸りになつても餘り怒つて、惡口を付いたり何かしては不好ませんよ。』

子爵は少しく呆氣に取られたる者の如く、眞田夫人の顏を見たまゝ、急に答をも敢てしなかつた。夫人は言葉を續いで、

『貴方は奥樣も少しはネグレツト(等閑にする)されてるのを知つてるのでせう。』

子爵は猶じつと夫人の顏を見詰めて居たが、少時してから、

『それぢや、貴孃も私を責めるのですな——貴孃も!。』

『だつて、春子さんは可愛想ですもの。』

『僕も非常に可愛想と思つて居た!。』と嚴かなる調子で子爵は言つた。

『だツて、今は?。』

『それは、今は事情が丸で違ふ。』

不意に無限の感が押寄せて來たといふ風で、

『妻がネグレクテツトされて居る、よし貴孃もさういふ。それはまア好いとして、今の妻のやうな生活が正しい名譽を貴ぶ者に默つて居られるですか。』

『言ひ過ぎたのは御免なさいよ。』と夫人は以前と同じやさしい調子で、『けれど、さう仰しやれば、貴郎だつて左樣ぢやありませんか。』

『僕！　僕のかうなつたのは、妻の責任では無いですか。』

『さう言へば、春子さんの方でも、矢張さう言ふわ。』

『あゝ、それは左樣かも知れん。』と子爵は苦々しげに、『澤山、理屈を付けて、何とでも言ふが好いです。けれど、春子さん、私を今日のやうな悲慘な境遇に陷れたのは、始を言へば、貴孃の爲めです。』

『私の爲め！。』

『突然さう言つては御解りにならんかも知れませんが、貴孃はまだ私が結婚しない前、志田の叔母さんの家で一緒に結婚を御勸めになつたのを御存じでせう、私が多年の無妻主義を捨てゝ叔母の言葉に從つたのは、叔母の達つての言葉によつてゞは無く、貴孃――貴孃があつたからです。眼の前に貴孃のやうな好い例があつたので、私は其時心の中にかう思つた、こんな好い立派な妻君もある、一家の幸福は左程得られぬものではあるまいと。』

『杉本さん……。左樣仰やつては……。けれど私はあの時御勸した通り、昔からよく貴方の奧樣の事は存じて居ます。春子さんは、妾などよりは何につけてもよく御出來なさるし、また一家の妻としても立派な御方だと私は今でも存じて居ますがねえ。』

『左樣かも知れません。』と杉本子爵は冷かに答へた。『私が惡いのでせう、私があれをあんなに爲て了つたのでせう。それでは、左樣なら！。』

杉本子爵は松原の蔭に流れて居た小川の橋を渡りて、海岸の砂原路をてく／＼と薔薇の別莊の方へと歩いて行つた。家に歸ると、十二時は既に十五分を過ぎて居る。妻はまだ歸つて來ない。渠は內に入つて何か書でも讀まうと思つたが、忽ちその考を捨てゝ了つて、深き思に頭を低れながら、其庭先を彼方此方と歩き始めた。

何時まで空しく待つて居る間に、其の妻に對する總ての悲哀、總ての絕望、總ての反抗は大海嘯の烈しく海岸を襲ふ如くに盛んに其の頭惱に簇つて來た。自分は普通一般の惡き夫の如く果して一家の不調和に責任を有して居るであらうか。自分は結婚が初期の快樂を通過して、もう面白く嬉しいもので無くなつた時にも、多大の犧牲と多少の煩悶とを以てそれに對しなかつたであらうか。自分が一生の幸福、一生の平和を其手に得やうとした妻の甚だ無責任になつて行くのに對して、冷淡にこれを見て居つたであらうか。それは自分は假借しなかつた、思ふ事はどし〳〵と實行したけれど、自分は眞心から妻を思ふから爲たので、これが即ち自分の妻を愛する所以であつたのだ。否、自惚れでも何でも無いが、自分位熱心に妻を愛し、眞面目に、正直に、そして溫容な夫は廣い世にも澤山はあるまいと思ふ。否少くともさう自から信じて神に誓ふことが出來る。其れであるのに、妻は滿足に夫に對する責任を盡して遺憾なかつたであらうか。

否、否、否――此身の家庭の幸福を失つたのも、今日のやうな希望なく目的なく、威嚴なく名譽なき暗黒な地位に沈淪して了つたのも、皆な彼女が夫に對する責任を盡して與れぬからである。然るに世間から多く憐まれるのはかの女で、多く責めらるゝのは自分である。ことにやさしい眞田夫人すらこれを責むるに至つては、此身は殆ど其の情を遣るに處が無い。

かゝる苦々しい追懷を繰返して居る間に、夏の夜は早くもその最初の黎明の光を送つて來た。やがて次第に明けて、時計は遂に六時を打つた。けれど猶春子夫人は歸つて來ぬのである。一家の妻として、其母なしに、其夫なしに、若き人々と吉田夫人の覺束ない保護の下に一夜を全く明かすとは、實に容すべからざる事である。子爵は今の場合忍耐は最早不必要であると思つた。で、其儘家を出でゝ、急いで國分村の方へと向つた。

大磯から國分村への路は、多くは海岸に沿うてあつて、風情ある松原が絶えず其間を點綴して居る。曉の

波の音は心地よく其磯を洗つて、言ふべからざる美しい夏の朝の趣を呈して居るが、子爵の物思ひ勝なる身は常の如くこれを立留つて見やうともせず、只々先へ先へとのみ進んで行つた。やがて松原の少し繁つた處に來ると、霧の美しく籠めた向ふに、賑はしく人の笑ふ聲が爲て、それが段々此方へと近づいて來るのを認めた。けれど霧が深いので、その如何なる人の群であるかは更に解らぬ。

一歩々々その聲は次第に近くなつて、果てはその人數の七八人の男女入雜りの群で、互に面白げに笑ひ戯れつゝ歩いて來るのであるといふ事が明かになつた。子爵は直ちに、おのれの妻が其一群の花であるのを覺つたのである。

よち〳〵と蛇の蟠るやうに曲つて行く路は次第に兩方から迫つて行つて、松原の霧を隔てゝ、もう其の間は十七八間位しか無いほどの距離になつた。互に戯れ騒ぐ笑聲は殆ど上流社會の貴婦人の群とは思はれぬばかりに、極めてはしたなく耳を撲つたが、やがてそれはばつたりと申合せたやうに小聲になつた。渠等は今しも始めて子爵の姿を認めたのである。

春子夫人は取澄した樣子で、更に驚いたやうな態度を示さなかつた。子爵は其儘其群にと近づいて行つたが。これもつとめて穩かなる樣子を粧ひ、帽子を取つて、先づ一群の人々に會釈した。

『別に何でも無いが。』と妻に向つて、『何したかと少し心配に爲つたから、散歩旁々出懸て來て見たのだ……。』

『この通り嚴重に御守立して居ますから、大丈夫ですよ。』と吉田夫人は半は冷笑する樣に言つた。

『いや、何うも難有う。此から私が一所に連れて歸るですから、もう御歸り下さつても差支はありません。』

渠は再び會釋したが、其儘妻を伴うて、一群の人々に別れた。吉田夫人はその一行と共に何事をか笑ひ合ひつゝ元の路を國分村の方へと引返すのであつた。

二人は默つて步いて行く。少時して、

『何時お出なすつて?。』と春子夫人は問うた。

『昨日の夕方。』

『あゝ、さうですか。』

また、默つて步いて行く。春子夫人は再び口を開いて、

『東京で阿母樣に御逢なすつて?。』

『いや。』

『貴方は阿母樣が子供等を伴れて行つたのを御存じ?。』

『知つてる。』

やがて二人は大磯の町近く來たが、數分の後にはかれ等は別莊の門を潜つて裡に入つた。さて、互に押默つた儘、靜かに二階へと昇つて行つた。

春子夫人がその己の室の戸を開けて、またすぐそれを閉ぢやうとすると、『一寸……。』と言つて、子爵もそのまゝその後に跟いて入つた。

若き妻は亂次ない衣服のまゝで、不安らしい顔色をして、じつと其處に立盡して居ると、子爵は今まで堪へに堪へし憤怒の情が一時に心頭に發したといふ風で。

『お前は一家の妻と言ふ事を覺えて居るか、え? これ。』

見る〳〵子爵夫人の顔は蠟の如く白くなつて、ぶる〳〵と少しく身を戰はし出したが、取るともなく傍にある物品を取つて——そしていくらか氣を落付けたといふ風で、險しい眼色に夫を見返し、

「澤山仰やい！　貴郎は一家の妻のやうに私を爲て下すつたか。」

「何だ！。」と子爵は一喝して、今一度、言つて見ろ、默つて居れば、好い氣になつて、勝手な理屈を付けて、一家の妻のやうにして呉れんとか、ネグレクテットされてるとか、勝手な事を言つて吹聽して居るが、誰れが御前を捨てた、誰が御前をネグレクテットした。私はお前が今のやうにならない爲めに何んなに喧しく言つたり心配したりしたかを知らんのか。お前がこんな女にならんが爲めに、私は氣に入らぬ事も言つてお前の感情を害するのも憚からなかつたのだ。それなのに、その樣は何だ。高等淫賣もそんな亂次の無い樣は仕て居りはせん。一夜つまらぬ女や男共と騷ぎ散して、子供や夫の事を考へやうともせぬとは、實に愛憎が盡て何とも言へん。お前はもう昔の春子ぢやない、昔のやさしい美しい春子ぢやない。一家の妻としても、二子の母としても、更にその資格は少しも無い。墮落して了つて丸で賣女か何かのやうだ。」

かく烈しく罵倒されても、春子夫人はそれに答へやうとも爲なかつた。否、其儘立上つて、前の柱に仕懸けられてある電鈴を押し、

「少し御免下さい……婢を呼んで、衣服を着改へますから。」

子爵はこの冷淡なる態度に更に無限の不快を感じて、其儘、ツと室外へと出て行つて了つた。

二三時間の後、一輛の車は子爵を停車場に送るべく其の別莊の玄關の前に來て待つて居た。玄關口で、子爵は送つて出た婢に向ひ、

「奥樣はまだ眠つて居るだらうナ。」

「はい。まだ御休みになつて居らつしやいます。」

「それぢや、起さずに行くから、起きたら不意に用が出來て、東京に歸つたと言つて呉れ。」

かれはかくて車に上つた。

（完）

懺悔録

佐倉花子

儂は什麼しても獨立の出來ない身體なのです。それは儂も不具者と申すではなし、思ひ切つて看護婦になるか、さもないところが小學校の敎員位にはなれやうと思ひますが、父は甚く女の獨立と言ふ事に反對で、什麼しても嫁にやると云つてたのですもの、儂は女の身として父の意に背く事は出來なかつたのでございます。

それに母も女大學で仕込まれた人ですから、儂がいくら獨立を唱へましても、今の學問はさうしたものか知らないが、昔から女は嫁に行くもの、子を育てるものに極つて居る、お前が獨立するなど〻云ふ事は、畢竟我儘から起る事で、年を重つてから後悔する基だと云つて、いつも此事を云ひ出す度に叱られたのでした！

儂は女と云ふものが、人の妻と爲つて子を産んで、それを育て〻、賢母良妻と云はれ〻ば、それで役は濟むやうなもの〻、それよりは獨立して、生意氣のやうですが何か世の中へ貢獻して見たいとも思ひました。で、其當時まで自分の夫を選むやうな必要も見ませんでしたが、學校を卒業すると、もう兩親とも儂に隱して、方方へ嫁入の口を賴んで居る樣子でした。

もうさうなつては自分で覺悟しなければなりません、今迄自分で思つて居た理想も何も擲て〻しまつて、これから人の妻たるべき要意をしなければならないのです。

嫁入する、申さば他人の家へ乘込んで其處の女主にならうと云ふのですから、この位大膽な、そしてまた心細い事はありません、其夫は如何なる人なるべきか、其家は如何なる家なるべきか、舅姑はありや、若しあらば如何なる性格の人なるべきか、夫の職業は如何なる職業なるべきか、これ等多くの問題が解釋されねばな

らない筈です。

考へて見ると日本從來の結婚と云ふものは危いものでございますわね、かく〳〵の處に貰ひ人があるが見合ひをなすつて御覽なさい、ぢやア兎も角もと見合ひをする、それで直ぐに結婚と云ふのですもの、そんな複雜な問題を解釋して居る間なんぞはありますまい。

僕はまたいつも世間の夫婦と云ふものを疑つて居る一人なのです、只今も申す通り、見ず知らずの男と女とが結婚して、夫婦と云ふものが出來上る、それは先づ可いとしましたところで、其間に子供が一人出來ますね、すると其の夫婦は忽ち親になつて、父となり、母となり、かくて其の一家と云ふものが成立つと云ふのですものね、それは當然と云へばそれまでゝすが、深く考へればこの位不確かなものはございますまいと思ふのです。

僕は嫁に參るとして、種々な問題を解釋せねばならぬのですが、そんならば先づ第一に甚麼事から研究したらいゝでせうか知らッ、さうです、最も必要な條件は、夫の性格、夫の職業、夫の家庭であらねばなりません。

夫の性格。これは中々六ケ敷い問題ですが、また極めて簡單に解釋すれば容易な問題でもあるのです。夫としては氣の柔しい、同情のある、男らしい明晰な頭惱をもつた、決斷に富んだ人が好いと思ふのです。それは多くのお孃さん方が理想通りの夫をもつと云ふ事は難いでせうが、これだけの條件ならば、さして世間にない事もなからうと考へます。

そこで夫の職業です、これは隨分考へものでございますね、僕はまた急に此問題を解釋せねばならぬのでした、夫の職業、軍人か、實業家か、美術家か、音樂家か、學者か、政治家か、僕は別に夫の職業に對して好不好のない方でしたが、それでも何だか美術家とか、音樂家とか云つたやうな方が、高尚な職業のやうに思はれまして、比較的政治家や軍人は好みません方でした。

ある日お友達の花子さんと、戯れにこんな事を云ひ合ひまして、ぢやア職業の中で何が一番人の壽命を延ばさせて、何が一番壽命を縮めるだらうと云ふ論になりましたが、其時阿父さんが西洋の雜誌を持つて來て、話して下すつたのを、今も手帳に扣えてありますからお目にかけませう。

詩人は人數四十六人に對する平均命數が六十六歲
美術家は人數三十九人に對する平均命數が六十六歲
音樂家は人數三十八人に對する平均命數が六十二歲
小說家は人數二十六人に對する平均命數が六十三歲
學者は人數四十人に對する平均命數が六十七歲
宗教家は人數二十二人に對する平均命數が六十六歲
哲學者は人數十八人に對する平均命數が六十五歲
歷史家は人數三十八人に對する平均命數が七十三歲
科學者乃至發明家は人數五十八人に對する平均命數が六十九歲
將校は人數四十八人に對する平均命數が七十一歲
政治家は人數百十二人に對する平均命數が七十一歲

と云ふのです、花子さんはそれを見ると、壽命の上から云ふと政治家は可厭ね、十八人に對する六十五の哲學者がいゝわと云つて笑つたのですが、花子さんはまたいつもかう云つてゝした。
軍人は生きて居るにしても、國家の爲めに殉じたにしても名譽の職業で、其の妻はまた夫の名譽の幾分を擔ふ事が出來るだらうし實業家は將來益々發展すべき職業で物質上の榮華は極め得られるに相違ない、儂はこの

いづれへか嫁かうと思つて居る！

花子さんは一體虚榮心の勝つた方で、精神上の快樂などには餘り重きを置かない方でしたから、僕とは反對で、始めつから獨立なとゝ云ふ考へはなかつたやうです。

僕はまた何故軍人は好もしくないと思つたでせう、これには譯がありますので、僕の叔父が陸軍の士官だつたのですが、始終酒ばかり飮んでる、荒ッぽい事をしては、父や母を苦しめて居た事を幼い中に覺えて居た故です、何も軍人だからと云つて、一概に僕の叔父のやうなのもありますまいが、何だか僕は恐ろしいやうな氣がするのですね、可笑しいではございませんか。

けれども多く僕の知つた方を見ますと、軍人や政治家や、裁判官へ嫁かれた方は、皆暢氣に見えるのです、今年は衣服が何枚出來たとか、金の指環を新調したとか、函嶺へ湯治に行つたとか、他から聞けば羨ましい程樂な境界です。

それと申すも實は女と云ふものは或る詰らない虚榮心の爲めに、内輪の苦悶は押隱しても、外への虚榮をするものですから、襟の垢は目につかず、顏の白粉が綺麗に見えると云ふものでせう。

花子さんはまた僕にかう云ふ事を囁いたのでした。僕は若し軍人に緣がなかつから、小説家へ嫁きたい事よ！僕はまたさまで小説家を嫌ふ方ではなかつたのですが、昔から小説家に嚴肅な人と云ふのは尠いので、天才と云はれる人達程素行が修まらないやうですし、それに餘り長壽した方は尠ないやうです、西洋の例に見ましても、アラン、ポーガ三十九、バルンスが三十七、バイロンが三十六、キーツが二十四、チヤッタートンが十九と云ふのですもの、日本だつて先づ夭折が多いんですものね。

から云つて貶けたのでしたが、花子さんは熱心に、だッて〳〵〳〵トルストイは什麽したの、イプセンは什

麼したの、近松は什麼したのとまくしかけて、小說家だつて夭折と極つた事はないわ！

これでは夫の職業を選ぶに就いては、宛然壽命の上から打算するやうですねッて笑つたのでしたが、儂にしても花子さんにしましても決してさう云ふ譯ではありません、外に好みも、目的も、希望も、信賴もあるのですが、嫁けば先づ夫の健康と其長壽とを願ふのが、妻としての義務なら、又第一の望みだらうと思たからです。

そんなら貴孃は何の職業に從事する夫に嫁入らうと被仰るの、と花子さんに問はれゝば、儂は美術家か、音樂家！

まア可厭な、と花子さんは嘲りの笑で迎へて、ずッと高等な美術家か音樂家なら兎も角生じッかな所へ行つたら、それこそ火の車よ、浴衣一枚六ヶ敷いと云ふ事を御承知なの？

それは儂にしても、大家へ嫁かうとは思ひません、浴衣一枚六ヶ敷いのは知つてるのですが、何の生活にいかなる苦勞を嘗めやうが、心から儂を愛してくれて、將來に見込みのある人ならと！

最後の問題は夫の家庭です。俗に云ふ引越女房とでも云ふなら兎も角、さもなければ夫だけの家庭へ嫁かうと云ふ事は、先づない事と申して了宜敷いでせう、さすれば舅か、姑か、小姑の一人や二人、必らずあるものと覺悟しなければなりません。舅は先づ男の事、細かい處に眼はつかず、悴に愛をもつて居れば、また其嫁にも多少の愛を分つてくれますから、世間多く舅と嫁との間に葛藤の出來ると云ふ事も、それは下等社會には兎に角、中等社會に稀な事と申していゝ位ですが、姑となると、家風と云ふものを頭に置いて、何處までも夫の母たる權利を奪はれじとするところから、兎角心に僻みが出て、悴を愛すると反比例に嫁を苛るが普通のやうです。姑も昔は嫁、嫁もやがては姑になるのですから、互に同情があらねばならぬのですが、姑は兎角嫁に當る、其愛すべき個處までにも憎みをもつて、悴の苦悶も思はぬやうになるのが常と聞いて居るのです。あゝ姑、もし望み得られゝばこれだけは無い家へと思ふのでした。

小姑は什麼でせう。これも可厭です。昔から鬼千疋に向ふと云ふ程で、家庭を紊させる第一動機は此小姑に

あるものと信じて居ましたから、覺悟は覺悟として、萬一の僥倖にこれのない處へ！　我儘のやうですが、儂はそれを願つたのでした。

そこで儂が嫁入前の理想を取纏めて申しますると、夫の性格は同情ありて男らしき事、夫の職業は美術家乃至音樂家たるべき事、夫の家庭は舅の存在は止むを得ずとして、姑其他の繋累は餘り願はしからざる事、と云ふのでした。

で、この事を思ひ切つて母に告げましたら、それは餘り蟲が好過ぎるよ、さう〱お前の云ふやうなところはありはしないはね、まア何でも儂に任して置けば惡いやうにはしないはね、といふのです。

人生一代の大事、女子としては一代の大事と云はねばなりません、產れた家を去り、其の家の姓を奪はれ、見も知らぬ人の家に入つて、其家の人とならうと云ふのですもの、これを母一人に任せて置くと云ふ事が出來ませうか、母は畢竟こんな事で父の家へ嫁いたのでせうか、結婚と云ふ事に就いては女の意志の働く餘地はないのでせうか！

父から懊惱く勸められた事が二度、母から賴むやうに强迫かれた事が三度、これは見事に斷りました。其度親不孝と云はれ、恩知らずと呼ばれ、甚麽に辛い思をしましたか、お察し下さい、儂はそれ故心にもない見合ひの罪をそれから二度まで續けました。

學者もありました。技師もありました。新聞記者もあつたやうです。たつた一人音樂家！　それは父が頭から謝絕したと云ふ事でした。

それで今儂は什麽云ふ處へ嫁いて居るでせう。儂の始めの理想とは殆ど反對ではありませんか、男の性格は寧ろ粗暴で、それでまた同情に乏しいのです、職業は嫌の軍人、家庭には舅の代りに、意地の曲つた姑に小姑二人！

かうまで理想と實際とは違ふものでせうか知らッ、けれども御安心下さい、儂は今其の家庭に尠くとも主婦

の權利はもつて居るのです。意地こそ少し曲つて居ますが、姑は思つた程儂に苛く當りもしませんし、小姑も一緒に長く居て見ると、姉妹のやうに思ふ事がありますわ。軍人としての夫、其の威ある髯、其の逞ましい眉、其勳章、其劍、儂はいつしか軍人の名譽ある職業なる事も覺り、夫の粗暴も無邪氣のやうに思はれて、いつそいつそ〳〵もし女の兒でも出來たら、軍人に嫁けやうと思ひますの！

お笑ひなすつては不可ません、もう儂は姑根性になつて居るんでせう。儂に女の兒が出來るものとして、其の兒が若しお嫁に行く年頃になつたら、何とまア云ふでせう？

お前は軍人へお出で、軍人は世界で尤も名譽ある職業だ。詩人や、美術家や、音樂家へは決してお出でゝない、行末が案じられると云ふでせう。

若しまた男の兒が出來たとして、其の兒が中學へでも入るやうになつたらば、何と目的を定めるでせう。お前は軍人におなり、軍人にならなければ男に生れた甲斐がない、軍人になつて立派な大將になつておくれと云ふでせう。

夫は儂に能くかう云ふ事を申すのです。あゝ軍人は可厭だ、孫子の代まで軍人にするものではない、今度男の兒が出來たら、俺は實業家にしてしまふ、軍人には決してさせない！

夫としましたら、家に居て考へて居るやうな事はありません、不平もあれば、面白くない事もありませうが、儂はまた結句此の言葉を聞く度に胸の苦悶を覺えました。何だつて此の名譽ある職業を夫は不好とお思ひでせう！

でいつでもまた押返して、儂は乾度軍人にして見せますと申しますと、夫は笑つて、お前の好きな音樂家にするがいゝ！　妻となつてすらがかうですもの、母となつたらまた什麽變るか譯つた事ぢやアございません。花子さんにしても、今は軍人嫁ひの、美術家の奥さん。結婚前の事を考へると、まるで夢のやうでございますわよ。

雜報

◎各女學校の催し

▲女子商業學校紀念音樂會　神田錦町なる女子商業學校は嘉悅孝子女史に依て經營さるゝ所の唯一の實業的女學校なるが、同校にては去月二十九日の日曜日を以て創立二週年の紀念會を兼ね、維持費募集の爲めに音樂會を高等商業學校大講堂に開催したり、當日の番組は前田久八氏のピアノ獨奏、北村季晴氏の長唄ピアノ(勸進帳)、四元氏の薩摩琵琶(上村艦隊)、今井氏等の三曲(決死隊)、服部氏の狂言(三人片輪)、杵屋六四郎氏の長唄(鞍馬山)等なりしが、來會者頗る多く、仲々の盛會なりし。

▲本郷辰岡町の日本女學校にては去月十八日卒業式を催したるが、例により校長西澤之助氏の演說熱誠の情を吐露し、儀式又た嚴肅に擧行さる、殊に來賓の多かりしは近來稀に見るの盛況にて、爲めに一時は入場を謝絕したる程なりと▲目白の女子大學にては去月廿八日秋季運動會を催したるが、目下普請中の故を以て來賓を招待せず、内輪丈に止めしを以て、何となく見榮え、爲榮えのせざる觀ありしも來年は賑はしく催す由▲芝公園の日本女子美術學校生徒五十名は去月廿一日校長職員に引率されて、日光中禪寺地方に寫生の爲め發足し▲又た山脇房子氏校長の高等女子實修學校の職員生徒一同も去月下旬甲武線にて日野驛より下車、百草園まで赴き▲お茶水高等女學校生徒も前同樣百草園まで▲山田興松氏校長の日本美術女學校生徒も亦た先月下旬玉子瀨の川方面へ遠足に出掛けたり▲小石川竹早町の第二高等女學校並に女子師範にては來る七日秋季運動會を同校構内の運動場に開く筈。

▲日本音樂學校　神田錦町三丁目日本音樂學校は音樂界の老手山田源一郎氏の私設に係り、元と音樂遊戲協會と稱し、萬世橋倶樂部内に在りたるものなるが、時恰かも音樂を修得せんとする希望者日一日に盛んなるの機運に際したることゝて、入會志望者甚だ多く、教場の狹隘を感ずる所から、昨秋目下の所に新築移轉して、男女百五拾餘名の生徒を收容し、斯界の一大勢力を以て目さるゝに至りしかば、遂に本年九月を以て學校組織に改め、同時に日本音樂學校と命名したるものにて、東京音樂學校、華族女學校等の諸教師こゝに教鞭を執ると云へば音樂修業者の爲めには最良の學府たるべし、本校の學科左の如し。

(一)普通科　小學校唱歌科教員志望者の爲に之を設け修業年限を一ヶ年とす

(二)本　科　中等程度の各學校音樂科教員志望者の爲めに之を設け修業年限を二ヶ年とす

(三)受驗科　官立音樂學校入學志望者の爲に之を設け修業年限を一ヶ年とす

(四)專修科　特に志望の學科目を專攻せんとする者の爲めに之を設け修業年限を二ヶ年とす
　但し舞踊專修科に限り六ヶ月とす

(五)研究科　本科並びに專修科卒業生にして聲樂若しくは器樂を專攻せんとする者の爲め之を設く

因に授業時間は毎日午後三時より六時迄とし授業料は月金二圓とす。

▲牛込區軍人家族授產婦人會　今回の戰役に徵されて、護國の大役に服したる人々の家族遺族の婦人達に相應の業を授け、幾分にても其の生計を補ひ、聊にても其悲みを慰めんとの趣旨にて、題號の如き婦人會、牛込區内の有力婦人の間に組織せらる、本會に於て授くる產業は、婦人に出來る裁縫及び洗濯を主とすと雖も、戰役の爲め癈人となりたる男子にも相應の作業を授くることあるべく、而して其の賃金の幾分を貯金せしむる規定なりと、會費毎月一圓貳十錢、事務所及工場は牛込區市ヶ谷仲ノ町五十三番地にあり。

▲女子音樂園　麴町區中六番町四番地に新設立の同會は女子の品性陶冶の爲め特に和洋音樂を教授し且つ家族團欒の裡に是れが監督する新案の家塾にて松山縫子專ら監督の任に當り園長堤正夫其外數名の教師あり且つ毎月一回文士音樂家等を聘して講演を開らき時々生徒の音樂演奏會なども開らくと云ふ

▲三田裁縫女塾　芝區三田綱町の同塾にて本科一ヶ年、速成科六ヶ月、高等科六ヶ月、洋服專攻科六ヶ月、教員養成科六ヶ月、受驗準備科三ヶ月の六部に分ちて教授し尚ほミシン使用法講習會を開らきて實地練習をなさしむる由

▲女子職業の捷徑　婦人就職の途數多き今日最も早く卒業し得られて而して最も多く月給を取るのは簿記法を專攻した人と、料理法を覺えた人と以上の學校を卒業したる人なりと、而して三者何れも月給十二三圓より二十圓までなるが、先づ女子體操音樂學校卒業生百卅一名中の就職調査を見るに次ぎの如きものあり

女子師範學校及師範學校女子部七名△高等女學校七十五名△技藝學校五名△高等小學校十八名△幼稚園三名△結婚又は家事上の都合にて就職せざる者十九名△支那朝鮮へ航渡せしもの四名

以上の中には文部の試驗に合格して三十五圓を取るもの五六名ほどありと。

▲女子高師入學者の注意　女子高等師範學校生徒の募集に就ては從來東京府は一般募集の方法を執りしが本年よりは之を改め府下に設立せる專門學校在學生及び高等女學校其他同程度の學校の卒業者中當該學校長の保薦したるものゝ內より選拔することゝし他府縣女學校の卒業者は當府に本籍を有する者の外總て募集せざることとなりたり。

新刊紹介

▲婦人の慰問使　本書は今夏愛國婦人會を代表して滿洲軍慰問の旅途に上れる奧村五百子女史一行の視察記なり、附するに滿洲婦人風俗、諸將十分談片、滿洲慰問日誌、歸朝後の講演、滿洲實業の栞等の好讀物を以てす、國を愛する婦人は宜しく熟讀すべく、女子の活動に敬意を拂ふの男子亦須らく一讀すべし。(愛國婦人會發行)

▲二十世紀の婦人(第貳卷第拾號)　本誌は婦人界の一方に侃々諤々の新說を主張して、一異彩を放てる今井歌子女史が、獨力經營する所のものにて、現下の新時代に適應すべき婦人を造るを以て目的とすとかや、發行每に進步發達の跡著しく、本號載する所、同女史の女子の「殖民的思想」を論じたるものあり、登張竹風子の「艷福詩人」あり、宮田脩氏の「時代と女性」あり、松山俊子の「秋の新生」あり、其他小說に美文に和歌に、又た海外思想欄に見るべきの記事少からず、進步向上を理想とする女子の良伴侶たるべし。(定價一部金拾錢、麴町區飯田町五北海道婦人同志會發行)

▲日刊繪はがき　近頃繪葉書の流行日を逐ふて隆盛に向ふと共に日々に圖様の新たなる物を要求するに至れるより、是等の需要に充てん目的を以て、遂に日刊繪はがき會なるもの起れるが、同會の趣旨とする所は、和洋畫の各大家二十餘名に輪番揮毫を乞ひ、之を精巧なる印刷に附して、日々刊行し、會員の家庭に頒布するにありて、既に去月五日より引續き發刊し居れり、尙ほ時事に關するものは急速コロタイプに撮つて發刊する由なれば、之に依つて繪はがきの趣味を世間一般に流布するの功は蓋し大なるべし、定價一ヶ月一圓二十錢、市內無料配達、地方は五日目每に取纏め郵送するに付、別に郵稅五十錢を要すと。(神田區錦町一丁目東京日刊繪はがき會發行)

▲病間錄(綱島梁川著)　早稻田出身の文士にして勁拔なる評論家として江湖に其名を馳せたる綱島梁川氏久しく病臥にありて筆硯を絕ちしと聞きしが、今回病間錄の著あり、人生觀、宗教觀、哲學觀、其の叙ぶる所ろ聊か病的趣味を帶ぶる嫌なきにあらざれど、吾人は思想に飢へたる精神の糧として此の著を歡迎するものなり。(定價一圓)

▲母の心(柳川春葉作)　著者は家庭小說に於て一旗幟を樹てたるの人、一般家庭に對する觀察眼の緻密なると、寫實的筆力の非凡なるとは世の旣に知る所なるが、今又た此の新著に接するに及んで、著者の特長の更に遺憾なく發揮せられたるを見るは喜ばし、本書は嘗て東京日日新聞紙上に連載されたるものにして、筋は誤解されたる繼母の愛を骨子とし、現社會中流以上の家庭に得て起り易き風波を描きたるもの、人物性格の說明能く行屆きて、事態の成行又た頗る自然なり、加ふるに文辭溫雅にして些の缺點なし、吾人は好箇の家庭小說として之を江湖の讀者に推選するを辭せず。(春陽堂發行定價六十錢)

▲滑稽世界(第一卷第一號)　滑稽文學の眞趣味を發揮するを目的として生れたるものゝ由本號には石橋思案子の「滑稽學の意義」、花醉外史の滑稽小說「二つの戀」、笑よしのやの新作落語「高襟風呂」、鷺坊子の「火わらひ」、孤舟生の「笑の家庭」等を收め、全篇發噱解頤的の文字に富めるは面白し。(一部金八錢、每月一回八日發行、神田八名川町三大平社)

次號記事豫告　十二月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	……金二十錢
四冊（三ヶ月分）	……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	……前金二圓八十錢
内（定刊數	……十二冊
增刊四回）	……一、四、七、十月價格同一
郵税 一冊	二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅八年十一月五日發行　第五卷第拾五號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三千三百三十八番　三千三百八十番　二千六百二十番　三千二百二十九番

陸軍步兵中佐　岡野敏雄君校閱
陸軍步兵大尉　小山永行君著述

陸軍入隊案內

全一冊洋裝袖珍
紙數三百四十頁
正價貳拾五錢
郵稅四錢

▲石版美麗刷——帝國々旗勳章制服新圖
▲寫眞版——兵營生活 各科教練 演習十六枚插入

今後我國の軍備は益す大擴張を要すると共に、新入隊兵の著しく增加する事火を睹るよりも明かなり然るに世間此等の新入兵が其入隊以前に於て豫め軍制の梗槪、兵營の摸樣其他兵卒に課せらるゝ學科の槪畧等を悉知し得べき完全なる入隊案內書の欠乏するは盛世の缺點といふべきなり、著者小山大尉之を遺憾とし奉天の戰役に負傷して後、身補充大隊附にあるを幸ひ日夜鞠躬勉勵して遂に本書を作成せられたり而して本書は全篇を通して問答體を用ひ行文は極めて平易通俗を主とし其難解の文字は之を上欄に摘出して逐一注解を附し本文は都て平假名を施す之を讀む壯丁は何時軍隊に徵せらるゝも決してマゴツク樣の頓馬なく他人よりも早く習熟して早く昇進するの便利を得るなり蓋し國民必須の好著といふべし

夢香杉本文太郎君著

●戰鬪圖解

正價參拾錢　郵稅六錢

軍隊は如何にして編制せられ各兵種の性能は如何にして發揮せられ充員召集は如何行軍は如何宿營は如何又戰鬪は如何にして開始せられ攻擊は如何にして擧行せられ追擊は如何防禦は如何戰場に於る死傷者の處置、戰鬪後の處置其他行李、輜　を初め兵器及び彈藥の補充、被服裝具の補充、人馬の補充等戰鬪全般に關する幾多の動作を圖解し就中旅順の如き浦鹽の如き大要塞の組織並に攻擊法を說明網羅するに至りては先人未だ遺般の著なし

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

帝國百科全書

第百參拾六編

文學士 石倉小三郎君著

西洋音樂史

（新刊發賣）

上製五拾五錢　郵稅拾錢
並製四拾錢　郵稅八錢

輓近我邦西樂の發達實に驚くべき者ありと雖も未だ其原始發展の徑路を明かにし樂風の趨向を說きたるものあるを聞かず寔に藝苑の一大缺陷なり。著者深く之を憾とし研鑽數年、今や此の著あり實に邦語西歐樂史の嚆矢にして此闕陷を塡し得て餘ありと云ふべし。本書は嘗て唱道せし樂史研究の法則に基き文明史の背景に據り或は哲學に考へ或は對例を文字にとり他の諸史と相待て世界思想の解明に資せんとす世の學者樂師は勿論一般好樂者流の必讀を値すべき近來の好著なり。

第百參拾七編

文學士 小川銀次郎君著

近世美術史

（近刊）

上製五拾五錢　郵稅拾錢
並製四拾錢　郵稅八錢

小川文學士の美術史は既に出版せられて世の精讀を博せり然れ共既刊の分は上古中古より近古までの變遷史にして其近世に屬するものなし茲に於て小川文學士再び筆を近世美術に執り遂に本編を公にするに至れり本編は第拾七世紀以後即ち伊太利美術ボロチーズ派より現時に至る迄の美術變遷史にして行文は愈よ暢明に挿圖は愈よ麗密を極む曩に上下の美術史を購求せし人は必ず本編をも共讀し以て其完備を期し玉ふべきなり。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の二）

(後付の四)

明治三 博文館

明治三十九年 當用日記

弊館出版の懷中當用兩日記の正確堅牢にして實用に適するは茲に喋々するを要せず今回用紙印刷體裁製本に至るまで尙一層の改善を加へ殊に本年調製の新形懷中日記はポケット挿入に至極便利にて附錄には重要規則類あり又名刺代用の切取線付の白紙あり、又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尙趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の三種には農學博士橫井時敬君の農家年中行事及幸田露伴先生の旅行の心得某醫學士の衞生の心得等を掲げ尙ほ伊東祐穀氏の嚴格なる調査に係る最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豐富記事愈よ正確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

四種

◎卷頭　皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷とし揭ぐ

大形菊判 **上製**(船來洋紙總クロース金字入)　▲正價金五拾錢　郵稅拾四錢

中形四六判 **特製**(船來洋紙脊皮美製金文字入)　▲正價金五拾錢　郵稅拾貳錢

中形四六判 **上製**(船來洋紙總クロース金字入)　▲正價金三拾五錢　郵稅拾錢

小形菊判半截 **上製**(船來洋紙總クロース金字入)　▲正價金三拾錢　郵稅八錢

◎紙數　大判中形共五百四拾餘頁　小形五百三拾餘頁

▶賣捌所は全國各地の書籍雜誌店

▶取次望みの方は御申込次第

世界お伽噺

巌谷小波君編

第七拾四編

世わ情

◎小島冲舟君書

旅わ道づれ世わ情、三つ出された難題に、一人困つて居る處を、奇體な道づれの情でもつて見事に説き得た功には、夢を實にした出世話、さて其道づれの身元は、嘗て氷の牢の中から、助けてやつた酒屋の亭主、さても世わ情なりけり、ノウルエイのお伽噺

第七拾五編

變身術

◎吉本月莊君書

十錢銀貨を惡んだ代りに、習ひ覺えた變身術、それが不思議に役に立つて、王樣今や敗軍と云ふ時、勝利の神の指輪を取りに、兎となつては一跳百里、鯉となつては一潑千里、鳩となつては一飛萬里、首尾よく役目を果たすと云ふ、至極面白いハンガリーのお伽噺

第七拾六編

豆の手蔓

◎久保田金仙君書

アーデルスタンは天の牢舍に繫がれて居る父と、魔法に依て立琴と雛に化けて居る兄弟を救ふ爲に、豆の蔓の梯子に縋て遂に成効せり、彼は如何にして豆を得たるか、又如何にして魔物を降伏せしめしか、而して其豆は如何になりしか、乞ふ此書に就いて知れ。

第七拾七編

薔薇姫

◎大竹竹舟君書

薔薇姫は薔薇を愛せし姫也、薔薇の花片を呑みて花片姫を產み、魔物の爲に非命に死したり、此間萬年若衆あり、惡婆あり、花片姫の死活ありて、頗る波瀾萬丈を極め、遂に善惡曲直明かになりて、花片の一家盛ゆと云ふ目出度お話しなり。

毎月二回發行石版美麗表紙

毎編讀切紙數一冊約七十頁

正價一冊金八錢　十二冊金八拾五錢

五十冊參圓貳拾錢　全部百冊六圓廿錢

郵稅一冊貳錢宛

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(後付の七)

(後付の八)

早稻田大學野球撰手　橋戸信君著　(十一月上旬出版)

最近野球術



全一冊洋裝中判
紙數約二百五十頁
正價參拾錢
郵税六錢

口繪寫眞版（第一高等學校、慶應義塾、學習院、早稻田大學　最近野球撰手▲米國模範撰手▲野球大競技等珍絕壯絕

目次

(インフィールド)內野篇

ピッチング(投手)カーブの種類●カーブに對する注意●キャッチング(捕手)●フワーストベース(一壘)●一壘手に對する諸種の注意●セコンドベース(二壘)●ショートストップ(遊擊篇)●サードベース(三壘)●內野手に對する忠告

(アウトフィールド)外野篇

バッテング(打擊法)●ラインアップ(打擊順)●ベースランニング(走壘法)●マネーヂメント(監督法)●アンパイアリング(審判)

附錄

野球の三德▲米國の野球界

野球は武士的競技なり、膽を練り筋肉を鍛へ腦力を發達せしむる最好遊戯なり、方今到る處、ボール、バットを見ざる無く、野球競技は學生間の一大勢力となれり、唯惜む之れに對する好著述無きを、偶二三書ありと雖ども、多くは簡に失し粗に失し、僅かに初心者を敎ふるに足るのみ、記事陳腐にして野球の眞體を知り難し、即ち本書の出づる所以也、著者は有名なる早稻田大學野球撰手SSにしてキャプテンを兼ね、本年春より夏にかけて、遠征隊一行と共に野球の本場所なる米國に渡り奮鬪苦戰數十回、自已の視察經驗に加へて、同國模範撰手の意見學說及び好著述を參酌し、歸來江湖の要求に應じて此著あり、最も斬新なる野球術、最も科學的なる野球術を知らんとする人は本書を讀め、記事頗る流麗壯快加ふるに數十の寫眞版木版は各撰手の秘訣、魔球の秘術を示して余蘊なく、實に野球間無比の珍書なり。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

報知新聞家庭記者中村千代松君編

実験問答 日本家庭節用

女子高等師範學校教授 槇山榮次君
明治女學校學監 呉久美子君
高田商會技師工學士 關藤國助君
東京府職工學校長 今景彦君
學習院教授 馬上孝太郎君
東京工業學校助教授 瀬谷準造君
日本女子大學校教授 片岡哲子君
法學士 大里武八郎君
醫學士 佐藤得齋君
農學士 河村精八君
補助

▲全一冊洋裝總クロース三六版約八百頁 家庭行事寫眞版數葉入（十一月中發行）

報知新聞の家庭顧問は非常に讀者の歡迎を博したものにて其質問の端書のみが三萬枚以上に達した本書は其中に就て極めて必要なる種類のみを撰擇したので其答は全然各専門の學識と實驗を有する諸大家に依て得たものである。本書は二樣の目的を持つて居る一は「其れなり直くと實用たらしめ得ること」一つは「普通の人には實用なり難いが其れを知て居ると萬事に理解の便利あること」是なり斯くして得たる經驗でなければ到底確實とは云はれぬ、本書元來博士大家の實驗と學理から出て居るから讀者にして十分の注意を怠らざれば一事一物必ず其希望を達するのである本書は實に明治家庭の寶典たるに背かざるなり其内容綱目を左に記す

▲第壹編 衣服問答
(一)裁縫(二)洗濯
▲第貳編 食物問答
(一)日本料理(二)西洋料理(三)漬物
▲第參編 作法問答
▲第四編 家事問答
▲第五編 衛生問答
▲第六編 病氣問答
(一)藥物看護(二)傳染病(三)强壯肥滿(四)體質(五)滋養食物(六)腦神經(七)小兒科(八)產科(九)婦人科(一〇)消化器(一一)呼吸器(一二)外科救急(一三)皮膚科(一四)中毒(一五)驅蟲(一六)花柳病(一七)生殖器病(一八)眼科(一九)雜病(二〇)病院

▲第七編 理科問答
(一)家庭理科(二)工藝理科
▲第八編 戸籍問答
▲第九編 諸稅問答
▲第十編 通信問答
▲第十一編 農事問答
(一)野菜肥料(二)牧畜(三)家禽(四)養魚(五)果實
▲第十二編 教育問答

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界

第五巻第拾五號

(明治卅三年十二月廿五日
第三種郵便物認可)

(明治卅八年十一月五日發行
毎月一回五日發行)



(定價金貳拾錢)